

小 犬 丸

# 中谷麿寺

中谷遺跡・中谷古墳

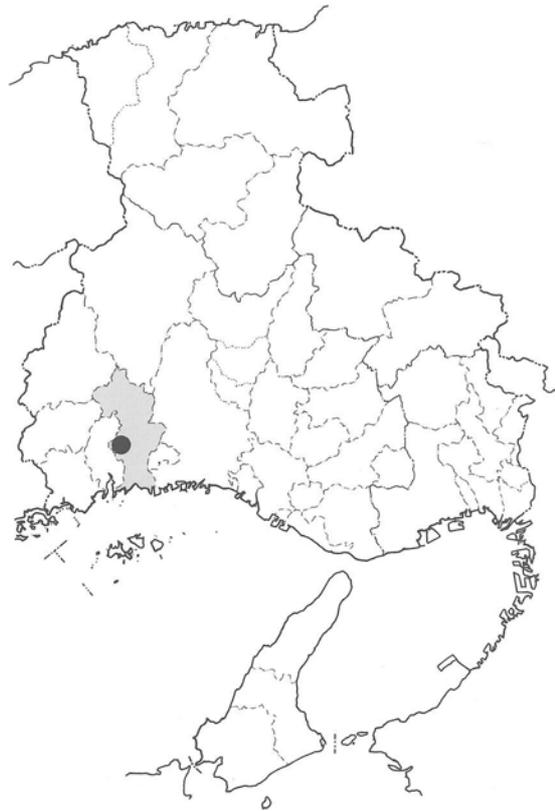
山陽自動車道新宮インターチェンジ建設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書2

2006年3月

兵庫県教育委員会

# 小 犬 丸

中谷廃寺・中谷遺跡・中谷古墳

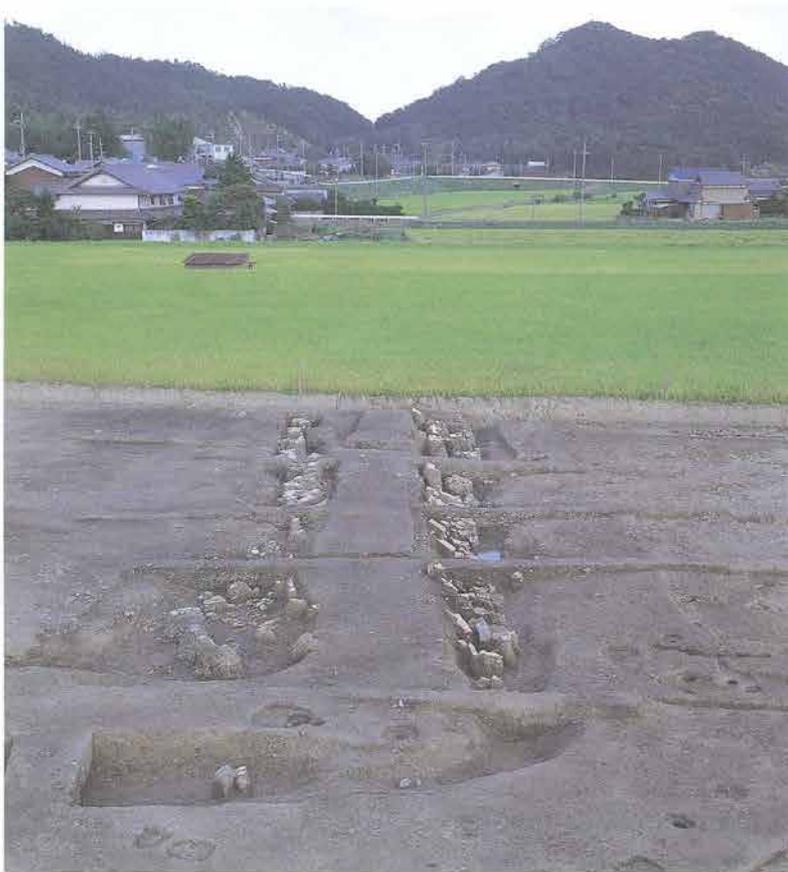




小犬丸の谷の全景（東から）



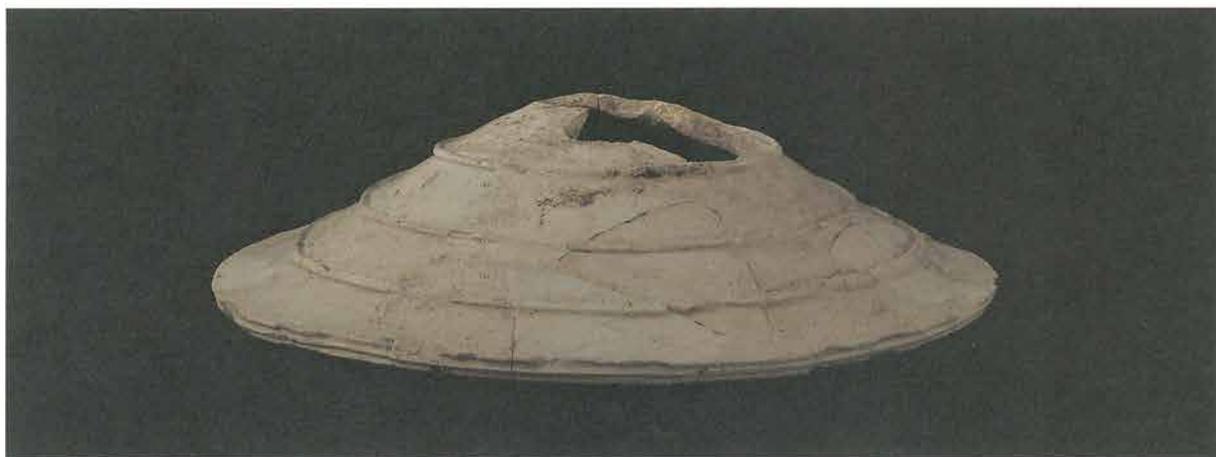
IV区瓦群検出状況（東から）



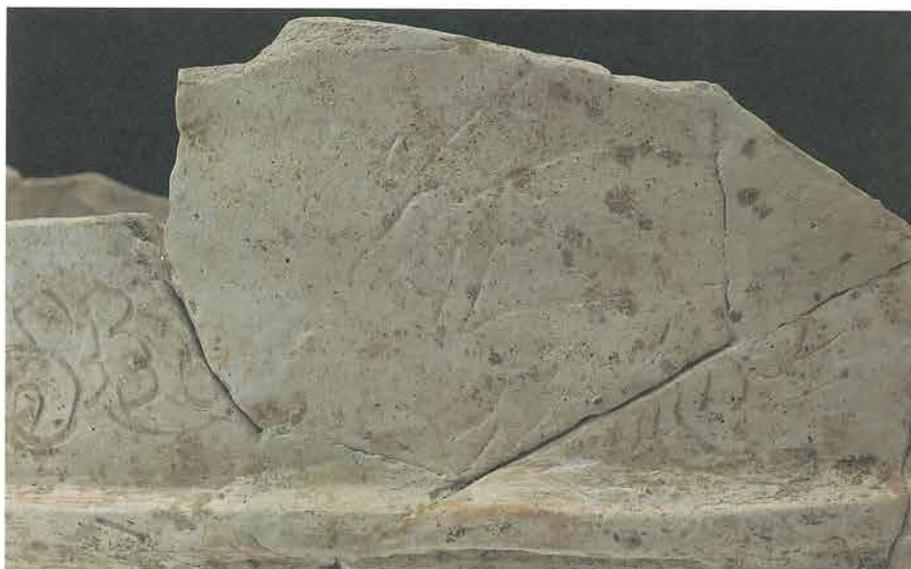
Ⅱ区築地（西から）



築地側溝内瓦出土状況



陶製宝塔



陶製宝塔部分



風鐸

## 例 言

1. 本書は、兵庫県龍野市（現たつの市）揖西町小犬丸字中谷・落合に所在する小犬丸中谷廃寺（こいぬまる なかたにはいじ）・小犬丸中谷遺跡（こいぬまる なかたにいせき）・小犬丸中谷古墳（こいぬまる なかたにこふん）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 遺跡の発掘調査は、山陽自動車道新宮インターチェンジ建設事業に伴い日本道路公団大阪建設局姫路工事事務所（当時）の依頼を受けて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。
3. 遺跡の本発掘調査は、平成9年度・10年度にかけて実施した。発掘調査には兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 別府洋二・久保弘幸・高木芳史・三枝 修が担当としてあたった。発掘調査に際しては、株式会社吉田組と作業委託契約を交わして実施している。
4. 遺跡は調査によって新たに確認されたもので、当初、大字を用いて「小犬丸遺跡」と呼称していたが、龍野市教育委員会と協議し、発掘調査によって判明した遺跡の性格から小字を用いて小犬丸中谷廃寺・小犬丸中谷遺跡・小犬丸中谷古墳と呼称することとした。
5. 報告書作成にかかる整理作業は日本道路公団関西支社の依頼を受けて、平成12～17年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所がおこない、岡本一秀・中村 弘・菱田淳子・村上泰樹・加古千恵子および別府が担当した。
6. 掲載した写真については、空中写真は株式会社ワールド（平成9年度）、株式会社サンコム（平成10年度）に委託して撮影した。その他の遺構写真等は調査担当者によるものである。遺物写真は株式会社イーストマンに委託して撮影したものを使用し、一部は整理担当者によるものを使用した。金属器のX線透過写真は金属器保存処理担当加古・岡本によるものである。
7. 掲載した図については、地形図については国土地理院発行のもの、日本道路公団提供のもの及び龍野市教育委員会提供のものを使用した。遺構配置図等は、Ⅲ・Ⅳ区下層については株式会社サンコムに委託して作成した空中写真測量図を用いた。その他の図に関しては調査担当者、調査補助員及び嘱託職員の手によるものである。
8. 出土した金属器の内、風鐸など一部の鉄器は（財）元興寺文化財研究所に依頼して保存処理をおこなった。その他の金属器などは加古・中村・岡本が担当して保存処理をおこなっている。
9. 本書の編集は柏原美音の補助の元、別府がおこなった。また、執筆は調査担当者および整理担当者によるものであるが、特に本事務所の職を離れた岩戸晶子・高木芳史両氏には無理を押して執筆願った。執筆分担は目次に掲載している。
10. 発掘調査に際しては、日本道路公団大阪建設局姫路工事事務所（当時）、龍野市教育委員会（当時）、地元小犬丸の方々にはお世話になりました。小犬丸自治会編集発行の「解説 通俗鯉丸誌」から得た知識も多く、本書にも利用させていただいた。この場を借りてお礼申し上げます。また、発掘調査に従事していただいた株式会社吉田組や三和共同建設の皆さんにも、改めて感謝いたします。
11. 発掘調査中、整理作業中には以下の方々に様々な御指導、御教示を受けました。記して感謝の意を表します。（順不同、敬称略）  
田中 琢・今里幾次・間壁霞子・石野博信・高橋美久二・上原真人・岩永省三・松村恵司・西村 康  
菱田哲郎・山本博利・岸本道昭・藤原清尚・野村展右・小川真理子・村上 立・小谷義男・大村敬通  
井守徳男・岡崎正雄・岩戸晶子

# 目 次

## 本文目次

第1章	調査に至る経緯と経過	(別府洋二)
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	3
第2章	遺跡の環境	(別府)
第1節	地理的環境	9
第2節	歴史的環境	9
第3章	遺構	
第1節	概要	13 (別府)
第2節	I区の調査	13 (高木芳史)
第3節	II区の調査	15 (別府)
第4節	III区の調査	17 (別府)
第5節	IV区の調査	19 (別府)
第6節	V区の調査	22 (久保弘幸)
第7節	小犬丸中谷廃寺の電気探査	27 (西口和彦)
第4章	遺物	
第1節	概要	31 (別府)
第2節	土器	31 (別府)
第3節	土製品	38 (別府)
第4節	石器・石製品	39 (久保・別府)
第5節	金属製品	41 (別府)
第6節	V区の遺物	43 (久保)
第5章	瓦類	(別府)
第1節	概要	47
第2節	瓦類の分類	48
第3節	各地区出土の瓦類	58
第6章	南面築地出土の瓦について	(岩戸晶子)
第1節	南面築地出土瓦	83
第2節	南面築地の瓦屋根の復原	87
第7章	建物所用瓦の分析	(別府)

第1節 基壇建物に伴う瓦の分析	99
第2節 軒瓦の分析	101
第3節 丸瓦・平瓦の分析	105

## 第8章 まとめと考察

(別府)

第1節 小犬丸中谷廃寺と昌福寺について	109
第2節 出土遺物について	110
第3節 寺域の推定	114
第4節 古代山陽道の復元	115
第5節 小犬丸中谷廃寺と布勢駅家	116

## 挿図目次

図1 電気探査成果図	28	図12 平瓦成形台復原模式図	85
図2 電気探査作業状況	29	図13 平瓦i型式タタキ原体復原図	86
図3 軒瓦の型式	49	図14 築地の構造模式図	87
図4 軒丸瓦KNM4の枷型痕跡写真	50	図15 築地屋根断面模式図	88
図5 軒丸瓦KNM4の範傷	51	図16 瓦列模式図	89
図6 軒丸瓦KNM4の範傷写真	52	図17 現代の韓国における築地瓦の例	91
図7 平瓦タタキ各種1	56	図18 南面築地の屋根復原図 断面図および立面図	94
図8 平瓦タタキ各種2	57	図19 軒丸瓦出土比率	101
図9 平瓦側面調整模式図	58	図20 軒平瓦出土比率	102
図10 瓦に残されたヘラ描き	70	図21 瓦類の並行関係	113
図11 平瓦に残る成形台端部立ち上がりの痕跡	85	図22 小犬丸自治会編集発行「解説 通俗鯉丸誌」より	120

## 表目次

表1 山陽自動車道新宮インターチェンジ関連埋蔵文化財調査一覧	1
表2 軒丸瓦出土一覧	71
表3 軒平瓦出土一覧	77
表4 丸瓦・平瓦・道具瓦出土一覧	81
表5 丸瓦の出土重量とその比率	83
表6 平瓦の出土重量とその比率	85
表7 丸瓦と平瓦の想定使用個体数・および比率	92
表8 隅数換算による個体換算数	93
表9 南面築地出土丸瓦一覧	96
表10 南面築地出土平瓦一覧	97
表11 軒瓦出土数	102

## 図版目次

図版 1		遺跡の環境
図版 2		小犬丸字境図、遺跡周辺の旧地割
図版 3		確認調査範囲
図版 4		調査地区と周辺の地形
図版 5	I 区	遺構配置図と基本土層図
図版 6	II 区	上面遺構配置図と基本土層図
図版 7	II 区	下面遺構配置図と基本土層図 II 区基本土層
図版 8	II 区	上面掘立柱建物SB201・202・203
図版 9	II 区	南面築地塀側溝瓦出土状況図
図版10	II 区	築地塀平・断面図
図版11	III 区	上面遺構配置図、下面遺構配置図と基本土層図
図版12	III 区	上面掘立柱建物SB301・302
図版13	III 区	上面掘立柱建物SB303・304
図版14	III 区	上面掘立柱建物SB305・306
図版15	III 区	井戸SE 1
図版16	III 区	西面築地塀平・断面図、内側溝瓦出土状況図
図版17	III 区	下面掘立柱建物SB307・308
図版18	III 区	上面掘立柱建物SB309・310・311、土坑SK301
図版19		III・IV区平面図
図版20	IV 区	上面遺構配置図、下面遺構配置図
図版21	IV 区	下面地形図
図版22	IV 区	基本土層図
図版23	IV 区	上面焼土平・断面図
図版24	IV 区	井戸SE 2
図版25	IV 区	上面掘立柱建物SB401・402
図版26	IV 区	下面瓦群平・断面図
図版27	IV 区	基壇平・断面図
図版28	IV 区	下面柱穴P4131・4132、土坑SK422断面図
図版29	V 区	中谷古墳墳丘測量図
図版30	V 区	中谷古墳墳丘・堀切断面図
図版31	V 区	中谷古墳石室実測図
図版32	V 区	SX501実測図
図版33	V 区	上位斜面部平面図
図版34	V 区	下位平坦面平面図
図版35	V 区	掘立柱建物SB502、柵SA501

- 図版36 V区 柵SA501断面図、掘立柱建物SB501  
 図版37 V区 掘立柱建物SB503・504  
 図版38 V区 井戸SE3 検出状況(上)・蓋除去後(下)

### 遺物図版

- |      |         |                     |       |   |                         |
|------|---------|---------------------|-------|---|-------------------------|
| 図版39 | 土器      | 縄紋土器・弥生土器・I区出土土器    | 図版74  | 瓦 | IV区出土軒丸瓦13 (KNM4 d)     |
| 図版40 | 土器      | I・II区出土土器           | 図版75  | 瓦 | IV区出土軒丸瓦14 (KNM4 d)     |
| 図版41 | 土器      | III区出土土器            | 図版76  | 瓦 | IV区出土軒丸瓦15 (KNM4 b c d) |
| 図版42 | 土器      | IV区出土土器             | 図版77  | 瓦 | IV区出土軒丸瓦16 (KNM4 e)     |
| 図版43 | 土製品     | 陶製宝塔                | 図版78  | 瓦 | IV区出土軒平瓦1 (KNH1)        |
| 図版44 | 土製品     | 陶製宝塔                | 図版79  | 瓦 | IV区出土軒平瓦2 (KNH1)        |
| 図版45 | 金属器     | 銭貨                  | 図版80  | 瓦 | IV区出土軒平瓦3 (KNH1)        |
| 図版46 | 金属器     | 銅製品・鉄製品             | 図版81  | 瓦 | IV区出土軒平瓦4 (KNH1)        |
| 図版47 | 金属器     | 風鐸・鉄製品              | 図版82  | 瓦 | IV区出土軒平瓦5 (KNH1)        |
| 図版48 | 石器・石製品  |                     | 図版83  | 瓦 | IV区出土軒平瓦6 (KNH1)        |
| 図版49 | 石器・石製品  |                     | 図版84  | 瓦 | IV区出土軒平瓦7 (KNH2)        |
| 図版50 | 土器      | V区出土土器              | 図版85  | 瓦 | IV区出土軒平瓦8 (KNH3)        |
| 図版51 | 石製品・金属器 | V区                  | 図版86  | 瓦 | IV区出土軒平瓦9 (KNH3)        |
| 図版52 | 瓦       | I・II区出土瓦            | 図版87  | 瓦 | IV区出土軒平瓦10 (KNH3)       |
| 図版53 | 瓦       | II区出土丸瓦             | 図版88  | 瓦 | IV区出土軒平瓦11 (KNH3)       |
| 図版54 | 瓦       | II区出土平瓦1 (①種)       | 図版89  | 瓦 | IV区出土軒平瓦12 (KNH3)       |
| 図版55 | 瓦       | II区出土平瓦2 (①種)       | 図版90  | 瓦 | IV区出土軒平瓦13 (KNH3)       |
| 図版56 | 瓦       | II区出土平瓦3 (①種)       | 図版91  | 瓦 | IV区出土軒平瓦14 (KNH3)       |
| 図版57 | 瓦       | II区出土平瓦4 (①種)       | 図版92  | 瓦 | IV区出土丸瓦1 (行基丸瓦)         |
| 図版58 | 瓦       | II区出土平瓦5 (③種)       | 図版93  | 瓦 | IV区出土丸瓦2 (玉縁丸瓦)         |
| 図版59 | 瓦       | III区出土軒瓦            | 図版94  | 瓦 | IV区出土丸瓦3 (玉縁丸瓦)         |
| 図版60 | 瓦       | III区出土丸・平瓦          | 図版95  | 瓦 | IV区出土平瓦1 (①②種)          |
| 図版61 | 瓦       | III区出土道具瓦(熨斗瓦・隅平瓦)  | 図版96  | 瓦 | IV区出土平瓦2 (③種)           |
| 図版62 | 瓦       | IV区出土軒丸瓦1 (KNM1)    | 図版97  | 瓦 | IV区出土平瓦3 (③種)           |
| 図版63 | 瓦       | IV区出土軒丸瓦2 (KNM1)    | 図版98  | 瓦 | IV区出土平瓦4 (③種)           |
| 図版64 | 瓦       | IV区出土軒丸瓦3 (KNM2)    | 図版99  | 瓦 | IV区出土平瓦5 (④種)           |
| 図版65 | 瓦       | IV区出土軒丸瓦4 (KNM2)    | 図版100 | 瓦 | IV区出土平瓦6 (⑤⑥種)          |
| 図版66 | 瓦       | IV区出土軒丸瓦5 (KNM3)    | 図版101 | 瓦 | IV区出土平瓦7 (⑦⑧種)          |
| 図版67 | 瓦       | IV区出土軒丸瓦6 (KNM4 a)  | 図版102 | 瓦 | IV区出土平瓦8 (⑨種)           |
| 図版68 | 瓦       | IV区出土軒丸瓦7 (KNM4 a)  | 図版103 | 瓦 | IV区出土平瓦9 (⑩種)           |
| 図版69 | 瓦       | IV区出土軒丸瓦8 (KNM4 b)  | 図版104 | 瓦 | IV区出土平瓦10 (⑪⑫⑬種)        |
| 図版70 | 瓦       | IV区出土軒丸瓦9 (KNM4 c)  | 図版105 | 瓦 | IV区出土平瓦11 (⑭⑮種)         |
| 図版71 | 瓦       | IV区出土軒丸瓦10 (KNM4 c) | 図版106 | 瓦 | IV区出土道具瓦1 (熨斗瓦・隅木蓋瓦)    |
| 図版72 | 瓦       | IV区出土軒丸瓦11 (KNM4 c) | 図版107 | 瓦 | IV区出土道具瓦2 (隅平瓦)         |
| 図版73 | 瓦       | IV区出土軒丸瓦12 (KNM4 c) | 図版108 |   | 小犬丸中谷廃寺と布勢駅家            |

## 写真図版目次

巻首カラー図版 1	小犬丸の谷の全景（東から）、Ⅳ区瓦群検出状況（東から）
巻首カラー図版 2	Ⅱ区築地（西から）、築地側溝内瓦出土状況
巻首カラー図版 3	軒瓦
巻首カラー図版 4	陶製宝塔
巻首カラー図版 5	陶製宝塔部分、風鐸

### 遺構写真図版

写真図版 1	遠景	遠景（西から）、遠景（東から）
写真図版 2	遠景	調査区遠景(西から)、調査区遠景(北から)
写真図版 3	全景	Ⅰ・Ⅱ区全景（北から）、Ⅰ・Ⅱ区全景（西から）
写真図版 4	全景	Ⅰ・Ⅱ区全景(上が北)
写真図版 5	全景	Ⅰ区全景(上が北)
写真図版 6	Ⅰ区	Ⅰ区(南東から)、集石SX101・102、SX101(南から) 溝SD102・103、SD103土器出土状況
写真図版 7	Ⅱ区	Ⅱ区全景(上が北)
写真図版 8	Ⅱ区	Ⅱ区全景(北から)、築地（南西から）
写真図版 9	Ⅱ区	築地全景（上が北）
写真図版10	Ⅱ区	南面築地（西から）、南面築地（東から）
写真図版11	Ⅱ区上面遺構	掘立柱建物SB201（南から）、SB202（東から） SB203(西から)、南西部柱穴群（南から）、暗渠排水（南から）
写真図版12	Ⅱ区築地	築地完掘状況（西から）、築地完掘状況（東から） 築地完掘状況（東から）、築地南西隅部（南から）
写真図版13	Ⅱ区築地	南面築地内側溝土層断面（ee'東から）、同外側溝土層断面（ee'西から） 同内側溝土層断面（dd'西から）、同外側溝土層断面（dd'西から） 西面築地外側溝土層断面（cc'北から）、同外側溝土層断面（bb'南から）
写真図版14	Ⅱ区築地	南面築地側溝瓦出土状況、南面築地外側溝1区瓦出土状況
写真図版15	Ⅱ区築地	南面築地外側溝3区瓦出土状況、南面築地外側溝1区瓦出土状況
写真図版16	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区全景（上が北）
写真図版17	遠景	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区遠景（南から）、Ⅲ・Ⅳ区全景（上が北）
写真図版18	Ⅲ区	掘立柱建物SB301（東から）、SB304・305（西から）、SB302（南から） 井戸SE1（南から）、Ⅲ区から東を望む、Ⅲ区から西を望む
写真図版19	Ⅲ区下面	全景（北西から）、全景（南東から）、土坑SK302周辺 全景（南西から）、作業状況（北から）
写真図版20	Ⅲ区西面築地	内側溝（南から）、西面築地全景（南から） 外側溝土層断面（南から）、西面築地瓦出土状況（南から） 西面築地内側溝瓦出土状況（南から）、軒丸瓦T26出土状況（南から）
写真図版21	Ⅲ区下面遺構	全景（南東から）、溝、土坑SK301、黒曜石出土状況

写真図版22	IV区	全景（上が北）、全景（西から）
写真図版23	IV区上面遺構	上面全景（北西から）、掘立柱建物SB302（北から） 井戸SE2（東から）、溝、土坑SK403、柱穴P428
写真図版24	IV区瓦群	瓦群（北東から）、瓦群（東から）、瓦群（北西から）
写真図版25	IV区瓦群	瓦群下層の状況（北から）、瓦群下層の状況（西から）
写真図版26	IV区下面	下面遺構全景（北西から）、瓦群堆積土層断面（cc'西から）
写真図版27	IV区下面	下面遺構（西から）、下面遺構（北から）
写真図版28	IV区基壇	基壇（東から）、基壇（北東から）
写真図版29	IV区基壇	基壇（東から）、基壇（北東から）
写真図版30	IV区基壇周辺	基壇西裾土層断面（北から）、基壇東裾土層断面（北から） 瓦群堆積土層断面（cc'北東から）、瓦群堆積土層断面（cc'東から） 基壇北裾瓦堆積状況（西から）、基壇北裾瓦堆積状況（北から）
写真図版31	IV区瓦群	瓦群3区瓦類出土状況、陶製宝塔出土状況
写真図版32	IV区	基壇北東隅（北東から）、基壇断ち割り状況（北西から） 基壇上土坑、柱穴P4131・4132（北から） 西面築地北端部（北から）、土坑SK425（西から）
写真図版33	V区	遠景（南西から）、全景（南から）
写真図版34	V区	調査前の状況（西から） 中谷遺跡北側の崖面と中谷古墳検出状況（南から）
写真図版35	V区	中谷古墳石室全景（南から）、中谷古墳掘切断面（西から）
写真図版36	V区	中谷古墳堀切・墳丘断面（西から） 中谷古墳墳丘上の掘立柱建物SB504（北から）
写真図版37	V区	中谷古墳石室完掘状況（南から）、石室左（北）側壁（南から）
写真図版38	V区	中谷古墳側壁基底石（南西から）、中谷古墳石室掘方（南から）
写真図版39	V区	SX501縦断面（西から）、SX501横断面（南から）
写真図版40	V区	SX501完掘状況（南から）、SX501床面敷石（南から）
写真図版41	V区	SX501掘方完掘状況（南から）、中谷遺跡掘立柱建物群全景（西から）
写真図版42	V区	井戸SE3検出状況（西から）、井戸SE3蓋除去時（西から）
写真図版43	V区	柱穴P526内鉄製品出土状況、土坑SK506内銅製品出土状況
写真図版44	空中写真	小犬丸中谷廃寺の範囲
写真図版45	調査の状況	確認調査状況（I区）、確認調査状況（IV区） II区東側の地中レーダー探査、築地土層断面剥ぎ取り IV区上面の調査状況、築地側溝の調査状況
写真図版46	調査の状況	IV区機械掘削時礎石？出土状況 龍野市トライやるウィーク体験発掘、現地説明会の状況
写真図版47	周辺の状況	昌福寺（南から）、馬越橋、本体工事の状況（南から）、I・II区の状況 完成した橋脚（I・II区）、小犬丸の谷を横切る小犬丸高架橋
写真図版48	整理作業	整理作業の状況

## 遺物写真図版

写真図版49	遺物	縄紋土器、弥生土器	写真図版86	遺物	軒丸瓦 (KNM4e他)
写真図版50	遺物	I区出土の土器	写真図版87	遺物	軒平瓦 (KNH1)
写真図版51	遺物	I区出土の土器	写真図版88	遺物	軒平瓦 (KNH1)
写真図版52	遺物	II区築地側溝出土の土器	写真図版89	遺物	軒平瓦 (KNH1細部、KNH2)
写真図版53	遺物	II区出土の土器	写真図版90	遺物	軒平瓦 (KNH3)
写真図版54	遺物	III区築地側溝出土の土器	写真図版91	遺物	軒平瓦 (KNH3)
写真図版55	遺物	III区出土の土器	写真図版92	遺物	軒平瓦 (KNH3)
写真図版56	遺物	III区出土の土器・炉壁	写真図版93	遺物	軒平瓦 (KNH3)
写真図版57	遺物	IV区出土の土器	写真図版94	遺物	軒平瓦 (KNH3)
写真図版58	遺物	IV区出土の土器	写真図版95	遺物	丸瓦 (行基式丸瓦)
写真図版59	遺物	IV区出土の土器	写真図版96	遺物	丸瓦 (行基式丸瓦)
写真図版60	遺物	宝塔	写真図版97	遺物	丸瓦
写真図版61	遺物	宝塔	写真図版98	遺物	平瓦
写真図版62	遺物	宝塔	写真図版99	遺物	平瓦
写真図版63	遺物	金属器	写真図版100	遺物	平瓦
写真図版64	遺物	金属器	写真図版101	遺物	平瓦
写真図版65	遺物	金属器	写真図版102	遺物	平瓦
写真図版66	遺物	金属器	写真図版103	遺物	平瓦
写真図版67	遺物	金属器	写真図版104	遺物	平瓦
写真図版68	遺物	金属器	写真図版105	遺物	道具瓦 (熨斗瓦)
写真図版69	遺物	スラッグ	写真図版106	遺物	道具瓦 (熨斗瓦・隅木蓋瓦)
写真図版70	遺物	石器・石製品	写真図版107	遺物	道具瓦 (隅木蓋瓦・隅平瓦)
写真図版71	遺物	石製品	写真図版108	遺物	道具瓦 (隅平瓦)
写真図版72	遺物	石製品			
写真図版73	遺物	V区 中谷古墳の遺物			
写真図版74	遺物	V区出土の遺物			
写真図版75	遺物	V区出土の遺物			
写真図版76	遺物	軒丸瓦 (KNM1)			
写真図版77	遺物	軒丸瓦 (KNM2)			
写真図版78	遺物	軒丸瓦 (KNM3)			
写真図版79	遺物	軒丸瓦 (KNM4a)			
写真図版80	遺物	軒丸瓦 (KNM4b)			
写真図版81	遺物	軒丸瓦 (KNM4c)			
写真図版82	遺物	軒丸瓦 (KNM4c)			
写真図版83	遺物	軒丸瓦 (KNM4c)			
写真図版84	遺物	軒丸瓦 (KNM4c)			
写真図版85	遺物	軒丸瓦 (KNM4d)			

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

山陽自動車道新宮インターチェンジ建設事業は、山陽自動車道龍野西ジャンクションと主要地方道相生山崎線新宮インターチェンジとを結ぶ南北の連絡道として、日本道路公団大阪建設局姫路工事事務所（当時）によって計画された。この事業は兵庫県が推進する西播磨テクノポリス計画の拠点都市である播磨科学公園都市へのアクセス道路として計画され、龍野市揖西町土師より龍野市西部を北上し、相生市の北東部を通過して、揖保郡新宮町の南西部に入り、揖保郡新宮町角亀に至る、延長12.6kmの自動車専用道路の建設事業である。

事業計画地内や周辺には、大陣原古窯跡群や小犬丸遺跡の存在が知られており、また古代山陽道を横切っていることから、事業用地内にその他の埋蔵文化財が存在することが予想された。このため平成6年度には兵庫県教育委員会により事業用地内の分布調査を実施、その後数次にわたって工事用道路等の分布調査を行い、平成8年度から逐次確認調査を実施した。

表1 山陽自動車道新宮インターチェンジ関連埋蔵文化財調査一覧（旧龍野市域分）

調査の種別	調査時期	調査地点	調査番号	備考
分布調査	H6年5月	龍野市域	940147	確認調査必要箇所12ヶ所 No.1～12地点
分布調査	H7年12月	工事用道路、相生市域	950415	確認調査必要箇所10ヶ所
分布調査	H8年4月	龍野市域再調査	960014	確認調査必要箇所5ヶ所
確認調査	H8年5月	No.6地点	960043	長尾三ノ谷遺跡確認
確認調査	H8年5月	No.13地点	960044	
確認調査	H8年5月	No.1地点	960268	
確認調査	H8年5月	龍野—5工事用道路 No.9地点	960269	
確認調査	H8年10月 ～12月	No.4-B地点 龍野2工事用道路	960392	
確認調査	H9年2月	No.4-A地点	960436	竹原播磨塚遺跡確認
確認調査	H9年2月	No.4-B地点	960437	
確認調査	H9年2月	No.9地点	960438	小犬丸中谷廃寺I・II区 確認
分布調査	H9年2月	工事用道路	960455	確認調査必要箇所1ヶ所 No.6地点
確認調査	H9年5月	No.4-A地点	970152	竹原播磨塚遺跡確認

確認調査	H9年5月	No.6地点	970153	長尾三ノ谷遺跡確認
確認調査	H9年5月	No.9地点	970154	小犬丸中谷廃寺I・II区 2次確認
本発掘調査	H9年8月 ～H10年1月	小犬丸中谷廃寺	970243	小犬丸中谷廃寺I・II区 本発掘調査
本発掘調査	H9年8月 ～H10年1月	竹原播磨塚遺跡	970244	平安時代掘立柱建物・積石塚
本発掘調査	H9年8月 ～H10年1月	長尾三ノ谷遺跡	970245	弥生～奈良時代の集落
確認調査	H9年10月	No.12地点	970369	小犬丸大谷遺跡確認
確認調査	H10年2月	No.4-B地点	970438	
確認調査	H10年4月	No.9地点	980033	小犬丸中谷廃寺III・IV区 確認
確認調査	H10年5月	No.10地点	980051	
確認調査	H10年5月	No.11地点	980052	
確認調査	H10年5月	No.1-A地点	980068	
本発掘調査	H10年5月 ～9月	小犬丸大谷遺跡	980070	弥生～中世の集落
確認調査	H10年9月	No.9-C地点 工事用道路	980125	小犬丸中谷遺跡・中谷古墳 確認
本発掘調査	H10年9月 ～12月	小犬丸中谷廃寺	980127	小犬丸中谷廃寺III・IV区 本発掘調査
本発掘調査	H10年10月 ～11月	小犬丸中谷遺跡 小犬丸中谷古墳	980160	小犬丸中谷遺跡・中谷古墳 V区本発掘調査
確認調査	H10年11月 ～12月	No.4-C地点	980186	
確認調査	H10年11月 ～12月	No.16地点	980188	
確認調査	H10年11月 ～12月	No.17地点	980189	
確認調査	H11年3月	No.1-B地点	980337	大陣原窯跡確認
確認調査	H11年3月	No.6地点	980338	
本発掘調査	H11年8月 ～12月	大陣原窯跡	990212	製鉄関連炭窯
確認調査	H11年12月	不時発見	990266	竹原中山遺跡確認
本発掘調査	H12年1月 ～3月	竹原中山遺跡	990299	弥生中期後半の高地性集落
確認調査	H12年5月	No.6地点南	200209	平田山遺跡隣接地
確認調査	H12年5月	No.6・7・8地点	200292	保安林部分

## 第2節 調査の経過

小犬丸の谷の中の広い範囲で、縄紋時代から弥生時代の土器等が散布しており、この谷の中に遺跡が存在することは古くから知られていた。鎌谷木三次氏によって紹介された小犬丸廃寺が、古代山陽道に置かれた布勢駅家であることが今里幾次氏、高橋美久二氏等によって比定されていた。その地点が県道姫路上郡線拡幅工事に伴って昭和57年から発掘調査され、古代山陽道の検出と共に布勢駅家であることが確実視されるに至っている。その後も龍野市教育委員会などにより布勢駅家として調査が続けられ、駅館院と呼称される方形区画内に建ち並ぶ礎石建瓦葺の建物が複数検出され、古代駅家の構造解明に多大の成果を挙げた。また、その下層からは弥生時代の住居址や遺物の出土を見ており、散漫ではあるが、周辺に弥生時代の集落が存在することも知られている。

### 1. 分布調査

前述のように、この東西に長い小犬丸の谷の中の広い範囲に、土器が散布していることは知られており、周知の埋蔵文化財包蔵地とされていた。山陽自動車道新宮インターチェンジ建設事業に先立った平成6年度の分布調査によって、当該地の水田上から須恵器片などが採集されたことによって遺跡の存在が推定され、また、古代山陽道がこの地点を横切ることが想定されていることから、No.9地点として発掘調査の対象地とされた。

分布調査の担当者は以下のとおりである。

調査第2班	主査	種定淳介
調査第3班	主査	久保弘幸
	研修員	三原慎吾
	技術職員	岡本一秀

### 2. 確認調査

平成8年度にはNo.9地点の確認調査（調査番号 960438）として、16ヶ所に2m×2mのグリッドと1m×4mのトレンチを設定して、重機及び人力によって掘削がおこなわれた。その結果、柱穴や溝が検出され、古代のものと思われる瓦や、主として奈良時代から中世の土器が出土したことから、小犬丸遺跡として本発掘調査が必要であると判断された。その範囲確定のため、および古代山陽道検出を目的として、平成9年度に第二次確認調査を実施した。

第1次確認調査と同様、第二次確認調査（調査番号 970154）は本発掘調査におけるⅠ・Ⅱ区の範囲でおこなわれた。第二次確認調査の結果、南端部では近世以降の遺物も含まれる旧河道が検出され、一部は圃場整備の際に大きく攪乱されていたことから、本発掘調査範囲から除外した。現河川の南側は現道が走り、その南側は急峻な丘陵斜面となるため調査できなかった。この調査でも古代山陽道の痕跡は確認できなかったが、柱穴や溝、完形に近い瓦を含む落ち込みが検出され、第一次確認調査の結果を追認し、確定することになった。

確認調査の結果を受けて、同じく平成9年度には本発掘調査（調査番号 970243）を実施したが、予想していなかった瓦葺の築地塀の痕跡が検出され、その南北方向の築地塀は更に北側に続くことがわかった。このことにより、日本道路公団（当時）と協議し、確認調査で地山礫層が現れ、当初本発掘調査

から除外していたⅡ区の北半部の調査を追加しておこない、更に北側での確認調査を翌年度おこなうこととした。

第3次確認調査（調査番号 980033）は、平成10年度に本発掘調査におけるⅢ・Ⅳ区でおこない、Ⅲ区では盛土の下で2面の遺構面が存在することと、Ⅱ区からの築地塀が続いていることがわかった。

Ⅳ区では築地塀の痕跡が山裾では検出できず、また築地塀の東側で大量の瓦が堆積している状況が検出され、本発掘調査が必要であるとした。この時点では築地塀が東側に屈曲しているものと推定していた。また、同じく平成10年度には更に北側の工事用道路部分の確認調査（調査番号 980125）をおこない、中世頃の柱穴や瓦を含む落ち込みを検出したことから、本発掘調査範囲（本報告Ⅴ区）を設定した。

平成10年度には更に北側の丘陵上にあるNo.10地点、No.11地点の確認調査（調査番号 980051・980052）を実施した。各地点の尾根筋で炭を含んだ焼土坑を各1基検出したが、他の遺構や遺物は検出されず、墓域や居住域といった継続的な利用はなされていないことが判明した。

確認調査の担当者は以下のとおりである。

平成8年度

調査第2班	調査専門員	吉田 昇
	主査	森内秀造
	研修員	高木芳史

平成9年度

調査第1班	調査専門員	山本三郎
	主査	別府洋二
	研修員	高木芳史

平成10年度

調査第1班	主任調査専門員	輔老拓治
	主査	別府洋二
	研修員	三枝 修

### 3. 本発掘調査

本発掘調査は平成9・10年度にわたっておこなわれた。平成9年度のⅠ区（約948m<sup>2</sup>）、Ⅱ区（約2,231m<sup>2</sup>）の調査（調査番号 970243）は、竹原播磨塚遺跡、長尾三ノ谷遺跡の本発掘調査と平行して実施した。途中、別府が事情により現場を離れた際には岡 昌秀研修員、松村勝仁臨時職員が現場の助力をおこなった。調査が進展するにつれ、埋土中に大量の瓦を含んだ2本の溝が平行して東西に走ることがわかり、しかも西端で直角に北に方向を変えて続いていることがわかった。これは寺院などの周囲を囲む築地塀であると考え、学識経験者として滋賀県立大学高橋美久二氏、奈良国立文化財研究所（当時）の岩永省三氏に来跡願い、築地塀・瓦等について様々な教示をいただいた。また、兵庫県文化財審議委員の石野博信氏・間壁菫子氏、龍野市教育委員会の岸本道昭氏、姫路市教育委員会山本博利氏や、今里幾次氏からも現地において遺構・瓦などについて様々な教示を受けた。11月の末には現地説明会を開催し、布勢駅家に隣接した新発見の寺院址として公表した。この年度の発掘調査における出土土器（瓦）数は

64箱である。

平成9年度末には奈良国立文化財研究所（当時）西村 康氏と県埋蔵文化財調査事務所西口和彦によって、Ⅳ区及びⅡ区の東隣の水田で、地権者の了承を得て電気探査及び地中レーダー探査を実施し、築地塀の延長や他の施設の存在を探っている。

平成10年度のⅢ区（約544㎡）、Ⅳ区（約450㎡）の調査（調査番号 980127）は、小犬丸大谷遺跡の本発掘調査完了後に開始された。途中台風による大雨で、Ⅳ区が山からの泥水で埋没し、一次調査が中断した。また終盤は、神戸市内の楠・荒田町遺跡の調査と重複しながら発掘調査を実施した。Ⅲ区では上面で掘立柱建物が複数棟検出され、下面ではⅡ区から延びる築地塀などが検出された。Ⅳ区では上面で井戸や焼土が検出され、焼土周辺の灰層から瓦が出土することから瓦窯の存在を想定したが、斜面上方に設定したトレンチからは遺構は検出されておらず、結局、鍛冶遺構であるとの結論に達した。確認調査や探査によって東に曲がると考えていた築地塀であるが、両側溝の北端を検出し、山裾で途切れることが判明した。大量に堆積した瓦は、調査区内に僅かに検出された基壇状の高まりに伴うものであることがわかった。奈良国立文化財研究所（当時）の田中 琢氏の来跡を受け、布勢駅家との関係についての指摘を受けた。また、出土した風鐸について奈良国立文化財研究所（当時）松村恵司氏や岩永省三氏から類例等の教示を受けた。現地は往来の激しい道路端であるため現地説明会はおこなわず、説明版を掲げただけであったが、1月には記者発表をおこない、神戸市中央区の神戸クリスタルタワー・県民ギャラリーで開催する「発掘調査成果速報展」において風鐸・陶製宝塔・軒瓦などを展示して成果を公表した。この年度の発掘調査における出土土器（瓦）数は565箱である。

Ⅴ区（約500㎡）の調査（調査番号 980160）は同平成10年10月からおこなわれ、重機による表土や石垣の除去の際に思いもかけず、横穴石室が一部残存していることが判明し、掘立柱建物や土坑などとともに調査をおこなった。この調査での出土土器数は6箱である。

検出された遺構は写真・実測図によって記録を留め、全体の遺構配置や地形は空中写真によって記録した。Ⅲ・Ⅳ区に関しては空中写真測量を実施している。

小犬丸中谷廃寺が検出された地区は小犬丸高架橋が建設される地点にあたり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所では、平成9年の10月に日本道路公団大阪建設局姫路工事事務所に遺跡の現状保存、とりわけ築地塀部分に関しての保存の要望を伝えた。10月、11月と県埋蔵文化財調査事務所大村敬通副所長、調査第1班山本三郎班長、企画調整班柏原正民及び調査担当者が、県道路建設課高速道路室、県龍野土木事務所を交えて日本道路公団大阪建設局総務部、同姫路工事事務所と遺跡の取り扱いについての協議をおこなった。

姫路工事事務所側も多方面からの検討を加え、本体工事作業ヤードとして寺域に含まれる東隣の土地は使用しないことなど、遺跡の重要性について理解を示している。県埋蔵文化財調査事務所では、主幹課の社会教育・文化財課とも相談し、県文化財保護審議会史跡・埋蔵文化財部会の指導、助言を受け、基壇建物が検出された後も協議・検討がおこなわれたが、高層の橋脚基礎がちょうど築地塀のコーナー部と基壇建物部にかかっており、現地保存となると、すでに南側から始まっている本体工事のみならず関連する付帯工事なども含めて大幅な設計変更となり、最低でも1年以上の計画延長と数億円の予算増となる。また、水路や取り付け道路等の地元協議の問題等のため、残念ながら今回の調査で検出できた遺構の現地保存は不可能であると判断され、記録保存の処置が執られると共に本体工事が着手されるに至った。

本発掘調査の担当者は以下のとおりである。

平成9年度

	所長	上田 勲
調査第1班	調査専門員	山本三郎
	主査	別府洋二
	研修員	高木芳史
	研修員	岡 昌秀
	臨時職員	松村勝仁
	補助員	玉越綾子
	室内作業員	森崎由起子

平成10年度

	所長	寺内幸治
調査第1班	主任調査専門員	輔老拓治
	主査	別府洋二（Ⅲ・Ⅳ区の調査担当）
	研修員	三枝 修（Ⅲ・Ⅳ区の調査担当）
	主査	久保弘幸（Ⅴ区の調査担当）
	補助員	小谷義男・野村展右
	室内作業員	森崎由起子

#### 4. 出土品整理作業

発掘調査によって出土した大量の瓦をはじめとした遺物は、一部は発掘調査事務所にて洗浄をおこなったが、洗浄・ネーミング・一部の接合補強、選択などの整理作業については、平成11年度より、兵庫県埋蔵文化財調査事務所の魚住分館（明石市魚住町）にて開始した。瓦類の整理作業にあたっては京都大学大学院教授上原真人氏の指導を仰いだ。氏からは平成12・13年度とその後も瓦の製作技法等について多くの教示を受けている。

また、整理作業中に入手できた小犬丸自治会編集発行の「解説 通俗鯉丸誌」によって、調査地点の東に隣接する昌福寺についての記事に塔心礎や出土した古瓦のことが見られ、江戸時代の文化年間までは古寺があったことが良く知られていたことがわかった。

平成11年度の整理作業の担当は以下のとおりである。

	所長	寺内幸治
整理普及班	主任調査専門員	池田正男
	主任	中村 弘
調査第1班	主査	別府洋二
	非常勤嘱託職員	長谷川洋子・伊東ミネ子・衣笠雅美・江口初美

平成12年度からは、出土した土器や瓦類の接合補強・復元作業を実施した。

整理作業の担当は以下のとおりである。

	所長	寺内幸治
整理普及班	主任調査専門員	池田正男
	主任	菱田淳子
調査第1班	主査	別府洋二
	非常勤嘱託職員	吉田優子・喜多山好子・早川亜紀子・石野照代・蔵幾子・鳥村順子 大仁克子・小寺恵美子・岡井とし子・蓬萊洋子・岩戸晶子

平成13年度からは出土土器・瓦の実測・拓本を開始した。

整理作業の担当は以下のとおりである。

	所長	大村敬通
整理普及班	主任調査専門員	池田正男
	主任	菱田淳子
調査第1班	主査	別府洋二
	非常勤嘱託職員	喜多山好子・眞子ふさ恵・早川亜紀子・中田明美・前田千栄子 横山キクエ・岡井とし子・前田恭子・小野潤子・柏原美音 津田友子・小寺恵美子・岩戸晶子

平成14年度からは出土土器・瓦の実測・拓本を継続し、復元を開始した。

整理作業の担当は以下のとおりである。

	所長	藤本修三
整理普及班	主任調査専門員	池田正男
	主任	岡本一秀
調査第1班	主査	別府洋二
	非常勤嘱託職員	柏原美音・増田麻子・小野潤子・吉田優子・眞子ふさ恵・石野照代 喜多山好子・中田明美・蔵幾子・大仁克子・津田友子

平成15年度からは金属器などの出土遺物の実測・拓本を継続し、写真撮影、写真整理を開始した。また、一部の金属器の保存処理（財団法人元興寺文化財研究所委託）を実施した。

整理作業の担当は以下のとおりである。

	所長	平岡憲昭
整理保存班	主任調査専門員	池田正男
	主任	菱田淳子
調査第1班	主査	別府洋二
	非常勤嘱託職員	柏原美音・加藤裕美・又江立子・吉田優子・眞子ふさ恵・石野照代 中田明美・西野淳子・蔵幾子・大仁克子・横山キクエ・津田友子 多賀直子・川上緑・川上啓子・小林俊子・渡辺二三代

平成16年度には金属器実測・トレース・写真撮影・レイアウト作業及び、金属器の保存処理をおこなった。

整理作業の担当は以下のとおりである。

	所長	平岡憲昭
整理保存班	主任調査専門員	池田正男
	主査	村上泰樹
同保存処理担当	主任	岡本一秀
調査第1班	主査	別府洋二
	非常勤嘱託職員	柏原美音・柏木明子・増田麻子・佐々木誓子・岡田祥子 栗山美奈・大前篤子・藤井光代・三島重美・高橋朋子

平成17年度にはトレース・レイアウト作業及び、原稿執筆をおこない、編集作業を経て報告書を刊行した。原稿執筆にあたっては、電気探査等を実施した西口和彦、V区発掘調査担当の久保弘幸、平成8・9年度発掘調査担当の高木芳史（現兵庫県立須磨友が丘高校教員）と平成12・13年度整理作業担当の岩戸晶子（現奈良国立博物館研究員）が一部分担し、残りは菱田の助力を得て別府が担った。

整理作業の担当は以下のとおりである。

	所長	平岡憲昭
整理保存班	主任調査専門員	池田正男
	主査	別府洋二
	主査	菱田淳子
	非常勤嘱託職員	柏原美音・柏木明子・三島重美

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

兵庫県は現在では近畿地方の西端にあたり、北は日本海から南は太平洋まで日本列島の中央を南北に横断する位置を占める。その範囲内には標準時を決める子午線が通り、経緯度の中心として「日本のへそ」も県内に存在する。

古代においては、当時の中心であった畿内の一部である摂津を含み、西方へと繋がる全ての道（山陽道・山陰道・南海道）が、範囲内を通過していた。その中の西南部を占める播磨国は律令時代における大国であり、瀬戸内海から中国山地を含む範囲に広がっており、山陽道が東西に貫き、また、美作国へと向かう道も播磨国内で分岐して通じている。

播磨国府所在地であった今の姫路市の西方に位置する「たつの市」は、平成17年10月に龍野市・新宮町・揖保川町・御津町が合併してできあがった新市である。その範囲は古代播磨国揖保郡の西半部を占めている。

旧龍野市の揖西町は古代揖保郡の西端にあたり、揖保川の西岸の揖保川流域揖西平野の一部とそれを囲むように北・西・南に連なる山塊が広がる地形である。三方の山塊には大小の谷が複雑に入り組んでおり、低地には独立山塊が点在している。周辺の上塊は竹原流紋岩および同凝灰岩や編成古生層によって成り立つ。低地部分は揖保川による影響が及びにくく、段丘の発達が阻害され、また、北側を走る断層により、低地が沈下したことによって、低地が埋没していったと考えられる。これは小畑地区の現地地表下2.2mでA T火山灰層が検出されたことや、尾崎遺跡の地表下約2mから出土した流木の放射性同位炭素年代測定により、6990±150 B Pの値が得られたことからわかる。埋没の理由には海面上昇期に堆積したなどが考えられている。

遺跡のある小犬丸は揖西町の北西部にあたり、南側の一端のみが山塊の途切れる、東西に長細い小盆地状の地形を持つ。この地形は龍野・上郡断層によって形成され、断層に沿ってこの小犬丸の谷を東西に貫いているのが古代山陽道を継承した現在の県道姫路上郡線である。この道を東にたどれば、琴坂を越えて古代揖保郡の中心地であった小神へ、更に揖保川を越え、龍野の市街地から古代播磨国府のあった姫路へと続く。西は二木峠を越えて相生市から上郡町へと抜け、赤穂市から古代の備前国である岡山県へとはいる。龍野市域は比較的条里地割りが残されており、小字名にも条里坪付の遺称が見られる。復元された条里から小犬丸周辺を見ると、古代山陽道は十四坊・十五坊坊間にあたり、調査地である中谷は十五坊六条に含まれる。『続左丞抄』所収の建久八年四月の「左弁官下文」には穀倉院領小犬丸保が含まれる布施郷の四至が記されており、現在の揖西町小畑、長尾、土師を含めたかなり広い地域を占めている。

### 第2節 歴史的環境

揖西町域での旧石器時代の遺跡には、龍子向イ山遺跡（3）で見つかったナイフ形石器があるが、低地が埋没したためかあまり知られていない。縄紋時代に入っても中期後半以降に清水遺跡（4）などで遺構・遺物が確認されているが、遺跡の密度は希薄である。本調査のⅢ区で発見された黒曜石器は

非常に稀なものであるが、播磨一円では二十ヶ所近くの遺跡で見つかっており、龍野市内でも皿池遺跡や中臣山遺跡で帯黒青色のものが確認されている。遺跡の密度が低い状態は弥生時代前期でも継続し、半田山の上で見つかった土器棺墓などはあるものの、その他は少量の土器の出土程度で集落本体は確認されていない。

この揖西の地に人々が生活した痕跡が激増するのは、弥生時代中期中葉からである。清水遺跡、尾崎遺跡（5）、北山遺跡（6）など河川に沿った低地に発生した集落は、その後、小神辻の堂遺跡（7）、佐江遺跡（8）、長尾谷遺跡（9）、北沢遺跡（10）、龍子向イ山遺跡、養久山・前地遺跡（11）、小犬丸大谷遺跡（12）、竹原中山遺跡（13）など拡散し、丘陵上や狭い谷の中にまで立地する集落が見られるようになる。その中核的な集落は中垣内川流域の清水遺跡と佐江遺跡と考えられている。

弥生時代終末から古墳時代初頭の集落は小神南遺跡（14）や北山遺跡、小神辻の堂遺跡、小畑十郎殿谷遺跡（15）、長尾三ノ谷遺跡（16）などで単発的に住居址が見つかるが、この時期の特徴的な遺跡は養久山山塊や半田山、白鷺山などで見つかった墳丘墓や前期古墳である。舶載三角縁神獸鏡が出土した前方後円墳である龍子三ツ塚古墳（18）を中心として、前・中期の古墳には鳥坂古墳群（19）や新宮東山古墳群（20）、南山古墳群（21）、友ヶ谷古墳群（22）などが知られている。

古墳時代後期にはいると長尾タイ山古墳群（23）など初期群集墳とされる古墳群も見られ、尾崎遺跡では韓式土器が出土するなど渡来系の人々がこの地へ移り住んだ様子が窺われる。中垣内（24）や小神（25）には数十基に及ぶ群集墳が現れるが、揖西の西端では数基単位の古墳群が点在し、小犬丸の谷には津原古墳群（26）や今回発見された小犬丸中谷古墳などの小規模な古墳しか見出すことができない。谷を南に出た山裾にある長尾薬師塚古墳（27）は終末期の大型方墳として、小犬丸周辺の里長つまり布勢駅長や小犬丸中谷廃寺の壇越に繋がる実力者の墓ではないかと推定されており（岸本2001）、後に山陽道に沿った官衙と寺院をあわせて運営できる素地がここに見出すことができよう。

古代山陽道に沿って、小神廃寺（28）、中垣内廃寺（29）が小犬丸から5kmの距離内に建立されており、小神には揖保郡の群衙が存在したと考えられており、その関連集落とされる小神芦原遺跡（30）では、数十棟に及ぶ掘立柱建物群が検出されている。

古代の播磨国内の山陽道には7の駅家が設置され、支路としての美作道にも越部、中川の2駅が設置された。山陽道には東から明石、賀古、草上、大市、布勢、高田、野磨の駅が設置されていることは「延喜式」巻28兵部省の条に見られる。播磨国府系瓦が散布する小犬丸東村の地は、かつて小犬丸廃寺とされていた。（鎌谷1942）しかしながら小犬丸と同様に播磨国府系瓦が出土するものの塔心礎など寺院址としての要素が見当たらず、かつ古代山陽道に沿って概ね等距離で配置されている遺跡を各駅家に比定したところ、この地が布勢駅家（2）であると推測された。（今里1960、高橋1982）

昭和58年度の発掘調査によって、東西約85mにわたる範囲で数棟の礎石建瓦葺の建物跡が検出された。更に昭和60年度には瓦葺建物群の東南で、古代山陽道と推測される道路状遺構が検出され、「布勢驛戸主・・・」と書かれた木簡や、「驛」「布勢井邊家」「布世井戸」などと墨書された土器が出土したことから、布勢駅家が小犬丸東村の地にあったことが確定した。

その後、布勢駅家では、龍野市教育委員会によって遺跡内容と範囲確認のため5ヵ年にわたって調査が実施された。その結果、方形に区画された範囲内に礎石建瓦葺の建物が建ち並び、その前面に山陽道が通っていたことがわかった。

駅家からは8形式の軒丸瓦と9形式の軒平瓦が出土している。その主流となるのが古大内式軒瓦（今里1962）である。単弁十三葉蓮華紋軒丸瓦と、樹根状の中心飾りをもつ均正唐草紋軒平瓦の組み合わせ

は、播磨国府系瓦の中でも最も多くの遺跡から出土しているものである。

布勢駅家から出土した越州窯青磁、緑釉陶器、灰釉陶器、赤彩土師器などの土器類や、碁石、海老錠、鍔帯などは、官人や蕃客と呼ばれる海外の使節が利用するにふさわしく、硯、製塩土器といった役所や馬を飼育した施設ならではの遺物も見られる。

この駅家は7世紀後半から8世紀前半に置かれ、8世紀末までには礎石建瓦葺建物となり、11世紀半ばまでには建物が倒壊したらしい。建物の末期には穀倉院領小犬丸保の建物として使われていた可能性も考えられている。

小犬丸の南西、揖西地区の竹原や大陣原、相生市域の那波野、光明山、西後明、入野地区には5世紀末から始まる百数十基の須恵器窯や瓦陶兼業窯が作られており、相生・龍野窯跡群（31）と呼ばれている。揖西地区では奈良時代から生産が始まり、平安時代に入ると一旦途絶えるものの、平安時代末まで須恵器や瓦の生産が続いている。竹原7号窯はその中でも最末期のものであろう。平安時代には山裾などに点々と営まれた集落も発掘調査でわかってきている。

「続左丞抄」建久八年四月三〇日 左弁官下文によると、布施郷が応保年中（1161～1163年）に平清盛の異母弟である大納言平頼盛の家領となり布施荘が成立するが、ここは以前から穀倉院領の小犬丸保が成立していた。そのため頼盛は強引に山野・畠地・在家・池を犯し、小犬丸保の領有権を作田のみに限った。そこで小犬丸保の領民が訴状を出したものである。

平家滅亡後、この地は布施荘が平家没官領として収公され、播磨国が後白河法皇の分国になった寿永二年（1183年）以降に穀倉院領に復す。しかしながら梶原景時が播磨守護となると、地頭・荘官などとして源氏方の武士が入り込み、法皇管領の荘園などをも押領し、治安は著しく乱れる。

鎌倉時代、おそらく未曾有の国難である元寇に備えるために、九州への街道を大規模に整備した。これが筑紫大道（中世山陽道）であり、嘉暦四年（1329年）につくられた「播磨国鶴荘絵図」に朱線で記されたその位置に発掘調査によって遺構が確認されている。より直線的な道を目指して策定されたこの筑紫大道は古代山陽道の南約1kmを走っているが、揖西町長尾で光明山の山塊にいく手を阻まれるため、北に迂回して古代山陽道に合流するようである。

合流地点は地形から見て、布勢駅家と小犬丸中谷廃寺との中間であろう。小犬丸中谷廃寺の南を通過する山陽道は中世においてもその重要性は変わっていない。小犬丸大谷遺跡のような狭小な谷の中にも地方武士の館を髣髴とさせる集落が営まれており、青磁・白磁・古瀬戸・備前・東播など各地の土器が出土した。この地域が中世以降でも盛んな往来があったことは、遺跡から出土する東西の様々な産地の遺物からも知ることができるが、小犬丸に見られる「宿垣内」の字名からも窺われる。

小犬丸の地は14世紀には御宇多院領となるらしい。14世紀の初め、小犬丸保の地頭岩間三郎入道は正和三年(1314年)、赤穂郡矢野荘の寺田悪党に加担している。元応元年（1319年）、六波羅探題は播磨にも使者を派遣して悪党の鎮圧をはかっている。この時期は悪党の全盛期であり、この地域の悪党的人物の代表として赤松円心がいる。円心は建武年中（1334～1338年）、小犬丸の南西の山塊に光明山城（32）を築いている。この城は、別名紫雲城や小犬丸砦などとも呼ばれ、西の感状山城・白旗城から東の平井城・龍野城に通ずる山陽道の交通の要衝を扼する城である。赤松上総介義則などが居城としたとあり、天正（1573～1592年）初め頃、羽柴秀吉の播磨攻略によって落城したといわれている。

[註] 文章中の（番号）は図版1 遺跡の環境の番号に対応している。

[参考文献]

- 田中真吾・後藤博彌 1978「龍野とその周辺の地質と地形」『龍野市史』第1巻 龍野市
- 松本正信 1978「黒耀石の謎」『龍野市史』第1巻 龍野市
- 渡辺久雄 1978「龍野市域の条里」『龍野市史』第1巻 龍野市
- 龍野市教育委員会 1998『長尾・小畑遺跡群』龍野市文化財調査報告21
- 岸本道昭 2001「龍野市長尾薬師塚古墳(初代布勢駅長の墓)」『ひょうご考古』第7号 兵庫考古研究会
- 鎌谷木三次 1942「小犬丸廃寺」『播磨上代寺院址の研究』
- 兵庫県教育委員会 1987『小犬丸遺跡Ⅰ』兵庫県文化財調査報告書第47冊
- 兵庫県教育委員会 1989『小犬丸遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第66冊
- 龍野市教育委員会 1992『布勢駅家』龍野市文化財調査報告 8
- 龍野市教育委員会 1993『布勢駅家Ⅱ』龍野市文化財調査報告11
- 今里幾次 1960「播磨国分寺式瓦の研究」『研究報告』第4冊 播磨郷土文化協会  
1979『播磨考古学研究』今里幾次論文集刊行会 再録
- 今里幾次 1962「古瓦からみた播磨国府寺」『歴史考古』7 歴史考古研究会  
1979『播磨考古学研究』今里幾次論文集刊行会 再録
- 高橋美久二 1982「古代の山陽道」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会
- 兵庫県教育委員会 2002『緑ヶ丘窯址群Ⅲ』兵庫県文化財調査報告第253冊
- 龍野市教育委員会 1999『竹原遺跡』龍野市文化財調査報告22
- 石田善人 1978「中世の龍野」『龍野市史』第1巻 龍野市

# 第3章 遺構

## 第1節 概要

本発掘調査地区は、南から順次、Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区、Ⅴ区と呼称している。本発掘調査はⅠ区・Ⅱ区を平成9年度、Ⅲ区・Ⅳ区及びⅤ区を平成10年度と、2ヵ年度にわたって実施した。Ⅴ区の調査は小犬丸中谷遺跡・中谷古墳として調査している。また、平成9年度末には、Ⅳ区及び、Ⅱ区の東隣の水田において、電気探査等を実施しており、その結果の一部を掲載している。

Ⅰ区の南側は圃場整備前には旧の小犬丸川と中谷川が合流する地点であり、確認調査の結果からも近世以降の旧河道と考えられ、大きく攪乱されていた。Ⅰ区全体がⅡ区南端で検出された旧河道状の落ち込みとなり、安定した地形になるのは中世以降になるものと考えられる。

Ⅲ区とⅣ区間の県道姫路上郡線や、Ⅰ区とⅡ区間にある農道も頻繁な利用があり、且つ本体工事に際しては掘削されないことから、本発掘調査範囲からは除外した。また、Ⅱ区とⅢ区間の道は県道の旧道であり、東側の昌福寺の山門から続く石垣積みの通路が現県道に分断されて残っている。両側に用排水路があり、近隣の農作業に影響があることや、下水管がすでに設置されていること、Ⅱ区の調査では北端部の削平が著しいこと、本体工事の掘削範囲から外れることなどから本発掘調査範囲から除外した。

遺跡は広い小犬丸の谷の中で、小字「落合」と「中谷」にかけて広がっている。(図版2) 両字境は旧道と思われるので、Ⅱ区とⅢ区間に当たるが、主要遺構の大きい範囲を占める「中谷」の字名を採って「小犬丸中谷遺跡」、「小犬丸中谷古墳」、「小犬丸中谷廃寺」と名付けた。この報告書では、Ⅴ区で検出された掘立柱建物などの集落址を小犬丸中谷遺跡としているが、Ⅰ区からⅣ区で検出された寺院廃絶後の集落址も同時期であり、本来は調査範囲全域及び、その東西に広がることが予想される中世の集落址全体を小犬丸中谷遺跡とすべきであろう。また、寺院創建以前の縄文・弥生時代の遺跡も同様である。寺院址は東側に広がることは間違いなく、また、小犬丸中谷古墳のような小規模の横穴石室が単独で存在することは稀であり、丘陵上に露出している石材の存在から小規模な群集墳が存在する可能性がある。これらを総括した遺跡総体を小犬丸中谷遺跡とし、その範囲内に小犬丸中谷廃寺、小犬丸中谷古墳が含まれているものと解釈したい。

## 第2節 Ⅰ区の調査 (図版5)

### 1. 調査の概要

当地区については、平成9年2月に確認調査をおこない、包含層と若干の遺構を確認した。そこで平成9年4月に遺跡の範囲を絞り込むため再度確認調査を実施し、遺跡の範囲を確定したうえで本発掘調査を実施するはこびとなった。当地区は北西から南東へ流れる中谷川の旧流路および氾濫原にあたり、遺跡が立地する微高地の南縁に相当する部分である。現在の中谷川は遺跡の西側および南側に河川整備による直線的な流路が整備されている。

基本土層は調査区西側の壁で観察をおこなった。一帯はすでに圃場整備がおこなわれており、その際の盛り土によって覆われている。遺物包含層は部分的に残存しており、縄文から中世までの遺物が検出されたが、寺院と関連の深い遺物は少ない。出土した遺物はいずれも激しく摩滅しており、中谷川の氾

濫等によって流れてきたものであろう。遺物の中には耳環も検出されており、上流には集落跡だけでなく、古墳が存在することは想像に難くない。遺構面となる地山は、砂礫を多く含むシルト混じりの締まった砂層で、遺構面検出・精査は困難を極めた。遺構面は北西から南東に向かって緩やかに傾斜しており、調査区の南端には旧流路の落ち込みが検出されている。

## 2. 遺構

検出した遺構は、柱穴、溝などである。Ⅱ区で検出された寺院跡との関連を示すものはみられなかった。柱穴は5基を検出したのみで、年代、性格とも明らかにしがたい。溝は4条を検出しており、ほかに性格不明の集石(SX)を2箇所検出した。

### 溝(SD)、不明遺構(SX)

#### SD101

調査区南端で検出した流路跡に取り付く溝で、ほぼ東へ直進し、調査区外へ続くものである。検出面において、幅は約1.8m、深さ約30cmを測る。断面は逆台形を呈する。近世以降の溝で、圃場整理前までは水路として利用されていたらしい。但し、この溝の方向は後に報告する南面築地の方向に一致しており、旧の地割りを留めている。出土遺物には、陶磁器や石製硯などがある。

#### SD102

流路の北側で検出したもので、流路とほぼ平行に走る溝である。残存状況は悪く、検出面からの深さは最大でも12cmほどで、検出したのは底部の痕跡が確認したものである。遺物は土師器の皿や鉄かぶと形鍋が出土している。

#### SD103

流路北側で検出したもので、流路とほぼ平行に走る。西側は調査区外へと続き、東端はSD102を切つて流路に取り付くものと考えられるが、この部分での残存状況が悪いため現況では確認できない。検出面での幅は最も広いところで約2.2m、西半分の狭いところで60cmを測る。深さは約40cmである。遺物は奈良・平安時代のものが見られるが、中世後半のものも出土している。

#### SD104

調査区西端で検出した溝で、ほぼ南北方向に走向する。北端は調査区外へ続いているが、Ⅱ区では続きが検出されなかった。南端はSD103に取り付くが、切りあい関係は明らかにできなかった。検出面での幅は2.7m、深さ30～50cmで、断面は椀形を呈する。遺物は土師器鍋や備前壺が出土している。

これらの溝については、検出状況から流路との強い関連が示唆される。中世後半以降に耕地への取水および排水などを目的として構築された可能性が高いと考えられる。

#### SX101・102

握り拳大の礫の集積が、SX101では1.5m×1.5m、SX102では3.5×1.0mの範囲で検出された。礫の間には若干の瓦や須恵器・土師器片などが混じる。検出時は祭祀跡の可能性を想定して調査を進めたが、集積の外縁は不明瞭で掘り方も検出できなかったことから、人為的なものではない可能性が高い。洪水時の鉄砲水などによる堆積物かもしれない。

## 第3節 II 区の調査（図版6～10）

### 1. 調査の概要

II区では上下2面で遺構が検出されたが、確実に2面に分かれるのは南半部のみであり、北半部は礫層を主とした同一面で遺構が検出された。当初、確認調査の結果からII区の北西部は遺構が削平されていると考えて本発掘調査外としていたが、西面築地側溝が延びていることが判明したため拡張した。この地点では耕土・床土直下で遺構面となるため、土層図は実測していない。また、南東隅部は崩壊の恐れがあり、土留めを行ったため土層図は実測できなかった。

下面の遺構は南西方向へ下がる谷状地形周辺で検出された小柱穴群などであるが、建物等は復元できない。南西端では上層の遺構面を切り込んで、奈良時代頃の土器を含む流路を確認したが、下層に含まれる遺物は古墳時代以前のものに限られる。寺院址に関連する築地などの遺構は便宜的に下面に含めて記述する。

南半部で下層まで調査した主眼は古代山陽道の検出であったが、道路面や側溝などは検出できなかった。締まりのない洪水性の堆積物で埋没しており、II区の範囲内には道路遺構は存在していないものと判断した。

上面の遺構面は北から南へと緩やかに下る地形であり、一部に低い段状の落ちが存在する。これはその北側に南北方向に走る暗渠排水と同様、近世以降の水田を造成する際に削平されたものであろう。暗渠排水はその南端で石垣を伴い、周辺には柱穴が集中するが、建物を復元するには至らなかった。

### 2. 上面の遺構

遺構の中で築地側溝が埋没した後に掘削された柱穴が存在しており、復元できた掘立柱建物は寺院廃絶後の時期に属するものと考えられる。上面の遺構はこれらの中世以降の掘立柱建物などで構成されるが、北半の単一面で検出された遺構は便宜的に上面のものとして取り扱う。

#### 掘立柱建物

##### SB201

中央東寄りで検出され、築地側溝が埋没した後に掘削された柱穴が含まれ、築地本体が削平された後に構築された建物である。1間×3間の南北棟で、桁行き約1.8m、梁間約3.6mと梁間が長い、床束が存在していたものであろう。遺物が出土していないため所属時期は不明であるが、他の柱穴・建物と同様中世以降のものであろう。北側にも小規模の建物が存在する。

##### SB202・203

2間×2間、2間×3間の建物を復元したが、柱通りも揃わない。建物には伴わないが、南東隅周辺の柱穴から15～16世紀の土師器鍋が出土しており、これらの掘立柱建物は中世後半以降のもものと推定される。

### 3. 下面の遺構

下面の遺構には東西方向及び南北方向の築地堀と、築地堀の南西部で検出できた小柱穴群や流路状の落ち込みがあり、調査区南西部で検出できた遺構は寺院址以前のものであろう。

#### 築地堀

II区東壁のほぼ中央で検出された2条の溝は、真西に直線的に走り、ほぼ直角に方向を北へと変えて途切れながらも続く。特に東西方向の溝の中からは大量の瓦が出土し、両溝に挟まれた部分に瓦葺の施設つまり堀が構築されていたと想定できた。この部分には規則的に並ぶような柱穴などは認められず、土を築いて

作られた築地塀であったと判断された。両溝は築地塀に伴う側溝であり、塀に囲まれた内側の溝を内側溝、外側の溝を外側溝と呼んでいる。

溝の規模は、南面内側溝で幅約1.6mから、一部二段に掘り込まれて幅約2.7mを測る。西端のコーナー部では幅が広がり3m近くなる。この地点の溝底から軒丸瓦（T3）が出土している。深さは20～40cmを測る。側溝底から斜面にかけての一部に焼土が認められた。南面外側溝では幅1.8～2.5m、深さは30～40cmを測る。

築地本体は、このⅡ区で、東西方向で約21m、南北約33mにわたって検出できた。本体基底部幅（内外の側溝肩間距離）は、最も残りが良く、削平の度合いが少ない南面築地の東端の地点で約1.2mを測る。南面築地の中央部では高さ10cmほど段状に高まっており、幅約1.35mを測る。南北方向の西面築地北半部で、削平を受けて最も残りの悪い地点では、幅2m以上になる。ここでは側溝の深さも20cm以下である。西面築地の側溝では残りの良い外側溝南半で、幅約2m、深さ約40cmを測る。

東西方向の南面築地側溝の埋土からは内側溝・外側溝とも大量の瓦が出土しており、内側溝の西端底で出土した軒丸瓦1点、と外側溝から出土した軒平瓦2点以外はすべて平瓦と丸瓦である。瓦は、任意に設定した土層観察用のセクションによって西から1～4区に分けて取り上げた。出土した瓦はほとんどが赤橙褐色を呈しており、火災に遭った可能性も考えられたが、瓦が変色するほど築地が燃えるとは考えられない。

瓦は完形に近い状態で出土しているものもあり、あまり高い位置から転落したものではなかろう。また、内外両側溝から出土していることから、塀が内外どちらか一方に倒壊した様子もない。側溝の埋土には瓦に混じって拳大程度の礫が多く含まれており、築地本体の構造に関するものではないかと考えられる。布勢駅家の築地が想定される位置にも小礫の高まりが認められ、構造的に相通ずる。長辺60cm程度の石材も出土している。

西面築地の側溝からは瓦は出土するが、南面築地のようにまとまった状態では瓦は出土しなかった。このことから西面築地には瓦は葺かれていなかったと推測できる。

築地本体は削平を受けてほとんど残存していないが、表面には部分的に黒色土が見られ、それを除去するといくつかの小柱穴が検出できた。これらの柱穴はⅡ区の南端で検出された古墳時代以前と推測される柱穴群と埋土等が類似していることや、規則性が認められないことから、築地構築時の作業足場等に伴うものではなかろう。また、掘り込み地業なども認められなかった。検出時に東端付近から鉄鏝が出土している。古い古墳時代のものか、築地構築時に意図的に埋められたものかは不明である。

西面築地の外側溝は南端から約14mで途切れ、直径約3m、深さ約30cmの円形の土坑となる。土坑の底近くからは鉄斧（M20）が出土した。約3.3m途切れた部分は、後世の水田造作などによって段や小溝が延びる位置にあたるが、外側溝を意図的に円形に突出させており、柱穴等の施設は検出できなかったが、西門となる可能性がある。この地点では、内側溝は約12mにわたって溝がなくなる。

#### 柱穴・流路状落ち込み

調査区の南半では南西方向に向かって下る地形となり、南西隅では粗砂を主とした堆積となり、流路状となる。埋土からは須恵器杯B片などが出土したが、Ⅰ区に広がる河川堆積物と同質のものであろう。周辺では柱穴状の小穴を多数検出したが、建物等を復元することはできず、遺物もほとんど出土しなかった。P2201からは石匙（S1）が出土している。これら南半部下層の遺構は、検出中に出土した須恵器蓋杯小片から古墳時代以前のものと考えられる。

## 第4節 Ⅲ区の調査（図版11～18）

### 1. 調査の概要

調査前の状況では、Ⅱ区から約1m高くなっている。確認調査によって厚い盛土が確認され、その下層で20cmほどの厚さで整地をおこない、その上下2面の遺構面が存在することがわかった。整地の時期は不明であるが、出土した遺物から見て、中世後半以降のものであろう。上下面で検出された柱穴からは瓦の小片が出土するものが多い。中には軒瓦が出土した柱穴もあるが、すべて小片である。

このⅢ区及び、Ⅳ区の調査では下面のみヘリコプターによる空中写真測量を行っている。

### 2. 上面の遺構

上面では、掘立柱建物や柱穴・土坑・井戸などが検出された。遺構内からは瓦片は出土するが、時期を決定できる遺物はあまり出土しなかった。おそらく15世紀以降のものであろう。

#### 掘立柱建物

##### SB301

2間×4間に南北西側の3面に庇・縁が付くもので、南北7.3m、東西10.0mの規模をもつ。柱間は東西約2.2m、南北約2.4m、庇の出は北・西側で約1.3m、南側は約1.0mを測る。建物の方位は下面のSB307の方位に近い。上面で復元できた最も大きな建物である。

##### SB302

2間×2間の建物で、南北約4.2m、東西約4.5mの規模をもつ。建物の方位はSB301に近い。SB306と重複している。

##### SB303

2間×4間の側柱建物、東西棟で、南北約4.3m、東西約8.8mの規模をもつ。建物の方位はSB301と異なり、東がやや北に振れ、暗渠排水や溝などに近くなる。

##### SB304

3間×2間の側柱建物で、南北約5.5m、東西約5.0mの規模をもつ。建物の方位はSB303に近い。

##### SB305

2間×4間の東西棟で、南北約3.9m、東西約7.4mの規模をもつ。建物の方位はSB303に近い。建物の南辺と東辺に土坑が掘られており、東辺の土坑には塊石が入れられている。

##### SB306

4間×3間以上の建物で、更に北側に広がる可能性がある。南北約7.0m、東西約7.7mの規模をもつ。建物の方位はSB303に近い。SB302と重複している。

#### 井戸

##### SE1

Ⅲ区の東端で検出された。直径約2.2m、深さ約2.5mの掘り方内に、内径約1mの石組みを積み上げている。井戸の掘り方周辺が浅く窪み、東側で溝に取り付いている。出土遺物は少なく、埋土中には東播系須恵器片、備前焼片や羽釜形、鉄かぶと形の土師器鍋片や瓦が含まれていたが、図化できたのは84の須恵器甕片のみである。井戸は中世後半以降まで使用されていたものであろう。湧水や時間的制約の

ため、最下層までの断ち割りは行わなかった。

### 3. 下面の遺構

整地土を除去した下面では、築地塀・柱穴・溝・土坑などが検出されたが、土壌層・包含層は見られず、整地前に削平されたものであろう。下面では15世紀までの遺物が出土している。調査区の東端では平面形が方形を呈した柱穴がいくつか認められたが、建物を復元するには至らなかった。

また、縄紋土器や同時代と考えられる石器が出土しており、下面の一部の遺構は同時代のものと考えている。

#### 築地塀

Ⅲ区の西半部で南北方向の2条の溝が平行して検出された。これはⅡ区から続く西面築地側溝であり、2条の溝間が築地基礎部分となり、幅2～2.4mを測る。外側溝は幅1.5～2.5m、深さ約35cm、内側溝は幅1.6～2.2m、深さ約30cmを測り、底の高さはともに南側に傾斜する。

内側溝では瓦が比較的まとまって出土しており、北半の一部では完形に近い状態で出土している。他地区の状況から見て、西面築地には瓦は葺かれていなかったと想定されることから、築地に伴うものではなく、別の瓦葺の施設を想定する必要がある。ここでは軒瓦も含まれており、西門などの施設が現県道下に存在する可能性も完全には否定できないが、軒瓦や平瓦の種類の多彩さから見ても、Ⅳ区で検出された建物からもたらされた可能性が最も高いと考える。また、外側溝からも瓦が出土しているが、Ⅳ区からの出土が少ない熨斗瓦が4点出土するなど、特異な状況を示す。両側溝の埋土上層からは12世紀から13世紀頃の土師器が出土している。

掘立柱建物SB307は築地塀上に重複して構築されており、側溝が埋没した後のもので、寺院の一部であった築地塀は削平されてしまったのであろう。但し、築地塀より西側では遺構密度が薄く、土地境界の意識は残っている。

#### 掘立柱建物

##### SB307

5間×4間の南北棟建物で、南北約10.6m、東西約8.6mの規模をもつ。南側の一部に幅約1mの庇・縁が付く。建物の方位は築地に近いが、北がやや東に振れる。築地上や側溝埋土上から柱穴が掘り込まれており、築地側溝が埋没し、築地本体が削平された後に構築されたものであろう。

##### SB308

SB307の南東隅に取り付く小型の南北棟で、SB307の南辺柱列と庇・縁の柱列と列を揃えて作られており、一連の建物である可能性がある。南北約3.6m、東西約1.8mの規模をもつ。

##### SB309

2間×3間の南北棟側柱建物で、南北約5.6m、東西約3.0mの規模をもつ。SB307と重複し、方位も北が西に振れている。

##### SB310

3間×3間の建物で、南北約4.5m、東西約3.4mの規模をもつ。SB307・309と重複し、方位もSB309よりさらに大きく振れている。

## SB311

3間×3間の南北棟側柱建物で、南北約5.0m、東西約4.2mの規模をもつ。建物の方位はSB307に近い。

## 土坑

### SK301

長径約1.7m、短径約0.9m、深さ約0.6mの楕円状の断面を示し、底には2ヶ所の柱穴状の窪みが見られる。埋土は、10YR3/2黒褐色小礫混じり極細砂で、地山に近いもので、他の遺構とは異なる。近辺で黒曜石製の石器が出土していることから、陥し穴の可能性がある。西側の築地塀に近い地点にも同様の長円形の土坑があり、深さは0.5mを測る。

### SK302

Ⅲ区の北東部で、5m×3.5mの範囲の深さ10cm程度の浅い落ち込みを検出した。この浅い土坑からは瓦片が一定量出土しており、おそらく、Ⅳ区の基壇建物に伴う瓦がここまで拡散し、後に上面を削平されたものであろう。

## 溝

### SD303

調査区の東端でSK302を切るように弧状を描いて斜めに走る幅約25cm、深さ僅か5cm程度の小溝である。83の丹波焼壺片や中国製の褐釉壺片が出土している。

## 第5節 Ⅳ区の調査（図版20～28）

### 1. 調査の概要

Ⅳ区は県道姫路上郡線と丘陵斜面に挟まれた狭小な地区である。Ⅳ区北側の丘陵斜面では瓦片や中世の陶磁器が採集されているため、確認調査を実施した。工事用道路部分に当たる東寄りの地点で遺構を確認したことから、Ⅴ区の調査をおこなった。本線部分にあたるⅣ区直上では、遺構は確認できなかった。更に西面築地の延長部分及び、当初、窯の一部と考えていた焼土の延長部分にトレンチを追加したが、遺構は検出されず、表土に遺物が含まれているにすぎなかった。

Ⅳ区の調査では、重機によって表土・盛土を除去したが、その際盛土内にかなりの量の瓦が含まれていた。この盛土は含まれていた陶磁器から近世以降になされたことがわかるが、どこから持ち込まれたものかは不明である。含まれていた瓦の多彩さから見て、その下層の基壇建物周辺出土の瓦に近く、一辺約60cmの礎石と考えられる石が3～4塊含まれていたことから、基壇建物を削って整地された可能性が高い。おそらく現県道を作る際に削平されたものを盛土にしたものであろう。この礎石と考えられる塊石には柱座などの造出は観察できず、各面にも柱当たりの痕跡は認められなかった。

確認調査の結果、西面築地の延長部では地山が検出され、築地塀が途切れているか、或いは東へ折れて北面築地となることが想定された。東側のトレンチでは大量の瓦が礫と共に出土したが、東西方向の北面築地側溝の存在は判断できなかった。この確認調査の東側トレンチは実はトレンチ内にちょうど同じ方向・幅の中世の溝が走っていることが全面調査の際にわかった。

機械掘削により旧耕土・床土を除去すると、山裾付近では黄褐色の地山面が現れ、溝・柱穴が検出された。南側の同一平面上でも焼土や土坑、井戸などを検出した。これらの遺構を上面の遺構とした。

## 2. 上面の遺構

上面の遺構は山裾の地山面に掘削された柱穴や溝（近世以降の暗渠も含まれる）や、瓦群の上面に盛土された旧床土層？面で検出された土坑・柱穴などである。この他に耕作痕と思われる平行に走る浅く細かい溝も検出された。山裾に平行する小溝はもともと山裾がそこまで延びていた可能性を示しており、掘立柱建物の時期に山裾を広げたものであろう。

### 掘立柱建物

#### SB401

2間×2間の南側に縁の付いた南北棟掘立柱建物である。更に東側に4間分拡張できる可能性があるが、柱間が不揃いである。焼土を切り込んで一部の柱穴が掘られている。

#### SB402

2間×2間の掘立柱建物であるが、西側は3間となる。下層の瓦群を切り込んで構築されている。これらの掘立柱建物が構成される柱穴からは時期が決定できる遺物は出土しなかった。

### 土坑

#### SK403・404

SK403は平面形が直径約70cmの円形の土坑で、深さは約15cmを測り、壁面は垂直である。埋土および底近くから銅銭が13枚出土した。SK404も直径約60cm、深さ約20cmの円形の土坑で、壁面は垂直である。埋土から銅銭が出土した。全て北宋銭で、聖宋元宝（初鑄年1101）が最も新しいもので、この土坑などのいくつかの上層遺構は早ければ12世紀初め、おそらくそれ以降に構築されたことがわかる。

### 井戸

#### SE 2

石組みの井戸で、基壇周辺の瓦群を切り込んで構築されている。直径約2.3m、深さ約3mの掘り方内に、内径約1mの石組みを構築している。石組みは大きいもので50cmを超える山石や川原石を約21段積み上げている。井側内埋土や掘り方埋土には多くの瓦片が含まれている。119の備前小壺片も掘り方から出土した。中世後半以降のものである。

### 焼土

地山面が傾斜する位置で検出され、柱穴が切り込んでいるため、当初下面の遺構として捉えた。前面に堆積した灰層中からも大量の瓦片が含まれていたことから、補修用の瓦の窯燃焼部と考えていたが、斜面上方のトレンチでも焼成部は検出されず、また含まれていた瓦が基壇周辺の瓦と同様にタタキ・焼成・胎土が多岐に亘る事から瓦窯ではなく、中世頃の鍛冶遺構の可能性を考えて、上面の遺構として取り扱う。約1.5m四方にわたって強く火を受けており、中央部は青褐色に硬く焼け、周辺は赤褐色に火化する。

## 3. 下面の遺構

下面の遺構には寺院址に関わる築地塀や基壇建物があり、それに伴う瓦群の下層で検出された土坑などが含まれる。

## 築地堀

Ⅱ区から南北に続く西辺を限る築地堀跡である2条の側溝を検出した。築地側溝は旧の斜面裾付近で途切れることから、築地堀も丘陵斜面にあたって終わるものと思われる。斜面上方の細長い平坦面にもトレンチを設定したが、何ら遺構は検出されなかった。調査当初は東側へ直交する細砂の帯状の堆積を確認したため、築地堀が東へと折れ曲がるものとし、築地検出として掘り下げ、広い面積に広がる瓦群が現れた。これは後に基壇建物に伴う瓦群であることが判明したが、その上面出土の瓦は築地検出として取り上げており、統計資料には付さなかった。南北方向の築地堀はⅡ区からこのⅣ区にかけて総延長約71mとなる。

## 基壇建物

調査区の東半部では、地山がすぐに検出された北端の山裾を除いて、一面に瓦の堆積が広がっていた。表層の細片を除去すると、南端の現県道側で「L」字形に瓦が分布しない箇所があり、瓦葺建物の基壇の一部と判断された。図版26は細片を除去した段階のものである。

瓦群に含まれる瓦は、築地側溝出土のそれと比べて細片が多いが、一部には平瓦が重なり合って並ぶ状況が認められ、軒先から転落した様子を窺わせる。風鐸も基壇の北東隅部分の瓦群下層から出土している。瓦群は基壇とその北側の地山の落ちに挟まれた幅8mの範囲の落ち込み内に堆積していた。これは建物に伴う雨落ち溝とするには規模が大きいことから、建物の基礎地盤造作のための整地削平と考えられる。

基壇は上幅約9.0m、裾幅約11.3mの北辺と、北西・北東の隅部が確認されたが、北東の隅部は中世の井戸と溝によって不明瞭であるため、上幅は更に大きくなる可能性がある。断ち割りの結果、黒色土と黄褐色土の不規則な互層が上面に認められるが、掘り込み地業は認められない。下部は地山の削りだしによって構築され、積土のあった上部はその後削平されたものと思われる。高さは最高値で約0.7m残り、全周に高さ約10cmの小段を有する。段の幅は北辺で1m内外である。段の内側には直径15cm程度の杭列？が並ぶが、全周するものではない。基壇化粧となる石材なども出土せず、瓦積み状況も認められなかった。木材による化粧であろうか。

基壇の上面の西寄りに平面形が方形を呈する深さ約20cmの土坑或いは柱穴が検出された。また、同じく基壇上面で検出された小柱穴からは、11世紀後半から12世紀前半にかけての土師器小片が出土している。これら以外の礎石掘付坑などは検出されなかったが、盛土を重機で掘削する際に立方体を呈した石塊が周辺から出土しており、礎石の可能性を考えている。

基壇北辺の方位は、築地の方位に対して直角ではなくやや北に振っているが、丘陵裾の方向と一致するため、地形によって制約されたものと考えられる。

この基壇は南のⅢ区では検出されていない。また、Ⅲ区ではこの基壇に伴うと考えられる瓦群の堆積も認められなかったが、基壇の南にあたる浅い土坑SK302内には比較的瓦が含まれていた。

## 土坑

瓦群の下層で検出された土坑は、基壇の周囲に不規則に掘られており、平面形も不整形なものが多い。いずれの土坑も瓦は上層にのみ浅く溜まっており、その下層には地山に類した黄褐色の細砂が堆積している。下層からは瓦片はほとんど見られない。

SK421は深さ約40cmの土坑で、上層には瓦片が堆積しており、12世紀前半頃の須恵器椀(118)が出土している。

SK422は基壇北西隅に掘られた土坑で、埋土はレンズ状に堆積している。埋土中からは土器の細片が出土している。

SK423は深さ約15cmの浅い土坑であり、土師器甕片（116）や須恵器甕片（117）が出土している。他の土坑も20～40cm程度の深さをもつが、SK424は東の調査区外へ向かって広がっている。Ⅳ区東半は後に井戸が設けられるように、水脈が走る小さな谷地形となるのであろう。

#### 焼土坑

基壇東の瓦群を取り除いた下層で検出された。楕円形の土坑の狭端部が赤化している。土坑の深さは約20cmである。遺物は伴っていない。この他にも下層土坑SK425内や、基壇北側の裾でも小規模な焼土を確認している。

#### 柱穴

基壇の北正面に2基の柱穴（P4131・4132）が約0.6mの間隔を空けて基壇と平行に並んでおり、共にKNM4類の軒丸瓦が上面に突き出る状況で検出された。柱穴の深さは20～25cmである。Ⅲ区でも中世に属する10ヶ所近い柱穴から小片ではあるが、軒瓦が出土しており、建物倒壊時や後世の根固めの可能性もあるが、藤原京横大路の路面上に掘られた土坑に軒丸瓦などを納めたものがあり、地鎮め祭式の遺構とされている。（今尾1994）、類似する性格を有するものとして報告する。P4132からは杯B小片が出土している。

また、同じく基壇北面のP4102からは土師器甕が出土している。

今尾文昭 1994 「新益京の鎮祭と横大路の地鎮遺構」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズ

## 第6節 V区の調査

### 1. 調査の概要

小犬丸中谷遺跡は、小犬丸中谷廃寺の北側にひかえる山塊から、南向きに派生した尾根の先端部付近に位置しており、遺跡付近の地形は、中谷古墳および以下で報告するSX501などが立地する斜面部と、中谷遺跡が立地する平坦面に大きく二分される。

上位に位置する斜面部は、開墾の対象となっていたようであるが、概ね尾根上の斜面が遺存しており、遺構はこの斜面を利用して構築された小犬丸中谷古墳とSX501、および中谷古墳の墳丘を削平した後に造られたと考えられる掘立柱建物跡1棟が検出された。斜面部と平坦面の間は高さ3mを超える崖となっており、岩盤が露頭していた。また、中谷古墳は、崖によってほぼ半分が崩壊していた。

下位の平坦面は、調査以前は耕地として利用されていたが、調査の結果、上位斜面部との間の崖に隣接する位置にまで遺構の分布が見られたことから、遺跡設営時にはすでに現状のような崖面が形成されていたことが明らかになった。この崖面の形成が、遺跡設営のために人為的になされたものかどうかは判断が難しいが、その可能性は首肯されるものである。いずれにしても崖面の形成は、中谷古墳造営以降、中谷遺跡設営までの間ということになる。

中谷遺跡南縁は、再び高さ2～3mの崖面となっており、その下位の平坦面は民家の敷地内となっていた。尾根裾に形成されたこのような雛壇状の平坦地は、平地面積が狭小な本地域にあって耕地面積を確保しつつ、集落を形成するためには必須のものであったと推察される。

調査着手時点においては、小犬丸中谷古墳の存在は知られておらず、集落遺跡の調査を目的として調査計画を立案した。その結果調査は、表土および遺構上面を覆う堆積物を機械掘削により除去し、以下を人力により調査するという方法で実施することとなったが、機械掘削開始直後に、上位斜面部と下位平坦面間の崖面から横穴式石室が検出されたため、中谷古墳と命名して、あわせて調査を実施することとなった。なお遺構の図化は、国土座標を用いた座標系を基準として実施している。

## 2. 上位斜面部の遺構

上位斜面部では小犬丸中谷古墳のほか、小型の石室状遺構（SX501）、中谷古墳の墳丘を削平して設けられた掘立柱建物跡1棟（SB504）が検出された。

### 小犬丸中谷古墳

#### 墳丘（図版29）

小犬丸中谷古墳は、復元直径約6m、石室の全長3.8mを測る小型の円墳で、開墾のため石室のほぼ中央で縦断されるように破壊され、斜面下方にあたる南半分（石室右側壁を含む）を喪失していた。加えて墳丘東端は調査区外となるため、墳丘の全形は明らかではない。しかし調査区内に遺存していた部分の形状から、石室長軸方向にやや長い円墳であったと推定できる。

墳丘の上部は、開墾によって削平されており、この整地面から掘立柱建物跡（SB504：後述）が検出されたことから、墳丘の削平は中世段階におこなわれた可能性が高い。墳丘上方の斜面には、基盤の風化岩盤を掘削して幅1.8～2.3mの堀切が設けられていた。また、墳丘の断面観察により、遺存していた墳丘盛土下部では、こうした風化岩盤のブロックを多量に含む盛土層が認められた（図版30）。

#### 石室（図版31）

かろうじて遺存していた奥壁から、石室幅は0.9m前後と推定される。奥壁は石室外方向に大きく傾斜していたが、正立位を復元すればほぼ左側壁の高さと合致する。

左側壁は、床面から0.7mの高さまでが遺存していた。基底石の両端で測定した側壁全長は、3.76mである。奥壁際と羨道側端部では、基底石として大型の石材が縦位に設置されているが、この両石材間の基底石は、多様な大きさのものが横位に用いられている。2段目より上では、石材の形態や大きさのばらつきが大きく、壁面の空隙が目立ち粗略な印象を受ける。2段目の石材頂部の高さを、揃えようとする意図は認められないが、3段目（奥壁・羨道側では2段目）では、側壁石材頂部の高さは、正立位に復元した奥壁高とほぼ同じにそろえられていたようである。

石室内の遺物は僅少で、奥壁際から土師器甕1点、石室中央やや奥壁寄り、鉄器1点、砥石1点、羨道部で鉾滓1点が出土したにとどまる。これらのうち砥石と鉾滓は、後世の再利用の際に遺棄されたものと考えられる。また、墳丘西側の堀切底付近から出土し、石室内の副葬品であったと思われる遺物、および機械掘削時に石室直下の崖面付近から出土し、石室破壊時に転落したと考えられる遺物を、一括して記載する。

### 石室状遺構

#### SX501（図版32）

SX501は中谷古墳の北西で検出され、内部は炭化物などを含む自然流入土によって埋没していた。

軟質の風化岩盤を掘削した掘り方内に、扁平な大型の石材を敷いて床面を設け、3方に拳大ないしは

それよりやや大型の礫を積んで壁を構築した、小型の石室である。掘り方は、奥壁側に向けてやや幅を広くしているが、床面および側壁はほぼ正しく長方形の規格をもって構築されている。掘り方の規模は、長軸3.4m、短軸1.8mである。斜面下方に向けて開口していたものと考えられ、斜面上方にあたる奥壁側での掘り方の深さは約1mを測る。

床面の敷石範囲は、開口部より一段低く掘り下げられており、敷石上面と開口部の地面の高さが等しくなるように構築されている。床面の敷石は、いずれも在地の石材と考えられるが、平滑な面を選択して用いている。

側壁は、拳大ないしこれよりやや大型の多面体状の石材を用いて構築されており、基底から最大で4段分（右側壁：最大高0.4m）が遺存していた。遺存する石材の状況から、奥壁も同様の構造であったと見られるが、奥壁の石材は大部分が喪失していた。左側壁は、右側壁と異なり、開口部側に大型の石材を用いている。ただし、開口部の右側壁付近に原位置を失った大型石材1点が遺存しており、これが右側壁開口部寄りに用いられていた可能性は考慮してもよいであろう。

開口部側では、床面の石敷きと掘り方との間に、均等な幅の空隙が見られる。この空隙幅は、側壁に見られる石材の厚さに近似していることから、何らかの閉塞施設が設けられていた痕跡と考えられる。また遺構の形式上、本来天井をもつものであったろうが、調査区内では天井石と考えられるものは出土していない。

SX501埋土からは、遺物の出土は見られなかったが、床面石材除去の段階で、石材下より小犬丸中谷廃寺から持ち込まれたと見られる平瓦破片が出土した。やや焼成不良と見られる瓦を主体とし、いずれも破片化したものである。平瓦のタタキの種類には⑤⑥⑩⑭種などが見られる。

#### 掘立柱建物跡

##### SB504（図版37）

中谷古墳の墳丘が削平・整地された面において、掘立柱建物跡1棟が検出された。調査区内では2間×2間までが確認されている。柱穴の規模は、直径25cm～30cm、深さ11cm～33cmを測る。

柱穴内からの出土遺物はなく、建物跡の時期を決定する根拠に欠けるが、中谷古墳の墳丘を削平した整地面付近で、底部に回転糸切りを用いた須恵器碗（179）が出土していることから、これに近接した12～13世紀代に属する可能性を考慮できる。

### 3. 下位平坦面（中谷遺跡）の遺構

下位平坦面からは、掘立柱建物跡・土坑・柵・溝・井戸等の遺構群が検出された。掘立柱建物跡群は、調査区中央部から東部に位置し、重複した数棟以上からなる。柵・溝はこれに伴うものと思われる。土坑は、その多くが調査区南西部で等間隔の配置を見せるが、SK501・502を除き、近代以降に構築されたものである。

以下に遺構について記載をおこなうが、掘立柱建物跡については柱穴群の重複が著しく、建物跡に相当する柱穴の組み合わせが、正しくおこなわれているか否か問題を残している。

#### 掘立柱建物跡

##### SB501（図版36）

下位平坦面の中央から東寄りの位置で、変則的な3間×6間に復原した。さらに調査区南側へ延びる可能性も捨象できないが、調査区南側が、直ちに崖面となっていることを勘案すれば、その可能性は低

いと判断される。東西方向の柱間が、建物跡の両端では2.0～2.2m程度であるのに対し、中央部2間の柱間は、その2倍近い約4mを測る。こうした柱間の状況は、一般的な掘立柱建物跡とは異なっており、復元の正否に問題を残す。建物跡の規模は、東西11.7m、南北6.0mである。

建物跡外周の東・西・北側を囲むように、「コ」の字形の柵と考えられる柱穴列（柵）、および北側と西側で溝が検出された。

柱穴内からの出土遺物は僅少であり、図示しうるものはわずか1点（177）のみである。

## 柵

### SA501（図版36）

掘立柱建物跡群の、山側で検出された柱穴群をもとに認識された。山側では、掘立柱建物跡SB501の長軸に、ほぼ沿った方向を示す。柱穴間はやや不規則な部分も見られるが、多くの部分で2.0m前後を測る。西側と東側でやや鋭角的に屈折して南に延び、総延長は、約23.2mを測る。

図示できる遺物は出土していないが、柱穴P515およびP534より、風化・磨耗の著しい瓦片が出土しており、小犬丸中谷廃寺から持ち込まれたものと考えられる。

## 溝

柵の北（山）側と西側に位置しており、最大幅は20cm前後を測る。北側では延長約7.6m、西側では約2.9mにわたって、柵SA501にやや斜交と方向に延びることから、掘立柱建物跡SB501、柵SA501に伴う可能性があると思われる。遺物は出土しなかった。

## 掘立柱建物跡

### SB502（図版35）

下位平坦面東部で復元された、1間×3間の東西方向建物跡である。掘立柱建物跡SB501・503と重複する位置にあるが、直接的な柱穴の重複部分がなかったため、前後関係は明らかではない。柱間は東西方向がいずれも2.0m前後であるのに対し、南北方向では3.0～3.2mを測る。建物跡の規模は、東西6.1m、南北3.2mである。遺物は出土しなかった。

### SB503（図版37）

下位平坦面南東部で復元された、1間×2間の建物跡である。掘立柱建物跡SB501・502と重複するが、直接的な柱穴の重複部分がなかったため、前後関係は明らかではない。柱間は東西方向がいずれも2.0～2.3m前後であるのに対し、南北方向では4.0mを測る。建物跡の規模は、東西4.2m、南北4.0mである。

柱穴P507より、土師器鍋1点が出土した（178）。このほかに、図示できない遺物として、柱穴P528より、風化・磨耗の著しい瓦片が出土している。

## 井戸（SE3）（図版38）

調査区東端に位置する、現表土（耕土）下で検出された石組みの井戸である。検出時には、大型の石材3枚を用いて完全に閉塞されており、内部には土砂の流入はほとんど認められなかった。側壁は、拳大～人頭大の石材を用いて構築されており、検出面からの深さは5m以上に達する。位置が民家に接近しており、重機による断ち割り掘削ができないこと、最深部が5mを超え、人力による調査が危険であることから、内部の調査は断念せざるを得なかった。

内部の排水は実施したが、遺物等は確認できなかった。

#### 土坑

調査区の南西側で、一列に並ぶ方形～長方形の土坑群が検出された。これらはいずれも、近代以降に掘削されたものと考えられる。締まりの悪い土壌で埋没しており、遺物はほとんど出土しなかったが、SK506から銅製品1点が出土している。

#### 柱穴

柱穴P525・526は、ともに長径60cmを超える大型の柱穴で、柱穴内に大型の石材を埋置している点でも共通するが、周辺に類同の柱穴が見られず、建物跡として復元することはできなかった。

#### 4. V区小結

この地区の調査では、古墳時代終末期・中世前半期という、大別2時期の遺構群が検出された。

小犬丸中谷古墳は、これまで古墳の存在が知られていなかった小犬丸地区の当該期を考える上で、重要な資料といえる。今後の周辺地域の開発にあたっては、同様の古墳に対する十分な注意が必要となる。また、SX501は、石敷きの下位から、中谷廃寺から持ち込まれたと見られる複数の平瓦破片が出土したことから、平安時代後半以降の、貯蔵穴的な機能をもった「室（むろ）」ないしは墓であろうと推測される。下位平坦面の遺構群との関連は、明らかにできなかった。

下位平坦面には、数棟にわたる建物の重複が見られるが、建物の規模・形態については遺構の重複が複雑なため問題を残している。出土遺物が僅少であることから、遺構群の時期を決定することは困難である。しかし、掘立柱建物跡SB501の柱穴P514から出土した白磁皿が12世紀後半代に属すること、図示し得なかったが、ほぼ同時期と見られる須恵器椀が柱穴内から出土していること、この範疇を逸脱する時期の遺物が出土していないことなどから、概ね12世紀末から13世紀前半にかけて形成されたものとして大過ないだろう。これは小犬丸中谷廃寺の廃絶以降の時期に相当している。

## 第7節 小犬丸中谷廃寺の電気探査

### 1. はじめに

山陽自動車道新宮インターチェンジの建設に伴う事前の発掘調査で、寺院の築地跡に附属する2本の並行した溝が検出された。溝は調査区の中央でほぼ直角に曲がる南西隅と推定される部分が検出されている。その内、東西方向の溝が東側の調査区外にも延びることが想定され、また門などの遺構の存在も推定されるので、地権者の同意を得て、電気探査を行った。

### 2. 探査の方法と測定範囲

電気探査は地中に電気を流し、土の電気抵抗を測定し、土壌の電気抵抗の違いにより、地中に含まれている物体や地中の状況を推測する手法である。地中に水分が多く含まれていると電気は流れ易く電気抵抗は低く、乾燥した土壌や礫などが多く含まれていると、その箇所は周囲よりも電気抵抗は高いと考えられる。今回の探査の対象は、溝跡であり、一般的には水分を集め易く電気抵抗は低くなると想定されるが、溝中の堆積土には礫や瓦片が混じっており、場合によっては高くなることも想定された。電気抵抗の低い箇所、若しくは高い箇所が探査区内で東西に帯状に延びれば、その箇所が溝跡と推定される。

電気探査に使用した機器はイギリス Geoscan Research 社製のRM15電気抵抗測定器 (Resistance Meter) で測定法には4本の電極棒を等間隔に配置するウェンナー法を採用し、2本ずつの電極を0.75m間隔に木枠に固定し、測定点は測定線に沿い南北方向に1m間隔で測定した。測定線の間隔も1mとした。測定深度は、電極棒の間隔と同じでほぼ0.75mまでである。測定範囲は東側水田面全域を対象として南北59m、東西36mで南西隅部を測定原点とした。東西方向の築地溝の予想位置は原点から北に25~35m付近に当たる。測定時の出力電力は40Vの1mAである。

### 3. 探査成果

探査の成果は比抵抗分布図(成果図)として表している。測定数値(見かけの比抵抗)の高低差を濃淡で、高い抵抗数値は濃く、徐々に低くなる抵抗数値は淡く色分けし、等比抵抗線を加えて表現している。成果図で注意を引く箇所にはアルファベットを付けた。

南北測定線0m付近の高比抵抗は西側畦の影響と思われる。高比抵抗のAは西端から東へ7・8m付近に幅約2mで南北に25mほど延びている。次に高い箇所としてはBとCが上げられる。抵抗の低い箇所は北東部に広がっているが、特に抵抗値の低いDは北西から南東方向に幅広く認められる。

測定区内を全体的に観た抵抗値の拡がり、A・B・Cを含んだ高比抵抗箇所が北西から南東に拡がり、その北側に低比抵抗のD、北東端でやや高い抵抗値のEとなっている。

### 4. おわりに

起点から北へ25~35m付近には、低比抵抗もしくは高比抵抗値の帯状に東西に延びる箇所は見あたらない。Aは直交し、Bはやや斜め方向となっている。成果図からは探査目的の溝跡と推測される成果は認められない。地形図から探査を実施した水田の標高は43.93m、調査された水田は44.50mを測り、約50cmの差がある。検出された溝底高が約44mなので、圃場整備事業で削平された可能性が考えられる。結果的には、探査で、築地や溝は消滅している可能性が高いことを表した。

発掘をしていないので確かではないが、Aは圃場整備前の畦、BやCは規模の小さい礫の集まりとも思われる。Dは北西から南東方向への窪み(流路跡)と想定する。

# Koinumaru RM(Wenner-0.75m)

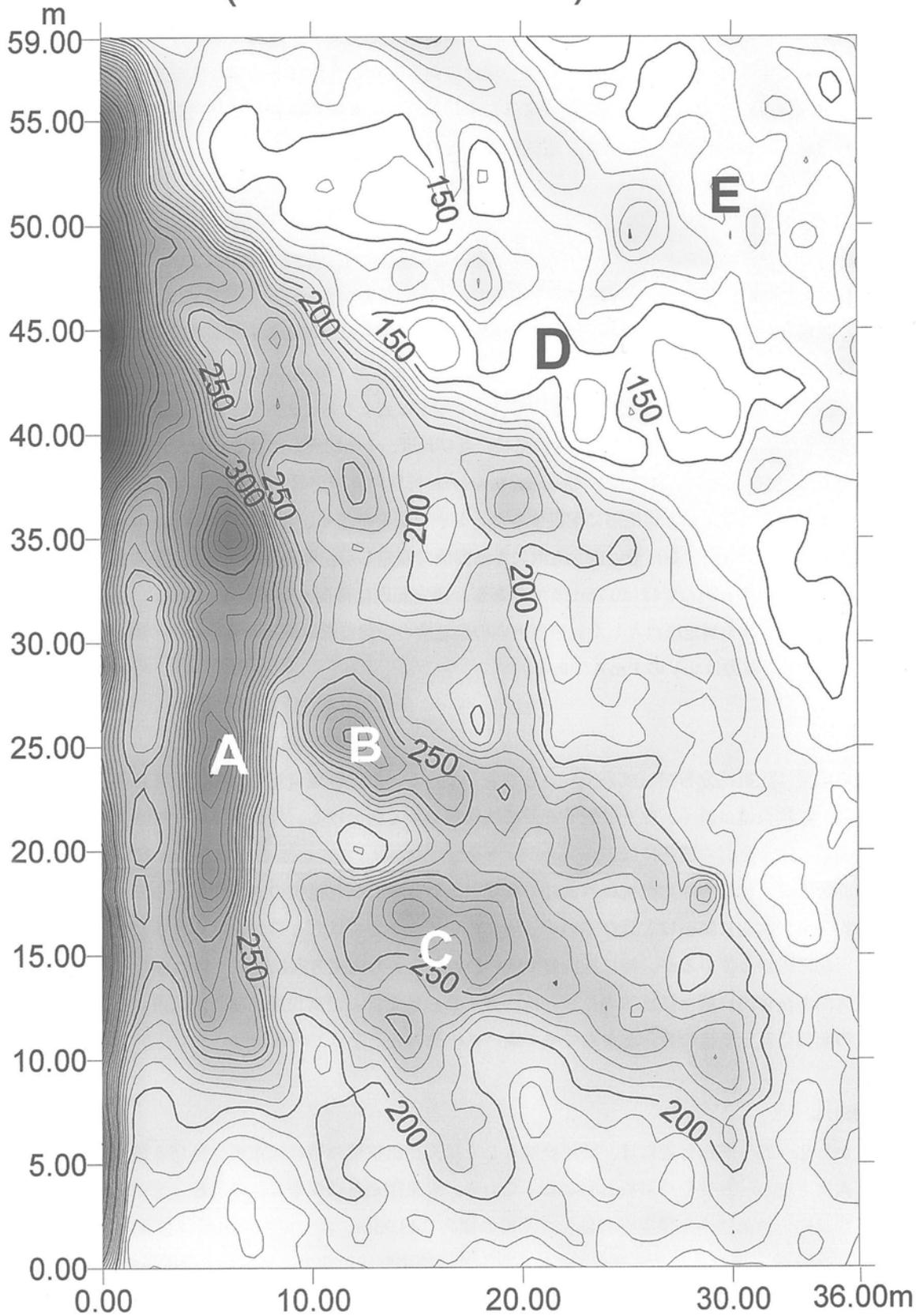


图1 電気探査成果図

成果図の四隅の国土座標は以下の数値である。

	X	Y
南西隅 (原点)	-127,045.339	14,099.307
北西隅	-126,987.782	14,112.290
南東隅	-127,047.031	14,135.267
北東隅	-126,989.516	14,148.248



図2 電気探査作業状況



# 第4章 遺物

## 第1節 概要

小犬丸中谷廃寺・同遺跡・同古墳から出土した遺物には、土器（縄紋土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器）、瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦）、土製品、石器・石製品、金属製品等があり、縄紋時代から近世にかけて、断続的ではあるが非常に時間幅の広い様相を示している。発掘調査では28ℓ入りコンテナで635箱もの遺物が出土したが、その大半が瓦類である。このため瓦類については、別に章を設けて一括して分類し、地区ごとの様相を記述する。

以下にⅠ区からⅣ区出土の遺物の内、縄紋土器や弥生土器、土製品、石器・石製品、金属製品については出土点数が少ないため、一括して報告し、その他の土器についてはⅠ区から順に記述する。また、Ⅴ区は他地区から離れた丘陵斜面上であり、遺物も小犬丸中谷古墳に伴うものなど別の性格を有するものが含まれているため、節を改めて記述する。

## 第2節 土器（図版39～42）

### 1. 縄紋土器

1はⅢ区築地内側溝内P256から出土した。キャリパー形の口縁部を有する深鉢形土器で、外面と口縁部内面に縄紋を施し口縁端部は磨り消している。口縁直下に二条の波状紋を施す。胎土中には直径1mm程度の石英や長石の砂粒が多く含まれる。中期のものであろう。下半部と上半部は接合しないが、残存復元高27.9cm、復元口径33.6cmを測る。

2はⅢ区P200から出土した胴部の破片で、断面蒲鉾状の隆帯で紋様を描く。器表面が荒れており、地紋は不明である。胎土中には直径2mm程度の石英や長石の砂粒が含まれる。中期のものであろう。

3はⅢ区P227から出土した。わずかに外傾する胴部の破片で、縦方向の縄紋を施す。胎土中には直径1mm程度の石英や長石の砂粒が多く含まれる。中期の船元式の範疇に入るものであろう。

4はⅣ区築地内側溝北端部から出土した縁帯紋土器口縁部である。外反する口縁部を肥厚させ、平行する沈線2条を施す。後期中頃の津雲A式や北白川上層1・2式に相当する。

5はⅢ区築地内側溝から出土した胴部の破片で、縄紋を弧状の沈線で囲み、中を磨り消した磨消縄紋である。後期前半の中津式や福田KⅡ式に相当する。胎土中には直径3mmまでの長石や石英の砂粒が多く含まれる。

### 2. 弥生土器

6はⅡ区の下層の南西部流路状落ち込みから出土した広口壺の口縁部である。大きく開く口縁の端部を拡張して面を作る。頸部には凹線を施す。

7はⅠ区南西部の近世以降の流路跡から、8はⅡ区機械掘削時に、9はⅢ区下面P3193から、10はⅢ区包含層出土の弥生土器底部である。後世の堆積中に混入したもので、弥生時代の遺構から出土したものはなく、調査区全体でも弥生時代の遺構は確認できなかった。

### 3. I区出土の土器 (11~47)

11・12は集石SX101から出土した。SX101は自然堆積の可能性もある集石であるが、軒丸瓦S1・2も出土している。11は土師器の椀で、外に開いた比較的高い貼り付け高台をもち、内湾しながら開く口縁へと続く。

12は須恵器杯底部で、貼り付け高台をもつ。内面には一方向の仕上げナデを施す。底径6.8cmを測る。

13は集石SX102出土の土師器の大型杯である。直線的に開く口縁部をもつ。底部を欠くが、高台を持つものであろう。口径約17.2cm、残存器高8.1cmを測る。

14~17は溝SD102から出土した。14・15は土師器小皿で、内外面に指頭圧痕を残した手づくね成形の後、ハケ状のナデを施す。14は内面に煤が付着する。歪んでいるが、口径7.5cm、器高1.6cmを測る。15も歪んでおり、口径7.5cm、器高1.6cmを測る。

16は龍泉窯系青磁碗底部で、高台側面まで釉を掛け、露胎の高台内面には3ヶ所にトチの痕跡を残す。見込みには草花紋を印刻する。底径5.1cm。

17は土師器鍋で、底部中央を除いて外面にはススが付着し、内面の中央にも炭化物が付着する。斜めにまっすぐ開く体部には斜め方向に平行タタキを施し、内面はナデによって仕上げる。端部を肥厚させた口縁部はナデによって仕上げる。口径約27.1cm、器高約11.1cmを測る。

18~21はSD103から出土した。18は土師器甕口縁部である。頸部まで縦方向のハケで調整し、口縁部外面はヨコナデで仕上げる。口縁部内面は横方向のハケ調整をおこなう。

19は土師器椀である。外方へ開く貼り付け高台をもち、内湾しながら開く体部へと続く。緻密な胎土をもち、轆轤成形であり、口縁には斜め方向の仕上げナデを施す。口径約16.2cm、器高約6.8cmを復元した。

20は鉄かぶと形の鍋で、外面には平行タタキが残り、内面はハケの後、ナデで仕上げるが、口縁部直下は強いナデによって窪み、仕上げのナデは及ばない。口縁部はヨコナデで仕上げる。口縁内面を肥厚させる。

21は須恵器のいわゆる壺Qである。回転ケズリによって張る肩部から円筒形の頸部へと続き、水平に開く口縁部へと至る。内面には粘土紐の痕跡が残り、体部下半は横方向の回転ヘラケズリを施した後、ヨコナデで仕上げる。口縁部は輪花状に12回以上打ち欠いており、おそらく底部も意図的に抜かれたものであろう。胴部最大径9.7cmを測る。

22・23はSD104から出土した。22は鉄かぶと形の鍋で、外面には平行タタキが残り、口縁部はヨコナデで仕上げる。口縁部直下の内面に強いナデを施して端部を肥厚させる。

23は備前壺である。円盤作りの底部から粘土紐を積み上げ、タタキによって成形している。器表面はナデによって仕上げるが、肩部には指頭圧痕が残る。肩部と胴部最大径にヘラ描き沈線2条を描いている。還元炎焼成に近く、一部に自然釉が付着する。底径約20cm。

24~27はI区の流路から出土した。24は須恵器杯蓋で、扁平な摘みが付く。屈曲して広がる口縁の端部は下方に摘み出される。

25も須恵器の蓋であるが、屈曲する口縁端部外面に沈線状の切込みをめぐらせるものである。

26は須恵器稜椀である。やや厚手の底部に高台を貼り付け、体部下方は丸みを帯び、稜をもって屈曲し、外反気味に口縁端部へと続く。外面にはケズリやミガキなどの調整は見られない。底部内面には不定方向の仕上げナデを施す。口径約14.4cm、器高約4.7cm、底径約9.6cmを復元した。

27は須恵器甕口縁部である。肩部外面には平行タタキが残り、一部は頸部にも見られる。口縁端部は

上方に少し摘み上げ、外方に1条の沈線を巡らせた面を有する。口径約18.9cm。

28～47は包含層出土の土器として取り扱うが、28～35は流路の南東端で出土した。その他のものも上部土壌層出土の38・37・46を除くと、流路周辺の洪水性堆積層中の出土である。

28は内外面に赤色顔料を塗布した所謂、丹彩土師器である。厚い底部から急激に薄く作り、口縁端部は強いナデによって僅かに外反する。

29は土師器貼り付け高台底部で、端部の丸い外方に張った高台に、横方向へ開く体部をもつ。

30は土師器の把手で、指頭圧痕や絞り痕を残す。約1cmの厚さの本体の器面には内外面に非常に粗いハケを施す。

31は須恵器杯Aで、ヘラ切り不調整の底部から開き気味に立ち上がる。口縁端部には重ね焼の痕跡が残る。復元口径11.8cm、底径7.6cm、器高2.9cmを測る。

32は須恵器椀底部で、糸切り底部の周縁を強くナデ、高台状に作る。底径8.3cm。

33は須恵器杯Bで、口縁部を欠く。貼り付け高台の底径9cmを復元する。

34は内面に重ね焼の痕跡が付着するため、椀かもしれない。体部外面にヘラケズリを施し、底部内面には一方向の仕上げナデを施す。

35は須恵器の壺の底部と思われるが、底部内面に円弧を描く仕上げナデと火襷が観察できる。底径約11.9cm。

36は土師器皿である。内外面に指頭圧痕を残し、口縁部はヨコナデで仕上げる。全体の1/3程度の残存率で口径7.8cm、器高1.73cmを測る。

37は土師器の鉄かぶと形の鍋で、外面には平行タタキが残り、口縁部はヨコナデで仕上げる。口縁端部は内面を肥厚させ、直下を強くヨコナデでくぼませる。

38は土師器羽釜であり、外面には煤が付着している。短い口縁下には水平からやや下がり気味の鐙が付き、指頭圧痕を残してナデを施す。

39は土師器甕で全体の1/6程度の残存率で口径29.8cmを測る。内湾気味で真っ直ぐに立つ胴部から屈曲して短く開く口縁部へと続く。内外面とも指頭圧痕を残してハケで仕上げる。口縁内面には横方向のハケを施す。

40は瓦器椀底部で、退化した低い貼り付け高台が付くものである。

41は瓦質鉢で、奈良火鉢であろう。口縁の相対する2ヶ所の上と外に粘土を付加し、内側から穿孔して把手受けを付ける。内面は横方向のハケで調整し、口縁部から外面にかけてはナデ調整で仕上げる。口径31.6cmを復元した。

42は須恵器蓋で、笠形を呈し、天井部はヘラケズリを施す。天井部と口縁部との境に稜をもち、口縁端部は鋭く屈曲する。

43は須恵器杯Bで、高台は断面が方形で、底部周縁近くに貼り付けられる。約1/3の残存率で、口径約15.9cm、器高6.6cm、底径約10.3cmを測る。

44・45は須恵器杯Aで、ヘラ切りの底部は僅かに丸みをもつ。44は約1/4の残存率で、口径約13.8cm、器高約3.4cm、底径約11.5cmを測る。

45は底部内面に仕上げナデを施し、約1/4の残存率で、口径約12.3cm、器高約4.0cm、底径約8.6cmを測る。

46・47は須恵器椀で、糸切りの平高台を残す。46の底径6.3cm、47の底径約6.6cmを測る。

#### 4. II区出土の土器 (48~69)

48~54は築地外側溝出土の土器である。48は東西に走る南面築地の南側の溝、外側溝上面から出土した土師器碗底部である。貼り付け高台を付し、ナデによって仕上げる。

49~51は南北に走る西面築地の西側の溝、外側溝の最下層から出土した須恵器杯Bである。外側に屈曲した高台をもつ。全て1/3以下の破片であり、口径13.2~13.8cm、器高4.2~4.3cm、底径9.8~11.0cmと器形・法量が似るが、焼成が異なることから別個体とした。

52は同じく西面築地外側溝の途切れる円形土坑上面から出土した須恵器杯Aで、ヘラ切り底部から開き気味に立ち上がる。1/2の残存率で口径約13.7cm、器高2.6cm、底径約9.5cmを測る。

53は同じく西面築地外側溝から出土した小型の甗で、高台を貼り付け、肩部はわずかに張り、その部分に穿孔されている。8世紀前半にまで遡るものであろう。貼り付け高台の底径は4.9cmを測る。

54は西面築地外側溝の南端近くの上層から出土した須恵器のいわゆる壺Lで、ヘラ切り底部に高台を貼り付け、倒卵形の対部へと続く。口頸部は欠損しているが、2段構成と思われる。胴部は回転ケズリで調整し、肩部はナデ調整を施す。閉塞技法によるものであろう。底径約9.6cm。

55~60は築地内側溝出土の土器である。55はコーナー部最上層から出土した土師器碗或いは托である。糸切りの平高台をもち、内面は一段下がる。

56は南面築地内側溝出土の土師器杯で、全面に赤色顔料が塗布される。底部内面に数条の一方方向のヘラミガキ状の痕跡が見られ暗紋かもしれない。底部外面には筋状の圧痕が数条観察できる。木の葉の痕跡かもしれない。口縁端部を屈曲させ、内面を凹線状にくぼませる。口径約15.7cm、器高2.6cmを測る。

57は55と同じくコーナー部最上層から出土した須恵器碗或いは杯Cで、ヘラ切り不調整の丸みをもった底部から内湾して立ち上がり、口縁端部は外反する。口径14.8cm、器高4.0cmを測る。

58は西面築地内側溝の北半部から出土した須恵器杯Bで、口径14.95cm、器高4.6cm、底径11.3cmを測る。焼成は悪く土師質である。口縁端部にススが付着し、灯明皿に利用された可能性がある。

59はコーナー部最下層から出土した須恵器杯Bで、底部内面には多方向の仕上げナデが施される。口径約14.4cm、器高4.5cm、底径約10.6cmを測る。

60は同じくコーナー部から出土した須恵器壺で、口縁部と高台を欠損する。底部内面に自然釉が付着していることから、広口壺であろう。外面は回転ケズリで調整し、肩は稜をもって張る。

61~69はII区の包含層出土のものである。61・62は土師器皿である。指頭圧痕を残し、口縁部はヨコナデで仕上げる。62の口径11.1cm、器高3.2cmを測る。

63・64は土師器の鉄かぶと形鍋で、体部下半には斜め方向に平行タタキを残し、肥厚させた口縁部はヨコナデで仕上げる。

65は須恵器の糸切り平底碗である。底径6.8cmを測る。

66は糸切り底部の杯状の器形であるが、硬く赤橙色に焼成され、重ね焼の痕跡が残る。近世のものであるろう。

67は唐津皿で、緩やかに内湾する体部の内外面に灰白色の灰釉をかけており、底部は露胎となる。底部は回転ケズリで成形しており、低い三日月高台が削り出される。内面や高台には砂目が残る。17世紀前半から中頃のものであろう。底径4.6cm。

68は須恵器把手である。断面は方形を呈している。おそらく平瓶に付くものであろう。別に平瓶と思われる破片も出土している。

69は須恵器双耳壺で、肩部に突帯を巡らせる。耳は下方を押さえて、平面三角形にしている。内外面

ともナデによって仕上げている。

#### 5. Ⅲ区出土の土器 (70~115)

70~77は西面築地外側溝出土の土器で、70~75の土師器皿は溝の上面から出土した。灰白色に焼成され、口縁外面を2段にわたってヨコナデで仕上げ、底部には指頭圧痕を残す。73は他の土師器皿と異なり、褐灰色に焼成され、口縁端部外面に沈線状の窪みを巡らせる。71は口径8.5cm、器高1.7cmを測る。75は口径約13.2cm、器高約2.3cmを測る。

76は須恵器皿で、溝底の東寄りで出土した。底部内面には仕上げナデを施し、外面にはヘラ切り後の圧痕が数条見られる。口縁端の一部にススが付着し、灯明皿として仏事に用いられたものであろう。完形で口径14.0cm、器高2.5cm、底径11.4cmを測る。

77は須恵器甕口縁部である。口縁端部は僅かに上下に拡張し、ナデによって仕上げる。肩部外面はタキをナデ消し、内面には同心円状の当て具の痕跡を残す。

78~82は西面築地内側溝から出土した。すべて上層からの出土である。78・79は土師器小型の皿で、指頭圧痕の残る底部からヨコナデによって口縁部を引き出す。79は口径8.6cm、器高1.6cmを測る。

80・81は土師器皿或いは杯で、指頭圧痕の残る底部から口縁外面を概2段にわたってヨコナデによって口縁部を引き出す。81では口径約11.8cm、器高2.9cmを測る。

82は須恵器稜碗の小片で、ヨコナデによって仕上げられており、口縁端部は角張る。

83はSD303出土の丹波焼壺肩部である。内面に指頭圧痕を残して、ヨコナデで仕上げ、沈線を巡らせる。表面には自然釉がかかる。

84は井戸SE1から出土した須恵器甕である。大きく外湾して丸く納める口縁端部を持つ。1/12程度の残存で、口径36.6cmに復元した。

85~103はⅢ区下面検出の柱穴から出土している。15世紀頃までの時期を示す。上面で検出した掘立柱建物や柱穴からは瓦片以外はほとんど遺物が出土せず、凶化できる遺物や時期を決定できる遺物は認められないが、この下層出土の遺物の時期から15世紀以降と推定できる。

85~88はP3243から出土した土師器皿である。全て手づくねで作られるが、88は粘土板を板状工具によってタタキ、その後引き上げ、ヨコナデによって仕上げている。86は口縁下を強いヨコナデによって屈曲させる。85で口径約7.2cm、器高1.4cm、87で口径8.5cm、器高1.5cmを測る。

89はP3170、90はP3215、91はP3172とP3209、92はP3131、93はP3249、94はP3223、95はP3179から各々出土した土師器皿で、全て手づくねで作られる。85は小型の皿で器高も低い。89は厚手の杯状を呈し、口縁外面にナデによって小段を作る。90は他のものより薄く丁寧に作られており、古相を示す。口径約12.3cm、器高約2.5cmを測る。92は外反する口縁を持つ薄手のもので、14~15世紀頃のものであろう。94は口径12.4cm、器高2.2cmを測る。

96はP3103出土、97はP3145出土の土師器鍋である。口縁部が屈曲して開く鉄鍋形の形態を持つ。

98はP3189出土、99はP3147出土の土師器羽釜である。比較的大きな斜めに下垂する鐙を有し、内面は横方向のハケで調整する。

100はP3157出土の鞆羽口で、全径約9cm、口径約2cmを測る。中世頃に集落内で鍛冶を行っていたのであろう。他に炉壁や鉄滓も多く出土している。土器ではないが、後述する土製品とは異なる性格のためここに含めておく。

101はP3236出土の須恵器杯Bである。底部の6割以上残存しており、中世の遺構に混じりこんだとい

うより、8～9世紀の柱穴が存在することを示している。口径約15.2cm、器高約4.5cmを測る。

102はP3120出土の須恵器片口鉢で、所謂、東播系のこね鉢である。

103はP3187出土の白磁皿底部で、底面まで施釉するものである。所謂口禿の白磁皿であろう。底径約6.8cm。

104～116はⅢ区の包含層他出土の土器である。112が下面上層で出土した以外は、すべて上面に伴って出土した。

104～108は土師器皿である。全て手づくねで、浅い小型のものと、外反する口縁をもつものがある。104は器高1.2cmの浅いもので、口径約8.3cmを測る。105は丁寧なナデ仕上げを行っており、口径約8.6cm、器高1.5cmを測る。106は杯状の器形をもち、口縁端部外面に強いヨコナデを施す。口径約12cm、器高約2.7cmを測る。107は丁寧なナデによって仕上げられており、口径約13.3cm、器高約2.7cmを測る。108は外反する口縁をもつもので、口径約13.7cmを測る。

109～110は土師器羽釜である。比較的大きな斜めに下垂する鰐を有し、内面は横方向のハケで調整する。109外面の鰐の下には煤が付着する。

111は瓦質の羽釜で、垂直に立つ口縁部は四角く納めており、内面直下の強いナデで口縁端部を内側に突出させる。内面は横方向のハケで仕上げる。

112は比較的小型の須恵器杯Bで、貼り付け高台のみが土師質に焼成されている。1/5の残存で、口径約13cm、器高4cmを測る。

113は須恵器蓋である。直線的に下る天井部から短く屈曲して下垂する口縁端部へと続く。天井部には自然釉がかかっており、調整は不明である。

114は須恵器こね鉢口縁部である。端部を上下に大きく肥厚させている。

115は備前播鉢である。緩やかに内湾する体部から四角く収める口縁端部へと続く。端部内面をヨコナデするため、端部がわずかに突出する。内面には4本単位の櫛描きの卸目を間隔を空けて入れている。底付近は使用のためかよく摩滅している。1/12の残存であるが、口径約23.6cmを復元した。

116は備前甕口縁部である。口縁端部を玉縁状に丸く折り返している。

## 6. Ⅳ区出土の土器 (117～152)

Ⅳ区からは上面の柱穴や井戸から出土したもの(117～123)、下面の柱穴・土坑から出土したもの(124～126)以外は瓦群とともに出土している。その中で、瓦群の表層の細片除去までに出土したものは、128・131・134・135・139～143・148・153である。瓦群の下層で出土したものには127・133・136・149がある。

117はP428から、118・119はP429から出土した土師器皿である。指頭圧痕を残して手づくねで作られ、口縁端部をヨコナデしている。全て口縁端部の一ヶ所に煤が付着しており、灯明皿として用いられたものである。117は底面に手の指の痕跡が残されており、掌の上のせて作成されたものであろう。完形で口径8.0cm、器高2.0cmを測る。118も完形で口径8.3cm、器高2.2cmを測る。

120はSB402を構成する柱穴から出土した陶器底部である。円盤作りの平底から厚い器壁をもって立ち上がる。外面には灰釉が掛けられており、13世紀前半頃の中国南方産の灰釉壺であろう。底径10.5cmを復元する。

121はP422掘り方出土の備前播鉢である。口縁端部を上方に拡張し、内面には櫛描きの播り目が施される。

122はP4102出土の土師器甕である。胴部外面は縦方向のハケで調整し、指頭圧痕を残した外反する厚手の頸部から口縁部にかけてはヨコナデで仕上げる。胴部内面はナデ仕上げ、口縁部内面は横方向のハケ調整を施す。

123はSE2掘り方出土の備前小壺底部である。底径4.5cmの糸切り底部で、内外面に自然釉が付着する。概して器壁は厚い。

124は下層のSK421の土層観察用アゼから出土した須恵器椀で、瓦群に伴うものかもしれない。糸切りの平高台から内湾しながら大きく開く体部を経て、僅かに外反する口縁部へと続く。底径約5cm、器高約4.8cmで、焼成は良くない。

125・126は下層のSK423から出土した。125は土師器甕で、口縁部は直線状に開き、端部は四角く端面をもって納める。無紋のタタキによって成形されたと考えられる胴部は部分的に薄くなり、内面には横方向のハケが施される。口縁部内面もハケ調整である。

126は須恵器壺口縁部である。口縁端部を強いナデによって上下に拡張し、端面は凹線状に窪ませる。1/6の残存で口径23.5cmを復元した。

127は瓦群下層出土の土師器杯Aで、ヘラ切りの底部から外反して端部内面を窪ませる口縁に続く。底部内面には仕上げナデが施される。一部に赤色顔料が認められ、所謂丹塗土師器である。口径約15cm、器高2.6cmを測る。

128は口径約9cm、器高約3cmの土師器で、杯の形態を示すが、手づくねからヨコナデ調整を施し、口縁端部に煤が付着するなど上層の土師器皿と類似する。口径約9cm、器高3.0cmを測る。

129は土師器椀底部である。やや外に張る貼り付け高台を有しており、吉備系の土師器椀であろう。

130も土師器底部であるが、断面方形の貼り付け高台を有しており、杯Bの可能性はある。

131は瓦群上層の包含層から出土した。手づくねで作られた口径約7.2cm、器高約4.9cmの土師器皿である。

132は地山が北から落ち込む部分で瓦群とともに出土した器壁の厚い土師器羽釜である。口縁直下に厚い鐳を巡らせ、内外面は丁寧なヨコナデによって仕上げられる。傾斜する口縁端部や鐳端部は窪ませる。外面に煤が付着する。

133は瓦群下層の基壇裾から出土した器壁の厚い土師器羽釜である。胴部外面にはハケ調整が残る。

134・135は瓦群上層の包含層から出土した須恵器杯B蓋である。ヘラケズリを施した天井部から短く下垂した端部へと緩やかに内湾して続く。135は内面に自然釉がかかる。

136は瓦群下層の基壇裾から出土した。ナデ調整の天井部から傾斜を変えて水平に開いた、短く下垂する端部に至る。内面には仕上げナデが施される。

137～140は須恵器杯Bである。137・138は北からの落ちで瓦群とともに出土。139・140は瓦群上層出土のものである。底部はヘラ切り、体部はナデによって成形・調整している。137は口径約12.3cm、器高3.4cmを測る。138は口径約12.2cm、器高4.2cmを測る。

141～143は瓦群上層出土の須恵器である。142は杯Aで、ヘラ切りの底部からナデによる成形・調整の外傾する口縁部へと続く。口径約12.4cm、器高3.2cmを測る。

143は糸切りの底部をもつ平底の椀である。底径5.3cmを測る。

144は瓦群から出土したヘラ切りの底部をもつ平底の椀で、内面に墨が付着する。但し、硯として使われたような磨耗痕は見られない。

145～148は瓦群から出土した。145は糸切り底部をもつ平底の椀である。内湾しながら大きく開く口

縁部へと続く。口径約17.4cm、器高6.3cmを測る。

146はヘラ切り底部をもつ須恵器皿で、底部外面はヘラ切り後、未調整。底部内面には一方向の仕上げナデが施される。口径約17.9cm、底径約16.4cm、器高は2cmをわずかに切る。

147は直線的に開く口縁部をもつ須恵器甕の口縁部で、外反した後わずかに内湾する端部をもつ。外面に二段にわたってあまい櫛描き波状紋を施す。口縁端部は水平に四角く収める。小片であるが、古式の様相をもつ。

148は鉄鉢を模した須恵器鉢で、やや軟質の焼成である。内湾する口縁の端部は端面を窪ませて、内側に少し突出させる。内外面ともヨコナデ調整を施す。口径約20.1cmを復元した。

149は瓦群下層から出土した鉄鉢形の須恵器鉢で、丸底と思われる底部から内湾して広がる体部を経て、更に内湾させる口縁部へと至る。口縁端部は四角く納める。外面は回転によるケズリの後、横方向のヘラミガキを施す。口縁部はヨコナデ調整。外面下半の直径12cm付近まで重ね焼の痕跡が見られる。内面はナデ調整の後、暗紋風にヘラミガキによって弧線を重ねている。口縁端部はヨコナデで仕上げる。1/5の残存率で口径約21.6cm、器高約8.5cmを復元する。

150・151は瓦群出土の須恵器の小型の壺Mである。150は糸切りの平底底部から倒卵形の胴部へ続き、頸部から外反する口縁部へと続くが、口縁端部は意図的に打ち欠かされている。底径約4.7cm、残存器高約12.5cmを測る。151は一回り大きいものであり、肩が張る器形であるが、同様に口縁部が打ち欠かされている。

152は瓦群の基壇裾から出土した須恵器の獣脚である。粘土棒の先端片面に粘土板を貼り付けて、爪先を成形し、5本の溝を刻んで指を表現している。粘土棒の先端はナデによって丸く納めて肉球の膨らみを表している。脚部は面取りして不整八角柱状となる。

153は上面の包含層出土の青磁梅瓶底部である。内外面にオリーブ灰色の釉薬が掛けられているが、内外をケズリ出した高台部は露胎である。底径約7.7cm。

### 第3節 土製品 (図版43・44)

IV区の瓦群に混じって、白灰色の陶器質に焼成された土製品が出土した。円筒形を呈するものと、笠形を呈するものがあり、両者の口径が近いことから、組み合わせさせて塔形の一体を成すものと考えられる。東日本などで多く出土している瓦塔や瓦堂とは屋根瓦の表現がないなど趣が異なる。その形は石製や金属製の宝塔に類しており、寺院址から出土し、唐草紋が描かれるなど仏教に大きく関係するものであることから陶製宝塔と呼称しておく。焼成・色調は一部の軒丸瓦に近く、緻密な胎土をもち、硬く焼成されているためか、風化など暴露されていた状況は見られない。屋内に置かれていたものであろうか。また、火を受けた状態も見られず、火舎香炉として使用されていた痕跡は見られない。

154は円形笠形を呈するもので、裾径約45.6cm、頂部を失うが、現存高は約12.0cmを測る。天井部外面には上部を窪ませた断面方形の突帯を三重に巡らせる。裾部端面には2条の凹線を巡らせる。内面には高さ約1.8cmの断面方形のかえりが巡らされるが、一部に低く、薄く作られる部分が認められる。粘土紐巻き上げで成形され、指頭圧痕を一部残して、ヨコナデで仕上げる。

155は平底から円筒形の胴部をもつ土製品で、外方に突出する平底の底部(底径32.5cm)から、真っ直ぐに立ち上がり円筒形を呈する胴部へと続く。口縁部は失われているが、現存高は約17.8cmを測る。底部には内側から外側へと焼成前の小孔が穿たれており、貫通しないものもある。小孔は斜めに穿たれ

たものもある。また、底部外面にも小さな窪みが認められる。胴部には断面が台形を呈した突帯が巡り、突帯の上部には相対する2方向に方形の窓が設けられている他にも、いくつかの繰り込みが認められる。方形の窓には外側に段が作られる。一方の窓が正面を表すように、上段の窓の下に花紋？がヘラ描きされ、左方向へ波状紋風に延びている。その向かって右には角をもつシカ（麒麟？）が左を向いて描かれている。窓直下の下段には、中心飾りと考えられる花紋？から左方向に、蕨手を26回反転させた偏向唐草紋をヘラ描きで巡らせている。ヘラ描きは概して稚拙である。

この他にも焼成等が似通っているが、別の個体と思われる小片がいくつか出土した。

156は口縁直下に断面方形の突帯を巡らせるもので、外面には縦方向の粗いハケメ状の調整が施され、その上からヘラ描きで花紋？と沈線が描かれている。内面は縦方向のハケが施される。

157・158は外面にヘラ描き紋様を描いたものである。157は磨耗が激しく下端に突帯が一部残存するように復元したが、端部となる可能性もある。他のものに比して細いヘラ描きで、小さな蕨手状の弧線を3段にわたって並べたものであろうか。158は蕨手状のヘラ描き紋が描かれた小片である。155に類するが接合できず、器壁も少し厚い。

163は内外面に相直行する断面三角形の突帯を貼り付けるものである。一方の面にはハケ状の調整痕が残る。

159～161・164は底部である。底径の小さなものは土器の底部の可能性もあるが、焼成が似通っているため、ここに含めた。161は復元底径約32.5cmの平底の底部であるが、155のような外方への突出や小穿孔は見られない。Ⅳ区下層のSK423から出土した。162は外方へ開く体部をもち、段を巡らせるもので、155とは形態が異なる。内外面にハケ調整を行う。

164も平底の一部と思われるが、内面に同心円紋状のタタキの当具痕が残る。Ⅲ区のP236から出土した。

更に当初、熨斗瓦と考えていた図版106のT231・232も同様の焼成を示しており、成形・調整もこの土製品に類する。短辺方向に緩く湾曲した板状の製品で両端を失っており、湾曲の度合いは155とは違うようである。表裏面はヨコナデによって仕上げられており、側面は不調整のままである。

## 第4節 石器・石製品

石器・石製品はⅡ区～Ⅳ区から出土したものを合わせて取り扱う。2点出土した石器は縄紋時代に属するもので、弥生時代の石器は確認していない。石製品は所属時期不明のものがほとんどであるが、石帯は古代に、石鍋は中世に属するものである。

### 1. 石器（図版48）

S1は、Ⅱ区下面柱穴P2201出土のサヌカイト製横型石匙である。扁平な剥片に、表裏から丁寧な二次加工が施されており、特につまみ部分は、薄く精緻に整形されている。刃部は、わずかに内湾するが、全体にはほぼ正三角形を呈している。縄紋時代前期以降に属するものと思われる。なお、用いられたサヌカイトは、肉眼観察からは讃岐産と判断される。長さ37.5mm、幅42.6mm、厚さ4.2mm、重量4.4g。

S2は、Ⅲ区の下面の陥し穴状土坑（SK301）周辺の、地山直上から出土した二次加工のある剥片である。黒曜石製縦長剥片に、表裏から不規則な二次加工を施し、削器状の縁辺を形成している。二次加工は背面側において卓越するが、その剥離痕は不揃いで、粗雑な印象を受ける。また、素材剥片の腹面側

打面付近には、平坦な二次加工が施されている。素材となった剥片は、背面側に広く礫面をとどめる縦長剥片であり、先端に見られる新欠から、漆黒色で緻密な黒曜石が用いられていることがわかる。腹面側中央には、大きな気泡が残る。本資料は、定型的石器として分類することが困難なため、二次加工のある剥片としたが、二次加工が施された縁辺の角度から削器的な機能が推測される。長さ56.5mm、幅28.0mm、厚さ12.8mm、重量15.6g。

## 2. 石製品 (図版48・49)

S3・S4・S5は花崗岩系の川原石を用いた磨石・敲石と考えるが、Ⅲ区の中世の柱穴や井戸から出土しており、弥生時代のものではなく、後世のものかもしれない。

S3はⅢ区の下面P3244から出土した。扁平な円礫を用いており、一部側面にかけて敲打痕が見られる。下面がやや丸い。重量366.7g。

S4はⅢ区SE1の石組み内埋土中から出土した。全体的に平滑であるが、表裏面が平滑であり、わずかに窪んでいる。下半を欠損するが、重量383.2gを測る。

S5もSE1の石組み内埋土から出土した。表裏面とも平滑である。大きく破損する。

S6は石帯の巡方である。緑褐色に白色の線状の紋が浮かぶ石質で、蛇紋岩製と思われる。縦4.2cm、横4.3cm、厚さ0.75cmで、断面形は台形を呈している。表面や四側面は丁寧に磨き上げられており、一部欠けてはいるが、角は鋭い。裏面は平滑ではあるが、粗い面を残し、角には面取りを施す。裏面の四隅には連結した2孔一對の潜り穴を穿孔して、帯皮との結束に備えている。Ⅳ区瓦群の東南部から出土した。

S7は赤白色の石質の滑石製石鍋で、口縁部の一部が残る。外面に巡らされた鏝も残るが、端部は欠損している。破面は磨耗している部分もあるが、成形された状態ではない。Ⅳ区上面の包含層から出土した。

S8～11は砥石である。S8・9はⅢ区下面の上層から出土した。

S8は灰色の粘板岩と思われる石材を用いており、上辺と側辺は切断した痕跡が残っている。表裏とも下半部が平滑で使用されている。肌理の細かい石質であるため仕上げ砥であろう。

S9はにぶい褐色の縞模様を呈した石材を用いている。凝灰岩質砂岩であろうか。上辺、下辺とも欠損しており、他の表裏面、側辺は使用しており、使用面は緩やかに湾曲している。中砥であろう。

S10はⅣ区包含層から出土した。三辺が欠損しており、断面の一部が赤化していることから火を受け割れたものであろう。表裏両面を使用しており、表面の傾斜した面も平滑である。褐色の砂岩質の粗砥であろう。

S11はⅣ区瓦群中の上層から出土した。白褐色の石材を用いている。凝灰岩質砂岩であろうか。上辺、下辺とも欠損しており、他の表裏面、側辺は使用しており、使用面は緩やかに湾曲している。表裏面には横方向に強い筋状の擦痕が残る。断面は平行四辺形を呈している。中砥であろう。

この他、Ⅲ区の人力掘削時やⅣ区の基壇を断ち割った際にサヌカイトの剥片が出土している。また、近隣で採取できる蛇紋岩と思われる石材で棒状や円盤状を呈したものが出土している。顕著な加工が認められないため図化しないが、同様のものは小犬丸大谷遺跡からも出土している。

## 第5節 金属製品（図版45・46・47）

金属製品はⅠ区からⅣ区出土のものを合わせて取り扱う。M1～M17は銅製品、M18～M59は鉄製品である。鉄製品のうちM18～M26は遺構出土のもの、M42～M59はⅣ区の瓦群と共に出土したものである。これらの金属製品で寺院址に関連するものは、築地周辺出土のもの、基壇周辺で大量の瓦とともに出土した風鐸などである。

### 1. 銅製品

M1～14はⅣ区上面で検出された土坑から出土した北宋銭である。M11がSK404から出土した以外は全てSK403出土のものである。

M1は太平通寶（初鑄年976年）で、裏面は無紋である。

M2は至道元寶（草書、初鑄年995年）で、裏面は無紋である。

M3は北宋の皇宋通寶（篆書、初鑄年1038年）で、裏面は無紋である。

M4は熙寧元寶（篆書、初鑄年1068年）で、裏面は無紋である。

M5は元豊通寶（行書、初鑄年1078年）で、裏面は無紋である。

M6は元豊通寶の篆書であろうか、錆化が著しく判読が困難である。

M7は元豊通寶（篆書、初鑄年1078年）である。

M8は元祐通寶（行書、初鑄年1086年）で、裏面は無紋である。

M9は天聖元寶（真書、初鑄年1023年）であろう。

M10・11は紹聖元寶（行書、初鑄年1094年）で、裏面は無紋である。

M12・14は聖宋元寶（篆書、初鑄年1101年）と考える。

M15はⅠ区の包含層から出土した金銅製の耳環である。0.6～0.8cmの楕円形の銅芯を曲げており、内側の一部に塗金が残存している。17.4g。

M16はⅠ区の包含層から出土した銅製の環で、幅0.32～0.75cm、厚さ0.18cmの銅板を曲げており、接ぎ手の部分が残存する。接ぎ手部分は加工のためか断面がかまぼこ状を呈している。正円ではなくやや楕円形の製品が復元される。

M17は表採ではあるが、完形の煙管吸い口である。銅版を曲げて接いであり、表部分のみ蠟付けしている。吸い口部の外径約0.5cm、羅宇接続部の径は約0.9cmを測る。近世のものであろう。

### 2. 鉄製品

鉄製品は比較的多く出土しており、羽口や炉壁、鉄滓なども出土していることから、小鍛冶が存在したのであろう。M18～26は遺構から出土しており、その中でM18～20は築地周辺からの出土である。

M18はⅡ区の東西方向の南面築地東端部で築地基部を断ち割った際に黒褐色土より出土した。黒褐色土は築地の盛土の一部と考えられ、築地築造時に埋められたか或いは自然に埋まったと考えるが、明瞭な掘り込み地業や版築が認められないため、下層の古墳時代頃の堆積土中にあった可能性も残る。広根式の鉄鎌で、腸袂の両端に小さな切れ込みを有する。鎌身部の最大幅は前方に寄る。鑄をもたず、扁平な断面形態である。

M19はⅢ区の西面築地外側溝埋土中の出土である。断面長方形の鉄棒が緩やかに湾曲するが、一部に

地金が枝分かれしている。用途不明。

M20はⅡ区西面築地の外側溝が一旦途切れる部分に、円形に掘られた土坑状の底から出土した袋状鉄斧である。長さ約9.2cm、刃部幅約4.7cm、袋部の高さ約2cmを測り、刃部は刃先に向かって幅を増す。

M21はⅢ区のP3121から出土したピン状の釘である。不整形の頭部をもち、断面円形の身が付く。他の角釘と異なる作りであり、小型である。

M22はⅢ区の上面P3039出土の円筒形を呈した鉄器で、幅約2.3cmの鉄板を用いており、下径2.38cm、上径2.12cmの裁頭円錐形に作る。工具の口金や締め金具であろう。

M23はⅢ区のP3113出土の角釘で、頭部を失っているが小型のものである。

M24はⅢ区の上面P3037出土の角釘で、両端を失っている。

M25はⅢ区のP3144出土の鑿・鑿で、方柱状の頭部を少し折り曲げている。

M26はⅣ区の上面井戸SE2の上層出土の角釘で、小型から中型のものである。

M27～41はⅠ～Ⅲ区の包含層出土の鉄器である。

M27はⅠ区の確認調査時に出土した刀子で、両端部を欠くが復元刃部長約6.3cmの小型のものである。幅の広い茎部へは両関をもって続く。

M28はⅢ区の包含層出土の刀子である。復元刃部長7cm以上で、片関から続く茎は方柱状を呈している。

M29はⅢ区の重機掘削時に出土した。全長7.7cmの山形を呈した平面形態で、下部側の厚みが大きい(0.65cm)ことから、火打金であろう。紐孔は見られず、両端の折り曲げも不明瞭である。

M30はⅠ区の包含層出土のもので板状を呈したものである。

M31はⅢ区の包含層出土のもので、方柱状先細りの鉄棒を大きく屈曲させた形態を持つ。屈曲が著しいことから、吊り手金具等の可能性もあるが、大型の角釘であろう。

M32・33はⅢ区重機掘削時及び包含層上面で出土した鑿・鑿で、頭部は打撃によってつぶれている。

M34～41はM36・39がⅡ区から出土した以外はⅢ区から出土した角釘で、大型のものから小型のものまでである。

M42～59はⅣ区出土の鉄器で、M42・47・48・54・59が上面から出土した以外は、瓦群中から出土しており、M43・45・51・55は瓦群の下層から出土している。

M42～51は角釘で、幅・厚さが1cmを超える大型のもの(M45・47)、中型のもの(M42～44・46)、幅・厚さが0.6cmまでの小型のもの(M48～51)に分かれる。いずれも頭部を敲き伸ばして折り曲げたものである。

M52は瓦群を取り除いた下層から出土している。釘と異なり、断面は円形で細く針金状を呈する。

M53は板状を呈したもので厚さ0.3cmと薄い。楔であろうか。

M54は釘と同様頭部を作るが、敲き伸ばしたのではなく、全体の太く短い形態から、鑿・鑿であろう。楔や鑿・鑿とした鉄器は約500m北の谷の中にある小犬丸大谷遺跡からも出土している。

### 3. 風鐸

M55は鉄製風鐸である。Ⅳ区基壇北東隅の北側で瓦群の下層からM56の風招とともに出土した。

鑄造と考えられる肉厚の製品で、裾部がわずかに広がる円筒形を呈している。裾部はほとんど残っていないが、長側面の二方に弧状の刻りを入れたものであろう。

吊り手部を含めた現存高は約10.6cmを測り、断面形は直径6.1～7.4cmの円に近い紡錘形を呈している。

現状では破損が著しいが、側面の両側に穴が開いている。加古川市の石守廃寺例のように窓が空けられていたものであろうか。天井部の中央付近に穴を開け、棒状の吊り手金具を通す。吊り手金具は直径約0.6cmの鉄棒の上端を鉤状に曲げたもので、下端は環状に曲げて、別の環状に曲げた金具と絡む。下方の金具は錆化によって横方向へと曲がっているが、先端を欠いていた。

この部分にはM56の風招の吊り手金具が接合でき、二連接ぎとして風招を吊り下げたものであることが判明した。現状では風招の上縁が鐸身の下端の高さに一致するが、本来の吊り下げられた状態に復元すれば、上側の吊り手金具が下端の環まで舞の下面まで引き上げられ、風招は鐸身下端の挟り内に収まり、動きが制約される。鐸身自身の高さが約8.5cmとやや寸詰まり感を抱かすが、以上の理由で下端が一部残存しており、これ以上身長が高くなることはない判断した。上部の吊り手金具を留める装置や工夫があるのかもしれないが、実物やX線写真では判断できなかった。

また、風鐸の類例では通常、裾部に四方弧状削りを入れているが、本例が二方削りとなる理由も鐸身が小型であることと、鐸身と風招との関係によるものであろう。

M56～59は風鐸の舌、風招である。

M55内側の吊り手金具と接合するM56は、厚さ0.2cmまでの鉄板を加工したもので、上部は山形、下端は三葉形を呈し、両端がわずかに外側に開くが、双円弧状の削り込みの中央の突出が左右の裾を結ぶ線とそろそろ。吊り手金具を装着する孔は一方からの打ち抜きによって空けられたものか、楕円孔の下端が片面側に突出する。これは他のM57～59も同様である。円孔の形態は楕円形或いは隅丸方形で0.4～0.8cmの大きさである。吊り手金具は先を尖らせ、直接円孔を通して曲げられている。吊り手金具に固定して実際に風鐸本体に接して音を出す金具や装置は見られない。吊り手金具や風招が直接、風鐸に当たって音を出すものであろうか。

M57・58もM56と同形の風招で、M57は厚さ0.3cm前後の鉄板を加工している。一方の端を欠損し、もう一方はわずかに上方に反る形に復元されたため、双円弧状の削り込みの中央の突出が左右の裾を結ぶ線より突出する。瓦群中から出土した。

M59も厚さ0.2cm前後の鉄板を加工して吊り手金具装着の孔を一方から穿孔したもので、やはり風招であろう。上部の山形は他のものと比較して尖っており、下端も三葉形ではなく、弧状の削り一つ入れる形態である。縦全長も7.3cmと長くなる。また、穿孔は楕円形で0.4～0.5cmと小さい。やはり小型の鐸に伴うものであろう。瓦群の上層から出土した。

## 第6節 V区出土の遺物（図版50・51）

### 1. 小犬丸中谷古墳出土の遺物

165は、土師器の甕である。球形の体部から「く」の字に屈折して開く口縁部を見せる。体部外面は、タタキの後にやや粗いハケ調整が施され、内面には顕著な指頭圧痕が認められる。石室奥壁付近から出土した。

166・167は、須恵器杯身である。形態は蓋に類するものであるが、今回の調査では立ち上がりをもつ杯身を見出すことができなかつたため、杯身と判断した。ともに底部はヘラ切り無調整である。いずれも堀切内より出土した。

168・169は、同一個体に属する須恵器長頸壺であるが、頸部と体部の間に接合点が見出せなかつた。頸部に2条の沈線を巡らせている。底部外面は、不定方向のヘラケズリにより、丁寧に調整されている。

堀切内出土。

170は、堀切内より出土した須恵器甕である。小型で、やや肩部の張った体部から、大きく外上方に広がる頸部～口縁部を見せる。口縁部は、焼け歪みが顕著である。底部はヘラ切り無調整。

171は、堀切内より出土した須恵器平瓶である。後述の二点と比較して、肩部の屈曲が顕著である。体部下半にヘラケズリの痕跡をとどめている。

172～174は、石室直下の崖面付近から、機械掘削の際に出土した遺物であり、本来、石室内にあった可能性が高い。

172は、須恵器の体部の破片であるが、その形態とカキメの状況から提瓶と考えられる。

173・174は須恵器平瓶である。いずれも肩部の屈曲は顕著ではなく、特に174は扁球形の体部を見せる。口縁部は、173では直線的に、174ではやや内湾気味に開く。ともに底部はヘラ切り無調整である。

175は、墳丘北部で出土した、須恵器甕である。口縁部外面に一条の凸帯と沈線を施す。

M60～M63は、石室内より出土した鉄器である。

M60は、石室奥壁から0.7mほど羨道側に寄った床面上より出土した、圭頭形鉄鏃である。鏃身の横断面形は平造であり、側面観には僅かな反りが見られる。棘状鬚と、断面が方形を呈する茎部をもつ。杉山（1988）によれば、B-II-第3型式に相当する。

M61～63は、石室内の埋土中より、原位置を遊離した状態で出土した鉄器であり、本来石室に伴ったものか否か、判断は困難である。M61・M62は、ともに断面がほぼ正方形を呈する。釘ないしは鉄鏃の茎である可能性が高い。M63は、一端に花形に開いた部位を有する。茎部の断面は長方形を呈し、M61・62とは明瞭に異なっている。花形の部位が、本来の形態を示すものか、錆による変形によるものかは、レントゲン写真によっても判断できなかつた。

S12は石室床面より出土した砥石である。微粒の砂岩と思われる。本来は直方体であったろうが、長軸方向の4面ともに、使用により顕著な凹面となっている。小口面には、金属器によるものと思われる傷が多数認められる。

このほかに羨道付近で出土した鉾滓があることから、石室は二次的に利用されていた可能性が高い。砥石、鉄器の一部（M61～63）については、再利用による持込の可能性が考慮される。

## 2. 掘立柱建物SB501出土の遺物

柱穴内からの出土遺物は僅少であり、図示しうるものはわずか3点のみである。

177は、白磁皿である。ゆるやかに内湾しつつ立ち上がる口縁部を見せるが、底部が失われているため、高台等については不明である。白味の強い色調を呈することから、施釉前に化粧土が塗布されたものと思われる。釉は薄く、多数の貫入が認められる。体部下位は施釉されない。大宰府編年（横田・森田 1978）による、白磁皿VI類に属するものであろう。柱穴P514出土。

M64は、柱穴P504内より出土した銅銭である。銘が著しく潰れているため、判読は不可能であるが、字体の輪郭から「皇宋通寶」の可能性を、わずかながら考慮しうる。

M66は、柱穴P523より出土した鉄製品である。「く」の字形に屈曲し、両端とも折断面となっている。断面形がほぼ正方形を呈することから、釘類かと推定されるが明らかではない。

## 3. 掘立柱建物SB503出土の遺物

柱穴P507より、土師器鍋1点が出土した（178）。玉縁状に肥厚する口縁部をみせる。小破片のため明

らかではないが、器表面の形状から、口縁部下で緩やかに外方へ屈曲し、まるみをもつ体部に至ると思われる。内面の口縁部下に強いヨコナデを施して、凹部を形成している。外面には、顕著なススの付着が見られる。

このほかに、図示できない遺物として、柱穴P528より、風化・磨耗の著しい瓦片が出土している。

#### 4. 土坑出土の遺物

M65は、用途不明の銅製品である。歪んだ円錐形を呈し、図上端は、つまみ状の球形に仕上げられている。片面に、工具端部の打撃によると思われる、米粒形の凹文を形成する。他の一面は無文である。頭部の形状から、何らかの形で垂下させる機能が推測されるが、用途等は不明である。SK506出土。

#### 5. 柱穴出土の遺物

176は、土師器皿である。柱穴P535より出土した。

M67・68は、柱穴P525より、M69・70は柱穴P526より出土した、鉄製品である。ともに両端が尖るが、これは錆化の結果と考えられる。断面形は不整形で、器種を判断する根拠に欠ける。

M69・70は、ともに断面がほぼ正方形を呈する鉄製品で、同一個体であった可能性も捨象できない。やはり器種を判断する根拠に欠けている。

M71は確認調査時に出土した鉄製熊手である。細長い鉄板の一端に切れ目を入れて三叉にし、湾曲させて先端を尖らせている。基部は逆方向へ曲げて柄の装着に備える。木柄の一部が背部にのみ残存しており、基部を木柄にはめ込み、鉄輪でかshめて装着する。近世以降のものであろう。

#### [参考文献]

- 森内秀造 1994「相生窯址群における平安期の須恵器について」『相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅱ』  
兵庫県文化財調査報告第139冊兵庫県教育委員会
- 小川真理子 1999「稜椀研究の再検討」『瓦衣千年 森郁夫先生還暦記念論文集』
- 小森俊寛、上村憲章 1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 百瀬正恒、近江俊秀 1995「各地の土器様相 近畿」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 岡田章一、長谷川眞 2003「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 間壁忠彦、間壁菫子 1966～1968・84「備前焼研究ノート」1～5『倉敷考古館研究集報』1・2・5・18
- 森田 稔 1995「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 古代の土器研究会 1996『古代の土器4・煮炊具（近畿編）』
- 岩本正二・西口寿生 1977「飛鳥・藤原地域の出土遺物」『考古学雑誌』第63巻第1号
- 横田賢次郎・森田 勉 1978「大宰府出土の輸入陶磁器について一型式分類と編年を中心にして一」  
『九州歴史資料館研究論集』4
- 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究』No2
- 永井久美男 2002『新版中世出土銭の分類図版』高志書院
- 山田清朝 1998「火打金について」『中尾城跡』兵庫県文化財調査報告書第67冊 兵庫県教育委員会

- 小林行雄 1959「風鐸」『図解 日本考古学辞典』東京創元社
- 稲垣晋也 1970「その他の建築資材」『新版考古学講座』第7巻 有史文化（下）雄山閣出版株式会社
- 別府洋二 2003『小犬丸大谷遺跡』兵庫県文化財調査報告第265冊 兵庫県教育委員会
- 杉山秀宏 1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』8 奈良県立橿原考古学研究所

出土遺物については、岡田章一、森内秀造、深井明比古、池田征弘各氏の教示によるところが大きい。

# 第5章 瓦類

## 第1節 概要

小犬丸中谷廃寺から出土した瓦類は、寺域外と想定されるⅠ区やⅤ区も含めて全域から出土しているが、主としてⅡ区の築地側溝内と、Ⅳ区の基壇周辺から大量に集中して出土している。

Ⅰ区からも丸瓦・平瓦の破片が出土しているが、小片であるため、軒瓦（軒丸瓦）のみを掲載した。

また、Ⅴ区からも丸瓦・平瓦が出土しているが、SX501床面敷石下など中世以降の遺構や包含層に伴っての出土であり、後世に持ち込まれたものであろう。平瓦凸面のタタキの種類などはⅣ区の状況に似通っており、違いを見出すことはできない。小片であるため掲載しなかった。

築地は寺域南辺部分の東西方向（南面築地）と、それに直交する西辺を限る南北方向（西面築地）の2辺が検出され、大量の瓦を伴っていたのはⅡ区の南面築地である。寺域の正面、おそらく山陽道に面している側にもみ瓦を葺いていたものであろう。また、南面築地でも軒瓦は軒丸瓦・軒平瓦合わせて3点しか出土しておらず、軒瓦は用いられなかったものと考えられる。

西面築地側溝でも瓦は出土しているが、量的には少ない。西面築地の側溝が途切れる部分でも、門の存在を窺わせるような瓦の出土状況は見られなかった。Ⅲ区出土の瓦は後世の柱穴や包含層出土のものを除くとほとんどが西面築地側溝から出土しているが、築地に用いられたとするには散漫である。Ⅲ区の北東部、Ⅳ区で検出された基壇建物に最も近い位置の浅い落ち込みからも細片が少なからず出土していることから見ても、おそらく北側の基壇建物から転落したものと想定される。但し築地の外側の側溝から熨斗瓦がまとまって出土するなど、特異な状況も看取される。

Ⅳ区で大量に出土した瓦は西から1～5の小区に分け、北側からの丘陵地山の落ち込み斜面を「北からの落ち」、基壇周辺のを「瓦群」として瓦を取り上げている。調査当初、築地塀が東へ曲がって北面築地となることを想定して瓦群最上層のものを「築地検出」として取り上げているが、「瓦群」などと同様、基壇建物に伴う瓦の堆積であることが、後に判明した。整理作業の段階では小片が多いため、軒瓦の一部を除いて盛土内出土や包含層出土の瓦と同等の扱いをしている。丸瓦・平瓦では「瓦群」および、最終的に「瓦群」と一連の堆積と認定できた「北からの落ち」出土のものを中心に取り扱った。

以上のように出土状況から見て、瓦を用いた構造物は、発掘調査範囲内では、南面築地と、Ⅳ区の基壇上に存在したと考えられる建物に限られているが、更に東側に広がる寺域内には別の瓦葺建物が存在していたことは想定でき、それらから移動した瓦類が含まれることは充分考えられる。

瓦は地区ごとに掲載しているが、もちろん発掘調査の際に設定された地区は遺跡の性格によって分けられたものではなく、現在の道路等によって分けられたものであり、便宜的なものにすぎない。ただ、発掘調査によって出土した資料として、出土地点や状況を明示する必要性から採った方法である。この中で、Ⅱ区出土の瓦は築地に用いられた状況を示しており、Ⅳ区出土の瓦は基壇建物に用いられた状況を示しているものと取り扱って大過ないと考える。これにより、各構造物で用いられた瓦の特徴・差異が明示できるものとする。

大量に出土した瓦は平瓦・丸瓦だけでなく、軒丸瓦・軒平瓦の全点をも掲載することはできなかったが、一覧表によって補完している。また、Ⅱ区やⅣ区出土の丸瓦・平瓦については、隅数や重量の計量等の統計処理をおこなっている。

## 第2節 瓦類の分類

### 1. 軒丸瓦の分類

軒丸瓦は型式不明の1点を含めて総数405点出土した。(註1)

瓦当紋様によって4型式に分類でき、各型式は範の状況(彫り直し、範傷、分割型-枷型の使用など)によって更に細分できる。

#### KNM1 (図2 1~3)

面違い鋸歯紋縁単弁十弁蓮華紋軒丸瓦である。外縁は直立縁に近い斜縁で、面違い鋸歯紋の三角形の右側に段がある。一重の輪郭線で囲まれた子葉の個々の幅に差があり、割付は不均等である。また、一部の蓮弁がやや傾いて配されている。蓮弁の彫りは深い。間弁は「T」形を呈し、その基部は中房にまで達する。中房は低い凸型で、蓮子はやや偏った位置に1+8が配される。

蓮子が小型で尖っているものをa、扁平なものをbに分類した。aでは蓮弁(子葉)の弁端が尖っており、中央に稜線が通っているものがあるが、bでは蓮弁全体が丸くなり、彫りも深くなる。また、間弁も太く大きくなる。両者には同一箇所に範傷が存在しているため、同範であり、aからbへと範の彫りなおしが行われたものと考えられる。

丸瓦との接合方法は、瓦当裏面のう上縁に近い位置に半円弧状の溝を作って、丸瓦を差し込み接合する。溝の底は指などによって窪ませている。丸瓦の広端部凸面側を面取りするものが確認できた。接合部には内外に粘土を補充しているが、内側のそれは少ない。瓦当裏面は横方向のナデによって調整され、中央が高く盛り上がるもの(T3・49)、堤状突帯(周縁突帯)をもつもの(T1・26・44・46・47・52)がある。顎部や粘土を補充した瓦当の周縁部外側は横方向のナデによって仕上げられている。T26では直径17.0cm、内区径15.0cm、中房径6.3cmを測る。

焼成は、南面築地出土の丸瓦・平瓦に類似した赤く焼成されたもの、硬く須恵質に焼成されたもの、土師質に焼成されたものがある。胎土は、かなり粒子の大きな砂粒を含むものも見られるが、緻密である。赤く焼成されたものや土師質に焼成されたものに砂粒が目立つものが多い。37点出土した。

#### KNM2 (図2 4・5)

面違い鋸歯紋縁単弁八弁蓮華紋軒丸瓦である。外縁は直立縁に近く、面違い鋸歯紋は正しく三角形をなさない。一部の蓮弁が中心からやや傾いて配され、蓮弁の幅も一定ではない。子葉を囲む一重の輪郭線の一方がないものがある。間弁は中房から出て、蓮弁を覆うように繋がる。中房は凸型で、蓮子は1+8、外側の蓮子は縁に沿って配される。

蓮子が扁平なものをa、小型で尖っているものをbに分類した。両者は範傷の状況から判断してaからbへと範の彫りなおしを行っている。

丸瓦との接合方法は、上縁に近い位置に半円弧状の溝を作って丸瓦を差し込み接合する。丸瓦の広端部凸面側を面取りするものがある。接合部に補充する粘土は内面では少なく、瓦当裏面は横方向のナデ調整を施し、堤状突帯(周縁突帯)をもつもの(T56・59)がある。瓦当周縁外側はナデによって仕上げられる。別に瓦当からはずれた丸瓦広端部の凹面、凸面両側に面取りを施したものが1点確認できた。KNM1或いはKNM2に伴うものであろう。

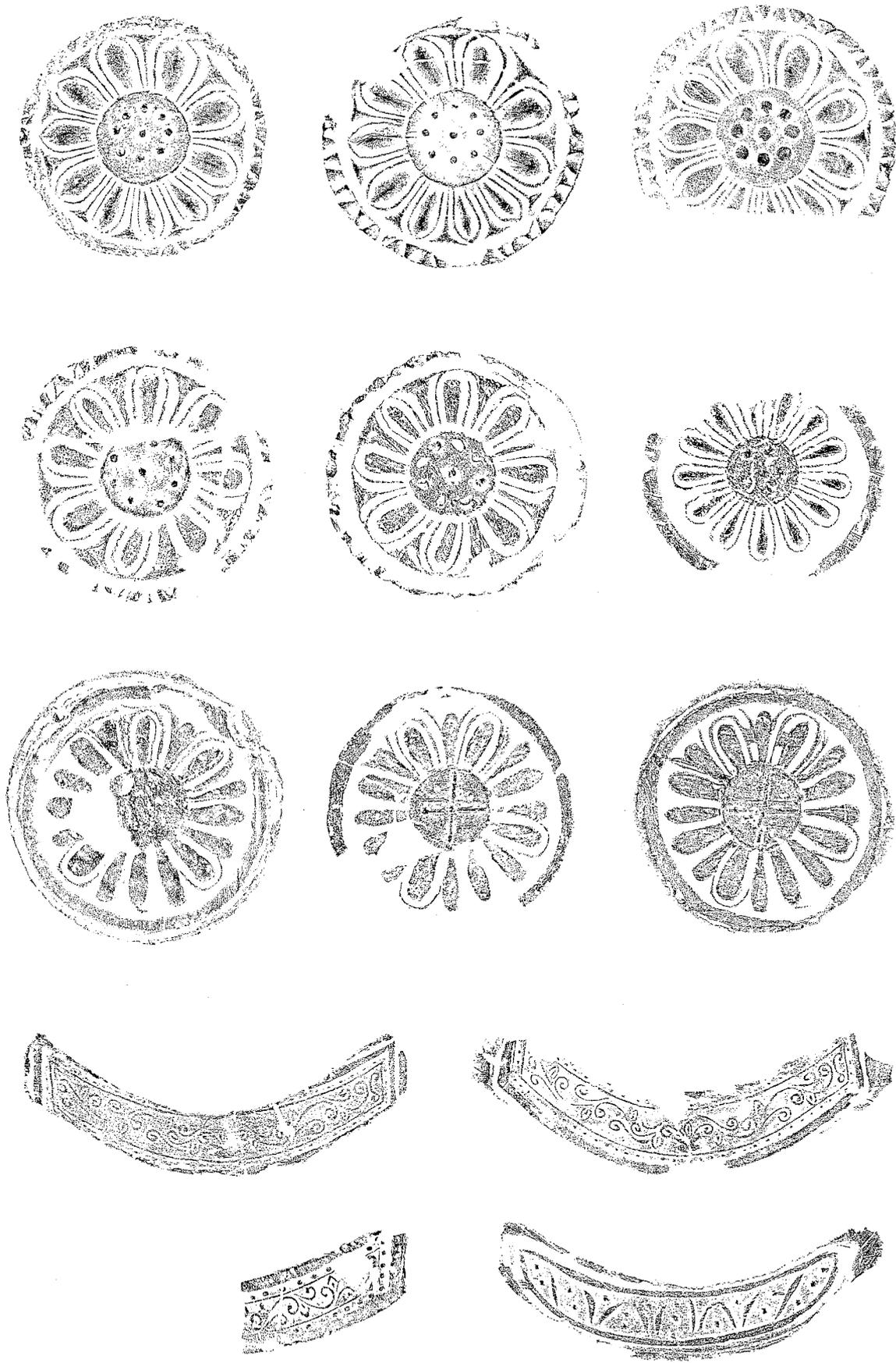


図3 軒瓦の型式

焼成は、赤く焼成されたものではなく、砂粒が少なく、硬く須恵質に焼成されたものや、砂粒を含み土師質に焼成されたものがある。41点出土した。

#### KNM3 (図2 6)

細弁の十三弁蓮華紋軒丸瓦で、外縁は素紋で直立縁である。蓮弁は子葉とそれを囲む一重の輪郭線で表現される。中房はわずかに突出し、1+5の蓮子を配する。所謂、「播磨国府系瓦」の「古大内式軒丸瓦」(今里1962)であるが、蓮子がひとつ少ないこの形式は布勢駅家(小犬丸遺跡 NM01型式)で主体をなしており(山根1986)、古大内亜式或いは小犬丸式とも呼称されている。

丸瓦との接合が観察できるT63では、中房の真裏近い低い位置に丸瓦が接合し、上下に支持粘土を厚く貼り付ける。T62でも内区の裏あたりに接合されている。

瓦当面から約1.7cmの位置の顎部に瓦当面に平行する小段が巡り、枷型を使用した痕跡と考えられるものがある(註2)。土師質に焼成され、砂粒の少ない緻密な胎土をもつものと、褐色を呈し、砂粒を多く含んだ肌理の粗い胎土をもつものがある。すべてIV区からの出土で、4点出土した。

#### KNM4 (図2 7~9)

細弁の十六弁蓮華紋軒丸瓦で、外縁は素紋である。中房は低い凸型で、通有の蓮子はなく、全くの無紋のもの、「十」字状に範に線刻されたものがある。「十」字は中心を通り直径方向に刻まれ、更にそれにやや斜めに交差して一条刻まれる。この斜め方向の線刻は木目方向とは少しずれており、他に木目に沿って三条ほど直線が見えるが、傷かもしれない。無紋のものは中房の周囲の角が丸くなっているが、「十」字のものは角が立っており、彫りなおした可能性が高い。

十六ある蓮弁の内、四弁には子葉を囲む一重の輪郭線が巡り、その奇数隣の弁(子葉)には側面に沿って突き出る線刻が見られる。これは輪郭線を巡らせた蓮弁と間弁をもつ蓮華紋の範(例えばKNM1やKNM2)を大きく改変した痕跡と考える。つまり、範の改刻の際に一部の蓮弁の輪郭線は追刻せず、消失させ、また、間弁を細弁に改刻したものであろう。総じて蓮弁の彫りは浅い。

瓦当の周縁外側に段が付くものがあり、円形範の範端と考えていたが、後述のように丸瓦との接合位置が偏っていることから瓦範の形態は方形であったと推測される。また別に、周縁外側の丸瓦接合位置に近い側面に瓦当面に直交する方向に段が観察されるもの、瓦当側面の範端から約2.3cmの位置に瓦当面に平行する段や突線が観察されるもの、側面に木目が観察されるものがある。これは瓦範(紋様型)の上にさらにもう一段枠を置き、瓦当外周を規定した側面型、つまり枷型の痕跡(星野1981)と思われ、

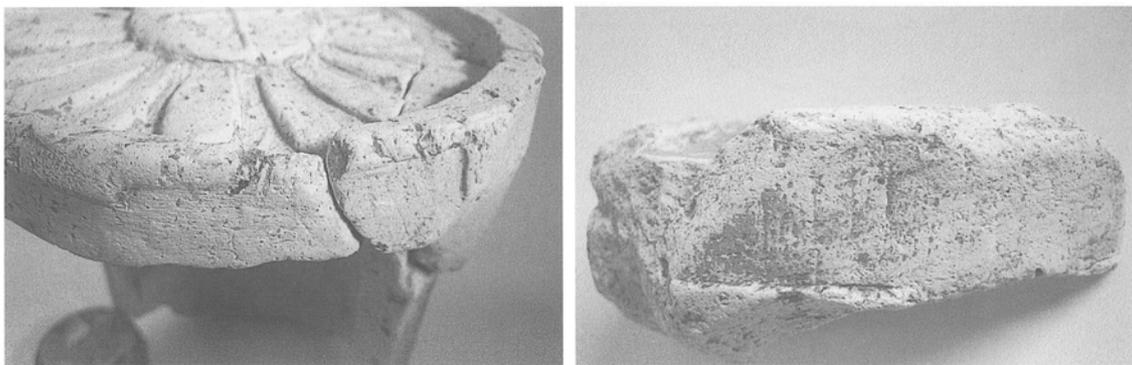


図4 軒丸瓦KNM4の枷型痕跡写真

外枠二段型（近藤1982）の筧を使用しているものであろう。この枷型の使用により、顎部の厚さは2.0～2.6cmを示す。ちなみに枷型を用いないものでは顎部の厚さが4 cm近いもの（T66）がある。

内区の蓮弁などに木目に沿った顕著な筧傷が観察できるものとできないものがある。（図6）筧傷は蓮弁の輪郭線の外側に突き出るもの（1）が早く、蓮弁の輪郭線内のもの（3）が後出すると考えられる。（図5）

外縁は直立縁のものが多いが、筧傷のないものには斜縁に近いものもある。外縁が丸いものと、角張り上面の一部にケズリを施すものがある。

以上の筧の特徴から、以下の5類に細分できる。この5類は筧傷の進行度や、筧の彫り込まれた深さなどから、概ねaからeへと移行するものとする。

- a：筧傷がなく、中房が無紋で、外縁が丸く、枷型を用いない一群。
  - b：筧傷がなく、中房に「十」字が刻まれ、外縁が角張り、枷型を用いる一群。
  - c：筧傷があり、中房に「十」字を刻み、外縁が角張り、枷型を用いる一群。
  - d：筧傷があり、中房に「十」字を刻み、外縁が丸く、枷型を用いる一群。
  - e：筧傷があり、中房が無紋で、外縁が丸く、枷型を用いる一群。
- これらとは別に外縁を削り取って内区のみにするもの（T116・117）がある。

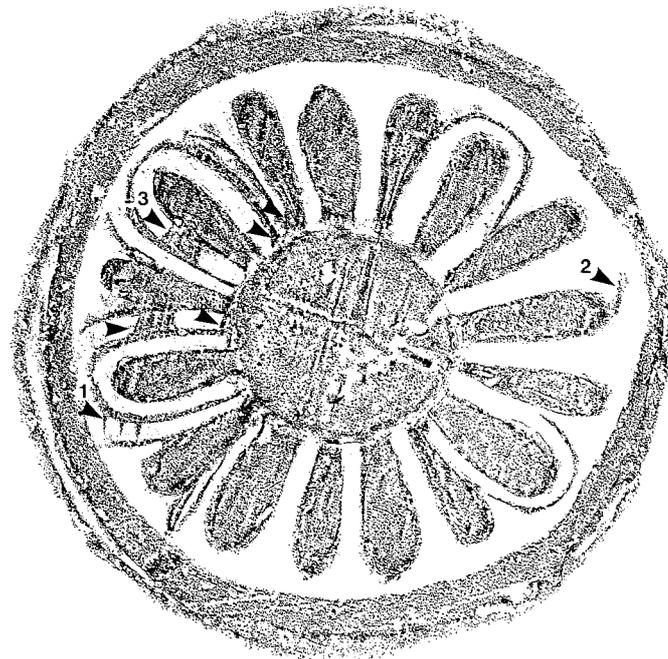


図5 軒丸瓦KNM4の筧傷



図6 軒丸瓦KNM4の範傷写真（左a、右c）

丸瓦との接合方法は、瓦当裏面上半に半円弧状の溝をつけて丸瓦を差し込み、接合部の内外面に支持粘土を補充するものである。差し込まれる丸瓦の広端部は不調整である。内面の粘土を補充した部分は、丸瓦内面から瓦当裏面中央付近まで不連続ではあるが、縦方向にナデを施している。瓦当裏面下端には横方向のナデや、丸瓦端部に補充した粘土から続くヘラケズリが観察できる。瓦当周縁下端に横方向のナデを施すものがあり、また横方向のケズリを施したものも見られる。丸瓦凸面の粘土補充部は縦方向のケズリやナデを施し、瓦当付近は横方向のケズリ・ナデで仕上げるものもある。接合する丸瓦は無段の行基式のもの1点（T100）確認している。

瓦当と丸瓦の接合位置関係は、偏った位置に集中する傾向にある。約20点で観察したところ、木目に沿った範傷に直交する方向の50°の範囲内に集中し、正位置と180°逆転の位置のものは、ほぼ同数に近い。1点のみa類のT71が90°の位置になるが、a類のもので逆転位置になるものもある。このことにより、瓦当範の形態は長方形を呈していたものと推測される。逆転位置のものにはa類、b類、c類、d類とほぼ全ての段階のものが含まれ、正位置のものにはb類、c類に偏る傾向がある。

胎土は砂粒を含むが、緻密である。一部に砂粒が目立つものもある。焼成には、須恵質や陶器質に堅緻に焼成されたもの、南辺築地出土の丸瓦・平瓦に類似した土師質で赤く焼成されたもの、白褐色や灰褐色で土師質や瓦質に焼成されたものがある。

KNM4は総計322点出土した。

## 2. 軒平瓦の分類

軒平瓦は型式不明の6点を含めて総数239点出土した。（註3）瓦当紋様により3型式に分類できる。

### KNH1（図2 10・11）

均正唐草紋軒平瓦。樹根状のものの上から左右に出た蕨手の中間に蕾形を入れた中心飾りの両側に、二葉蕨手紋を反転するもので、各蕨手の茎部間に蕾形を入れている。蕾形は宝珠様で、中に縦長の珠紋を入れる。向かって左側は4回反転するが、向かって右側は3回反転の後、「S」字形の紋様を縦長に配しており、左右対称とはならない。外区には非常に細かい珠紋を配する。中心飾りなどの紋様構成はKNH2と同系統のものである。

左下の圏線の角が突出し、左二反転目の子葉の根元が太くなる、右二反転目の子葉の根元が一部枝分かれするなどの紋様の特徴や、瓦当面に浮き出た木材組織の痕跡から、全て同一の範によるものと判断

される。

両脇区外や凸面側の周縁部分に瓦当面に範端の痕跡を残して、範の外まで瓦当面が広がるものが多く、瓦範と瓦当周縁部との関係はBタイプ（近藤1982）である。脇区はケズリやナデによって面を揃えている。凹面側の周縁外側の瓦当から0.5cmほどの位置に、小段が観察できるものが見られ、範端の痕跡と考えるが、多くは広端部凹面側にケズリを施しており、珠紋帯まで削るものも見られる（T128）。

平瓦部から瓦当部への成形は、粘土板の上下に粘土を付加したもの、粘土板を下向けに曲げ下方に粘土を付加したもの、粘土板を曲げ上下に粘土を付加したもの、があり、曲線顎を形作る。瓦当面に粘土を付加したものも見られる。

平瓦部凹面に観察できる痕跡は、布目・布端・糸切り痕・広端部側のケズリ・ナデ・棒状のタタキ痕・風蝕痕などである。凸面で観察される痕跡には、縦方向のケズリ・ナデなどがあり、通常の平瓦成形に見られるタタキの痕跡は認められない。おそらく凸形台上に粘土板を1～3枚重ね、押さえ込んで成形したものであろう。狭端部で厚さが3cmほどあるものがある。顎部は横方向のケズリを施し、横方向のナデによって仕上げている。側面の調整は凹面側に縦方向のケズリを施し、平瓦でのe類となる。

胎土には砂粒を含むが緻密である。須恵質に硬く焼成されたものと、土師質の軟質のものがあり、前者は、直線に近い曲線顎をもつ。後者は直線に近い曲線顎のものと、瓦当の厚さが7cm近くある曲線顎のものがある。

凸面の顎付近に朱線（赤色顔料）が付着したものがある。（T120・129）

168点出土した。

#### KNH2（図2 12）

均正唐草紋軒平瓦。一对の髭をもつ樹根状のものの上に左右に出た蕨手の中間に蕾形を入れた中心飾りの両側に、二葉蕨手紋を四回反転するもので、各蕨手の茎部間に蕾形を入れている。蕾形は山形で、中心飾りを除くと中に縦長の珠紋を入れる。外区には比較的大きな珠紋を配する。所謂、「播磨国府系瓦」の「古大内式軒平瓦」（今里1962）である。「小犬丸遺跡I」でNH01bと分類された（山根1986）範傷をもつ個体が2点確認できた。砂粒の少ない胎土をもち、灰白色の土師質に焼成されている。すべてIV区からの出土で、小片を含めて6点出土した。

#### KNH3（図2 13）

均正唐草紋が崩れたものであろう。中心飾りには縦に3の珠紋を並べ、逆「ハ」字に開く子葉を2回配し、更に外方向の子葉を1配する。子葉の間には珠紋を配する。楕円形の太い圈線が巡る。瓦当は範より大きく、両脇区外が広く残るものがある。

向かって左側の下方外区に界線から突出した範傷が観察でき、その他の特徴からもすべて同範と判断できる。

格子タタキ（タタキ③種）の一枚作り平瓦の広端部の凸面側に粘土を付加して押範する。付加粘土は中央部が厚く、両端部は薄いか或いはほとんどない。付加された粘土上にはタタキは見られない。瓦当部にまで粘土を付加するものもある。平瓦側面の面取りや削りと同時に瓦当面の両端や上下面の範外を削る。曲線顎をもつ。側面の調整は平瓦のe類である。

瓦当近くの凸面側顎中央に、直線的な圧痕が見られるものがある。二次成形台或いは乾燥時の台の痕跡であろう。また、顎付近の凸面に朱線（赤色顔料）が付着したものがある。

1点のみの出土であるが、瓦当直近まで同じ③種の格子タタキを施したものがあり、(T4) 直線顎に近いものである。

胎土には砂粒を含むが緻密である。須恵質或いは陶器質の硬い焼成のものがほとんどである。

59点出土した。

### 3. 丸瓦の分類

丸瓦には無段の行基式丸瓦と有段の玉縁式丸瓦がある。数量的には無段の行基式丸瓦が圧倒的に多い。統計処理作業をおこなったⅣ区出土の丸瓦6199点中198点が玉縁式丸瓦で、3%強の比率となる。Ⅱ区南面築地に使用されているものは、更に玉縁式丸瓦が少なく無段のもので占められる。軒丸瓦KNM4に接合できた丸瓦も無段のものである。(T100)

行基式丸瓦・玉縁式丸瓦とも第1次成形技法は粘土板巻きつけ技法を用いており、粘土紐巻きつけ技法のものは見出すことができなかった。各瓦の凸面に凍害などによる風蝕痕が残されるものも認められる。

#### 行基式丸瓦

行基式丸瓦の凸面の痕跡にはタタキメ、ヨコナデ、ケズリがある。タタキメはヨコナデや縦方向のケズリによって消されているが、無紋のタタキ板によるものと想定される横方向の小段が残るものがある。縦方向のケズリは中央部に残されることがあるが、ヨコナデによって消されている。ヨコナデは両端部付近に明瞭に認められる。

凹面の痕跡には、布目、粘土板の糸切り痕、粘土板の合わせ目、布綴じ合わせ目、ナデ、分割界線がある。側板連結の痕跡が見られないことから、成形台は一本模骨のものであろう。糸切り痕や粘土板の合わせ目から、第一次成形が粘土板巻きつけ技法によるものとわかる。粘土の重ね方は、狭端部から見て左回りに巻きつけられたものが多く、合わせ目の形状がS字形を呈する。合わせ目がZ字形のものも見られる。凹面広端部端を弧状にヘラケズリするものがある。また、狭端部を打ち欠いたと考えられるものが相当数見られる。側面の調整は、凹面側をヘラケズリにより面取りしているものがほとんどである。

焼成は、Ⅱ区築地出土のものでは薄赤褐色の土師質のものがほとんどで、Ⅳ区出土のものには白褐色の土師質や陶器質のもの、赤褐色の陶器質のものも見られる。

#### 玉縁式丸瓦

玉縁式丸瓦はⅣ区基壇建物に伴ったものがほとんどで、Ⅲ区築地側溝からも数点出土した。Ⅲ区のものも築地に伴うものではなく、Ⅳ区の建物倒壊によってもたらされた可能性がある。

玉縁式丸瓦には凸面の一部に縦方向の縄叩きが観察できるものがあるが、ほとんどがナデ消されている。また、格子叩きが残された丸瓦が1点だけ確認できた。タタキの種類は平瓦で分類した③種であろう。

玉縁式丸瓦の凹面に残された痕跡には、布目、粘土板の糸切り痕、粘土板の合わせ目、布綴じ合わせ目、ナデ、分割界線などがある。側板連結の痕跡が見られないことから、成形台は一本模骨のものであろう。布目は玉縁凹面にまで及んでいる。糸切り痕や粘土板の合わせ目から、第一次成形が粘土板巻きつけ技法によるものとわかる。粘土の重ね方は、粘土板合わせ目の形状は玉縁から見てZ字形を呈するものが確認できた。端部の調整には凹面広端部端や狭端部端をヘラケズリするものがある。側面の調整は、凹面側をヘラケズリにより面取りしているものがほとんどである。

焼成は土師質、須恵質、陶器質、瓦質など様々である。

#### 4. 平瓦の分類

平瓦も破片資料が多いが、南面築地側溝出土のものなど完形に近いものも見られる。平瓦凹面で観察できる痕跡から桶巻き作り、一枚作りに分類し、凸面に観察できるタタキの種類によって更に細分した。横方向に粘土の継ぎ目が見られるものもあるが、糸切り痕も観察されるため、第1次成形の粘土紐作りのものは見られなかった。

凹面の一部に凍害などによる風蝕痕を残すものがあり、痕跡が全長の半分を超えるものも見られる。

平瓦は第1次成形技法によって

A：粘土板桶巻き作り

B：粘土板一枚作り

に分類される。A技法のものは平瓦凹面に観察される粘土の継ぎ目、斜め方向の布の綴じ合わせ痕、桶の枠板の痕跡を判断の基準にした。

更に凸面に施されたタタキの原体には、刻線叩板と、縄巻叩板があり、主なタタキの種類によって分類をおこなった。刻線叩板によるものは、①から⑬の13種、縄巻叩板によるものは⑭⑮の2種に分類した(図7・8)。他種の叩板も存在するが、点数も少なく、小片が多いため分類できなかった。側面の調整はa~jの10種に分類した。(図9)

- ①：各辺が2.5cm×3.0cm程度の大きめの直交する正格子目を刻んだもので、2方向の刻線は木目に対しては斜交する。
- ②：各辺が0.7cm×0.5cm程度の小さめの直交する正格子目を刻んだもので、木目に対して平行する刻線と直交する刻線を組み合わせる。
- ③：木目と直交に近い方向に通して入れた平行の太い線刻と、その間を繋ぐ短い線刻で囲まれた各辺が1.5cm×1.1cm程度の斜格子を刻んだもの。
- ④：各辺が0.7cm×1.2cm程度の斜格子目を刻んだもの。
- ⑤：各辺が1.0cm×1.3cm程度の斜格子目を刻んだもので、形作られる平行四辺形は左上がりである。
- ⑥：各辺が0.8cm×1.2cm程度の斜格子目を刻んだもの。
- ⑦：各辺が1.4cm×2.5cm程度の斜格子目を刻んだもので、形作られる平行四辺形は右上がりである。
- ⑧：各辺が0.9cm×1.7cm程度の斜格子目を刻んだもので、形作られる平行四辺形は左上がりである。
- ⑨：各辺が0.8cm×0.8cm程度の斜格子目を細線で刻んだもの。
- ⑩：各辺が1.2cm×1.5cm程度の斜格子目を刻んだもので、形作られる平行四辺形は右上がりである。
- ⑪：各辺が1.6cm×2.2cm程度の右上がりの平行四辺形を形作る斜格子目に縦線を加えて刻んだもの。
- ⑫：木目方向の縦線に斜め方向の線を加えたもので、各辺が1.2cm×1.6cm程度の右上がりの平行四辺形を形作る。
- ⑬：木目方向の縦線に斜め方向の線を加えたもので、各辺が0.8cm×1.2cm程度の右上がりの平行四辺形を形作る。タタキ板原体の1ヶ所に×の線刻が見られる。
- ⑭：縄巻叩板によるもので、縄の条が9本/3cmほどの粗いもの。
- ⑮：縄巻叩板によるもので、縄の条が16本/3cmほどの細かいもの。

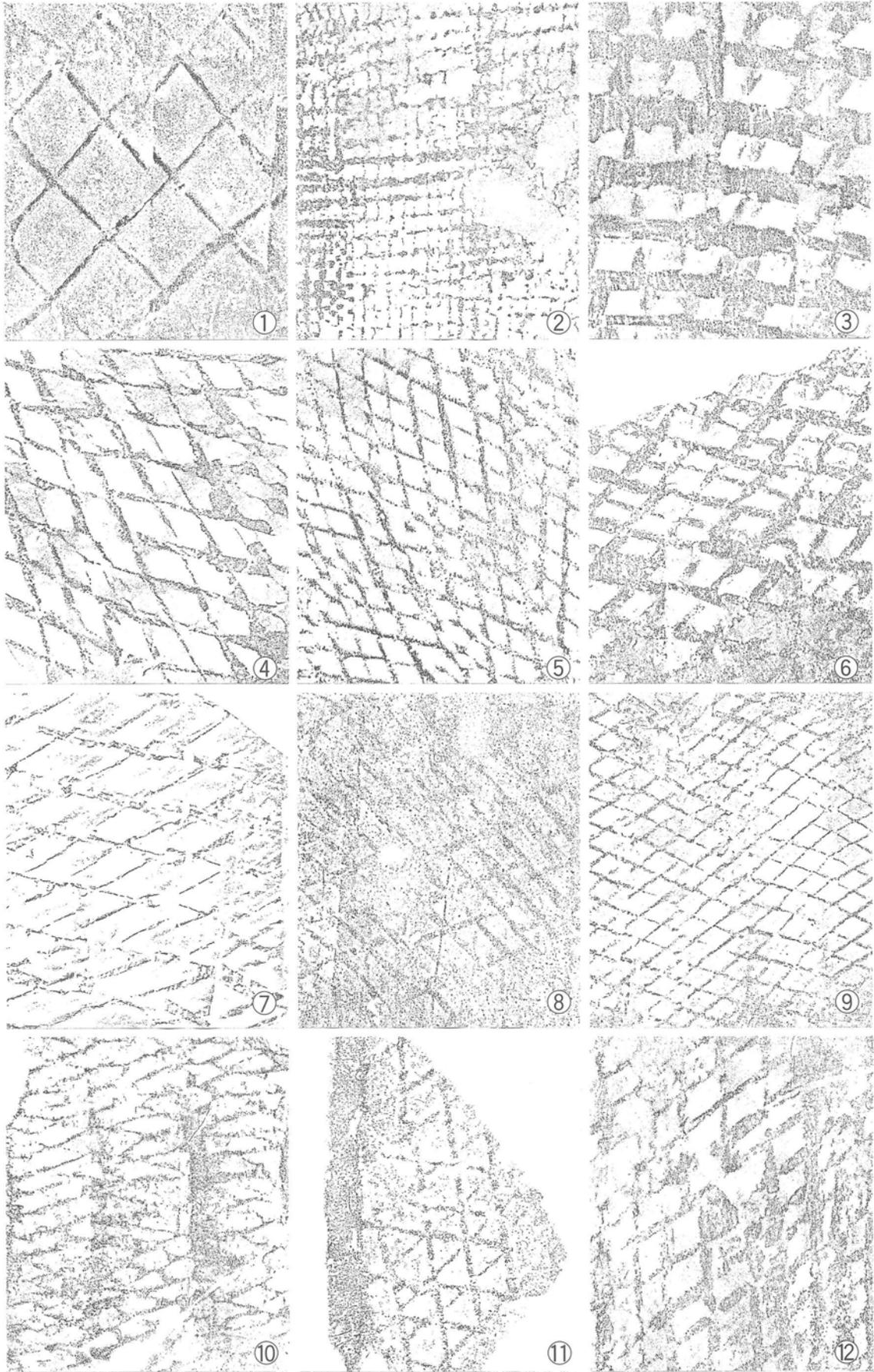


図7 平瓦タタキ各種1

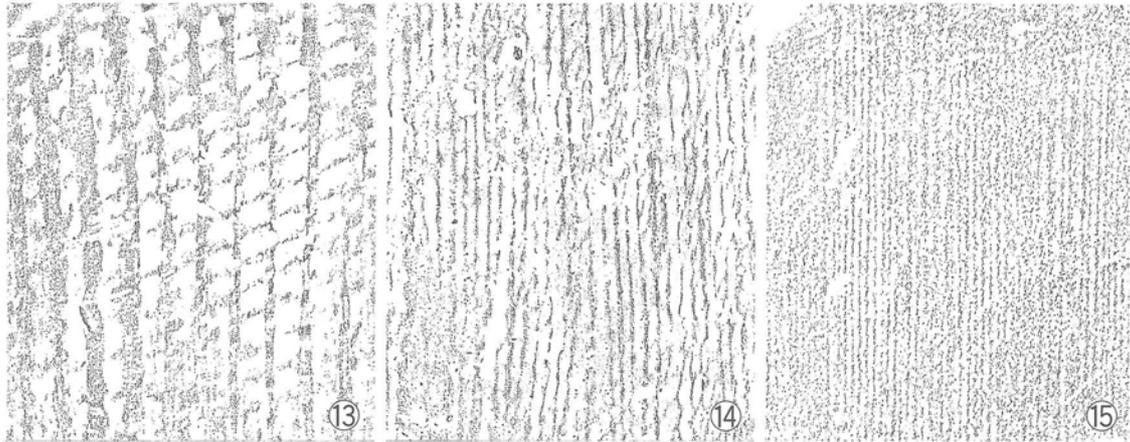


図8 平瓦タタキ各種2

④⑤⑥のタタキをもつものには、粘土の継ぎ目や布の綴じ合わせ目、桶の杵板痕が観察できるものがあり、A技法（粘土板桶巻作り）の痕跡と考えられる。④⑤⑥のタタキは非常に似ており、各々タタキ板原体が復元できないため、同じタタキ板の異なる部位の可能性もある。

その他のものはB技法（一枚作り）であろう。③⑩⑫のタタキをもつものには、凹面に布端の痕跡が側面に沿って見られるものや、端面や側面に布目が見られるものがある。B技法の中にも、糸切り痕の下に縦方向の粘土の継ぎ目が見られるもの（T16）や、横方向に4ヶ所の粘土の継ぎ目が見られるもの（T184）が抽出できたが、他の状況から1枚作りと判断され、粘土角材製作時の痕跡であり、粘土紐作りのものではないと判断された。

タタキ③種のものでは布目が側面で観察できるものが存在する。このタタキ③種の平瓦は軒平瓦KNH3にも用いられている。基壇建物周辺からは最も多く出土している。

タタキ①種のは南面築地で主に用いられているもので、基壇建物周辺からの出土も比較的多い。タタキ⑬種のは熨斗瓦に用いられているが、同じものが布勢駅家でも認められる。

タタキ⑭⑮種の縄巻叩板によるものは、比較的出土数は少ない。統計処理作業をおこなったIV区瓦群等出土のものでは、平瓦6533片中522片検出でき、8%を割る比率である。すべて側面に平行するタテ縄叩きである。いずれも第1次成形技法がB技法の粘土板一枚作りである。他に縄の条が13本/3cmほどのやや粗いもので、離れ砂が付着したものもある。

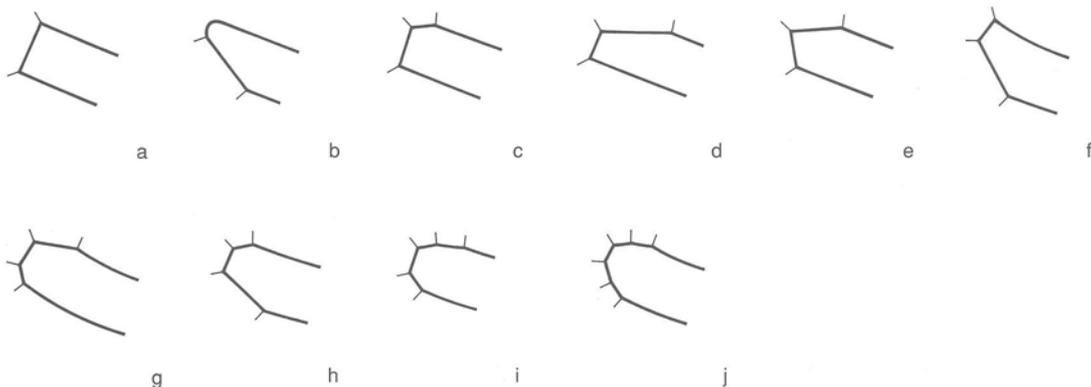


図9 平瓦側面調整模式図

平瓦の厚みは2cm弱のものがほとんどであるが、タタキ③⑨⑩種のものの中に破片ではあるが、厚さ約1cmの非常に薄いものもある。タタキが⑨種のものでは中央部の厚さが約3.5cmと厚いものが多い。側面の厚さは約2cmである。

また、タタキ④種をもち、凹面に桶の杵板痕が残る粘土板桶巻き作りの平瓦で、タタキの方向から広端面と考えられる面の厚さが約3cmと厚く、端面が無紋でケズリの痕跡のみを残すものがある。これなどは、軒先に用いられた可能性があるが、赤色顔料付着などの積極的な証拠は見つからなかった。また、タタキ④か⑤種の平瓦凸面に粘土を付加した小片も見られる。

## 5. 道具瓦

熨斗瓦、隅切りを施した平瓦と隅木蓋瓦を抽出することができた。すべて平瓦を焼成前に加工したもので、割り熨斗瓦などの焼成後に加工された道具瓦は抽出できなかった。Ⅳ区出土のものが大半だが、Ⅲ区築地外側溝から熨斗瓦がまとまって出土している。西面築地には瓦は用いられなかったものと思われるので、Ⅳ区の建物が倒壊した際にもたらされたものであろう。

### 熨斗瓦

熨斗瓦は平瓦を焼成前に縦に半裁して作ったもので、所謂、切熨斗瓦である。いずれも1枚作り平瓦を用いている。側面の調整は平瓦同様におこなっているが、半裁面は不調整である。端部側の凹面に棒状タタキやナデケズリ様の調整を加えたものがある。凸面のタタキは①や⑬種のものがある。

### 隅木蓋瓦

Ⅳ区から2点出土した。隅木蓋瓦は、隅棟先端の隅木の上面を覆う瓦で、広端面に茅負の隅木をはめ込むための三角形の切込みと、その前方の釘穴が焼成前に加工されている。1点(T233)には角釘が残されていた。粘土板一枚作りの平瓦を加工しており、凸面のタタキは③種である。

### 隅平瓦

隅平瓦はⅣ区基壇建物周辺から出土しており、Ⅲ区の西面築地側溝からも1点出土している。隅棟に接して用いられ、平瓦の広端部の左右どちらかの隅を焼成前に切り落としている。切り落とした裁断面は不調整である。凸面のタタキは③種及び⑥、⑦種である。

## 第3節 各地区出土の瓦類

### 1. Ⅰ区出土の瓦類 (図版52)

Ⅰ区は寺域外であり、出土遺物のほとんどが、中世の遺物に混じって出土している。SX101の集石から軒丸瓦KNM1が3片出土している。

#### 軒丸瓦

T1はKNM1bに分類できる。瓦当面の過半が剥がれ落ちている。顎部の裏面周縁部はわずかに突帯状に厚くなる。T2はKNM1の瓦当部剥片である。ともに土師質に焼成される。

## 2. II区出土の瓦類 (図版52~58)

II区では築地の両側溝から大量の瓦が出土した。そのほとんどが寺域の南限となる東西方向の築地(南面築地)に伴うものである。軒丸瓦1点、軒平瓦2点が出土したが、点数の少なさから見て築地には用いられなかったと思われる。築地出土の丸瓦・平瓦については第6章で詳述するため、ここでは図を掲載したものについて概略のみを記す。

### 軒丸瓦 (図版52)

T3は南面築地内側溝西端の最下層から出土したKNM1bで、赤褐色に焼成される。丸瓦は脱落しているが、瓦当裏面上縁に溝を設けて丸瓦接合に備える。瓦当裏面はナデによって仕上げられ、顎部の厚さが約2.5cmに対して中央が厚さ約3.5cmと盛り上がっている。直径約18.2cm、内区径15.7cm、中房径6.7cmを測る。蓮子は押しつぶしたかのように扁平である。

### 軒平瓦 (図版52)

T4は北半の西面築地側溝から出土したKNH3である。他のKNH3と異なり、唯一瓦当部直近まで凸面のタタキが残るもので、平瓦部も約3.1cmと厚い。このため顎部は直線顎に近くなる。凸面のタタキは③種である。凹面には布目(8×10cm)、糸切り痕が見られる。瓦当部の厚さは5.2cmを測る。側面の調整はe種である。

T5は北端の西面築地外側溝から出土したKNH1で、平瓦部凹面の瓦当付近には布目(9×9cm)を消すように横方向のヘラケズリが施され、凸面には縦方向のヘラケズリとナデが施される。側面の調整はc種である。

### 丸瓦 (図版53)

築地側溝から出土した丸瓦は、ほとんど全て無段の行基式丸瓦で、赤白褐色の土師質に焼成されるものが多い。凸面はヨコナデで仕上げられており、タタキの残るものは見られない。凹面には布の綴り合わせ目(T6・9~11)、粘土の合わせ目(T7・10)、T7では分割界線が観察できる。T9・10では広端部凹面側を弧状にケズリを入れている。法量は、T10で、全長約36.8cm、狭端部幅約10.4cm、広端部幅約16.5cm、厚さ約1.9cm、T11で、全長約38.9cm、狭端部幅約10.8cm、広端部幅約15.9cm、厚さ約2.2cmを測る。T9は狭端部に打ち欠きが見られる。

### 平瓦 (図版54~58)

築地側溝から出土した平瓦は、凸面に①種のタタキをもつものが大半を占めており、③種のもものがごく少量である。

T12~23は①種タタキをもつもので、タタキは側面に平行に狭端部側から見て左から右へと移動している。縦方向には3~4回に分けてたたいている。焼成は赤褐色の土師質のもの、白褐色の土師質のものも多く、赤褐色の陶器質に焼かれたものもある。側面の調整はc種のもものがほとんどで、凹面側から刃物を入れた小さな段が見られる。これが分割界面であるなら、A技法の桶巻き作りとなるが、粘土板の継ぎ目や、布の綴り合わせ目をもつものが確認できなかった。端部の調整は狭端部凹面側角を削っている。

凹面で観察される痕跡で、粘土板糸切り痕はT14とT19で顕著に観察できるが、糸切りの方向が異なる。長さ20cm程度の棒状のもので凹面側をたたいた痕跡が多くのもので見られる。痕跡は両端部に近

い位置に多く、両側からたたいて瓦の湾曲を修正したものであろう。

T13・15・22では、側面に沿った側端部に側面に平行する浅い凹線が布目を伴って観察できるが、分割線か布端痕か判別できない。

法量は、小さなものでT20が全長約33.1cm、狭端部幅約21.0cm、広端部幅約23.6cm、厚さ約1.9cm、大きなものでT17が全長約35.1cm、狭端部幅約21.9cm、広端部幅約24.8cm、厚さ約2.3cmを測り、T14の全長34.5cm、狭端部幅約21.9cm、広端部幅約24.4cm、厚さ約2.5cmがほぼ平均値である。

タタキ③種のもは、赤褐色、白褐色の土師質に焼成されたものがある。凹面には粘土板糸切り痕が残される。T24では広端面の一部に布目が観察できる。B種粘土板一枚作りによるものである。法量はT24で全長約33.1cm、狭端部幅約17.9cm、広端部幅約24.9cm、厚さ1.8cmとタタキ①種のものとは比べて小さい。

### 3. III区出土の瓦類（図版59～61）

III区で瓦がまとまって出土しているのは西面築地側溝内からである。ここでは軒瓦は築地内側溝から11点出土しているが、外側溝では上面などから2点軒丸瓦が出土しているに過ぎない。瓦全体の出土量も内側溝からのものが多く、平瓦のタタキも多種にわたる。また、III区北東部の浅い落ち込みSK302からも平瓦・丸瓦が出土しているが、この位置はIV区の基壇建物のちょうど南側に接する。これらの状況から、III区で出土した瓦の多くは、IV区の建物が倒壊した際にもたらされた瓦類と考えている。その他には井戸・柱穴・溝や包含層など中世に属する遺物を伴って出土したものである。

III区からは、軒丸瓦44点（KNM1が6点、KNM2が3点、KNM4が35点）、軒平瓦26点（KNH1が21点、KNH3が5点）が出土している。また、築地外側溝からは、建物に伴うIV区でも出土が少ない鬘斗瓦が4点出土している。

#### 軒丸瓦（図版59）

T26～28はKNM1である。

T26は築地内側溝から出土したKNM1aで、丸瓦部が一部残されている。丸瓦の広端部凸面側を4cm以上の幅で削り、瓦当裏面上縁の溝に接合する。凹面側の調整は不明である。瓦当裏面は横方向のナデによって仕上げられ、下半には堤状突帯を巡らせる。丸瓦は厚さ約1.8cm、凸面はナデによって仕上げられ、凹面には縦11本/cm、横8本/cmの布目と、粘土板の合わせ目が観察できる。側面は凹面側に面取りを施す。須恵質に焼成され、瓦当直径約17.0cm、内区径約15.5cm、中房径約6.5cm。

T27は築地上面検出中に出土したKNM1a。T29はKNM2の小片である。

T30～32築地外側溝から出土したKNH4である。T30はKNH4cに分類できる。外縁外に範端の痕跡が認められる。瓦当裏面の調整は上半部が縦方向のナデ、下半部が横方向のナデを施す。瓦当は薄く作られており、顎部で2.7cm、中房部で1.5cmと中央が窪んでいる。直径約17.3cm、中房径約5.3cm。

T31は築地側溝の上面から出土している。KNM4aに分類でき、赤褐色土師質に焼成されている。

#### 軒平瓦（図版59）

T33は下面P212出土のKNH3で、顎部の一部に横方向の凹線が残る。

T34は包含層出土のKNH1の右半部片で、脇区は範端外に広がり、ケズリによって平滑に面を揃えている。赤褐色の土師質に焼成される。

### 丸瓦（図版60）

行基式丸瓦1点、玉縁式丸瓦1点を図化した。T35は行基式丸瓦で、凹面には布目、布の綴じ合わせ目が観察できる。凹面側の側面を面取りしている。凸面は縦方向のナデを施し、広端部近くを横方向のケズリからナデを施す。全長約37.7cm、広端部径約13.7cm、厚さ約1.7cmを測る。

T36は玉縁式丸瓦で、全長36.8cm、玉縁長4.9cm、幅約17cm、玉縁幅9.8cm、厚さ1.9cmを測る。凹面の狭端部、広端部と側面を面取りしている。凹面には糸切り痕、布目、布の綴じ合わせ目が見られるが、一部はナデ消されている。布目（9×10/cm）は玉縁部まで及んでいる。

### 平瓦（図版60）

平瓦2点を図化した。T38は上層出土のものである。2点ともタタキが①種のもので、側面の調整はc。狭端部凹面を面取りする。凹面には棒状タタキ、布目が観察できる。

T37は全長約34.0cm、T38は全長35.8cmを測る。T38には糸切り痕も残されている。

### 道具瓦（図版61）

T39～42は築地外側溝から出土した切鬘斗瓦である。一枚作りのタタキ③種の平瓦を焼成前に縦に半裁して2枚の鬘斗瓦を製作している。側面の調整はe種、半裁部の側面は不調整である。同様の鬘斗瓦は小犬丸遺跡（布勢駅家）でも確認でき、AⅢaに分類されている（山根1986）。

長さがT39で37.7cm、T40で38.3cm、T41で37.7cm、T42で38.3cmと平瓦と比べても大きい。T39・40・42では凹面端部に沿って布端が観察され、T41では布の折り返し痕が見られる。T39の布目は著しいほつれが見られる。凹面の端部付近には棒状タタキの痕跡が認められる。

T43は築地外側溝出土の隅平瓦である。タタキ⑦種の平瓦広端部の左隅を焼成前に切り落としている。切断面は不調整である。切り落としの端面からの角度は55°となる。

## 4. IV区出土の瓦類（図版62～107）

IV区からは、最も多くの瓦が出土している。軒瓦では、軒丸瓦351点（KNM1が47点、KNM2が39点、KNM3が3点、KNM4が261点、不明1点）、軒平瓦212点（KNH1が146点、KNH2が6点、KNH3が54点、不明6点）が出土している。これらの内、基壇検出前の重機掘削や人力掘削時に包含層から出土したもの、確認調査時に出土したもの、下層の土坑や柱穴から出土したものを除外した瓦群から出土したものだけでも、軒丸瓦289点（KNM1が19点、KNM2が32点、KNM3が3点、KNM4が235点）、軒平瓦174点（KNH1が116点、KNH2が4点、KNH3が49点、不明5点）となる。

丸瓦・平瓦の色調・焼成はⅡ区築地出土のものとは異なり、白褐色や赤褐色の土師質や陶器質のものや、須恵質、瓦質など様々なものがある。この傾向は軒瓦にも当てはまる。

### 軒丸瓦（図版62～77）

T44～53はKNM1である。T44～48はa、T49～51はbに分類できる。T46・51が重機掘削時に出土し、T47が上層で出土した以外は瓦群出土のものである。

焼成はT44・47のように須恵質のものや、T46・50・53のように瓦質のもの、T49のように砂粒を多く含み赤褐色土師質のものなど様々である。瓦当裏面は横方向のナデを施し、T44・46・47・52のように周縁に堤状突帯を巡らせるものが見られる。また、T49・50は瓦当裏面中央部をやや高く膨らませ気味

に作る。顎部はナデによって仕上げるが、一部ケズリが施されるものもある。

T44は直径約16.4cm、内径約15.0cm、中房径6.4cm。瓦当裏面に堤状突帯を巡らせており、瓦当厚は中心で2.3cm、顎部で3.5cmを測る。補充粘土が少ないため、裏面の調整は丸瓦部までは及んでおらず、布目が瓦当裏面約2cmまで残っている。

T45は中房部の厚さ3.5cmを測るが、当初2.5cmほどの厚さで範に粘土を充填し、更に粘土を追加したことが観察できる。

T54～61はKNM2で、T54～56がa、T57～59がbに分類できる。T59が重機掘削時、T54が上層出土以外は瓦群出土のものである。

焼成はT57・59のように須恵質のものほか、瓦質や土師質のものがある。瓦当裏面は横方向のナデを施し、T57・59のように周縁に堤状突帯を巡らせるものが見られる。顎部はナデによって仕上げる。

T54は瓦群上層のものと下層土坑出土のものが接合できた。直径約17.2cm、中房径約5.8cm、厚さは中房で約2.5cmを測る。丸瓦接合部の補充粘土は少なく、丸瓦凹面の瓦当裏面から約3cmの位置に布目(7×6/cm)が残る。

T57は直径約17.1cm、中房径約5.6cm、厚さは中房で約1.4cm、顎部で約2.9cmを測る。

T62～65はKNM3である。小さな砂粒を含むが緻密な胎土をもち、褐色の土師質や瓦質、須恵質のものがある。T63は下層土坑から出土した。

T62の顎部には枷型の痕跡が観察できる。丸瓦との接合は瓦当裏面のかなり下がった位置に、やや鈍角気味に接合されており、内外に厚く支持粘土を補充している。瓦当裏面の調整は丸瓦凹面の約15cmまで縦方向のナデを施し、側面のケズリも追加している。凸面の調整は瓦当近くは横方向のケズリ、丸瓦部は縦方向のケズリを施す。瓦当の直径約15.4cm、中房径約4.8cm、厚さは中房で約2.8cmを測る。

T63でも丸瓦の接合はかなり下がった位置に、やや鈍角に接合されており、補充粘土は多い。瓦当裏面の調整は指によるナデで、丸瓦部にも縦方向のナデを施している。

T66～117はKNM4で、T66～77がa、T78～83がb、T84～99がc、T100～108がd、T114・115がeに分類できる。T75・99が下層の土坑、T89・90が下層柱穴、T76・100・107が上層出土のものであり、それ以外は瓦群出土のものである。

KNM4aには、範の外縁より一回り大きい瓦当を持つもの(T66・70・71・72・74)があり、外縁の外側に木目に沿った範傷や木目が見られる。直径は一定しておらず、T66では15.5～19.0cmの楕円を呈している。他のものにも顎部に範端の痕跡と考えられる小段が残るが、横方向のケズリやナデによって調整されている。瓦当の断面は顎部から徐々に厚みを増して丸瓦接合部に至るものが多く、瓦当の厚みを均質に成形するもの(T75)でも厚さが約3.5cmを測り、KNM4b～dと比べると厚い。

T66は赤褐色土師質に焼成されたもので、丸瓦との接合の支持粘土が著しく厚いものである。外縁の上面に残る擦痕は木目の方向とは異なる。範端より一回り大きい外縁外側の顎部や外周は横方向のケズリやナデを施し、瓦当裏側には縦方向の強いナデと、顎部に沿った横方向のナデを施す。瓦当直径18.1cmを測る。

T67は範が二重に打たれている。範端を残すが、外周を削っているため瓦当直径は17.7cmとなる。瓦当の厚さは3.2cmと厚い。

KNM4b (T78~83) は瓦当の厚さが薄くなり、裏面は中心に向かって窪んでいくものが多い。但しT81のように平らで厚さが約3cmのものもある。外縁部上面はナデ調整が見られる。

T78は丸瓦部が残り、凹面は瓦当裏面まで指の跡を付けながら縦方向のナデを施す。瓦当裏面下端部は横方向のナデを施している。丸瓦凸面は縦方向のナデを施し、瓦当周辺を横方向のケズリとナデで仕上げる。瓦当直径約16.7cm、中房径約5.3cm、厚さは中房で約1.5cm、顎部で約2.3cmを測る。

T82・83は顎部全体から丸瓦接合部付近まで柵型の痕跡を残しており、上半部は横方向のケズリによって仕上げている。T82には紋様範の範端も観察できる。

KNM4c (T84~99) も同様に瓦当の厚さが薄くなり、裏面は中心に向かって窪んでいく。外縁部上面にはケズリを施すものも多く見られる。丸瓦との接合部は、支持粘土を瓦当裏面まで不連続ながらも強く縦方向にナデ調整するものや、瓦当裏面下端に横方向のケズリを施すもの(T86・94・95)がある。

T84は瓦当直径約16.0cm、中房径約5.6cm、厚さは中房で約1.4cm、顎部で約2.5cmを測る。瓦当裏面は丁寧に縦方向のナデを施している。

T85は丸瓦が20cm以上残るものである。瓦当外縁にケズリを入れるが紋様範端が一部残り、外周の上下にはケズリやナデを施すが側面の一部に柵型の痕跡が観察できる。瓦当裏面の調整は下端にはユビオサエを残し、上半は強い指による縦方向のナデを施す。直径約17.0cm、厚さは中房で約1.9cm、顎部で約2.5cmを測る。

T86も外縁にケズリを施すもので、瓦当裏面下端にも横方向のケズリを入れ、上半は縦方向のナデを施し、丸瓦部の13cm近くまで及んでいる。直径約16.8cm、中房径約5.3cm、厚さは中房で約1.3cm、顎部で約2.5cmを測る。

T87では外縁外側全周に柵型の痕跡が認められ、外側の調整は丸瓦凸面の縦方向のケズリに限られる。調整の省略であろう。一部に残る木目から柵型も木質で作られていたことがわかる。

T89は外縁外側に紋様範端を残している。直径約17.0cm、内区径約14.3cm、中房径約5.2cm、厚さは約1.7cmを測る。

T95は顎部全体に柵型の痕跡を残し、柵型の紋様範側に切れ込みが見られる。不加工の丸瓦広端部と瓦当との間に空間が見られる。このような例は比較的多く見られ、瓦当裏面に加工された丸瓦装着用の溝の断面が丸いことと、丸瓦広端部が不加工であることが原因であろう。装着用の溝部分の瓦当の厚さは0.7cm以下のものも見られる。

KNM4d (T100~108) も瓦当の厚さが薄くなり、裏面は中心に向かって窪んでいくものや、比較的均等な厚みをもつものがある。外縁部上面はT105のように一部にケズリを入れるものがあるが、調整不明或いは未調整のものが多い。

T100は唯一行基式丸瓦狭端部まで残存するが、接合の支持粘土は少ない。全長40.0cm、丸瓦の凹面には8~9本/cmの布目が見られる。瓦当部分は6片が接合でき、全て瓦群から出土したが、丸瓦は上層の包含層と下層の柱穴P3132から出土している。

T103で直径約17.1cm、中房径約5.3cm、厚さ約1.5cmを測る。

T109~112はKNM4b或いはcと考えられるが、範傷の部分を欠損しているため判別できなかった。

T110は外縁表面にケズリを施している。T111・112でも同様の調整を行っている。また、瓦当裏面下

半にケズリを施しており、厚さが1.0cmに近い部分も見られる。T112にも同じ調整が認められる。丸瓦凸面の調整は縦方向のケズリで、わずかに瓦当周辺に横方向のケズリが施される状況で、調整の省略が見られる。

T113はKNM4c或いはdと考えられるが、外縁が摩滅しており、判別できなかった。白褐色の土師質の焼成である。

T114～115はKNM4eと分類したが、T115は外縁がわずかに残るのみであり、枷型の痕跡は不明瞭なものである。赤褐色土師質に焼成されている。

T114も表面に傷があり荒れていることから、dの器表面が摩滅したものかもしれない。他にこのe類は確認できなかった。T114は外縁外側に範端が一部確認できる。瓦当直径約17.4cm、中房は扁平で径約5.3cm、厚さは中房で約2.7cmを測る。

T116・117はKNM4bの外縁を切り落としたもので、周囲はナデ調整され、その後ユビオサエが残る。瓦当裏面には丸瓦接合の弧状の溝が抉られている。ともに褐色土師質に焼成されている。T116は範が二重に押されており、一部外縁を残して直径14.8cmを測る。瓦当裏面の調整は多方向のナデによって平滑に仕上げている。

T117は一部が欠損していることから、c或いはdの可能性も残す。外縁はほとんど落とされており、直径14.7cmを測る。瓦当裏面の調整は他のKNM4とは異なり横方向のケズリ或いはイタナデを施す。丸瓦の接合位置は多数派から90°振っている。

#### 軒平瓦（図版78～91）

T118～144はKNH1である。T118が柱穴、T124・142・144が上層から出土した以外は瓦群出土のものである。

顎部の形態は曲線顎であるが、大きく下方に湾曲して、湾曲部と幅の広い顎面に横方向のケズリを施すもの、平瓦部から続く縦方向のケズリが湾曲部まで及び、顎面に横方向のケズリを施すもの、緩やかに湾曲して幅の狭い顎面に横方向のケズリを施すものなどがある。湾曲面に横方向の直線的な圧痕が見られるもの（T123・124・138・144）があり、調整時或いは乾燥時に置かれた台の痕跡と思われる。平瓦部凸面にはケズリのほかに縦方向のナデも施されている。

T118はP4132から出土し、狭端部まで残存するものであり、全長は約33.6cmとなる。瓦当面は範の両脇区外まで三日月状に広がる。同様に瓦当面が三日月状を呈するものには、T125・126などがある。

凹面の広端部に弧状のケズリを施すため、瓦当面の上部両端は外縁まで失うが、中央部は範端が残されている。平瓦部凹面は糸切り痕を残して布目が観察され、狭端部に沿って布の端が見られる。狭端部近くには棒状タタキが残されている。凸面には縦方向のナデの痕跡が見られる。やや砂粒を含んだ白褐色土師質の焼成である。側面の調整はc種。

T119は瓦当右脇区の外を大きく残し、表面をヘラケズリしている。上辺にも範端が認められる。凹面の調整は瓦当から約8cmまで横方向のヘラケズリを施す。平瓦凹面に残された布目は8×8/cmである。凸面の調整は顎部に横方向のケズリとナデ、平瓦部には縦方向のケズリを施す。側面の調整はe種である。

T120も同様の調整を施すが、凸面の顎部から緩やかに移行した平瓦部に幅約2.5cmの朱線が認められ

る。側面の調整はe種。

T121は狭端部まで残存するもので、全長は約35.0cmである。凹面には糸切り痕、布目が残りに、広端部全面にわたって弧状のケズリを施すが、範端までは及んでいない。側面の調整はj種である。

T124も一部狭端部まで残るが、狭端部左側を斜めに欠損しており、隅軒丸瓦の可能性はある。狭端部にも布目がまわっている。全長は約33cmを測る。広端部凹面には幅広く横方向のケズリを施している。顎部は横方向のケズリ後、ナデを施し、沈線状の圧痕が残る。平瓦部は縦方向のケズリの後、ナデで仕上げる。

T127は瓦当面両脇区外を四角く残すもので、瓦当部幅は約28cmを測る。この形のものが最も多い。T127は瓦当凸面側も広く残している。

T128は瓦当周縁の上下を削り込んだもので、凹面側、凸面側の外縁や珠紋帯の一部を失っている。瓦当部幅は約26cmである。

T145～150はKNH2である。小片のものが多く、砂粒の少ない胎土をもち、灰白色土師質の焼成である。T146・148が上層から出土した他は瓦群出土のものである。

T145の内区右下と、T147外区珠紋上に範傷が認められる。顎の形態は曲線顎で、湾曲部まで縦方向のケズリやナデを施し幅の狭い顎面には横方向のケズリを施している。

T151～164はKNH3である。全て瓦群出土のものである。瓦当部は三日月形の外縁をもち、同じく三日月形の範であろう。瓦当面の形態も両脇区外を広げた三日月形である。凸面に残るタタキは③種で、長軸方向に長いタタキ原体を平行にずらして叩き締めている。タタキは補充粘土上にも認められる。粘土板糸切りの痕跡は、瓦当側左に収束するものと、瓦当側中央に収束するものがある。顎部の形態は緩やかな曲線顎であり、KNH1のような形態差は少ない。顎面は横方向のケズリを施し、湾曲部は縦方向のケズリの後ナデを施している。瓦当部の補充粘土上にもタタキが認められることから、平瓦の成形も同時に行っていた可能性が高い。

T151の瓦当部幅は約25.5cm、狭端部幅約20cm、全長約32.6cmを測る。瓦当部幅はT160で約27.5cm、T162で約24.5cm、全長はT152で約34.1cm、T154で約34.0cmと差がある。全長はT152で34.0cm、T154で33.6cmを測る。

T151の凸面顎部は横方向のナデ調整で、一部ヘラケズリを施す。顎部と平瓦部との間に瓦当に平行する圧痕があり、木目が観察できる。同様の圧痕はT157～162でも見られる。成形台上或いは乾燥時に付いたものであろう。凹面に棒状タタキの痕跡を残すが、幅約1.5cmと他の瓦に見られる棒状タタキとは異なる。その他に凹面の調整は側面の面取り（e種）だけで、端部には調整を施さない。狭端部に沿った部分と一方の側面に沿って布端が認められる。

T159も同様の調整が観察できるが、顎部に幅3cm程度の朱線が認められる。顎部の朱線は他にT155・156でも残されている。

#### 丸瓦（図版92～94）

T165～170は行基式丸瓦、T171～179は玉縁式丸瓦である。実際の出土点数では、玉縁式丸瓦が3%程度の比率で、行基式丸瓦が圧倒的に多いが、玉縁式丸瓦を多く掲載している。瓦群出土のものを掲載した。

行基式丸瓦は様々な色調・焼成をもつ。T166～168では粘土板の合わせ目が観察でき、粘土板は狭端部側から見てS字状に重ね合わされる。法量はT165で、全長約36.5cm、狭端部幅約9.2cm、広端部幅約15.3cm。T166のように全長約34.1cmと短いものもある。小片で図示できなかったが凸面に斜格子タタキ(⑥種か)を残すものが抽出できた。

玉縁式丸瓦も瓦質・須恵質など焼成は様々であるが、赤褐色土師質のものはない。T171・172では凹面に粘土板の合わせ目が観察され、狭端部側から見てZ字形に重ね合わせられている。凸面に縄タタキを残すもの(T177・178)があり、縦方向のタタキの後、縦方向のケズリを行い、横方向のナデで仕上げている。T179では凸面にヘラ描き沈線がある。側面の調整は凹面側を削り、玉縁部も同様である。玉縁部凹面端部にナデ調整を施すものが多いが、不調整のもの(T174)、端部を削って面取りしているもの(T172)、玉縁部内面全体にケズリを施すもの(T179)も見られる。T172は凹面広端部端にも横方向のケズリを加えている。法量はT171で、全長約41.9cm、玉縁長約6.3cm、筒部段部幅約13.8cm、広端部幅約18.0cm、厚さ約1.9cm、T172では長さが短く、全長約36.0cm、玉縁長約5.8cm、玉縁幅約9.9cm、筒部段部幅約14.4cm、広端部幅約15.9cm、厚さ約1.6cmを測る。

#### 平瓦(図版95～105)

図示できたものは、T180～228であり、完形に復元できるものは少ない。焼成は須恵質、陶器質、土師質、瓦質と様々である。タタキによって15種に分類したが、抽出できなかったものが存在する可能性が残る。タタキ毎の統計的な数量処理を怠ったが、IV区で主体的なものは、軒平瓦KNH3にも用いられている③種であり、築地に主体的に用いられている①種がそれに次ぎ、A技法である桶巻き作りに伴う④⑤⑥種は前二者より少なくなる。縄タタキ⑭⑮種は少なく、全体の8%に過ぎない。②種や⑩～⑬種は非常に少ない。T181・195・199・202・205・211・222は上層出土、T214は土坑SK402から出土し、他は瓦群出土のものである。

T180・181はタタキ①種のものである。タタキは側面に平行に、狭端部から見て左から右へと移動し、全長方向は3段に分けてタタキを施している。凹面には布目、糸切り痕、棒状のタタキが観察でき、狭端部を削っている。側面の調整はc。T180は赤褐色陶質に焼成され、全長約32.9cm、狭端部幅約21.1cm、広端部幅約24.0cm、厚さ約2.1cmを測り、II区築地で用いられた同種タタキのものよりもやや小さい。

T182・183は須恵質に焼成されたタタキ②種のものである。T182の凹面には布端痕と思われる痕跡が側面端に沿って見られる。側面の調整はe。端部幅は約25.3cm、厚さ約1.6cm。T183の凹面には粘土板糸切りの痕跡が見られる。

T184～193はタタキ③種のものである。狭端部側を中心に放射状にタタキ板を移動している。全長方向には3段程度に分けてたたいている。凹面に残された痕跡には糸切り痕、布目などがあり、T185のように布がほつれたもの、T184のように狭端部に沿って布端が見られるもの、T187・190・191のように狭端部に沿って布の折り返しが見られるものや、広端面の一部まで布目が及ぶもの(T186～188・192)がある。B技法、粘土板一枚作りによるものである。

凹面に幅約1cmの棒状のタタキを施したものがあり、タタキ原体の形状は断面三角形を呈する。これはタタキ①種に見られたものとは異なる。側面の調整はeのものがほとんどである。凹面狭端部側を削って面取りするが、T191のように小さな弧状に2回ケズリを施すものもある。T191は側面のケズリも弧状をなす。T193は約1cmと非常に薄く作られている。陶器質に焼成されたものが多く見られる。法量はT184で、全長約32.6cm、狭端部幅約19.2cm、広端部幅約25.2cm、厚さ約2.1cm、T187で、全長約

33.0cm、狭端部幅約18.6cm、広端部幅約24.9cm、厚さ約2.2cmとⅡ区の築地で用いられた同種タタキの平瓦とほぼ同じ大きさである。

T194～199はタタキ④種のものである。T194・197ではタタキを一部ナデ消している。T194・195には縦方向の粘土板の継ぎ目が観察でき、凹面では継ぎ目部分を強く指でなでている。狭端部から見て粘土を「S」字状に重ね合わせている。T194では、分割界線と思われる凹線が側面に沿って見られる。狭端部凹面側をケズリによって面取りする。風蝕痕が著しい。側面の調整はcで、凹面側から刃物を入れた痕跡が残る。他にdやe種の調整が見られる。T196～199の凹面には布の綴り合せ目が斜め方向に観察できる。T194は、狭端部幅約24.5cm、厚さ約1.6cmを測る。

T200～205はタタキ⑤種のものである。T200～202・204・205の凹面には幅2.5～6cmの枳板の痕跡が観察できる。T200・203には縦方向の粘土板の継ぎ目が観察できる。T200・201では広端部凸面側に弧状のケズリを施しており、他種の平瓦には見られない特徴である。T200の端部凹面側は不調整であるため、凸面側から刃物を入れた痕跡が残る。側面の調整にはd・e・g種が見られる。厚さは約2.5cmと厚めである。

T206はタタキ⑥種のものである。一部にタタキが横方向に移動する様子が見える。赤褐色土師質に焼成される。一方の側面近くまで風蝕痕が見られる。厚さは約2.3cm。

T207～210はタタキ⑦種のものである。須恵質に焼成されているものが多い。側面の調整はcで、面取りの幅は狭い。T207では両端部凹面側にも同様の面取りを施している。全長は約39.1cmと最大値を示している。

T211はタタキ⑧種のものである。側面は角を丸くなでている。土師質に焼成される。

T212～215はタタキ⑨種のものである。総じて器壁が厚い。タタキは横方向に移動するものが確認できる。側面の調整はgやh種で凸面側にも施す種類が主体となる。T212の狭端部幅約24.3cm、厚さ約2.8cmを測り、T213でも約2.6cmと総じて厚み大きい。

T216～219はタタキ⑩種のものである。タタキは横方向に移動するものが確認できる。側面の調整はeやg種で凸面側にも施している。T219はa種の面取りなしであり、凸面のタタキを一部ナデ消している。T216は端部幅約29.9cm、厚さ約2.2cmの比較的大きなものであるが、凹面で観察できる風蝕痕は広端部側に偏る。T217は端部幅約24.0cm、厚さ約2.7cm、T218は厚さ約2.7cmと総じて器壁が厚い。

T220・221はタタキ⑪種のものである。T220は長方形に近く、全長約35.8cm、狭端部幅約23.3cm、広端部幅約25.3cm、厚さ約2.1cmを測る。広端部凹面側を削っている。凹面の両側面に沿って布端が観察できる。T221では側面に一部布目が見られる。共に布目を一部縦方向にナデ消している。

T222はタタキ⑬種のものである。Ⅲ区出土の熨斗瓦と同種のタタキであるが、点数は極めて少ない。側面に沿って布端が見られる。

T223はタタキ⑭種のものであるが、小片のみ抽出できた。

T224～228は縄タタキを施すもので、須恵質、瓦質のものが多い。統計処理作業をおこなったⅣ区出土の平瓦では8%の比率を占めるが、小破片を除いた作業であるため、残りの良い硬質のものは実際よりも多めになる傾向が予測され、実際はさらに小さな比率となろう。凹面の布目の一部を、強いナデによって消しているものが多い。側面の調整はb・c・f・h種で、凸面側に及ぶものが主体となる。T224は3cmあたりの縄の条数が9本程度の粗い縄目の⑭種で、全長約33.2cm、狭端部幅約19.3cm、厚さ約2.4cmを測る。T225～227は3cmあたりの縄の条数が15～16本の細かい縄目の⑮種である。T228は3cmあたりの縄の条数が13本程度のもので、凸面に離れ砂が付着している。

## 道具瓦（図版106～107）

Ⅳ区からは熨斗瓦・隅木蓋瓦・隅平瓦の道具瓦を抽出することができた。いずれも平瓦に焼成前に加工したものである。

T229・230は切熨斗瓦である。T230は瓦群から出土した。

T229はタタキ①種の平瓦を焼成前に縦に半裁したものであるが、厚さは約1.3cmと平瓦に比べると薄い作りとなる。一部タタキが端部まで及んでいない。凹面には端面に沿った布端の痕跡と、棒状のタタキの痕跡が見られる。凹面の端部際に小さな段が残り、成形台或いは枠の痕跡とすれば、凸面のタタキや布端が大ききずれていることと符合する。棒状タタキはその修正のためのものであろう。側面の調整はcで、半裁面は不調整である。赤褐色土師質に焼成される。

T230はタタキ⑩と思われる平瓦を焼成前に半裁したもので、半裁面の厚さが約3cmと厚く、不調整である。側面の調整はe種である。

T231・232も熨斗瓦と考えていたが、タタキ・布目等が観察されず、焼成も白色陶器質と土製品の宝塔に近いことから、宝塔の一部としたい。横断面が緩やかに湾曲した板状の製品で、粘土紐巻上げ成形により円筒形の成品を作り、横方向のナデ調整後、縦に切断している。裁断面は不調整。但し、他の宝塔とは接合できず、湾曲の度合いも少し異なるようである。

T233・234は隅木蓋瓦である。ともに瓦群から出土した。

T233は基壇北面の西寄りの瓦群3区から出土した。タタキ③種の平瓦の広端部中央を幅約10cm、深さ約3cmの「V」字形に切れ込みを入れ、切れ込みの中央から約7.5cmの位置に穿孔している。穿孔は瓦の破損を防ぐためか、中央からややずれた位置に行っている。切れ込み、側面とも不調整である。

T234も基壇北面の中央瓦群3区と4区間のあぜから出土した。同じくタタキ③種の平瓦を加工したもので、切れ込みの一部と穿孔部には角釘が残存している。角釘は0.5cm角、両端を欠損するが、約3cm残っている。側面の調整はc種である。

T235～241は隅切りを施した平瓦で、隅平瓦であろう。T236・238が瓦群最上層出土、T239が下層土坑出土以外は瓦群出土のものである。

T235はタタキ⑦種の平瓦の広端部一隅を切り落としたもので、左隅平となる。側面・切り落とし面とも不調整。切り落としの端面からの角度は約60°とやや急である。風蝕痕が顕著である。

T236～238はタタキ⑥種と考えられる平瓦を加工したもので、T236・237は左隅平、T238は右隅平となる。T236の端部には布目が残り、側面の調整はd種、切り落とし部は不調整で、凹面側から刃物を入れている。端面との角度は約20°を測る。T237では端面との角度は約15°で、緩やかである。T238では側面・切り落とし面とも不調整。切り落としの端面からの角度は約30°である。

T239はタタキ③種の平瓦を加工したもので、左隅平となる。側面の調整はe種、切り落とし面は不調整で、凹面から刃物を入れている。切り落としの端面からの角度は約30°である。

T240はタタキ⑥或いは⑩種の平瓦を加工したもので、右隅平となる。切り落とし面は不調整。切り落としの端面からの角度は約50°である。

T241は布目の残る平瓦の狭端部隅から斜めに上側を切り落としたもので、左隅平と思われる。切り落

とし面の調整がe種。端面には布目が残り、凹面側を削って調整している。タタキは残っておらず、ナデ・ケズリの調整がなされる。狭端部隅も削り落としている。切り落としの端面からの角度は約50°である。他のものとは加工の仕方が異なっているが、小片であるため、別の用途を持つものかは判断できない。

## 5. V区出土の瓦

V区からも瓦小片が出土しているが、軒瓦・道具瓦は見られない。平瓦はタタキ④⑤⑥⑩⑮などが見られ、IV区の状況に類している。確認調査の結果から見ても、更に斜面上方に瓦葺きの施設が存在した可能性は極めて低い。また、東側の平坦地でも瓦の散布は見られなかった。おそらく山裾のIV区周辺から後世に持ち込まれたものであろう。

### [註]

註1 外縁のみの小片や瓦当面の剥がれ落ちたもので、他の軒丸瓦と接合できなかった破片が40点以上ある。

そのほとんどがKNM4と思われるが、小片であるため今後の作業では除外している。

註2 小犬丸遺跡（布勢駅家）出土の軒丸瓦（NM01）の瓦範に、分割型a形式（星野1981）、AⅡタイプ（外枠二段型）（近藤1982）が存在することは、（山根1986）ですでに指摘されている。

註3 狭端部まで残存しているが、瓦当面が剥がれ落ちたものなどが8点ある。平瓦の調整などからKNH1に属すると考えられるが、今後の作業では除外している。

[参考文献] 瓦についての用語等については、以下の文献を参照した。

佐原 真 1972「平瓦桶巻作」『考古学雑誌』58巻2号

大川 清 1996『古代のかわら』窯業史博物館

坪井利弘 1975『日本の瓦屋根』理工学社

星野猷二 1981「鏡瓦製作と分割型」『考古学雑誌』第67巻第2号

近藤喬一 1982「瓦の範と瓦当」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会 平凡社

上原真人 1996「蓮華紋」『日本の美術』第359号 至文堂

上原真人 1997「瓦を読む」『歴史発掘』11 講談社

今里幾次 1960「播磨国分寺式瓦の研究」『研究報告』第4冊 播磨郷土文化協会

1979『播磨考古学研究』今里幾次論文集刊行会 再録

今里幾次 1962「古瓦からみた播磨国府寺」『歴史考古』7 歴史考古研究会

1979『播磨考古学研究』今里幾次論文集刊行会 再録

今里幾次 1992「龍野市小犬丸遺跡の古瓦」『布勢駅家』龍野市文化財調査報告8

山根実生子 1986「瓦」「小犬丸遺跡出土の瓦について」『小犬丸遺跡』兵庫県教育委員会

菱田哲郎 1994「多哥寺創建瓦について」『多哥寺遺跡』中町文化財報告9 中町教育委員会

西川雄大 1997「出土瓦の検討」『多哥寺遺跡Ⅱ』中町文化財報告15 中町教育委員会

奈良文化財研究所 2003『吉備池廃寺発掘調査報告―百済大寺の調査―』奈良文化財研究所創立50周年記念学報第68冊

奈良文化財研究所 2001『山田寺発掘調査報告』創立50周年記念奈良文化財研究所学報第63冊  
財団法人古代学協会 1976『平安宮大極殿跡の発掘調査』平安京跡研究調査報告書 第1輯

瓦については、上原真人氏、岩戸晶子氏から多くの教示を受けた。

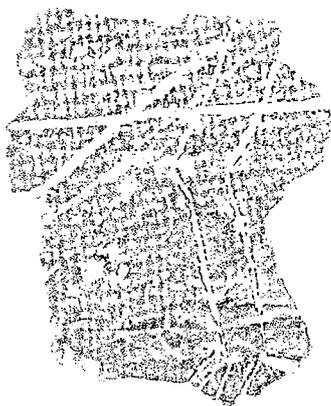


図10 瓦に残されたヘラ描き

Ⅳ区の瓦群から出土した須恵質の平瓦の凹面にヘラ描きの絵が描かれていた。細い線で2本の折れ曲がった平行線を描き、先端は2～3本に分かれている。鳥の両足を描いたものと思われるが、人ないし動物の足か手の輪郭を描いたものかもしれない。(T249)

表2-1 軒丸瓦出土一覧

報告No.	図版	写真	拓本No.	種別	KNM	細分	中房	周縁	脚型	箆形	瓦当面積	完形面積	出土地区	出土遺構	出土層位	備考
1	52		132	軒丸瓦	1	b					107.1		I	SX101		N3/0暗灰色瓦質
2	52		136	軒丸瓦	1						32.5		I	SX101		N3/0暗灰色瓦質
3	52	c3	51	軒丸瓦	1	b					213.1	253.7	II	築地内溝I(東西)	最下層	7.5YR8/3浅黄橙色土師質 裏中膨
26	59	76	608	軒丸瓦	1	a					226	252.2	III	築地内側溝1区		7.5Y8/1灰白色硬質 堤状突帯
27	59		610	軒丸瓦	1	a					84.7		III	築地	上面検出	2.5Y8/2灰白色 土師質
28	59		624	軒丸瓦	1						104.7		III			2.5Y8/2灰白色 土師質
29	59		628	軒丸瓦	2						29.6		III			2.5Y8/2灰白色 土師質
30	59	81	794	軒丸瓦	4	c	*	h	k	y	217.5		III	築地外側溝4区		2.5Y8/1灰白色 土師質
31	59	79	795	軒丸瓦	4	a	○	m	s	n	148.7		III	築地外側溝上面		赤褐色土師質
32	59		623	軒丸瓦	4	a	?	h	?	y	75		III-1	築地内側溝		白褐色陶質
44	62	c3/76	1	軒丸瓦	1	a					214.1	214.1	IV-4	瓦群		須恵質 堤状突帯
45	62	76	130	軒丸瓦	1	a					174.1		IV-3	瓦群		10YR8/3浅黄橙色土師質
46	62	76	131	軒丸瓦	1	a					162		IV	盛土攪乱重機掘削		5Y5/1灰色瓦質 砂大 堤状突帯
47	62		37	軒丸瓦	1	a					82		IV-5中央	築地検出	東サブトレ	須恵質 堤状突帯
48	62		34	軒丸瓦	1	a					127.6		IV-5	北からの落ち		5Y8/1灰白色硬質 砂大きい
49	63	76	17	軒丸瓦	1	b					163		IV-3	瓦群		10YR8/2灰白色土師質 裏中膨
50	63	76	24	軒丸瓦	1	b					108.1		IV	盛土攪乱重機掘削		2.5Y8/2灰白色瓦質 裏やや中膨
51	63		133	軒丸瓦	1	b					101.4		IV-3	瓦群北		7.5Y8/1灰白色土師質 砂多し
52	63		134	軒丸瓦	1						69.5		IV-5	北からの落ち		2.5Y8/1灰白色土師質 堤状突帯
53	63		148	軒丸瓦	1						95.7		IV-5	瓦群北		5Y8/1灰白色瓦質
54	64		154	軒丸瓦	2	a					133.5		IV-2北	築地検出	瓦群最上層	N4/灰色瓦質
55	64	77	156	軒丸瓦	2	a					109.5		IV-4	瓦群下	下	5Y8/2灰白色瓦質
56	64		153	軒丸瓦	2	a					80.4		IV-3	瓦群		2.5Y8/2灰白色 土師質
57	64	c3/77	9	軒丸瓦	2	b					231.5	231.5	IV-5	北からの落ち		須恵質 堤状突帯
58	65	77	21	軒丸瓦	2	b					220.5		IV-3	瓦群		10YR8/1灰白色土師質
59	65	77	151	軒丸瓦	2	b					102.9		IV	盛土攪乱重機掘削		5Y5/1灰色硬質 堤状突帯状
60	65	77	152	軒丸瓦	2						198.5		IV-4	北からの落ち		2.5Y8/2灰白色土師質
61	65		155	軒丸瓦	2	a					74.4		IV-5	白褐色土師質		白褐色土師質
62	66	78	5	軒丸瓦	3					y	161.1		IV-3	北からの落ち	下層	N5/灰色瓦質 柳型
63	66	78	44	軒丸瓦	3						79.8		IV-2	下層土坑		10YR4/1褐色土師質 小砂多し
64	66	78	190	軒丸瓦	3						117.5	180.6	IV-2	瓦群北		10YR6/3にぶい黄橙色土師質小砂含み緻密
65	66		191	軒丸瓦	3						28.8		IV-2	瓦群		須恵質 砂含む
66	67	79	2	軒丸瓦	4	a	○	m	s	n	274.4	274.4	IV-2南	築地検出	瓦群最上層	7.5YR8/6浅黄橙色土師質 裏厚い
67	67		20	軒丸瓦	4	a	○	m	s	n	229.6		IV-3	瓦群		2.5Y7/2灰黄色土師質
68	67		93	軒丸瓦	4	a	○	m	s	n	232.6		IV-3	瓦群		5Y8/2灰白色土師質
69	67	79	26	軒丸瓦	4	a	○	m	s	n	143.2		IV-3,4間アゼ	瓦群(下段基壇上)	第1層	2.5Y8/2灰白色土師質
70	67	79	229	軒丸瓦	4	○	m	s	?		113.6		IV-5	北からの落ち		2.5Y8/1灰白色土師質
71	67		10	軒丸瓦	4	a	○	m	s	n	193.2		IV-3,4間アゼ	北からの落ち	3層	7.5YR8/4浅黄橙色土師質
72	68		94	軒丸瓦	4	a	○	m	s	n	188		IV-5	北からの落ち		7.5Y7/3にぶい橙色土師質
73	68		92	軒丸瓦	4	a	○	m	s	n	166.5		IV-5	瓦群北		2.5Y7/3浅黄色土師質
74	68		19	軒丸瓦	4	a	○	m	s	n	165.6		IV-3	瓦群		7.5YR8/3浅黄橙色土師質
75	68		224	軒丸瓦	4	a	○	m	s	n	136.9		IV-2	2,3間のセクション北	下層 土坑1	7.5Y8/1灰白色土師質
76	68	79	14	軒丸瓦	4	a	○	m	s	n	167.9		IV-3	築地検出	瓦群最上層	10YR8/3浅黄橙色土師質
77	68	79	95	軒丸瓦	4	a	○	m	s	n	143.5		IV-4	瓦群北		2.5Y8/2灰白色土師質
78	69	80	28	軒丸瓦	4	b	*	h	k	n	199.6		IV-4	瓦群		2.5Y8/2灰白色土師質
79	69		83	軒丸瓦	4	b	*	h	k	n	144.6		IV-3	北からの落ち		2.5Y8/3淡黄色土師質
80	69	80	84	軒丸瓦	4	b	*	h	k	n	154		IV-3	瓦群		2.5Y8/2灰白色土師質
81	69	80	4	軒丸瓦	4	b	*	m	k	n	192.8		IV-2南	築地検出	瓦群最上層	2.5Y6/1黄灰色土師質
82	69	80	82	軒丸瓦	4	b	*	h	k	n	185.9		IV-3	北からの落ち		2.5Y8/2灰白色土師質
83	69	80	85	軒丸瓦	4	b	*	h	k	n	158.5		IV-5	瓦群東南		2.5Y8/2灰白色土師質 歪
84	70	81	25	軒丸瓦	4	c	*	h	k	y	205.6	205.6	IV-3	瓦群		10YR8/2灰白色陶質
85	70	81	23	軒丸瓦	4	c	*	h	k	y	194.7		IV-3,4	基壇スノ		淡橙褐色陶質
86	70	81	22	軒丸瓦	4	c	*	h	k	y	195.2		IV-4 3,4間アゼ	瓦群		2.5Y8/2灰白色土師質
87	70	82	36	軒丸瓦	4	c	*	h	k	y	152.9		IV-5	瓦群東南		2.5Y8/1灰白色土師質
88	71	82	33	軒丸瓦	4	c	*	h	?	y	197.2	213	IV	Pit-4131		2.5Y8/2灰白色土師質 砂多し
89	71	c3/82	3	軒丸瓦	4	c	*	h	k	y	239.7	239.7	IV	Pit-4132		2.5Y8/2灰白色硬質
90	71	83	27	軒丸瓦	4	c	*	h	k	y	124.3		IV-3,4間アゼ	瓦群(下段基壇上)	第1層	2.5Y8/2灰白色硬質
91	71	83	35	軒丸瓦	4	c	*	h	k	y	177.3		IV-5	北からの落ち		2.5Y8/2灰白色硬質
92	72	83	11	軒丸瓦	4	c	*	h	k	y	129.5		IV-5	北からの落ち		2.5Y8/3浅黄色陶質 砂粒
93	72	83	12	軒丸瓦	4	c	*	h	k	y	125.3		IV-3	北からの落ち		褐色陶質
94	72	84	18	軒丸瓦	4	c	*	h	k	y	160		IV-4	瓦群		須恵質
95	72	84	74	軒丸瓦	4	c	*	h	k	y	196.4		IV-4	瓦群		2.5Y8/2灰白色硬質
96	73	84	39	軒丸瓦	4	*	h	?	y		136.8		IV-5	北からの落ち		2.5Y8/2灰白色硬質
97	73	84	15	軒丸瓦	4	c	*	h	k	y	111.8		IV-3,4間アゼ	北からの落ち	第3層	7.5YR8/8黄橙色土師質
98	73	84	40	軒丸瓦	4	c	*	h	k	y	140.7		IV-3	瓦群		2.5Y8/2灰白色硬質
99	73	84	106	軒丸瓦	4	c	*	h	k	y	136.5		IV-2	下層 土坑		須恵質
100	74		87	軒丸瓦	4	?	m	k	y		177.4		IV区	瓦群,下層,北から		白褐色土師質 行基丸瓦
101	74		72	軒丸瓦	4	d	*	m	k	y	227.8	239.5	IV-3	北からの落ち	下層	2.5Y8/2灰白色土師質
102	74	85	31	軒丸瓦	4	d	*	m	k	y	241.3		IV-5	北からの落ち		5YR7/4にぶい橙色土師質
103	75		75	軒丸瓦	4	d	*	m	k	y	200		IV-3	瓦群		2.5Y8/2灰白色土師質

表2-2 軒丸瓦出土一覧

報告No.	図版	写真	採本No.	種別	KNM	細分	中房	周縁	吻型	胎范	瓦当面積	瓦面面積	出土地区	出土遺構	出土層位	備考
104	75		8	軒丸瓦	4	d	*	m	k	y	158.1		IV-2,3間アゼ	北からの落ち	3層	2.5Y8/1灰白色土師質
105	75		32	軒丸瓦	4	d	*	m	s	y	155.2		IV-5	瓦群東南		2.5Y8/1灰白色瓦質
106	75	85	38	軒丸瓦	4	d	*	m	k	y	126.5		IV-5	瓦群		2.5Y8/2灰白色土師質
107	75		13	軒丸瓦	4		*	m	?	y	163		IV-5中央	築地検出	東サブトレ	2.5Y8/2灰白色土師質
108	75		16	軒丸瓦	4		*	m	?	y	194.3		IV-5	基壇東落ち	下層	2.5Y8/1灰白色瓦質
109	76	85	77	軒丸瓦	4		*	h	k	?	151		IV-5	瓦群東南		2.5Y8/2灰白色土師質
110	76	85	76	軒丸瓦	4		*	h	k	?	147.5		IV-5	北からの落ち		5Y8/2灰白色陶質 砂含む
111	76		79	軒丸瓦	4		*	h	k	?	157		IV-3	瓦群		2.5Y8/1灰白色土師質
112	76	85	78	軒丸瓦	4		*	h	k	?	161		IV-4	瓦群		2.5Y8/2灰白色土師質
113	76		30	軒丸瓦	4		*	?	?	y	190.7		IV-5	瓦群		2.5Y8/1灰白色土師質
114	77	86	6	軒丸瓦	4	e	○	m	k	y	255.5	255.5	IV-3	北からの落ち		2.5Y8/2灰白色土師質
115	77		257	軒丸瓦	4	e	○	m	?	y	113		IV-3,4間アゼ	瓦群北	第3層	5YR8/4淡橙色土師質 薄い
116	77	86	7	軒丸瓦	4		*	?	?	n	184		IV-3,4間アゼ	北からの落ち	3層	外縁ナシ 10YR8/2灰白色土師質
117	77	86	86	軒丸瓦	4		*	?	?	n	136		IV-3	北からの落ち		外縁ナシ 2.5Y8/3淡橙色土師質
			29	軒丸瓦	4		*	h	k	?	170.1		IV-3,4間アゼ	瓦群北	第4層(赤色層)	白褐色土師質
			73	軒丸瓦	4		?	?	?	y	39.8		IV-5	瓦群東		白褐色硬質
			80	軒丸瓦	4		*	m	?	?	82.4		IV東半分	包含層,上層,人力		白褐色硬質
			81	軒丸瓦	4	c	*	h	k	y	121.3		IV-3	北からの落ち		白褐色土師質
			88	軒丸瓦	4		?	m	k	y	59.7		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			89	軒丸瓦	4		?	m	?	y	97.7		IV-3	北からの落ち		白褐色土師質
			90	軒丸瓦	4	c	*	h	k	y	104.7		IV-5	北からの落ち		須恵質
			91	軒丸瓦	4		*	h	?	y	71.4		IV-3,4間アゼ	北からの落ち	第3層	須恵質
			96	軒丸瓦	4		?	m	?	?	24.1		IV-4,5間アゼ	瓦群北	4層	赤褐色土師質
			97	軒丸瓦	4		?	m	?	?	17.8		IV-5	北からの落ち		赤褐色土師質
			98	軒丸瓦	4		?	m	s	?	28.5		IV-2北	築地検出	瓦群最上層	赤褐色土師質
			99	軒丸瓦	4		?	m	s	?	52.5		IV-3	瓦群		赤褐色土師質
			100	軒丸瓦	4		?	m	s	?	52.2		IV-5	瓦群北		赤褐色土師質
			101	軒丸瓦	4		?	m	s	n	34.8		IV-5	瓦群北		赤褐色土師質
			102	軒丸瓦	4		?	m	?	?	22.7		IV-5	瓦群北	下層	赤褐色土師質
			103	軒丸瓦	4		?	m	?	?	25.4		IV-2	下層 土坑		白褐色土師質
			104	軒丸瓦	4		?	m	?	?	21.6		IV-2,3間南	瓦群	第1層	赤褐色土師質
			105	軒丸瓦	4		*	h	k	?	40		IV-3	瓦群北		白褐色硬質
			107	軒丸瓦	4		*	h	k	?	83.4		IV-3,4間アゼ	瓦群北	2層	須恵質
			108	軒丸瓦	4		?	h	k	?	27.9		Ⅲ	Pit-4160		白褐色土師質
			109	軒丸瓦	4		?	h	k	y	40.9		IV-3	瓦群		須恵質
			110	軒丸瓦	4		*	h	k	?	54.7		IV-4,5間アゼ		第3層 黒色土	白褐色土師質
			111	軒丸瓦	4		?	h	k	?	95.1		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			112	軒丸瓦	4		?	m	k	?	53.3		IV-4	瓦群		白褐色土師質
			113	軒丸瓦	4		?	m	k	?	71		IV-5南	南サブトレ		白褐色土師質
			114	軒丸瓦	4		?	h	k	?	33.9		IV-3,4間アゼ	北からの落ち	第3層	白褐色土師質
			115	軒丸瓦	4		?	h	k	?	17.9		IV-5北	築地検出	東サブトレ	白褐色土師質
			116	軒丸瓦	4		?	m	k	?	24.5		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			117	軒丸瓦	4		?	m	?	?	21.7		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			118	軒丸瓦	4		?	h	k	?	18.6		IV-3,4間アゼ	瓦群北	第2層	白褐色土師質
			119	軒丸瓦	4		*	h	k	?	76.1		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			120	軒丸瓦	4		*	h	k	?	97.2		IV-5	瓦群東		白褐色硬質
			121	軒丸瓦	4		?	h	k	?	39.4		IV-3	瓦群		須恵質
			122	軒丸瓦	4		?	h	k	?	22.8		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			123	軒丸瓦	4		?	h	k	?	15.5		IV-2南	瓦群		白褐色硬質
			124	軒丸瓦	4		?	h	k	?	58.3		IV-5	瓦群		須恵質
			125	軒丸瓦	4		?	m	k	?	68.3		IV-3	北からの落ち	下層	白褐色土師質
			126	軒丸瓦	4		?	h	k	?	49.2		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			127	軒丸瓦	4		?	m	k	?	53.6		IV	トレンチ1		赤褐色土師質
			128	軒丸瓦	4		?	h	?	?	30.3		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			129	軒丸瓦	4		?	m	k	y	34.2		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			135	軒丸瓦	1						15		IV-1南	築地検出	瓦群最上層	須恵質
			137	軒丸瓦	1						14.1		IV-2	瓦群		白褐色硬質
			138	軒丸瓦	1						138		IV-2,3間アゼ	瓦群(下段基壇上)	第1層	赤褐色土師質
			139	軒丸瓦	1						21.9		IV-5	北からの落ち		瓦質
			140	軒丸瓦	1						9.1		IV-1	人力	10YR3/2黒上面	瓦質
			141	軒丸瓦	1						14.9		IV区	包含層 上面人力		瓦質
			142	軒丸瓦	1						11.9		IV-2	瓦群		灰褐色硬質
			143	軒丸瓦	1						16.2		IV-3	瓦群北		白褐色土師質
			144	軒丸瓦	1						43.9		IV-5北	築地検出	東サブトレ	瓦質
			145	軒丸瓦	1						24.9		IV-5北端	落ち込み地山上		瓦質
			146	軒丸瓦	1						31.8		IV-5	北からの落ち		瓦質
			147	軒丸瓦	1	b					57.8		IV-4,5間アゼ	北からの落ち	5層	瓦質
			149	軒丸瓦	1						13.3		IV-2	瓦群		瓦質
			150	軒丸瓦	1						21.2		IV-5南	築地検出	瓦群最上層	須恵質
			157	軒丸瓦	2						10.6		IV-3	瓦群北		白褐色土師質

表2-3 軒丸瓦出土一覽

報告No.	図版	写真	布本No.	種別	KNM	細分	中房	周縁	脚型	銘傷	瓦当商標	完形商標	出土地区	出土遺構	出土層位	備考
			158	軒丸瓦	2						24.5		IV-3	北からの落ち		白褐色陶質
			159	軒丸瓦	2						60.2		IV-3	瓦群北		白褐色陶質 堤状突帯
			160	軒丸瓦	2						33.3		IV-3	北からの落ち		瓦質
			161	軒丸瓦	2						20		IV-5	瓦群北		褐色土師質
			162	軒丸瓦	2						3.1		IV-2.3間アゼ	瓦群(下段基壇上)	第1層	白褐色土師質
			163	軒丸瓦	2						26.3		IV-2南	築地検出	瓦群最上層	白褐色土師質
			164	軒丸瓦	2						54.5		IV-4	瓦群下	下層	白褐色土師質
			165	軒丸瓦	2						11		IV-5	北からの落ち		瓦質
			166	軒丸瓦	2						7.1		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			167	軒丸瓦	2						12.6		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			168	軒丸瓦	2						14		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			169	軒丸瓦	2						17		IV-5	瓦群		褐色土師質
			170	軒丸瓦	2						25.7		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			171	軒丸瓦	2						6		IV-1の内東			白褐色土師質
			172	軒丸瓦	2						23.4		IV-5	北からの落ち		瓦質
			173	軒丸瓦	2						6.3		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			174	軒丸瓦	2						9.5		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			175	軒丸瓦	2						11.3		IV区	土坑-403		白褐色土師質
			176	軒丸瓦	2						18.2		IV-4	瓦群		白褐色硬質
			177	軒丸瓦	2						10.3		III	Pit-3194		薄赤褐色土師質
			178	軒丸瓦	2						12.3		IV-4.5間アゼ	土坑-403		白褐色土師質
			179	軒丸瓦	1						8.3		I	SX101		白褐色土師質
			180	軒丸瓦	2						14.6		IV	トレンチ1		白褐色土師質
			181	軒丸瓦	2						2.7					白褐色土師質
			182	軒丸瓦	2						4.3		IV-4	北からの落ち		白褐色土師質
			183	軒丸瓦	2						7		IV-3	北からの落ち		白褐色土師質
			184	軒丸瓦	2						6.3		IV-5	北からの落ち		褐色土師質
			185	軒丸瓦	2						19.4		IV-3	北からの落ち		褐色土師質
			186	軒丸瓦	2						11.1		IV区	重機		白褐色土師質
			187	軒丸瓦	2						9.4		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			188	軒丸瓦	2						13.2		IV-5	瓦群東		白褐色土師質
			189	軒丸瓦	2						7.8		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			193	軒丸瓦	4		?	h	k	?	23.1		IV-3	瓦群		白褐色硬質
			194	軒丸瓦	4		?	?	?	?	11.7		IV-5	瓦群東南	黒色土	白褐色硬質
			195	軒丸瓦	4		?	?	?	?	11.6		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			196	軒丸瓦	4		?	h	?	?	6.2		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			197	軒丸瓦	4		?	?	?	y	19.1		IV区	包含層人力		赤褐色土師質
			198	軒丸瓦	4		?	h	?	?	13.4		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			199	軒丸瓦	4		?	m	?	?	22.3		IV-4	瓦群		白褐色土師質
			200	軒丸瓦	4		?	?	?	?	10.3		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			201	軒丸瓦	4		?	h	k	?	12.4		IV-5南	築地検出	瓦群最上層	白褐色土師質
			202	軒丸瓦	4		?	?	?	?	9.8		IV-4北	築地検出	瓦群最上層	白褐色土師質
			203	軒丸瓦	4		?	m	?	?	15.6		IV-2北	築地検出	瓦群最上層	白褐色土師質
			204	軒丸瓦	4		?	m	?	?	14		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			205	軒丸瓦	4		?	?	?	?	10.5		IV-5	基壇東落ち		白褐色土師質
			206	軒丸瓦	4		?	?	?	n	27.1		IV-3	瓦群北		白褐色土師質
			207	軒丸瓦	4		?	?	?	?	21.4		IV-3	北からの落ち		白褐色土師質
			208	軒丸瓦	4		?	?	?	?	8.7		IV区	人力	10YR3/2黒上面	白褐色土師質
			209	軒丸瓦	4		*	?	?	?	26		IV-4.5間アゼ	北からの落ち	5層	白褐色土師質
			210	軒丸瓦	4		?	h	?	y	23.2		IV-3.4間アゼ	北からの落ち	第3層	白褐色土師質
			211	軒丸瓦	4		?	m	?	?	21.3		IV-5	瓦群東南	黒色土	白褐色土師質
			212	軒丸瓦	4		?	?	?	n	19.1		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			213	軒丸瓦	4		?	m	?	?	27.3		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			214	軒丸瓦	4		?	h	?	?	19.5		IV-2南	築地検出	瓦群最上層	白褐色土師質
			215	軒丸瓦	4		?	m	?	?	18.5		IV-5北	築地検出	瓦群最上層	白褐色土師質
			216	軒丸瓦	4		?	m	k	?	43.6		IV-3	瓦群北		白褐色土師質
			217	軒丸瓦	4		?	h	k	?	21.1		IV-5	瓦群東		白褐色土師質
			218	軒丸瓦	4		?	m	?	?	39.7		IV-3.4間アゼ	瓦群北	4層赤色層以下	白褐色土師質
			219	軒丸瓦	4		?	m	?	?	13.8		IV-3	北からの落ち		白褐色土師質
			220	軒丸瓦	4		?	m	?	?	26.6		IV-3.4間アゼ	瓦群北	第2層	白褐色土師質
			221	軒丸瓦	4		?	h	?	?	10.4		IV区	包含層人力掘削		白褐色土師質
			222	軒丸瓦	4		*	?	?	?	14.4		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			223	軒丸瓦	4		?	?	?	?	13.3		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			225	軒丸瓦	4		?	?	?	?	12.4		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			226	軒丸瓦	4		*	h	k	?	61.3		IV-3.4間アゼ	北からの落ち	第3層	白褐色土師質
			227	軒丸瓦	4		?	?	?	?	18.1		IV-2	瓦群		白褐色土師質
			228	軒丸瓦	4		○	?	?	?	89.7		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			230	軒丸瓦	4		?	?	?	y	9.6		IV-4.5間アゼ	瓦群北	4層	白褐色土師質
			231	軒丸瓦	4		?	h	?	?	8.1		IV-5区	人力		白褐色土師質
			232	軒丸瓦	4		?	?	?	?	5.9		IV-4	瓦群下		白褐色土師質

表2-4 軒丸瓦出土一覧

報告No.	図版	写真	拓本No.	種別	KNM	細分	中房	周縁	柳型	范傷	瓦当面積	発形面積	出土地区	出土遺構	出土層位	備考
			233	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	9.1		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			234	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	6.7		IV-3	北からの落ち		白褐色土師質
			235	軒丸瓦	4	○	m	s	y		116.9		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			236	軒丸瓦	4	○	?	?	?	?	44.8		IV-3、4間アゼ	北からの落ち	第3層	白褐色土師質
			237	軒丸瓦	4	?	m	?	?	?	6.2		IV区	包含層 人力	10YR3/2黒上面	赤褐色土師質
			238	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	18.5		IV-5	北からの落ち		赤褐色土師質
			239	軒丸瓦	4	*	?	?	?	?	53.3		IV-5北	北からの落ち		白褐色土師質
			240	軒丸瓦	4	*	m	?	y		105		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			241	軒丸瓦	4	○	m	s	?	?	64		IV-5	瓦群北	下層	白褐色土師質
			242	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	7.4		IV-3	北からの落ち	下層	白褐色土師質
			243	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	15		IV-2	下層土坑		白褐色土師質
			244	軒丸瓦	4	?	m	s	n		86.4		IV-3、4間アゼ	北からの落ち	第3層	白褐色土師質
			245	軒丸瓦	4	○	m	s	?	?	57.1		IV-2	2、3間のセクション北	下層 土坑401	赤褐色土師質
			246	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	11.5		IV-5	瓦群北		白褐色土師質
			247	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	8		IV-5	北からの落ち		赤褐色土師質
			248	軒丸瓦	4	○	m	s	?	?	97.2		IV-5	基壇東への落ちアゼ	黒色土	赤褐色土師質
			249	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	18.7		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			250	軒丸瓦	4	*	m	?	?	?	105.8		IV-3、4間アゼ	瓦群(基壇スソ)	3層赤色以下	白褐色土師質
			251	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	9		IV区	包含層	10YR3/2黒上面	白褐色土師質
			252	軒丸瓦	4	?	m	?	?	?	19.6		IV-3区外	包含層 人力	1面下げ	赤褐色土師質
			253	軒丸瓦	4	○	?	?	?	?	85.3		IV-3	瓦群		赤褐色土師質
			254	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	2.1		IV-3	北からの落ち		赤褐色土師質
			255	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	15.3		IV-3	瓦群北		赤褐色土師質
			256	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	1.8					赤褐色土師質
			258	軒丸瓦	4	?	m	s	?	?	59.9		IV-4	瓦群		赤褐色土師質
			259	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	20.4		IV-3	瓦群		赤褐色土師質
			260	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	3.5		IV-5	瓦群北		白褐色土師質
			261	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	5		IV-5	瓦群東		白褐色土師質
			262	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	11.8		IV-5	北からの落ち 南端		白褐色土師質
			263	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	5		IV-3	北からの落ち		白褐色土師質
			264	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	4.2		IV-3	瓦群北		白褐色土師質
			265	軒丸瓦	4	?	m	?	?	?	6.7		IV-3	築地検出	瓦群	白褐色土師質
			266	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	2.5		IV-3、4間アゼ	瓦群(基壇スソ)	3層赤色以下	薄赤褐色土師質
			267	軒丸瓦	4	?	h	k	?	?	9.9		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			268	軒丸瓦	4	?	h	?	n		44.8		IV-2	下層 土坑		白褐色土師質
			269	軒丸瓦	4	?	h	?	?	?	9.7		Ⅲ	Pit-3215		白褐色土師質
			270	軒丸瓦	4	?	h	?	?	?	5.4		IV-3	瓦群北		白褐色土師質
			271	軒丸瓦	4	?	h	?	?	?	6.7		IV-1、2区	セクション北(灰色)		白褐色土師質
			272	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	10.4		IV-5	瓦群東南		白褐色土師質
			273	軒丸瓦	4	?	m	?	?	?	10.8		IV-3	北からの落ち	下層	白褐色土師質
			274	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	5.3		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			275	軒丸瓦	4	?	h	?	?	?	11		IV-3	北からの落ち		白褐色土師質
			276	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	5		IV-5	瓦群北		赤褐色土師質
			277	軒丸瓦	4	?	m	?	?	?	15.3		IV-5	基壇東落ち		白褐色土師質
			278	軒丸瓦	4	?	h	?	?	?	24.5		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			279	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	6.4		IV区	人力	10YR3/2黒上面	白褐色土師質
			280	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	4		IV区東	包含層人力		白褐色土師質
			281	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	6.3		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			282	軒丸瓦	4	?	h	?	?	?	5.5		IV			白褐色土師質
			283	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	14.4		IV-4、5間アゼ	北からの落ち	5層	白褐色土師質
			284	軒丸瓦	4	?	m	?	?	?	22.7		IV-4	瓦群下		白褐色土師質
			285	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	11.2		IV-4	瓦群		白褐色土師質
			286	軒丸瓦	4	?	h	?	?	?	8.8		IV-5	瓦群北	下層	赤褐色土師質
			287	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	19.9		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			288	軒丸瓦	4	?	m	s	?	?	31.2		IV-3	瓦群北		赤褐色土師質
			289	軒丸瓦	4	?	h	?	?	?	16.1		IV-4	瓦群		白褐色土師質
			290	軒丸瓦	4	?	m	?	?	?	18.4		IV-5	瓦群北		白褐色土師質
			291	軒丸瓦	4	?	h	?	?	?	16.3		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			292	軒丸瓦	4	?	h	?	?	?	11.7		IV-3、4間アゼ	瓦群北	第4層(赤色層)	白褐色土師質
			293	軒丸瓦	4	?	h	?	?	?	12.5		IV-3	瓦群北		白褐色土師質
			294	軒丸瓦	4	?	h	?	?	?	14.2		IV-4	瓦群北	下層	白褐色土師質
			295	軒丸瓦	4	?	h	?	?	?	11.5		IV-5	瓦群東	黒色土	白褐色土師質
			296	軒丸瓦	4	?	h	?	?	?	30.2		IV-4	瓦群		灰色陶質
			297	軒丸瓦	4	?	m	?	?	?	5.6		IV-5	基壇東への落ちアゼ	赤色土以下	赤褐色土師質
			298	軒丸瓦	4	?	?	?	?	?	3.6		IV-3、4間アゼ	瓦群(下段基壇上)	第1層	赤褐色土師質
			299	軒丸瓦	4	?	m	?	?	?	19		IV-3	築地検出	瓦群最上層	白褐色土師質
			300	軒丸瓦	4	?	h	?	?	?	13.3		IV-4	北からの落ち	下層	白褐色陶質
			301	軒丸瓦	4	*	?	?	?	?	35.2		IV-5北	北からの落ち		白褐色土師質
			302	軒丸瓦	4	?	h	?	?	?	9.6		Ⅲ	Pit-302		白褐色土師質
			303	軒丸瓦	4	*	m	?	?	?	47.8		IV-4	瓦群		白褐色土師質

表2-5 軒丸瓦出土一覧

報告No.	図版	写真	拓本No.	種別	KNM	細分	中房	周縁	模型	冠高	瓦当面積	外形面積	出土地区	出土遺構	出土層位	備考
			304	軒丸瓦	4	?	?	?	?	17.4			IV-3	築地検出	瓦群最上層	白褐色土師質
			305	軒丸瓦	4	?	m	?	?	10.7			IV-5	北からの落ち		須志質
			306	軒丸瓦	4	?	?	?	?	7.3			IV-5	瓦群東		白褐色土師質
			307	軒丸瓦	4	?	h	?	n	64.2			IV-5北	築地検出	東サブトレ	白褐色土師質
			308	軒丸瓦	4	?	m	?	?	37.6			IV-5	北からの落ち		須恵質
			309	軒丸瓦	4	?	?	?	?	8			IV-3,4間アゼ	北からの落ち		白褐色土師質
			310	軒丸瓦	4	?	h	?	?	63.1			IV-3	瓦群		灰色陶質
			311	軒丸瓦	4	?	?	?	?	17.5			IV-5	瓦群北		白褐色土師質
			312	軒丸瓦	4	*	?	?	?	21.6			IV-3	瓦群		白褐色土師質
			313	軒丸瓦	4	?	h	?	?	16.2			IV-3	北からの落ち		白褐色土師質
			314	軒丸瓦	4	?	m	?	?	35			IV-5	瓦群北		白褐色土師質 613と接合
			315	軒丸瓦	4	?	?	?	?	7			IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			316	軒丸瓦	4	?	h	k	?	13			IV-3区外	包含層 人力	1面下げ	白褐色土師質
			317	軒丸瓦	4	*	?	?	?	79.3			IV-2	瓦群		白褐色土師質
			318	軒丸瓦	4	*	?	?	?	26.1			IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			319	軒丸瓦	4	?	?	?	?	5.7			IV-4	瓦群		白褐色硬質
			320	軒丸瓦	4	*	h	?	n	115.9			IV-2北	築地検出	瓦群最上層	白褐色土師質
			321	軒丸瓦	4	○	m	?	n	83.2			IV-5	瓦群北		白褐色土師質
			322	軒丸瓦	4	*	h	k	?	118.4			IV-5	瓦群北	下層	白褐色土師質
			323	軒丸瓦	4	?	h	?	?	6			IV-3,4間アゼ	瓦群北	第3層	白褐色土師質
			324	軒丸瓦	4	?	?	?	?	6			IV-4	瓦群		白褐色土師質
			325	軒丸瓦	4	*	?	?	?	12.4			Ⅲ	北側上面		白褐色土師質
			326	軒丸瓦	4	?	?	?	?	11.3			IV区東	暗渠		白褐色土師質
			327	軒丸瓦	4	?	?	?	?	36.6			IV-4	瓦群		白褐色硬質
			328	軒丸瓦	4	?	h	k	?	24						白褐色土師質
			329	軒丸瓦	4	*	h	?	n	57.7			IV-3	瓦群		白褐色土師質
			330	軒丸瓦	4	?	h	?	?	49.6			IV-5	北からの落ち		白褐色硬質
			331	軒丸瓦	4	*	h	?	?	64.5			IV-2	2,3間のセクション北	下層 土坑401	白褐色土師質
			332	軒丸瓦	4	?	h	?	?	13.2			IV-3	築地検出	瓦群最上層	白褐色土師質
			333	軒丸瓦	4	*	?	?	?	10.5			IV-3	瓦群		白褐色土師質
			334	軒丸瓦	4	?	?	?	?	10.6			IV-3	瓦群		白褐色土師質
			335	軒丸瓦	4	*	?	?	?	2.7						白褐色土師質
			336	軒丸瓦	4	?	?	?	?	4.1			IV-3,4間アゼ	瓦群北	4層赤色層以下	白褐色土師質
			337	軒丸瓦	4	*	?	?	?	13.1			IV	Pit-4122		白褐色土師質
			338	軒丸瓦	4	*	?	?	?	16.6			IV-3	瓦群	下層	白褐色土師質
			339	軒丸瓦	4	?	?	?	?	11.1			IV-5	基壇東への落ちアゼ		白褐色土師質
			340	軒丸瓦	4	?	?	?	?	22.1			IV-3	築地検出	瓦群最上層	白褐色土師質
			341	軒丸瓦	4	*	h	?	y	94.3			IV-2	瓦群		白褐色硬質
			342	軒丸瓦	4	?	?	?	?	16.8			IV-4	瓦群		白褐色土師質
			343	軒丸瓦	4	*	m	k	?	87.6			IV-5南	南サブトレ		白褐色硬質
			344	軒丸瓦	4	*	h	?	?	51.1			IV-5	瓦群北		褐色硬質
			345	軒丸瓦	4	?	h	?	?	20.8			IV-4	瓦群		白褐色土師質
			346	軒丸瓦	4	?	?	?	?	19.8			IV-5	基壇東落ち 南	下層(明褐色)	白褐色土師質
			347	軒丸瓦	4	*	?	?	?	51.5			IV-5	瓦群東		白褐色土師質
			348	軒丸瓦	4	?	m	?	?	26.6			IV-3	築地検出	瓦群最上層	白褐色土師質
			349	軒丸瓦	4	?	h	?	?	46.8			IV-5	瓦群北		白褐色土師質
			350	軒丸瓦	4	?	m	?	?	49.7			IV-3	北からの落ち	下層	白褐色土師質
			351	軒丸瓦	4	?	h	k	?	18.1			IV-3	瓦群北		白褐色土師質
			352	軒丸瓦	4	?	?	?	y	15.7			IV-3	瓦群		白褐色土師質
			353	軒丸瓦	4	?	?	?	?	10.7			IV	人力掘削		白褐色土師質
			354	軒丸瓦	4	?	m	?	?	5.4			IV-3	瓦群北		白褐色土師質
			355	軒丸瓦	4	?	h	k	?	8.3			IV-4北	北からの落ち		白褐色土師質
			356	軒丸瓦	4	?	h	?	?	7.5			IV-5	瓦群東南		白褐色土師質
			357	軒丸瓦	4	?	h	?	?	19.5						白褐色土師質
			358	軒丸瓦	4	?	?	?	?	15.7			IV-3,4間アゼ	瓦群北	第4層(赤色層)	白褐色土師質
			359	軒丸瓦	4	?	h	?	n	51.6			IV-4	瓦群		白褐色土師質
			360	軒丸瓦	4	?	m	?	?	40.8			IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			361	軒丸瓦	4	?	h	?	?	12.9			IV-5	瓦群北		白褐色土師質
			362	軒丸瓦	4	?	h	?	?	10.2						白褐色土師質
			363	軒丸瓦	4	?	h	?	?	28.7			IV-4	瓦群北		白褐色土師質
			364	軒丸瓦	4	?	h	k	?	42.9			IV-3	瓦群北		白褐色土師質
			365	軒丸瓦	4	?	h	k	?	36.3			Ⅲ	Pit-3204		白褐色土師質
			584	軒丸瓦	4	*	?	?	?	34.6			Ⅲ	SB?-01		白褐色陶質
			589	軒丸瓦	4	?	m	k	?	21.9			Ⅲ	包含層	2面上層東	赤褐色硬質
			590	軒丸瓦	4	?	?	?	?	10.3			Ⅲ	SD301		白褐色土師質
			591	軒丸瓦	4	?	?	?	?	15.2			Ⅲ	包含層	2面上層	白褐色土師質
			592	軒丸瓦	4	?	?	?	?	6.1			Ⅲ	包含層	上面人力	白褐色土師質
			593	軒丸瓦	4	?	?	?	?	8.6			Ⅲ	包含層	上面人力	赤褐色土師質
			594	軒丸瓦	4	?	h	?	?	10.6			Ⅲ	包含層	2面上層	白褐色土師質
			598	軒丸瓦	4	?	?	?	?	14.6			Ⅲ	包含層	2面上層	瓦質

表2-6 軒丸瓦出土一覧

報告No.	図版	写真	标本No.	種別	KNM	細分	中房	周縁	榫型	范傷	瓦当面積	完形面積	出土地区	出土遺構	出土層位	備考
			599	軒丸瓦	1						31.6		Ⅲ	包含層	上面一段下げ	褐色土師質
			602	軒丸瓦	4	?	m	s	?		44		Ⅲ	築地内溝2区		赤褐色土師質
			607	軒丸瓦	4						24.1		Ⅲ	築地内側溝	2面検出	白褐色土師質
			612	軒丸瓦	4	?	h	k	?		31.8		Ⅲ	築地内側溝		白褐色土師質
			613	軒丸瓦	4	?	m	?	?		44		Ⅲ	瓦群		白褐色硬質 314と接合
			616	軒丸瓦	4	?	h	?	?		15.2		Ⅲ	瓦群		褐色硬質
			619	軒丸瓦	4	?	h	?	?		26.4		Ⅲ	重機		赤褐色土師質
			620	軒丸瓦	4	?	h	k	y		58.3		Ⅲ	重機		白褐色陶質
			621	軒丸瓦	1						19		Ⅲ	重機		瓦質
			625	軒丸瓦	1						11.7		Ⅲ			白褐色土師質
			627	軒丸瓦	4	?	h	?	y		17.9		Ⅲ			白褐色陶質
			629	軒丸瓦	4	*	?	?	?		63.5		Ⅲ			白褐色土師質
			632	軒丸瓦	4	?	?	?	?		22.4		Ⅲ北側溝		2面検出	白褐色土師質
			633	軒丸瓦	3						5.8		Ⅲ北側溝		2面検出	白褐色土師質
			634	軒丸瓦	4	?	?	?	?		17.3		Ⅲ-3			白褐色土師質
			635	軒丸瓦	4	?	?	?	?		15.8		Ⅲ北側	包含層 人力		白褐色土師質
			636	軒丸瓦	4	?	?	?	?		24.9		Ⅲ	包含層 人力		白褐色陶質
			638	軒丸瓦	4	?	?	?	?		16.3		Ⅲ	包含層 人力		白褐色土師質
			642	軒丸瓦	4	?	m	?	?		10.7		Ⅲ西半分	重機		赤褐色土師質
			643	軒丸瓦	4	*	?	?	?		56.9		Ⅲ	重機		白褐色土師質
			644	軒丸瓦	4	?	h	?	?		10.7		Ⅳ-5	井戸掘り方		白褐色土師質
			645	軒丸瓦	4	?	h	?	?		10.9		Ⅳ-2北	灰原		白褐色土師質
			646	軒丸瓦	1						24.5		Ⅳ-3	瓦群		瓦質
			648	軒丸瓦	4	?	h	?	?		12.2		Ⅳ-3	瓦群	下層	白褐色土師質
			649	軒丸瓦	4	?	h	?	?		9.9		Ⅳ-3,4間アゼ	瓦群北	3層	白褐色土師質
			650	軒丸瓦	4	?	?	?	?		13		Ⅳ-3	瓦群北		赤褐色土師質
			651	軒丸瓦	4	?	m	s	?		13.4		Ⅳ-3	瓦群		白褐色土師質
			652	軒丸瓦	4	?	?	?	?		4.9		Ⅳ-3	瓦群		赤褐色土師質
			653	軒丸瓦	4	?	h	?	?		13.7		Ⅳ-3	瓦群		白褐色土師質
			654	軒丸瓦	4	?	m	?	?		2.8		Ⅳ-3	瓦群		白褐色土師質
			655	軒丸瓦	1						22		Ⅳ-4	瓦群	下層	白褐色硬質
			656	軒丸瓦	4	?	m	?	?		17.9		Ⅳ-4	瓦群		瓦質
			657	軒丸瓦	4	?	h	?	?		5.9		Ⅳ-4	瓦群		赤褐色土師質
			658	軒丸瓦	4	?	h	?	?		8.6		Ⅳ-3	瓦群北		白褐色土師質
			659	軒丸瓦	4	?	h	k	?		13.2		Ⅳ-4	瓦群下		白褐色硬質
			660	軒丸瓦	4	?	?	?	?		4.3		Ⅳ-5	瓦群東南		白褐色土師質
			661	軒丸瓦	4	?	m	?	?		7.3		Ⅳ-3	瓦群		瓦質
			662	軒丸瓦	4	?	m	?	?		14.5		Ⅳ-5	瓦群北		赤褐色土師質
			663	軒丸瓦	4	?	?	?	?		9		Ⅳ-3	北からの落ち		白褐色土師質
			664	軒丸瓦	4	?	m	?	?		13.4		Ⅳ-3	北からの落ち		白褐色土師質
			665	軒丸瓦	4	?	?	?	?		17.5		Ⅳ-3	北からの落ち		白褐色土師質
			666	軒丸瓦	4	?	m	?	?		10.2		Ⅳ-3	北からの落ち		白褐色土師質
			667	軒丸瓦	4	?	h	?	?		9		Ⅳ-4	北からの落ち		赤褐色土師質
			668	軒丸瓦	4	?	h	?	?		9.1		Ⅳ-4,5間アゼ	北からの落ち		白褐色土師質
			669	軒丸瓦	4	?	h	?	?		11.4		Ⅳ-5	北からの落ち		褐色土師質
			670	軒丸瓦	4	?	m	?	?		10.5		Ⅳ-5	北からの落ち		瓦質
			671	軒丸瓦	?						17.4		Ⅳ-5	北からの落ち		瓦質
			672	軒丸瓦	4	?	h	?	?		13.7		Ⅳ-5	北からの落ち		赤褐色土師質
			673	軒丸瓦	4	?	m	?	?		15.9		Ⅳ-5	北からの落ち		瓦質
			674	軒丸瓦	1						12.3		Ⅳ-5	北からの落ち		白褐色土師質
			675	軒丸瓦	4	?	h	?	?		10.2		Ⅳ	南サブトレ		赤褐色土師質
			676	軒丸瓦	2						10		Ⅳ-5	北からの落ち		瓦質
			677	軒丸瓦	4	?	m	?	?		13.4		Ⅳ-3	北からの落ち		瓦質
			678	軒丸瓦	4	*	h	?	n		94.6		Ⅲ	築地内溝	2面検出	白褐色土師質
			796	軒丸瓦	4	?	h	k	?		20.6		Ⅲ	P3135		白褐色土師質
			797	軒丸瓦	4	?	m	?	?		24.4		Ⅲ-3	築地内溝		赤褐色土師質

KNM4小分類の凡例

写真のcはカラー図版  
 報告No.はTを省略している  
 中房 無紋○、十字刻線\*  
 周縁 丸いm、角張るh  
 榫型痕跡 ありk、なしs  
 范傷 ありy、なしn

瓦当面積単位 平方センチメートル  
 完形面積単位 平方センチメートル（復元含む）

表3-1 軒平瓦出土一覽

報告No.	図版	写真	标本No.	種別	KNH	瓦当面積	完形面積	出土地区	遺構	層位	備考	
4	52	94	50	軒平瓦		3	51.6		Ⅱ	区画溝1	2.5Y8/3淡黄色土師質 瓦当近までタキ	
5	52		49	軒平瓦		1	37.1		Ⅱ北拡張	築地外側溝	2.5Y8/2灰色硬質	
33	59		539	軒平瓦		3	50.7		Ⅲ	Pit-3212	2.5Y8/2灰白色土師質	
34	59		596	軒平瓦		1	60.6		Ⅲ	包含層北東	上面一段下げ	褐色土師質
118	78	87	367	軒平瓦		1	125.1	137.6	Ⅳ	Pit-4132	2.5Y8/3淡黄色土師質 砂含む	
119	78	87	507	軒平瓦		1	140.2	155.8	Ⅳ-3	瓦群北	2.5Y8/1灰白色土師質砂含む 風蝕痕	
120	78	87	42	軒平瓦		1	96.9		Ⅳ-5	瓦群東	朱線 白褐色 硬質	
121	79	89	510	軒平瓦		1	95.4		Ⅳ-3	瓦群	須恵質 砂含む	
122	79		493	軒平瓦		1	71.3		Ⅳ-2.3間アゼ	瓦群(下段基壇上)	第1層	須恵質
123	79		491	軒平瓦		1	123.6		Ⅳ-3	瓦群	5Y6/1灰色土師質 額に圧痕	
124	80	89	509	軒平瓦		1	121.4	140	Ⅳ-1	灰原?	2.5Y7/2灰黄色土師質 砂含む 額に沈線	
125	80	89	508	軒平瓦		1	94.6		Ⅳ-5	基壇東落ち 南	下層(明褐色)	2.5Y8/3淡黄色土師質
126	80		495	軒平瓦		1	85.9		Ⅳ-2.3間アゼ	瓦群(下段基壇上)	第1層	2.5Y8/2灰白色土師質 砂含む
127	81	c3/88	192	軒平瓦		1	195.1	198.7	Ⅳ-3	瓦群	2.5Y8/2灰白色土師質砂含む	
128	81	88	679	軒平瓦		1	126.2	126.2	Ⅳ-3	北からの落ち,瓦群	10YR8/2灰白色土師質	
129	81	88	379	軒平瓦		1	135.1		Ⅳ-3	瓦群	朱線 2.5Y8/3淡黄色土師質	
130	81		489	軒平瓦		1	63.5		Ⅳ-3	瓦群	2.5Y8/3淡黄色土師質砂含む 風蝕痕	
131	82		372	軒平瓦		1	131.2		Ⅳ-2.4間アゼ	瓦群北	4層(赤色層以下)	2.5Y8/2灰白色土師質砂含む
132	82		486	軒平瓦		1	128.5		Ⅳ-3	瓦群	5Y7/1灰白色土師質	
133	82	88	488	軒平瓦		1	112.4		Ⅳ-5	北からの落ち	須恵質	
134	82		484	軒平瓦		1	122.8		Ⅳ-4	瓦群	須恵質砂含む	
135	82	88	483	軒平瓦		1	117		Ⅳ-4	瓦群	須恵質 木目 凹面朱?	
136	83		423	軒平瓦		1	67.4		Ⅳ-5	北からの落ち	2.5Y7/2灰黄色土師質砂含む	
137	83	89	505	軒平瓦		1	37.9		Ⅳ-3	瓦群	10YR8/2灰白色土師質	
138	83		490	軒平瓦		1	48.5		Ⅳ-5	瓦群東南	2.5Y8/1灰白色土師質 額に圧痕	
139	83	89	499	軒平瓦		1	45.8		Ⅳ-5	基壇東への落ちアゼ	黒色土	2.5Y8/2灰白色土師質
140	83		407	軒平瓦		1	59.3		Ⅳ-5	瓦群東南	2.5Y8/2灰白色土師質	
141	83		404	軒平瓦		1	48		Ⅳ-3	瓦群	2.5Y8/1灰白色土師質	
142	83	88	421	軒平瓦		1	52.5		Ⅳ-5南	築地検出	瓦群最上層	須恵質
143	83		398	軒平瓦		1	40.5		Ⅳ-5	瓦群東南	2.5Y8/3淡黄色土師質	
144	83	89	373	軒平瓦		1	23.2		Ⅳ-1	灰原?	須恵質一部土師質 額に圧痕	
145	84	89	552	軒平瓦		2	61.6		Ⅳ-4	瓦群	N4/灰色土師質	
146	84		554	軒平瓦		2	9.9		Ⅳ-1	人力	10YR3/2黒の上面	2.5Y8/1灰白色土師質
147	84		553	軒平瓦		2	28.3		Ⅳ-5	北からの落ち	2.5Y8/1灰白色土師質	
148	84		555	軒平瓦		2	18.7		Ⅳ-3	人力	2.5Y8/1灰白色土師質	
149	84		556	軒平瓦		2	14.4		Ⅳ-2	瓦群	灰白色土師質	
150	84		575	軒平瓦		2	59.8		Ⅳ-5	瓦群北	灰白色土師質砂粒少ない	
151	85	90	43	軒平瓦		3	124.4	124.4	Ⅳ-3	瓦群	朱線 須恵質砂やや多し	
152	86	c3/91	551	軒平瓦		3	124.1	124.1	Ⅳ-3	瓦群	2.5Y8/2灰白色陶質	
153	87	92	550	軒平瓦		3	110	110	Ⅳ-3	瓦群	須恵質砂含む	
154	88		548	軒平瓦		3	73.1		Ⅳ-3	瓦群	2.5Y8/1灰白色土師質	
155	89	92	545	軒平瓦		3	127.8	132.2	Ⅳ-3	瓦群	朱線 5Y8/1灰白色陶質砂含む	
156	89	93	546	軒平瓦		3	98.5	102.5	Ⅳ-3	瓦群	朱線 2.5Y8/1灰白色陶質砂含む	
157	90	93	547	軒平瓦		3	116.9	123.5	Ⅳ-5	瓦群東	10YR7/2にぶい黄橙色陶質 額に圧痕	
158	90	93	549	軒平瓦		3	100.5	100.5	Ⅳ-3	瓦群北	7.5Y6/1灰色やや硬質土師質 額に圧痕	
159	91	94	41	軒平瓦		3	131.5	131.5	Ⅳ-3.4間アゼ	瓦群(下段基壇上)	2層	朱線 2.5Y8/2灰色陶質~須恵質
160	91		544	軒平瓦		3	120.8	138.3	Ⅳ-2.3間アゼ	瓦群(下段基壇上)	第1層	2.5Y8/2灰白色土師質砂粒多し
161	91		543	軒平瓦		3	86.4		Ⅳ-5	瓦群東南	7.5YR8/2灰白色土師質 風蝕痕	
162	91	94	542	軒平瓦		3	105.2	113.2	Ⅳ-3	瓦群	2.5Y8/2灰白色硬質 額に小段	
163	91	94	528	軒平瓦		3	41		Ⅳ-5	瓦群東	2.5Y8/1灰白色土師質	
164	91	94	535	軒平瓦		3	30		Ⅳ-3	瓦群	2.5Y8/1灰白色硬質	
			368	軒平瓦		1	20.1		Ⅳ-2南	築地検出	瓦群最上層	須恵質
			369	軒平瓦		1	79.7		Ⅳ-5	瓦群	赤褐色土師質	
			370	軒平瓦		1	19.5		Ⅳ-4	瓦群	褐色硬質	
			371	軒平瓦		1	14		Ⅳ-3.4間アゼ	瓦群(下段基壇上)	第1層	須恵質
			374	軒平瓦		1	24.5		Ⅳ-5	瓦群北	白褐色土師質	
			375	軒平瓦		1	28.3		Ⅳ-3	北からの落ち	下層	須恵質
			376	軒平瓦		?	14.4		Ⅳ-3	瓦群	白褐色土師質	
			377	軒平瓦		1	10.6		Ⅳ-5	北からの落ち	須恵質	
			378	軒平瓦		?	30		Ⅳ-3	瓦群北	白褐色土師質	

表3-2 軒平瓦出土一覧

報告No.	図版	写真	标本No.	種別	KNH	瓦当面積	発掘面積	出土地区	遺構	層位	備考
			380	軒平瓦	1	9.4		IV-3区内	人力		須恵質
			381	軒平瓦	1	28		IV-5	北からの落ち		褐色土師質
			382	軒平瓦	1	10		IV-5	瓦群東南		白褐色土師質
			383	軒平瓦	1	9.1		IV-4,5間アゼ	瓦群下	5層	須恵質
			384	軒平瓦	1	8		IV-4	瓦群		白褐色陶質
			385	軒平瓦	1	3.4		IV-5	北からの落ち	下層	須恵質
			386	軒平瓦	1	15.4		IV上面	包含層人力		白褐色土師質
			387	軒平瓦	1	40.9		IV-3	瓦群北		白褐色土師質
			388	軒平瓦	1	10.2		IV-5	瓦群東南		白褐色土師質
			389	軒平瓦	1	12.9		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			390	軒平瓦	1	11.7		IV-5	北からの落ち		薄赤褐色土師質
			391	軒平瓦	1	9.4		IV-5	北からの落ち		褐色土師質
			392	軒平瓦	1	7.7		IV-3	北からの落ち		白褐色土師質
			393	軒平瓦	1	61.4		IV-3	瓦群		薄赤褐色土師質
			394	軒平瓦	1	37.2		IV-3	北からの落ち		薄赤褐色土師質
			395	軒平瓦	1	24.6		IV-5	瓦群東		白褐色土師質
			396	軒平瓦	1	17.1		IV-2北	築地検出	瓦群最上層	白褐色土師質
			397	軒平瓦	1	10.3		IV-5中央	築地検出	東サブトレ	白褐色土師質
			399	軒平瓦	1	7.2		IV-4	瓦群北		薄赤褐色土師質
			400	軒平瓦	1	6.7		IV-4	瓦群下	下層	白褐色土師質
			401	軒平瓦	1	6.9		IV-3,4	基壇スソ		白褐色土師質
			402	軒平瓦	1	59.5		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			403	軒平瓦	1	34.3		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			405	軒平瓦	1	8.5		IV-4	瓦群		白褐色土師質
			406	軒平瓦	1	10.2		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			408	軒平瓦	1	9.3		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			409	軒平瓦	1	24.3		IV	包含層	10YR3/2黒の上面	薄赤褐色土師質
			410	軒平瓦	1	18.9		IV-4北	築地検出	瓦群最上層	白褐色土師質
			411	軒平瓦	1	14.6		IV-5南	築地検出	瓦群最上層	白褐色土師質
			412	軒平瓦	1	23		IV-5	北からの落ち		薄赤褐色土師質
			413	軒平瓦	1	23.1		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			414	軒平瓦	1	19.2		IV-5	北からの落ち		灰色土師質
			415	軒平瓦	1	21.9		IV-1,2区	セクション北(灰色)		白褐色土師質
			416	軒平瓦	1	14.6		IV-3	瓦群北		薄赤褐色土師質
			417	軒平瓦	1	33		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			418	軒平瓦	1	15.7		IV区	内側溝 人力	10YR3/2黒の上面	白褐色土師質
			419	軒平瓦	1	11.6		IV-5南	築地検出	瓦群最上層	白褐色土師質
			420	軒平瓦	1	53.1		IV-3	北からの落ち		白褐色土師質
			422	軒平瓦	1	16.6		IV-5	瓦群東		白褐色土師質
			424	軒平瓦	1	10.7		IV-5北	築地検出	瓦群最上層	白褐色土師質
			425	軒平瓦	1	34.3		IV-3,4間アゼ	北からの落ち		褐色土師質
			426	軒平瓦	1	10.1		IV-2北	灰原?		白褐色土師質
			427	軒平瓦	1	6.7		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			428	軒平瓦	1	59.8		IV-2北	土坑?	上面検出中	白褐色土師質
			429	軒平瓦	1	26.9		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			430	軒平瓦	1	47.7		IV-5	瓦群北		薄赤褐色土師質
			431	軒平瓦	1	33.6		IV-5	瓦群北		薄赤褐色土師質
			432	軒平瓦	1	10.6		IV-2	下層土坑		白褐色土師質
			433	軒平瓦	1	7.1		IV-2	下層土坑		須恵質
			434	軒平瓦	1	46.3		IV-5	瓦群東		白褐色土師質
			435	軒平瓦	1	21.8		IV-4	瓦群北		白褐色土師質
			436	軒平瓦	1	60.6		IV-3	瓦群北		白褐色土師質
			437	軒平瓦	1	16		IV-4,5間アゼ		第3層黒色土	白褐色土師質
			438	軒平瓦	1	14.1		IV上面	包含層人力		褐色土師質
			439	軒平瓦	1	10.6		IV-4	瓦群		褐色土師質
			440	軒平瓦	1	59		IV-2	瓦群		白褐色土師質
			441	軒平瓦	1	33.5		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			442	軒平瓦	1	52.3		IV-4	瓦群		褐色土師質
			443	軒平瓦	1	8.6		IV-4	瓦群		白褐色土師質
			444	軒平瓦	1	12.4		IV-3	瓦群		白褐色土師質

表3-3 軒平瓦出土一覧

報告No.	図版	写真	標本No.	種別	KNH	瓦当面積	完形面積	出土地区	遺構	層位	備考
			445	軒平瓦	1	3.9		IV	Pit-4172		薄赤褐色土師質
			446	軒平瓦	1	4.1		IV-5	北からの落ち 南端		薄赤褐色土師質
			447	軒平瓦	1	50.4		IV-2北	築地検出	瓦群最上層	白褐色土師質
			448	軒平瓦	1	17.9		IV-5	基壇東への落ちアゼ	黒色土	白褐色土師質
			449	軒平瓦	1	22.5		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			450	軒平瓦	1	12.8		IV-3,4間アゼ	瓦群北	第1層	白褐色土師質
			451	軒平瓦	3	18.9		IV-5	瓦群北		白褐色土師質
			452	軒平瓦	1	18.5		IV-5	瓦群北	下層	白褐色土師質
			453	軒平瓦	1	15.2		IV-5	瓦群東南		白褐色土師質
			454	軒平瓦	1	49.6		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			455	軒平瓦	1	6.7		IV区	内側溝 人力	10YR3/2黒の上面	薄赤褐色土師質
			456	軒平瓦	1	13.2		IV-3	築地検出	瓦群	白褐色土師質
			457	軒平瓦	1	10		IV-2,3間アゼ	瓦群(下段基壇上)	第1層	白褐色土師質
			458	軒平瓦	1	31.4		IV-3	北からの落ち		白褐色土師質
			459	軒平瓦	1	37.3		IV-4	瓦群		白褐色土師質
			460	軒平瓦	1	24.6		IV-5	瓦群北		白褐色土師質
			461	軒平瓦	1	12.2		IV-3	瓦群北		白褐色土師質
			462	軒平瓦	1	17.8		III	トレンチ3		薄赤褐色土師質
			463	軒平瓦	1	7.2		IV-3,4	基壇スソ		白褐色土師質
			464	軒平瓦	1	17.9		IV-4	瓦群		白褐色土師質
			465	軒平瓦	1	13.7		IV-5	瓦群東		薄赤褐色土師質
			466	軒平瓦	?	10		IV-5	瓦群東		白褐色土師質
			467	軒平瓦	1	13		IV-4	瓦群		褐色土師質
			468	軒平瓦	1	17.1		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			469	軒平瓦	1	12.1		III	Pit-3130		白褐色土師質
			470	軒平瓦	1	5.4		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			471	軒平瓦	1	9.8		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			472	軒平瓦	1	8.9		IV-2北	築地検出	瓦群最上層	白褐色土師質
			473	軒平瓦	1	9.1		IV区	包含層	10YR3/2黒の上面	白褐色土師質
			474	軒平瓦	1	22.6		IV区	包含層人力		薄赤褐色土師質
			475	軒平瓦	1	16.8		IV	トレンチ1		白褐色土師質
			476	軒平瓦	1	17.6		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			477	軒平瓦	1	17.5		IV-4	瓦群		白褐色土師質
			478	軒平瓦	1	11.4		IV			薄赤褐色土師質
			479	軒平瓦	1	50.9		IV-3,4間アゼ	瓦群(下段基壇上)	第1層	褐色土師質
			480	軒平瓦	1	8.5		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			481	軒平瓦	1	33.3		IV-2,3間アゼ	瓦群北	3層	薄赤褐色土師質
			482	軒平瓦	3	27.7		IV-3,4間アゼ		第3層	褐色土師質
			485	軒平瓦	1	19.3		IV-5	瓦群東		白褐色硬質
			492	軒平瓦	1	16.3		IV-3	瓦群		赤褐色土師質 風蝕痕
			494	軒平瓦	1	12.4		IV-2,3間アゼ	北からの落ち	3層	白褐色土師質
			496	軒平瓦	1	21.1		IV-5	瓦群東		白褐色土師質
			497	軒平瓦	1	18.5		IV-4	瓦群		薄赤褐色土師質
			498	軒平瓦	1	42.2		IV	トレンチ1		薄赤褐色土師質
			500	軒平瓦	1	69.8		IV-3	瓦群		薄赤褐色土師質
			501	軒平瓦	1	48.9		IV-3	北からの落ち		褐色土師質
			502	軒平瓦	1	42.8		IV-3	北からの落ち	下層	白褐色土師質
			503	軒平瓦	1	32.9		IV-5	瓦群北		薄赤褐色土師質
			504	軒平瓦	1	57.4		IV-5	北からの落ち		薄赤褐色土師質
			506	軒平瓦	1	42.6		IV-4	瓦群		褐色土師質
			511	軒平瓦	3	33.5		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			512	軒平瓦	3	22.7		IV-3,4間アゼ	瓦群北	第3層	白褐色土師質
			513	軒平瓦	3	32.8		IV-5	瓦群東		白褐色土師質
			514	軒平瓦	3	9.4		III北側	包含層 人力		白褐色土師質
			515	軒平瓦	3	13.9		IV-2	下層 土坑		白褐色土師質
			516	軒平瓦	3	9.9		IV-3,4間アゼ	瓦群(下段基壇上)	第2層	白褐色土師質
			517	軒平瓦	3	9.8		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			518	軒平瓦	3	19.7		IV-3,4間アゼ	瓦群北	2層	白褐色土師質
			519	軒平瓦	3	23		IV-2	下層 土坑		白褐色土師質
			520	軒平瓦	3	33.5		IV-3	瓦群		白褐色土師質

表3-4 軒平瓦出土一覧

報告No.	図版	写真	标本No.	種別	KNH	瓦当面積	瓦形面積	出土地区	遺構	層位	備考
			521	軒平瓦	3	38		IV-5	基壇東落ち 南	下層(明褐色)	白褐色陶質
			522	軒平瓦	3	10.8		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			523	軒平瓦	3	13		IV-5	瓦群		白褐色陶質
			524	軒平瓦	3	9.9		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			525	軒平瓦	3	20.7		IV-3	瓦群北		白褐色土師質
			526	軒平瓦	3	28.7		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			527	軒平瓦	3	38.1		IV-4	瓦群		白褐色土師質
			529	軒平瓦	3	46		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			530	軒平瓦	3	21.5		IV-5	瓦群東		白褐色土師質
			531	軒平瓦	3	9.6		IV-2,3間アゼ	瓦群(下段基壇上)	第1層	白褐色土師質
			532	軒平瓦	3	14.4		IV-4	瓦群		白褐色土師質
			533	軒平瓦	3	4.9		IV-4	瓦群		白褐色土師質
			534	軒平瓦	3	15.5		IV	トレンチ1		朱線 白褐色土師質
			536	軒平瓦	3	15.5		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			537	軒平瓦	3	17.3		IV-3区外	包含層	人力1面下げ	須恵質
			538	軒平瓦	3	35.6		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			540	軒平瓦	3	25.6		IV-4	瓦群		白褐色土師質
			541	軒平瓦	3	52.9		IV-3,4間アゼ	瓦群(基壇ス)	1層	白褐色土師質
			558	軒平瓦	3	20.1		IV-5	瓦群北	下層	白褐色土師質
			563	軒平瓦	1	20.2		IV-5	瓦群北		白褐色土師質
			564	軒平瓦	?	26.3		IV	築地内側溝北端		白褐色土師質 範外
			565	軒平瓦	1	19.4		Ⅲ	井戸	人力上面検出	薄赤褐色土師質
			566	軒平瓦	3	24.8		IV-3	瓦群		褐色土師質
			567	軒平瓦	1	22.2		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			568	軒平瓦	3	9.4		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			569	軒平瓦	3	7.9		IV-5	北からの落ち		白褐色土師質
			570	軒平瓦	1	14.3		IV-5	瓦群北		褐色土師質
			571	軒平瓦	?	8.5		IV-4,5間アゼ		5層	白褐色土師質
			572	軒平瓦	?	4.6		IV-3	瓦群	下層	白褐色硬質
			573	軒平瓦	3	9.3		IV-5	瓦群北	下層	白褐色土師質
			574	軒平瓦	3	10.7		IV-3	瓦群		白褐色土師質 頸庄痕
			576	軒平瓦	3	12.1		IV-2	北からの落ち		白褐色土師質
			577	軒平瓦	3	9.7		IV-4	瓦群		褐色土師質
			578	軒平瓦	3	10.4		IV-3	瓦群		白褐色土師質
			579	軒平瓦	1	12.8		IV-3,4間アゼ	瓦群北	1層	白褐色土師質
			580	軒平瓦	1	9.4		IV-5	基壇東への落ちアゼ	赤色土以下	白褐色土師質
			581	軒平瓦	1	8.1		IV	黒色土		白褐色土師質
			582	軒平瓦	1	14.2		IV-3,4間アゼ	瓦群	1層	白褐色土師質 狭端部アリ
			583	軒平瓦	1	13		Ⅲ	SB?-01		須恵質
			585	軒平瓦	1	9.7		Ⅲ	井戸	にぶい黄褐色	褐色土師質
			586	軒平瓦	3	56.4		Ⅲ	井戸		褐色陶質
			587	軒平瓦	1	8.7		Ⅲ	SD3101		須恵質
			588	軒平瓦	1	23.3		Ⅲ	井戸掘り方		白褐色土師質
			595	軒平瓦	1	36		Ⅲ	包含層北東	上面一段下げ	白褐色土師質
			597	軒平瓦	1	14.1		Ⅲ	包含層	上面一段下げ	白褐色土師質
			600	軒平瓦	1	18.7		Ⅲ	包含層 人力	上面	白褐色土師質
			601	軒平瓦	1	24		Ⅱ-1	築地内溝		白褐色土師質
			604	軒平瓦	3	43.3		Ⅲ	築地内側溝1区		白褐色硬質
			606	軒平瓦	1	9.7		Ⅲ-1	築地内側溝		褐色土師質
			609	軒平瓦	1	28.8		Ⅲ	築地内側溝1区		白褐色土師質
			611	軒平瓦	1	15.7		Ⅲ	瓦群		須恵質
			614	軒平瓦	1	13.4		Ⅲ	瓦群		褐色土師質
			617	軒平瓦	3	47.3		Ⅱ			赤褐色陶質
			618	軒平瓦	1	34.2		Ⅱ	重機		須恵質
			622	軒平瓦	1	15.3		Ⅲ	重機		白褐色土師質
			637	軒平瓦	1	6.5		Ⅲ	包含層 人力		白褐色土師質
			639	軒平瓦	1	16.3		Ⅲ		2面検出一段下げ	白褐色土師質
			641	軒平瓦	1	3.8		Ⅲ南側	人力		赤褐色陶質
			647	軒平瓦	3	14.3		IV-5	基壇東落ち		白褐色土師質

瓦当面積単位 平方センチメートル  
 瓦形面積単位 平方センチメートル(復元含む)

表4-1 丸瓦・平瓦・道具瓦出土一覽

報告No.	図版	写真	標本No.	種別	分類	暫定 調整	出土地区	出土遺構	出土層位	備考
6	53		55	丸瓦	行基	c	Ⅱ	東西内Ⅳ	最下層	7.5YR8/3浅黄橙色土師質 R32
7	53		61	丸瓦	行基	c	Ⅱ	東西側溝 外1		5YR8/4淡橙色土師質 R49
8	53		811	丸瓦	行基	c	Ⅱ	内溝1・2間東西側溝		7.5YR8/3浅黄橙色土師質 R16
9	53	95	58	丸瓦	行基	c	Ⅱ	東西側溝 外1		5YR8/3淡橙色土師質 R24
10	53	95	65	丸瓦	行基	c	Ⅱ	東西側溝 外1		7.5YR8/3浅黄橙色土師質 R9
11	53	96	62	丸瓦	行基	c	Ⅱ	東西側溝 外3		7.5YR8/3浅黄橙色土師質 R1
12	54	98	57	平瓦	①	c	Ⅰ	東西側溝 外2		7.5YR7/3にぶい橙色土師質 F8
13	54	98	53	平瓦	①	c	Ⅱ	東西側溝 外3		10YR8/3浅黄褐色土師質 F1
14	54		69	平瓦	①	c	Ⅱ	東西側溝 外2		5YR7/4にぶい橙色土師質 F13
15	55		68	平瓦	①	c	Ⅱ	東西側溝 外1		7.5YR8/3浅黄褐色土師質 F10
16	55		70	平瓦	①	c	Ⅱ	東西側溝 外?		7.5YR8/2灰白色土師質 F12
17	55	99	66	平瓦	①	c	Ⅱ	東西側溝 外1		5YR8/4淡橙色土師質 F14
18	56	99	56	平瓦	①	c	Ⅱ	東西側溝 外2		10YR8/3浅黄褐色土師質 F6
19	56	100	67	平瓦	①	c	Ⅱ	東西側溝 外3		7.5YR8/3浅黄褐色土師質 F11
20	56	100	52	平瓦	①	c	Ⅱ	東西側溝 外1		5YR7/3にぶい橙色土師質 F9
21	57		60	平瓦	①	c	Ⅱ	東西側溝 内2		7.5YR8/3浅黄褐色土師質 F16
22	57		59	平瓦	①	c	Ⅱ	東西側溝 内3		2.5Y8/2灰白色土師質
23	57		63	平瓦	①	c	Ⅱ	東西側溝 内2		5YR8/4淡橙色土師質 F20
24	58		64	平瓦	③	e	Ⅱ	東西側溝 内1		2.5Y8/2灰白色土師質 F72
25	58		71	平瓦	③	e	Ⅱ	東西側溝 内1	底付近	5YR7/4にぶい橙色土師質 F71
35	60		819	丸瓦	行基	c	Ⅲ	築地外側溝3区		2.5Y8/3淡黄色土師質
36	60	97	818	丸瓦	玉縁	c	Ⅲ	築地外側溝4区		5Y8/2灰白色瓦質
37	60		816	平瓦	①	c	Ⅲ	築地内側溝2区		2.5Y8/3淡黄色土師質
38	60		817	平瓦	①	c	Ⅲ	人力		2.5Y8/3淡黄色土師質
39	61	105	46	駿斗瓦	⑬	f	Ⅲ	築地外側溝4区		N6/灰色土師質
40	61	105	45	駿斗瓦	⑬	f	Ⅲ	築地外側溝4区		5YR5/1褐灰色土師質
41	61	105	47	駿斗瓦	⑬	f	Ⅲ	築地外側溝4区		10YR7/1灰白色土師質
42	61	105	48	駿斗瓦	⑬	f	Ⅲ	築地外側溝4区		2.5Y7/2灰黄色土師質
43	61	108	682	隅平瓦	⑦	a	Ⅲ-1	築地外側溝		白褐色硬質
165	92	97	719	丸瓦	行基	c	Ⅳ-5	瓦群東南		2.5Y8/1灰白色硬質 砂多し
166	92		720	丸瓦	行基	ca	Ⅳ-4	瓦群		2.5Y6/1黄灰色陶質
167	92		717	丸瓦	行基	c	Ⅳ-3・4間アゼ	瓦群(下段基壇下)	1層	5Y8/1灰白色土師質
168	92		718	丸瓦	行基	c	Ⅳ-3・4間アゼ	瓦群(下段基壇下)	1層	2.5Y8/2灰白色土師質
169	92		714	丸瓦	行基	c	Ⅳ-3・4間アゼ	瓦群	1層	2.5Y7/1灰白色陶質
170	93		704	丸瓦	行基	c	Ⅳ-5	瓦群東南		5Y8/1灰白色土師質
171	93		700	丸瓦	玉縁	c	Ⅳ-3・3・4間アゼ	瓦群 瓦群北	第2層	2.5Y8/2灰白色土師質 砂多し
172	93		698	丸瓦	玉縁	c	Ⅳ-4	瓦群		須恵質
173	93		699	丸瓦	玉縁	c	Ⅳ-3	瓦群		2.5Y8/1灰白色土師質 砂多し
174	93		709	丸瓦	玉縁	c	Ⅳ-3・4間アゼ	瓦群	1層	須恵質
175	93		706	丸瓦	玉縁	c	Ⅳ-3	瓦群		N5/灰色瓦質
176	93		705	丸瓦	玉縁	c	Ⅳ-5	北からの落ち		瓦質
177	94		701	丸瓦	玉縁	cd	Ⅳ-3?	瓦群?		5Y8/1灰白色硬質 縄タキ残
178	94		703	丸瓦	玉縁	c	Ⅳ-3	瓦群		須恵質
179	94		707	丸瓦	玉縁	c	Ⅳ-5	北からの落ち		2.5Y8/1灰白褐色陶質
180	95		730	平瓦	①	c	Ⅳ-3	瓦群		10YR8/3浅黄褐色陶質
181	95		729	平瓦	①	c	Ⅳ-1	灰原?		白褐色土師質砂粒大
182	95		772	平瓦	②	e	Ⅳ	瓦群		須恵質
183	95		774	平瓦	②	e	Ⅳ	瓦群		須恵質
184	96	103	560	平瓦	③	e	Ⅳ-3・4間アゼ	瓦群(基壇スノ)	1層	2.5Y8/1灰白色陶質
185	96	103	559	平瓦	③	e	Ⅳ-5	基壇東落ち 南	下層(明褐色)	10YR8/2灰白色陶質
186	96		727	平瓦	③	e	Ⅳ-3	瓦群		2.5Y7/1灰白色陶質
187	97		721	平瓦	③	e	Ⅳ-2	瓦群		5Y7/1灰白色陶質
188	97		724	平瓦	③	e	Ⅳ-3	瓦群		2.5Y8/2灰白色土師質
189	97		722	平瓦	③	e	Ⅳ-4	瓦群		2.5Y8/1灰白色土師質 風蝕痕
190	98		723	平瓦	③	e	Ⅳ-4	瓦群		2.5Y8/1灰白色土師質
191	98		725	平瓦	③	ad	Ⅳ-3	瓦群		須恵質
192	98		726	平瓦	③	e	Ⅳ-3	瓦群		須恵質
193	98		728	平瓦	③	e	Ⅳ-3	瓦群		薄い 褐色土師質
194	99	104	561	平瓦	④	c	Ⅳ-3	瓦群		5PB4/1暗青灰色瓦質
195	99		763	平瓦	④	e	Ⅳ	重機		須恵質 風蝕痕

表4-2 丸瓦・平瓦・道具瓦出土一覧

報告No.	図版	写真	標本No.	種別	分類	側面調整	出土地区	出土遺構	出土層位	備考
196	99		744	平瓦	④	e	IV-5	北からの落ち	下層	2.5Y8/2灰白色陶質
197	99		746	平瓦	④	d	IV-5	北からの落ち		10YR8/2灰白色土師質
198	99		747	平瓦	④	c	IV-5	北からの落ち		須恵質
199	99		742	平瓦	④	e	IV	重機		須恵質
200	100		731	平瓦	⑤	c	IV-5	北からの落ち	下層	須恵質
201	100		732	平瓦	⑤	d	IV-3	瓦群		須恵質
202	100		739	平瓦	⑤	g	IV	重機		5Y8/1灰白色硬質
203	100		762	平瓦	⑤	e	IV-4	瓦群		2.5Y8/2灰白色硬質
204	100		743	平瓦	⑤	e	IV-4	瓦群		須恵質
205	100		741	平瓦	⑤	d	IV	重機		須恵質
206	100		778	平瓦	⑤	c	IV	瓦群		7.5YR7/3にぶい橙色土師質風蝕痕
207	101		771	平瓦	⑦	c	IV	瓦群		N6/灰色須恵質 砂多し
208	101		750	平瓦	⑦	c	IV-3	瓦群北		須恵質
209	101		751	平瓦	⑦	h	IV-3	瓦群		須恵質
210	101		749	平瓦	⑦	c	IV-3	瓦群		須恵質
211	101		765	平瓦	⑧	a	IV-1	灰原?		10YR8/3浅黄橙色土師質
212	102		767	平瓦	⑨	h	IV-5	瓦群		N7/0灰色須恵質
213	102		789	平瓦	⑨	g	IV	瓦群(下段基壇上)	1層	5Y5/1灰色土師質 風蝕痕 釘
214	102		764	平瓦	⑨	g	IV-2・3間アゼ	土坑402	上層のみ出土	白褐色土師質
215	102		782	平瓦	⑨	a	IV	瓦群		N6/灰色土師質
216	103		776	平瓦	⑩	e	IV	瓦群		2.5Y8/2灰白色土師質 風蝕痕
217	103		777	平瓦	⑩	g	IV	瓦群	1層	5Y8/1灰白色土師質
218	103		752	平瓦	⑩	e	IV-5	瓦群北		須恵質
219	103		784	平瓦	⑩	a	IV	北からの落ち	4層	7.5Y8/1灰白色土師質
220	104		769	平瓦	⑫	f	IV-4	瓦群		N6/灰色瓦質
221	104		770	平瓦	⑫	h	IV-5	瓦群		須恵質
222	104		737	平瓦	⑬	c	IV	包含層		N6/灰色瓦質
223	104		753	平瓦	⑬	a	IV-5	瓦群東		7.5YR7/3にぶい橙色土師質
224	105	104	562	平瓦	⑭	c	IV-3	瓦群		5Y8/1灰白色須恵質
225	105		760	平瓦	⑮	b	IV-4	瓦群		須恵質
226	105		759	平瓦	⑮	b	IV-4	瓦群		須恵質
227	105		757	平瓦	⑮	h	IV-3・4間アゼ	北からの落ち	第3層	10YR8/1灰白色硬質
228	105		758	平瓦	⑮	f	IV-3	瓦群		N3/0暗灰色瓦質
229	106	106	688	鬘斗瓦	①	e	IV-2北	灰原?		赤褐色土師質
230	106	106	686	鬘斗瓦	⑤	e	IV-2・3間アゼ	瓦群	1層	5Y5/1灰色土師質
231	106	106	684	鬘斗瓦		a	IV	北からの落ち		2.5Y8/2灰白色陶質 宝塔?
232	106	106	685	鬘斗瓦		a	IV	北からの落ち		2.5Y8/2灰白色陶質 宝塔?
233	106	106	691	隅木蓋瓦	③	a	IV-3	瓦群		10YR8/3浅黄橙色硬質
234	106	107	793	隅木蓋瓦	③	e	IV-3・4間アゼ	北からの落ち	第3層	2.5Y8/3淡黄色硬質
235	107	107	690	隅平瓦	⑦	c	IV-5	北からの落ち		2.5Y6/1黄灰色土師質
236	107	107	681	隅平瓦	⑥	d	IV-5北	築地検出	瓦群最上層	白褐色硬質
237	107	108	692	隅平瓦	⑥	h	IV-3	瓦群		薄赤褐色土師質
238	107	108	687	隅平瓦	⑥	a	IV-5北	築地検出	瓦群最上層	褐色硬質
239	107	108	683	隅平瓦	③	e	IV-2	下層土坑		2.5Y7/2灰黄色硬質
240	107	108	680	隅平瓦	⑦	c	IV-3	瓦群		10YR8/2灰白色土師質
241	107	108	689	隅平瓦		a	IV-3	瓦群		須恵質
242		96	805	丸瓦	行基	c	II	東西外側溝1		赤褐色土師質 写真のみ R5
243		102	810	平瓦	①	c	II	東西外側溝1		赤褐色土師質 写真のみ F15
244		102		平瓦	①	c	II	東西外側溝2		赤褐色土師質 写真のみ
245		101	799	平瓦	①	c	II	東西外側溝3		赤褐色土師質 写真のみ F3
246		101	800	平瓦	①	c	II	東西外側溝4		薄赤褐色土師質 写真のみ F4
247		101	803	平瓦	①	c	II	東西外側溝4		赤褐色土師質 写真のみ F7
248		101		平瓦	①	c	II	東西外側溝2		赤褐色土師質 写真のみ F27
249	図10		557	平瓦			IV-4北	北からの落ち		須恵質 鳥の足?

# 第6章 南面築地出土瓦について

はじめに

小犬丸中谷廃寺出土瓦は、基壇周辺で出土したもの、築地側溝と考えられる2条の溝内およびその溝間から出土したもの、これら以外から出土したものの3群に分けることができる。築地としては西面築地と南面築地が検出されており、瓦の出土状況から南面築地のみが瓦葺であったと想定される。

南面築地の側溝およびその溝間から出土した「南面築地出土瓦」は、後述するように軒瓦を欠くものの一括性が顕著な点が特徴で、築地塀に瓦が葺かれた後、一部に瓦の補充は行われたものの、葺き替えは行われなままに廃絶に至った状況を示している。そしてまた、この南面築地出土瓦は多くの完形品を含むことから、築地の廃絶に伴って屋根から落下した後、ほとんど片づけられていないと考えられ、築地の廃絶時期は寺院の廃絶時期とそれほど隔たらない可能性が高い。

南面築地出土瓦は、築地に伴うことが明白な一括性の高い丸瓦・平瓦の一群であり、築地屋根にどのように瓦が葺かれていたのかを具体的に復原しうる良好な資料といえる。倒壊したままの状態での瓦とその瓦が検出された山田寺や縄生廃寺といった例は稀であり、これまで古代の瓦葺方法や屋根景観の復原といった問題へのアプローチを可能にする材料は乏しく、この分野に関する研究は希薄であった。本資料は、そうした状況を打開しうる材料となりうる貴重な存在である。

本章では、南面築地出土瓦について分析し、それをもとに築地屋根の瓦葺方法について復原を試みる。

## 第1節 南面築地出土瓦

発掘調査時でコンテナ48箱分の瓦が出土した南面築地出土瓦であるが、そのうち軒瓦は小片3片しか含まれなかったことから、南面築地の屋根瓦は丸瓦と平瓦のみで構成されていたと判断できる。本節では、丸瓦と平瓦の様相について、それぞれ見ていきたい。

### 1. 丸瓦の様相

丸瓦は一般的に凸面のタタキ目をナゲ消す調整が施されるため、分類に際しては各製作技法に着目し、色調・焼成・凹面の布目・厚さなどを指標とする。南面築地出土丸瓦は、色調・焼成・厚さからⅠ～Ⅶの7型式に分類できる。南面築地出土丸瓦の型式ごとの出土重量とその比率については、表5のとおりであることがわかった。

**Ⅰ型式** 南面築地出土丸瓦のうち最も出土量が多く、重量比で93.1%（重量110.62kg）を占め、南面築地に葺かれていた丸瓦の主体をなす。南面築地の周辺からまんべんなく出土する。行基式で、色調は多少の濃淡はあるが淡橙色を呈する。凹面に粘土板の継ぎ目や布の継ぎ目の転写が観察されることから、粘

表5 丸瓦の出土重量とその比率

型式	重量(kg)	重量比(%)
Ⅰ	110.62	93.1
Ⅱ	3.62	3.0
Ⅲ	0.68	0.6
Ⅳ	1.42	1.2
Ⅴ	0.90	0.8
Ⅵ	1.48	1.2
Ⅶ	0.14	0.1
合計	118.86	100.0

土板巻付けにより製作されたと判断できる。全長は平均約37cm、広端幅は平均で約16cm、狭端幅は平均約11cm、厚さは広端側で2.0～2.5cm、狭端で1.5～1.8cm程度である。重量は完形品で平均2.3kgを量る。

凸面は全面にナデが施され、タタキ目はまったく確認できない。凸面の筒端部は強い横ナデのためにやや外反するものが多い。また、広端部の凹面側を面取りするものとしなないものがあり、前者の方がやや多い。ほぼ全点において、側辺端部には、面取りが施されている。

なお、狭端部をはつられたものが散見する。これらの長さを計測すると、約34cmと一定した数値が得られた。このことから、丸瓦を3cmほど短縮することを目的として端部をはつたものと推測できる。

**Ⅱ型式** 4点の出土であるが、重量比は3.0%（重量3.62kg）を占め、Ⅰ型式について出土量が多い。行基式で、Ⅰ型式とよく似た造りではあるが、濃い赤橙色を呈する、より薄手であるといった相違点を見出せる。また、4点中3点は赤橙色と白色の胎土が混じりあい、マーブル状を呈する。凸面にはケズリとナデが施され、凹面には布目が残る、個体によっては分割界線が残るものもある（R49）。完形品は1点しかないが、それによれば全長36.0cm、重量1.6kgである。

**Ⅲ型式** 3点が出土し、重量比は0.57%（重量0.68kg）である。色調は淡灰褐色もしくは淡灰色を呈す。凸面には縦ヘラケズリの後、弱いナデが施され、凹面には比較的細かい布目が残る。すべて小片のため、行基式か玉縁式かなど詳細は不明である。

**Ⅳ型式** 5点が出土し、重量比は1.20%（重量1.42kg）である。色調は淡灰褐色で、焼成は非常に硬質である。凸面には全面横方向のナデが施され、凹面には布目が残る。糸切痕が残る個体もある。

**Ⅴ型式** 8点が出土し、重量比は1.06%（重量0.90kg）である。色調は淡黄褐色を呈する。焼成が軟質であるため、表面の磨滅が顕著であり、凸面の調整は不明である。胎土には砂粒を多く含む。狭端部が残る破片が1点あり、玉縁式であることがわかる。

**Ⅵ型式** 8点が出土し、重量比は1.76%（重量1.48kg）である。色調は凸面が灰色、凹面が灰色もしくは淡黄褐色を呈する。どの個体も断面は暗灰色を呈する、いわゆるモナカ状である。焼成はやや軟質である。凸面にはナデが施されるが、方向は不明である。凹面には布目が残る。

**Ⅶ型式** 1点が出土し、重量比は0.17%（重量0.14kg）である。全体的に非常に薄い造りである。色調は灰色を呈し、焼成は非常に硬質の須恵質である。凸面には丁寧な縦ナデが施される。側辺端部には凸面側に1ヶ所、凹面側に2ヶ所の面取りが施されている。丸瓦の厚さや焼成・色調などを比較すると、KNM4の最終段階であるe段階の丸瓦に対応するものと考えられる。

## 2. 平瓦の様相

遺跡全体では、平瓦のタタキ目は15種類に分類されている(第5章第2節4参照)。観察の結果、このタタキ目の分類はすなわち平瓦の製作技法や胎土・焼成の差異と相関性があることがわかった。本章ではタタキ目の分類による①～⑮種をそれぞれ型式としてみなし、i～xv型式と表記して論を進めることにする。南面築地からは15型式のうち、i・iii・v・vi・viii～x・xii・xv型式、計9型式の平瓦が出土している。型式別の出土重量とその比率については、表6のとおりである。

このうち、南面築地で主体的に出土する平瓦はi型式とiii型式であり、この2型式を合わせるとその重量比は94.5%を占める。以下、この2型式について詳しく述べていきたい。

**i 型式** 南面築地出土平瓦のうち最も出土量が多い。重量比は87.6% (重量206.61kg) を占め、主体をなすものである。南面築地の周辺からまんべんなく出土する。色調は多少の濃淡はあるが、ほとんどが橙色・淡橙色、一部淡黄褐色を呈している。平瓦平均値で、全長35cm、広端幅27cm、狭端幅24cm、厚さ2cmである。完形品の平均重量は3.2kgを量る。

観察の結果、①模骨痕や粘土継ぎ目などをまったく確認できない、②凹面だけでなく側辺端面にも布目を確認される個体がある、③両側辺に沿ってまつり縫いされた布端の転写が観察される個体がある、④側辺に成形台側辺がくい込んだ痕跡が残る個体(図11)が多く見られる、といったことから、側辺に立ち上がりを持つ凸形の成形台(図12)による一枚造りと判断できる。

各個体のタタキ目から、長さ29.5cm、幅6.5cmの長方形のタタキ板原体を復原でき(図13)、これ以外によるタタキ目は確認できない。タタキ板の両端が押捺される個体があることから、タタキ板の形態は垂直に立ち上がる持ち手がつくスタンプ状であると推定できる。工人は平瓦の狭端側に立ち、タタキの単位が広端側に向かって扇状に広がるようにタタキを施すことが多い。また、凹面にはすべての個体において布目を確認できる。凸面側にタタキを施した後、凹形成形台に移して、狭端部に広くケズリを入

表6 平瓦の出土重量とその比率

	重量(kg)	重量比(%)
i	206.61	87.6
ii	0.00	0.0
iii	16.30	6.9
iv	0.00	0.0
v	0.30	0.1
vi	4.41	1.9
vii	0.00	0.0
viii	0.50	0.2
ix	1.58	0.7
x	1.30	0.6
xi	0.00	0.0
xii	0.62	0.3
xiii	0.00	0.0
xiv	0.00	0.0
xv	2.89	1.2
不明	1.36	0.6
合計	235.87	100.6



図11 平瓦に残る成形台端部立ち上がりの痕跡

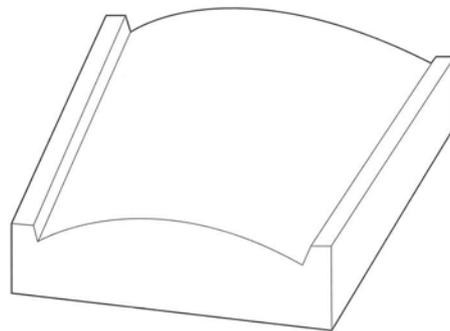


図12 平瓦成形台復原模式図



図13 平瓦 i 型式タタキ原体 復原図

れたり、側辺内側の角に面取りを施したりといった仕上げ調整が行われている。さらに、凹面において幅0.5cmほどの細い棒によって部分的にタタキが施されているものがかなりの割合で確認された。しかし、この棒タタキの意図は不明である。いずれの製作技法を見ても画一性が高く、異なる工人単位を抽出するには至らなかったため、かなり小さな工人単位で製作が行われていたと考えてよい。

**iii型式** 南面築地出土平瓦のうち、i型式に次いで出土量が多く、重量比は6.9%（重量16.30kg）を占める。遺跡全体で見ると、色調が橙褐色を呈する一群aと灰白色または灰色を呈する一群bとがある。いずれも一枚造りであるが、aは厚さが1.0～1.5cmと薄く、凸面の狭端部のタタキ目だけがナデ消されるという製作技法上の特徴がある。薄いために、焼成時にひずんでしまった個体が多い。全長は約33cm、狭端幅は約19cm、広端幅は約25cmで、完形品の重量は復原値で1.9kgである。一方、bは、全長幅などはaとほぼ同じであるが、厚さが1.5～2.0cmと比較的厚い。狭端までタタキ目が残る。焼成時のひずみがある個体は見られない。

南面築地で出土したものはaがほとんどで、かつ残存率が高い破片が多い。南面築地の中でも西端での出土が98%を占めており、築地で使用されている平瓦i型式とほぼ同じ大きさであることをあわせ考えると、南面築地西端部分での差し替え瓦として用いられたものと想定できる。

凸面を観察すると、3～5cm間隔でタタキ目が放射状に重ねられながらタタキ締められていくことがわかる。また、凸型成形台でタタキ調整が施された後、凹型成形台に移されて調整が行なわれたようで、凸面にある格子の凸部がつぶれていることが多い。そのため、タタキ目が不明瞭になる個体がほとんどで、タタキ板の復原は不可能であった。凹面にはi型式よりも細かい布目を観察できるが、布の綴じ目の転写や粘土の合わせ目は観察できず、一枚造りと考えられる。

なお、I区の外西コーナー、つまり築地の南西角付近においてbに分類できる平瓦が出土している。この平瓦の凸面の広端付近には朱線が遺存しており、築地に軒瓦が使用されていなかったことを直接的に示す資料である。

**その他の型式** その他の7型式の平瓦はいずれも小片で、重量比はそれぞれ全体の0.1～1.9%に過ぎない。あわせて5%ほどであり、この築地で用いられたのではなく混入したもののみなすのが合理的である。各型式の詳細は第5章第2節4に譲り、本章では重量比のみを提示し、分析の対象からは外すこととする。

### 3. 丸瓦と平瓦の組み合わせ

以上の分類および重量比から、丸瓦ではⅠ型式とⅡ型式が、平瓦ではⅰ型式とⅱ型式が築地屋根にま  
とまって使用された型式であると考えられる。

重量比および完形率の圧倒的な優位性および色調や焼成の共通性から、丸瓦Ⅰ型式と平瓦ⅰ型式とが  
セットで製作・焼成され、最も主体的に築地に使用されたことがわかる。築地が整備された際の“創建  
瓦”であろう。おそらく完成したばかりの築地は、現在の灰色一色の屋根景観とは大きく異なり、ほん  
のりとピンク色に染まった屋根を頂いていたことだろう。

平瓦ⅱ型式は、他の地区では灰白色や灰色の個体（b）が出土するにもかかわらず、築地の西端での  
み平瓦ⅰ型式と酷似する淡橙色の個体（a）が多く出土した。一方、丸瓦Ⅱ型式は、明らかに丸瓦Ⅰ型  
式と異なる工人の手によるものであるが、全長や幅など、そしてやはり色調は丸瓦Ⅰ型式と酷似して  
いる。また、丸瓦Ⅱ型式と平瓦ⅱ型式は淡橙色と白色の胎土がマーブル状を呈するという特徴を共有し、  
セットで製作され、使用されたものと考えられる。重量比から考えて、補修瓦であろう。

丸瓦Ⅱ型式と平瓦ⅱ型式がそれぞれ丸瓦Ⅰ型式・平瓦ⅰ型式のセットと同じ色調を目指して製作され  
ていたことは、淡橙色の平瓦ⅱ型式が築地地区で集中的に出土したことから明白である。このことか  
ら、補修時の瓦工が小犬丸中谷廃寺の南面築地に葺かれた瓦の色調に注目し、その創建瓦の特有の色調  
にあわせた補修瓦を特別に製作していたことがわかる。屋根に葺いた際に違和感がないようにという配  
慮であろうか。瓦の色調を工人が調節し得たこと、色調を調節しようという意識を持って瓦製作にあた  
っていたことがわかる非常に興味深い事例として特筆できる。

## 第2節 南面築地の瓦屋根の復原

これまで、考古学的見地からの建物に関する検討は、プランに対して行なわれることは多かったもの  
の、その上部構造―瓦葺方法や屋根景観について行なわれることはほとんどなかったといつてよい（註  
1）。というのも、現存する古代建築においても老朽化や台風などの被害のたびに瓦は葺きかえられてお  
り、古代の瓦葺の状況を示す材料は、倒壊建物がそのまま検出された奈良・山田寺や三重・縄生廃寺な  
どの僅少な例しかないからである。

前述したように、この南面築地出土丸瓦・平瓦における、①完形品の割合が高い、②遺構に伴って出  
土する、③一括性が高い、といった特徴は、  
廃絶後の二次的な移動がそれほどなかったこ  
とを示していると考えられる。このことから、  
丸瓦・平瓦の出土数比は使用枚数比を反映し  
たものであると考えたい。

本節では、まず遺構の状況から屋根面規模  
の復原を行う。次に、その結果をもとに丸  
瓦・平瓦の使用枚数を検討する。最後に、使  
用枚数を隅数換算および重量換算によって算  
出した出土数比と照らし合わせることで、具  
体的な瓦葺方法の復原を目指す。築地の各部  
名称については、図14を参照されたい。

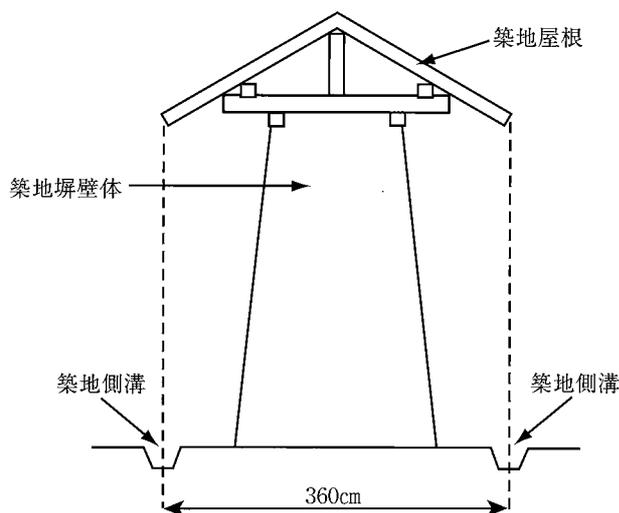


図14 築地の構造模式図

## 1. 屋根面規模の復原

### 築地の構造

築地塀とは、土をつき固めながら本体部分である壁体を築き、さらに屋根を設けた構造を採る。平城宮や官衙施設をはじめとする公的施設や寺院などで築造されることが多く、駅家である小犬丸遺跡でも築地塀が採用されている。掘立柱塀や板塀、柵などに比べ、より格の高い施設として築造され、区画内部の施設を荘厳する役目をも備えていたと考えられている。

築地塀の屋根には、瓦葺のものとは板を葺きさらに土を盛った上土塀の2種類があり、平城宮や国庁などで瓦葺が採用されるも、非瓦葺の方が多いという（註2）。南面する部分の築地のみ瓦を葺いていたという小犬丸中谷麿寺の状況からも、寺院正面の南側から出入りする人々の目を意識した結果、とくに採用したものであろうことが想像できる。

### 築地の規模と屋根面規模の復原

検出された築地のうち南面築地のみで瓦が葺かれていたと考えられるので、築地屋根の復原は南面築地の検出された直線部分21mのみを対象とする。検討対象が築地の直線部分のみであり、築地のコーナ一部分を含まないため隅棟の復原という不確定要素を結果的に排除することができた。

遺構の残存率がよい部分で計測すると、築地側溝の芯芯幅は360cmである（図14）。軒先は雨落ちである築地側溝の中軸上にくると考えれば、築地瓦屋根の梁行は築地側溝の芯芯幅と同じ360cmと復原できる。

ここで屋根勾配を復原する必要がある。屋根勾配を表す際には $30^\circ$ や $60^\circ$ などと“角度”は用いず、「4寸勾配」や「6寸勾配」というように、底辺を10とした時の高さを寸で表す特殊な表記を使用する。

築地屋根は切妻造と考えられ、そうであればその勾配は緩く、3寸勾配から、どんなにきつくても6寸勾配までと考えられる。

屋根の断面において、図15のように屋根頂部をa、屋根底辺の中点をb、軒先をc、さらに引渡し長さ（屋根頂部から軒先までの直線距離）をXcmとすると、

$$X > ab, X > bc \quad \text{かつ} \quad ab^2 + bc^2 = X^2 \dots \text{①}$$

が成り立つ。

3寸勾配の場合、 $ab : bc = 3 : 10$ であるから、 $bc = 180$ より $ab = 54$ 。さらに、①より、

$$X = \sqrt{(54^2 + 180^2)}$$

$$= 187.9 \quad \doteq 188\text{cm}$$

となる。

同様に、4寸勾配の場合、

$$X = 193.9 \quad \doteq 194\text{cm},$$

5寸勾配の場合、

$$X = 201.2 \quad \doteq 201\text{cm},$$

6寸勾配の場合、

$$X = 209.9 \quad \doteq 210\text{cm},$$

と計算できる。

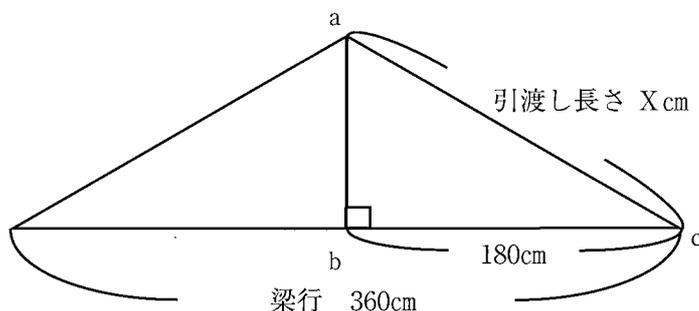


図15 築地屋根の断面模式図

築地塀程度の屋根であれば、引渡し長さも短く、屋根の反りなども小さいため、丸瓦・平瓦を葺く地の部分の長さは引渡し長さと同程度と推定されることが考えられる。よって、丸瓦・平瓦が葺かれる地の部分の長さは188～210cmの間の値を取るであろうことが復原できる。

## 2. 瓦の使用状況と使用枚数の復原

次に、復原された築地の屋根面の大きさから、実際に用いられた瓦の枚数を推定してみたい。その過程において、引渡し長さの値も具体的に復原できる。

小犬丸中谷廃寺の築地の屋根に葺かれていた可能性がある瓦の種類には、地の部分に葺かれた丸瓦・平瓦の他に、大棟を構成する鬨斗瓦・雁振瓦、大棟と地の平瓦列との取り付け部に生じる隙間を覆うための面戸瓦の計5種類がある。以下、順にその使用状況および使用枚数を推定していく。

### 瓦列数

築地屋根は切妻造であるので、屋根面すなわち地の部分と大棟とからなると考えてよい。それぞれで用いられた丸瓦・平瓦の枚数を考える場合、まず問題になるのが地の部分に瓦が何列葺かれていたか（これを瓦列数と呼ぶ）である。

瓦列数は平瓦によって規定される。実際、小犬丸中谷廃寺の平瓦を並べ、さらに丸瓦を実際に平瓦と平瓦の境界部にかぶせてみると、平瓦は広端を接して並べなければ丸瓦の狭端がその平瓦境界部を覆うことが不可能であることがわかった。つまり、このことによって瓦列数は平瓦の広端幅によって規定されることが明らかである。

したがって、瓦1列は幅が平瓦の広端幅と同じ27cmと考える（図16）、丸瓦・平瓦列は

$$21 \text{ (m)} \div 27 \text{ (cm)} = 77.8 \approx 78 \text{ (列)}$$

と考えられる。

### 地の部分を構成する瓦

丸瓦 引渡し長さを先述のように188～210cm前後と仮定して、この長さの屋根に用いられた1列あたりの丸瓦の枚数を考える。完形品の丸瓦（全長約37cm）を実際に葺いてみることによって、丸瓦を葺いた際の重なりは約9cmであることがわかる。また、先述したように、丸瓦の中には狭端部をはつることによって約34cmに短縮したものを8個体以上抽出することができた。これらは丸瓦列が棟の下部

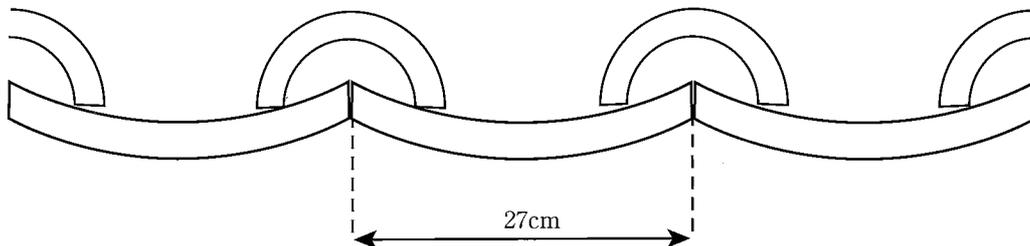


図16 瓦列模式図

にもぐり込む部分に用いられた丸瓦で、おさまりをよくするために棟基部とのあたりをはつつて調整・短縮したものと考えてよいだろう。

1列の丸瓦の枚数を $\alpha$ とすると、 $X$  (cm) <引渡し長さ> =  $(37-9) \times (\alpha-1) + 34$ と表すことができる。

引渡し長さは先述したように、188~210cmの間の値を取ると考えられるので、

$188 < (37-9) \times (\alpha-1) + 34 < 210$ と表すことができる。

すなわち、 $6.5 < \alpha < 7.28$   $\alpha = 7$  (枚) との値が得られる。

$\alpha = 6$  (枚) の場合、 $X = 174 < 180$ となり、屋根面が構築できないことから、成立しない。

$\alpha = 8$  (枚) の場合、 $X = 230$ となるが、この時 $ab = 143.2$  (cm) で、屋根勾配は8寸勾配となり、築地屋根には適さない。

したがって、 $\alpha = 7$  (枚) の場合、引渡し長さは202cm、屋根勾配はおよそ5寸勾配となり、最も妥当な数値と考えられる。

以上の計算から、屋根の地の部分に用いられる丸瓦は1列あたり7枚と確定できるから、

$$7 \text{ (枚)} \times 78 \text{ (列)} \times 2 \text{ (面)} = 1092 \text{ (枚)}$$

と計算できる。また、引渡し長さも202cmとほぼ確定できる。

平瓦 引渡し長さ202cmに用いられた平瓦の枚数を考える。この枚数は平瓦を葺く際にどれだけの重なりをとるかによって変化する。古代の平瓦には、平瓦の1/2ずつを重ねる2枚重ね、もしくは平瓦の1/3ずつを重ねる3枚重ねという葺き方が採られていたと考えられており、全長35cmの平瓦の枚数を $\beta$ としてそれぞれ1列あたりの平瓦の枚数を計算すると、

$$2 \text{ 枚重ねの場合: } 202 \text{ (cm)} = (35 \times 1/2) \times (\beta^2 - 1) + 35$$

$$\beta^2 = 10.5 \quad \approx 11 \text{ (枚)}$$

$$3 \text{ 枚重ねの場合: } 202 \text{ (cm)} = (35 \times 2/3) \times (\beta^2 - 1) + 35$$

$$\beta^2 = 8.2 \quad \approx 8 \text{ (枚)}$$

と計算できる。

以上の計算から、屋根の地全体に用いる平瓦は、

$$2 \text{ 枚重ねの場合: } 11 \text{ (枚)} \times 78 \text{ (列)} \times 2 \text{ (面)} = 1716 \text{ (枚)}$$

$$3 \text{ 枚重ねの場合: } 8 \text{ (枚)} \times 78 \text{ (列)} \times 2 \text{ (面)} = 1248 \text{ (枚)}$$

となる。

## 棟を構成する瓦

棟は、最下部に平瓦を転用した肌熨斗を置き、その上に平瓦を縦に半裁した熨斗瓦を重ね、さらに棟頂部には丸瓦を転用した雁振瓦をおいた構造になると一般的に考えられている。

熨斗瓦 熨斗瓦については、平瓦から半裁する際の分割方法によって切り熨斗瓦・刻み熨斗瓦・割り熨斗瓦の3種類に大別されている(註3)。切り熨斗瓦と刻み熨斗瓦については、分割面を観察すれば平瓦の破片と区別することは比較的容易であるが、割り熨斗瓦については、普通の平瓦の破片と区別して抽出することが非常に困難である。

しかしながら、西面築地も含め、築地地区からは切り熨斗瓦・刻み熨斗瓦と認識できる資料は1点も見出すことができなかった。また、破片の接合過程において、割り熨斗瓦の存在を示す幅1/2に復原できる資料(註4)もやはり見出すことができなかった。これらの事実と、築地程度の小型建物であれば

棟はそれ程高く作る必要がなかったことなどは、棟に用いられるための専用の鬘斗瓦が製作されなかったことを示唆していると考えられる。鬘斗瓦の代わりに平瓦を代用していたと考えたい（註5）。

堂宇などの大型建築の場合は棟が高く構築され、棟端に鬼瓦を据えて棟端部への雨水の流入を防ぐのが一般的である。瓦屋根を比較的丁寧に描いた絵画資料として現



図17 現代の韓国における築地瓦の例

鬘斗瓦として平瓦を3枚重ね、その上に雁振瓦として丸瓦を置く。

存するなかで古いものに、12世紀前半成立の『信貴山縁起絵巻』、12世紀後半成立の『伴大納言絵詞』があるが、これらの絵巻に見られる築地の棟表現を観察すると、平安京の築地の棟は3枚から4枚程度、東大寺の築地の棟は4枚程度、鬘斗瓦を重ねて構成していることが分かる。なお、いずれも棟端には鬼瓦を据える。

小犬丸中谷廃寺の南面築地では、鬼瓦が出土していないこと、京内や南都七大寺より小犬丸中谷廃寺の築地は小規模であり、したがって棟をそれ程高く作る必要がなかったことなども考え合わせれば、鬼瓦を使用しない程の低い棟、具体的には凹面を下にして平瓦を2枚か3枚伏せ積んで構築された棟が想定される（図17）。

なお、平瓦1枚の場合は、隣り合う平瓦の接する短辺部分の間隙から雨水が屋根内部に浸入するという問題が発生する。この雨仕舞の観点を踏まえると、平瓦1枚で棟を構築した可能性はありえないと考える。

よって、鬘斗瓦として棟に使われた平瓦の枚数は、

$$2 \text{ 枚積みの場合： } 2100 \text{ (cm)} \div 35 \text{ (cm)} \times 2 \text{ (枚)} = 120 \text{ (枚)}$$

$$3 \text{ 枚積みの場合： } 2100 \text{ (cm)} \div 35 \text{ (cm)} \times 3 \text{ (枚)} = 180 \text{ (枚)}$$

とそれぞれ計算することができる。

雁振瓦（註6） 近世以降は雁振瓦専用の瓦が製作・使用されるようになったが、古代においては丸瓦を棟頂部において雁振瓦としていたと考えられている。

雁振瓦の元来の役割は鬘斗瓦を2列に積み上げた時に生じる棟中央の隙間を塞ぐことにあり、そのため、平瓦を積み上げて構築された棟の場合は、棟中央に隙間ができないので雁振瓦の使用は絶対必ずしも必要なものではないように思われる。その上、平瓦中軸部分のみに風化や磨滅の痕跡が認められないことで雁振瓦の存在を証明する資料もとくに見当たらないため、雁振瓦が確かに使用されていたことを積極的に肯定できる材料はない。

しかしながら、古代の瓦葺の状況を現代に伝えた山田寺の回廊出土瓦では、風触痕や葺き土の痕跡などがよく遺存し、鬘斗瓦数枚を積み上げた頂部に平瓦を1枚伏せ置き、その上に丸瓦、つまり雁振瓦を置いたことが明らかとなっている（註7）。また、先述した絵画資料においても、築地には常に雁振瓦が使用されている。こうした状況証拠から、小犬丸中谷廃寺の南面築地でも、雁振瓦は使用されていたと考えるべきであろう。

表7 丸瓦と平瓦の想定使用個体数・および比率

	丸瓦(個)				平瓦(個)				丸瓦:平瓦	
	地の丸瓦	雁振瓦	面戸瓦	小計	地の平瓦	熨斗積み	小計			
A案	1092	75	78	1245	2枚重ね	1716	2枚積み	120	1836	1 : 1.47
B案	1092	75	78	1245		1716	3枚積み	180	1836	1 : 1.52
C案	1092	75	78	1245	3枚重ね	1248	2枚積み	120	1836	1 : 1.10
D案	1092	75	78	1245		1248	3枚積み	180	1836	1 : 1.15

雁振瓦として丸瓦 I 型式を使用したと考えられるので、丸瓦の全長37cm、重なり9cmであるから、雁振瓦の枚数を $\gamma$ とすると、

$$2100 \text{ (cm)} = (37 - 9) \text{ (cm)} \times (\gamma - 1) + 37$$

$$\gamma = 74.7 \approx 75 \text{ (枚)}$$

となる。

面戸瓦 平瓦列と棟との境界部にできてしまう隙間を塞ぐのが面戸瓦の役割であるが、切り熨斗瓦や刻み熨斗瓦のようにあらかじめ面戸瓦として特別に成形され、製作されていれば抽出は比較的容易であるが、一般的に古代の面戸瓦の出土数は非常に少なく、割り面戸瓦ともいべき丸瓦を割ったもので代用していたと考えるべきであろう。

今回の出土資料のうち、面戸瓦として特に製作されたと認識できるものは、破片も含めて見出すことができなかったため、この築地塀でも丸瓦を割って面戸瓦として使用していたと考えたい。

丸瓦の狭端側の幅は平均値で約4cm、平瓦の幅が広端で27cmであるので、面戸瓦が入る隙間は最大で幅23cmということになる。丸瓦の全長がI型式とII型式とも36~37cmであるので、余裕を見れば丸瓦1/2が入る大きさである。

瓦列数が78列なので、1列あたり丸瓦1/2個を面戸瓦として使用すると考えれば、検討対象の屋根面全体で面戸瓦として用いられた丸瓦の数は、

$$78 \text{ (列)} \times 1/2 \text{ (枚)} \times 2 \text{ (面)} = 78 \text{ (枚)}$$

となる。

#### 小結

以上の復原や計算から、検討対象とした築地屋根に用いられた丸瓦と平瓦の総数を算出するにあたり、瓦の構成について以下の4通りの案を提示できる。

- A案 平瓦2枚重ね・雁振瓦あり・熨斗瓦2枚積みの場合
- B案 平瓦2枚重ね・雁振瓦あり・熨斗瓦3枚積みの場合
- C案 平瓦3枚重ね・雁振瓦あり・熨斗瓦2枚積みの場合
- D案 平瓦3枚重ね・雁振瓦あり・熨斗瓦3枚積みの場合

この4通りの案について、具体的に丸瓦・平瓦枚数の復原値をあてはめていくと、表7のとおりになり、丸瓦と平瓦の比率は1 : 1.10から1 : 1.52の値が得られた。

次項では、南面築地出土丸瓦・平瓦の量を比較し、ここで得られた復原比と照合していくこととする。

### 3. 南面築地地区における丸瓦・平瓦の出土量比

本項では小犬丸中谷廃寺の築地から出土した丸瓦・平瓦の出土量比について考えていきたい。瓦の出土量比は出土点数を単に比較するのではなく、瓦使用時の状態をよりよく反映させるために隅数によって換算する方法と重量比で換算する方法が一般的に採用される。ただし、隅数換算の場合、資料数が少ないと誤差が大きくなってしまいう傾向があるため、ここでは重量換算を併用することとし、それぞれの方法で丸瓦と平瓦の出土量比を計算し、検討を加える。

#### 隅数による換算

隅数による出土量比の換算は、各個体の四隅のうち残存する隅をすべて数え、各隅残存数のうち最大数を個体換算数とし、それによって丸瓦・平瓦の比率を算出する方法である。

丸瓦のⅠ型式・Ⅱ型式と平瓦のⅰ型式・ⅱ型式については、南面築地地区から出土したすべての隅数を数え上げた。残存率が1/2以上の丸瓦・平瓦についてはピックアップし、表9・表10に残存隅をはじめ各部要素をまとめてある。表9・表10に掲載の丸瓦・平瓦の残存隅による個体換算数は、丸瓦Ⅰ型式が35個体、丸瓦Ⅱ型式が1個体、平瓦ⅰ型式が48個体、平瓦ⅱ型式が2個体であった。さらにピックアップからもれた破片資料についても隅数を数えた結果、表8のとおりになった。

すなわち、丸瓦全体の個体換算数は58個体、平瓦全体の個体換算数は71個体となり、比率は、

$$\text{丸瓦} : \text{平瓦} = 58 : 71 = 1 : 1.22$$

となった。

#### 重量による換算

重量による出土量比の換算は、(出土総重量) ÷ (完形品1個体当たりの重量) によって個体数を換算し、それによって丸瓦・平瓦の比率を算出する方法である。

丸瓦Ⅰ型式の出土総重量は110.62kg、完形品の重量は平均2.3kgであるため、換算個体数は、

$$110.62 \text{ (kg)} \div 2.3 \text{ (kg)} = 48.1 \approx 48 \text{ (個体)}$$

となる。

丸瓦Ⅱ型式の出土総重量は3.62kg、完形品の重量は平均1.6kgであるため、換算個体数は、

$$3.62 \text{ (kg)} \div 1.6 \text{ (kg)} = 2.3 \approx 2 \text{ (個体)}$$

となる。

平瓦ⅰ型式の出土総重量は206.61kg、完形品の重量は平均3.2kgであるため、換算個体数は、

$$206.61 \text{ (kg)} \div 3.2 \text{ (kg)}$$

$$= 64.6 \approx 65 \text{ 個体}$$

となる。

平瓦ⅱ型式の出土総重量は16.30kg、完形品の重量は平均1.9kgであるため、換算個体数は、

表8 隅数換算による個体換算数

隅数(個)	丸瓦Ⅰ型式	丸瓦Ⅱ型式	平瓦ⅰ型式	平瓦ⅱ型式
ピックアップ分	35	1	18	2
築地外区	14	0	12	0
築地内区	8	0	9	0
小計	57	1	69	2
合計	58		71	

$$16.30 \text{ (kg)} \div 1.9 \text{ (kg)} = 8.6 \div 9 \text{ (個体)}$$

となる。

したがって、丸瓦全体の個体換算数は

$$48 \text{ (個体)} + 2 \text{ (個体)} = 50 \text{ (個体)}$$

平瓦全体の個体換算数は

$$65 \text{ (個体)} + 9 \text{ (個体)} = 74 \text{ (個体)}$$

となり、重量換算による丸瓦と平瓦の比率は以下のとおりとなる。

$$\text{丸瓦} : \text{平瓦} = 50 : 74 = 1 : 1.48$$

### 小結

以上の1 : 1.22、1 : 1.48という結果から、小犬丸中谷廃寺の南面築地の屋根においては、平瓦の割合が比較的少ない瓦葺の方法が採られていたということがわかる。前項で復原した8通りの丸瓦と平瓦の比率に照らし合わせて考えれば、A案の丸瓦と平瓦の比率が1 : 1.47で最も近似し、最も妥当なものと考えられる。

1 : 1.22という比率はA案の1 : 1.47という比率に比べ、丸瓦の割合が高く平瓦の割合が低い。1 : 1.22の比率に近い瓦葺の方法があるかどうかを考えてみると、丸瓦の使用数を増やすか平瓦の使用数を減らす必要がある。A案では雁振瓦および面戸瓦の使用が想定されている以上、丸瓦をこれ以上使用できる余地はまったくない。一方で、平瓦の使用数を減らす場合は、熨斗積みを1枚積みにもで減らせば、計算上は丸瓦：平瓦の比率が1 : 1.42となる。しかし、熨斗積みを1枚とするには無理があり、到底首肯できない。

よって、重量換算によって得られた1 : 1.48を重視し、最も値が近く、丸瓦の割合が高く平瓦の割合が少ないという特徴を反映したA案の工法が南面築地に採用されていたと結論づけたい。

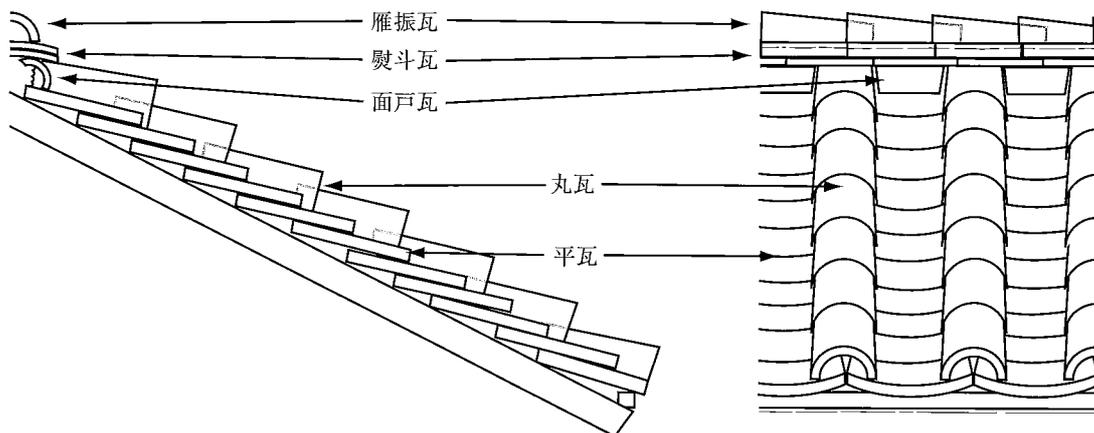


図18 南面築地の屋根復原図 断面図および立面図

## まとめ

本章では、南面築地出土瓦に注目し、色調にこだわった瓦生産がなされていたこと、また南面築地における瓦葺の具体的状況を復原した。山陽道沿いの駅館は、『日本後紀』によって「蕃客に備えて瓦葺粉壁」するようになると決められていたことが知られている。山陽道を行き来する外国使節を意識し、公的な建築物の外観に配慮を加えていたわけで、小犬丸中谷廃寺の築地屋根についても南面のみを瓦葺にし、色調をそろえていたことなどはそういった山陽道における建築物のあり方を反映した結果であったのかもしれない。

築地屋根の瓦葺が具体的に復原された例が少なく、他例との比較検討は困難であるが、本例が絵画資料のない奈良時代以前の瓦葺屋根、とくに地方における瓦葺屋根がどのようなものであったかを知る端緒になれば幸いである。

## 〔註〕

- 註1 〔山中2003〕。
- 註2 古代の瓦葺や屋根景観に対する検討としては、〔上原1980〕や〔上原2001〕が挙げられる。これらは軒瓦と丸瓦・平瓦の量比から、検討対象とする建物が瓦葺か椀皮葺かを判断したものであった。
- 註3 〔上原1988〕。
- 註4 幅1/2の平瓦片が集中して出土することから割り熨斗瓦の存在を推定し、その出土瓦の使用建物を椀皮葺と導いた論考がある〔上原1988〕。
- 註5 韓国では現在でも築地屋根の棟に平瓦を裏返して重ねる簡易的な棟を構築している例がよく見られる。このことについては上原真人先生からご教示を受け、図17として掲載した写真もいただいた。
- 註6 雁振瓦専用の瓦が製作されるようになるのは中世以降であり、古代においては丸瓦が用いられていたと考えられる。ここでは地の部分に用いられる丸瓦と呼び分ける目的で、とくに雁振瓦と呼称する。
- 註7 〔奈良文化財研究所2002〕。

## 〔参考文献〕

- 上原真人 1988 「平安貴族は瓦葺邸宅に住んでいなかった—平安京右京一条三坊九町出土瓦をめぐって—」  
『高井悌三郎先生喜寿記念論集 歴史学と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念事業会
- 上原真人 2001 「秀衡の持仏堂—平泉柳之御所遺跡出土瓦の一考察—」『京都大学文学部研究紀要』第40号  
京都大学大学院文学研究課
- 黒崎 直 1997 「掘立柱塀と築地塀—藤原宮と平城宮の外周施設をめぐって—」『立命館大学考古学論集』I  
立命館大学考古学論集刊行会
- 小松茂美編 1977 『伴大納言絵詞』日本絵巻大成2 中央公論社
- サントリー美術館編 1999 『特別公開 国宝 信貴山縁起絵巻』サントリー創業100周年記念展IV
- 坪井利弘 1975 『日本の瓦屋根』理工学社
- 奈良文化財研究所 2002 『山田寺発掘調査報告』
- 山中敏史 2003 「築地塀」『古代の官衙遺跡I』I 遺構編 奈良文化財研究所

表9 南面築地出土丸瓦一覽

NO.	型式	凸面		凹面		全長	現長	側面			広端			狭端			狭端打欠	残隅	重量 (kg)	備考
		調整	分割界線	布合目	粘土合目			形状	半径	厚	形状	半径	厚	形状	半径	厚				
R1	I	1	×	○	-	39.0	-	3	5.7	2.0	1	3.2	1.6	1	×	ABCD	2.18	完形		
R2	I	2	×	○	-	36.5	-	3	5.9	2.4	4	3.8	1.5	1	×	ABC	2.42			
R3	I	3	○	○	-	37.5	-	3	5.6	2.0	1	3.8	1.5	1	×	ABCD	2.44			
R4	I	3	○	×	S	36.9	-	2	6.0	2.0	1	3.5	1.6	1	×	ABCD	2.30			
R5	I	2	×	×	S	37.5	-	3	6.0	2.78	1	3.6	1.9	1	×	ABCD	2.54			
R6	I	1	○	○	-	-	33.6	2	5.8	1.6	4	-	-	-	○	ABCD	1.98			
R7	I	3	×	×	-	36.2	-	2	5.5	2.2	1	4.0	1.5	1	×	ABCD	1.82			
R8	I	2	○	○	-	34.2	-	3	6.1	1.7	4	4.5	1.7	1	△	ABCD	2.06	狭端凹面側のみをはつり、短縮		
R9	I	2	○	×	Z	37.2	-	3	5.7	1.9	4	*3.3	1.5	1	×	AB D	2.14			
R10	I	1	○	×	-	-	34.2	2	6.0	-	4	-	-	-	○	ABCD	2.00			
R11	I	1	○	○	S	37.0	-	2	*5.8	2.3	1	3.3	1.7	1	×	BCD	2.10			
R12	I	2	○	×	-	37.0	-	3	*6.0	1.9	1	3.4	1.6	1	×	ABCD	1.94	側面の面トリは片方のみ		
R13	I	1	○	○	S	37.2	-	2	6.2	2.4	4	3.8	1.8	1	×	ABCD	2.14	布一部はつれ		
R14	I	1	○	○	-	37.2	-	2	6.4	2.2	4	*3.7	1.8	1	×	ABC	2.27			
R15	I	3	○	×	-	36.9	-	2	6.2	1.8	1	3.7	1.9	1	×	A CD	1.60			
R16	I	2	○	○	-	35.2	-	3	5.5	2.3	4	3.8	1.8	1	×	AB D	2.02			
R17	I	2	×	×	-	36.9	-	3	6.1	2.2	1	3.8	1.6	0	×	ABCD	2.08			
R18	I	1	○	×	S	-	35.3	2	6.0	2.2	4	-	-	-	○	ABCD	2.10	凸面広端ヨコズリ		
R19	I	2	○	○	S	35.4	-	3	6.7	2.3	1	4.1	1.5	1	×	A CD	1.92			
R20	I	1	×	○	S	36.2	-	2	-	1.5	1	-	1.5	1	×	A D	1.65			
R21	I	?	○	×	S	-	32.0	1	-	-	-	3.9	1.5	1	×	CD	1.45			
R22	I	2	○	○	-	36.7	-	3	5.7	1.7	4	4.3	1.2	1	×	A CD	1.84			
R23	I	1	○	×	-	-	33.5	2	6.2	2.4	1	-	-	-	×	AB	1.56			
R24	I	1	○	×	-	-	33.2	2	5.6	2.3	4	-	-	-	○	ABCD	2.09			
R25	I	2	×	○	-	-	21.6	3	5.2	2.2	4	-	-	-	-	AB	1.51			
R26	I	1	○	○	-	-	23.0	2	-	2.1	4	-	-	-	-	A	1.19			
R27	I	3	○	×	S	37.5	-	3	-	2.0	2	-	1.3	-	×	B	0.88	狭端布はつれ		
R28	I	?	×	○	S	36.8	-	2	-	-	-	3.1	-	0	×	A C	1.22	糸切痕顕著		
R29	I	?	×	○	-	-	28.9	2	-	-	-	*4.4	1.6	0	×	CD	0.79	布一部粗		
R30	II	?	×	○	-	-	23.5	3	-	-	-	-	-	-	○	C	0.85	狭端側2/3残		
R31	I	?	×	×	-	-	14.6	3	-	-	-	4.0	1.2	1	×	CD	0.63			
R32	I	3	×	○	-	27.9	-	3	-	-	-	*4.8	1.6	1	×	C	0.65	布端は折ってからまつり縫いした痕跡有		
R33	I	3	○	○	-	35.9	-	2	5.7	2.8	1	4.1	1.5	1	×	ABC	2.24			
R34	I	?	○	×	-	-	22.8	2	-	-	-	4.7	*1.5	その他	○	D	1.60	狭端ズリ後、凹面のみ打欠		
R35	I	?	×	×	-	-	26.2	2	-	-	-	-	-	-	○	-	0.92			
R36	II	2	○	×	S	36.0	-	3	*6.8	2.0	4	-	1.2	-	×	ABC	1.60	全面横ズリ、薄め		
R37	I	1	○	×	-	35.5	-	2	6.2	1.8	1	-	1.8	4	×	ABC	1.90			
R38	I	1	○	○	S	36.6	-	2	5.1	2.7	1	3.6	1.5	1	×	ABCD	1.89			
R39	I	3	×	○	Z	35.1	-	3	5.2	1.8	4	3.7	1.6	1	×	ABCD	1.78			
R40	I	?	○	○	-	-	34.5	2	-	-	-	-	2.0	0	×	D	1.08			
R41	I	2	×	×	-	-	26.0	3	5.6	2.0	1	-	-	-	-	CD	0.84			
R42	I	?	×	○	Z	-	26.3	3	-	-	-	3.6	1.9	0	×	CD	1.21			
R43	I	?	×	○	-	-	30.5	2	5.8	2.2	4	-	-	-	-	AB	1.82			
R44	I	3	×	○	-	-	-	3	6.2	1.4	1	-	-	-	○	ABCD	1.50	糸切痕あり		
R45	I	1	×	×	-	36.9	-	2	6.5	2.4	1	3.6	1.3	0	×	ABCD	2.35	ほぼ完形		
R46	I	?	×	2	S	-	22.0	3	-	-	-	-	-	-	-	-	1.20			
R47	I	2	×	×	S	36.3	-	3	5.4	2.7	1	-	1.7	0	×	AB	1.49	狭端一部残存		
R48	I	?	×	×	-	-	25.2	2	-	-	-	3.4	1.5	1	×	A C	1.64	狭端面に切残しのハバ		
R49	II	?	○	×	S	-	26.8	3	-	-	-	4.1	1.4	4	×	CD	0.80	マーブル状の胎土		
R50	II	?	×	○	-	-	16.7	3	-	1.7	1	-	-	-	-	A	0.37	マーブル状の胎土		

<凡例>

凸面調整 … 1：広端に横ナデ調整 2：全面を不定方向にナデ調整  
3：全面に横ナデ調整

布合目 … 1：布の合わせ目を縫うもの 2：布の合わせ目を縫わないもの

粘土合目 … S：S型 Z：Z型

端面形状 … 1：未調整  
2：凹面面取り（普通幅）  
3：凹面面取り（幅細）

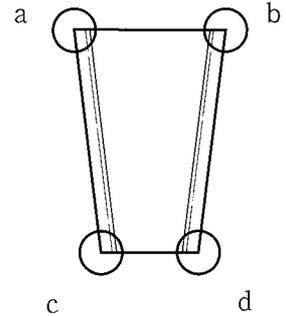


表10 南面築地出土平瓦一覧

NO.	型式	凸面			凹面			全長 (cm)	現在 長 (cm)	側辺 端面 形状	広端		狭端			半裁	残隅	重量 (kg)	備考	
		タタキ の方向	タタキ の向き	糸切 痕	布端 綴目	布端 処理	棒 タタキ				長 (cm)	厚 (cm)	長 (cm)	厚 (cm)	端面 形状					
F1	i	2	2	○	×	○	○	34.5	-	1	27.0	1.9	1	23.5	2.2	1	×	ABCD	3.04	布端あり
F2	i	2	2	○	×	×	○	35.0	-	2	25.7	2.1	1	23.8	1.8	3	×	ABCD	2.89	凸面タタキ後ケズリ
F3	i	2	2	○	×	×	×	35.3	-	2	27.0	2.4	1	23.6	2.3	3	×	ABCD	3.35	
F4	i	5or6	?	×	×	×	○	34.5	-	1	*27.0	2.0	1	23.6	1.8	3	×	AB D	2.96	
F5	i	4	2	○	×	×	○	33.5	-	1	*25.2	1.9	1	23.4	1.8	3	×	ABC	2.66	
F6	i	2	2	○	-	-	○	35.5	-	3	27.6	2.4	1	24.6	2.4	2	×	ABCD	3.40	凹面磨減
F7	i	2	2	○	×	×	×	34.0	-	2	27.0	2.8	1	23.8	2.3	3	×	ABCD	3.00	
F8	i	2	2	○	×	×	○	34.7	-	3	27.8	2.2	1	24.8	2.2	1	×	AB D	3.65	
F9	i	2	2	○	×	×	○	33.5	-	1	25.5	2.0	1	22.5	2.2	3	×	ABCD	3.00	
F10	i	2	2	×	×	×	○	34.2	-	2	27.2	2.2	1	24.0	1.9	3	×	ABCD	3.14	凹面に布端2本あり
F11	i	2	2	○	×	×	-	34.1	-	3	26.7	2.4	1	*23.5	2.6	3	×	A CD	3.24	
F12	i	2	2	○	×	×	×	34.3	-	1	-	2.3	1	24.3	1.9	1	×	ABC	3.04	
F13	i	2	2	○	-	-	-	35.0	-	3	28.0	2.0	1	25.0	2	3	○	ABCD	3.41	
F14	i	2	2	○	-	-	○	35.5	-	3	27.0	2.3	2	23.5	2.3	2	×	ABCD	3.50	
F15	i	2	2	×	×	×	○	34.3	-	1	26.4	2.2	1	23.5	2.3	3	×	ABCD	2.98	
F16	i	2	2	○	×	×	×	34.3	-	2	27.0	2.0	1	23.9	2.2	3	×	ABCD	3.02	布端2本ありか
F17	i	2	2	-	×	×	○	36.0	-	3	28.0	2.5	1	*24.0	3.2	3	×	BCD	3.56	布端あり
F18	i	2	1	-	-	-	-	35.5	-	1・3	*29.0	2.6	1	23	2.5	3	×	AB D	3.08	布目不明瞭
F19	i	2	2	○	×	×	?	34.5	-	1・3	*27.0	2.3	1	24.2	2.4	3	×	ABC	3.07	
F20	i	2	2	○	×	×	○	34.5	-	1	-	2.4	1	24.0	2.3	3	×	ABC	2.78	タタキ板に範傷なし、F9より古い
F21	i	2	2	○	×	×	-	34.5	-	1	*28.5	2.2	1	24.0	2.3	3	×	ABCD	3.08	
F22	i	4	2	○	×	×	-	35.0	-	1・3	*29.0	2.5	1	24.5	2.3	3	×	ABC	2.87	
F23	i	1	2	○	×	×	○	34.5	-	1・4	-	1.7	1	23.3	2.0	3	×	ABC		
F24	i	2	2	○	×	×	-	36.0	-	1・5	26.0	1.5	1	24.0	2.0	3	×	A C	2.83	押痕多数
F25	i	2	2	×	×	×	○	35.5	-	1・2	*26.5	1.7	1	*23.0	*1.5	3	×	A D	2.62	側面の一部成形台の痕跡残る
F26	i	2	2	×	×	×	○	34.8	-	2	*25.2	2.2	1	*19.4	2.0	3	×	A	2.64	磨減で布目見えず
F27	i	2	2	○	×	×	-	35.1	-	1・3	26.7	1.8	1	24.2	2.0	1	×	ABCD	3.16	
F28	i	1	?	○	×	×	○	34.0	-	3	26.7	2.3	1	*24.6	2.3	2	×	ABCD	2.82	
F29	i	2	2	-	×	×	-	35.0	-	3	28.0	2.3	1	25.0	2.0	3	×	ABCD	3.30	
F30	i	2	2	○	×	×	○	36.4	-	2	27.0	2.4	1	-	2.3	3	×	A CD	3.10	凹面の棒タタキ痕多い
F31	i	2	2	○	×	×	○	35.5	-	2	-	-	1	-	2.5	3	×	B D	2.02	
F32	i	2	2	○	-	-	-	34.0	-	1	27.0	2.7	1	-	2.6	3	×	D	2.60	
F33	i	?	2	○	-	-	-	34.5	-	1	*27.5	2.0	1	*25.4	2.1	3	×	B D	2.86	
F34	i	2	2	○	×	×	-	35.3	-	1・2	27.0	2.2	1	23.4	2.7	3	×	ABCD	3.31	側面まで布端の痕
F35	i	2	2	×	×	×	×	-	26.0	2	-	-	-	-	2.5	3	×	A	1.87	凸面タタキランダム、狭端布目粗

F36	i	2	2	○	×	×	-	35.2	-	1・3	25.0	2.0	1	-	2.0	3	×	CD	2.82	
F37	i	4	2	○	×	×	○	34.2	-	1	24.0	2.1	1	*19.9	2.2	3	×	C	2.28	
F38	i	2	?	○	×	×	×	35.7	-	3	*26.0	2.0	1	-	1.9	1	×	B	2.58	狭端に紐痕
F39	i	1	?	○	×	×	×	-	27.0	3	-	-	?	*24.0	2.4	3	×	AB	2.00	
F40	i	2	2	○	×	×	-	36.0	-	3	-	2.0	1	-	1.5	3	×	B	2.48	
F41	i	?	2	○	×	×	-	35.0	-	1・3	28.0	2.5	1	24.0	2.2	3	×	A C	2.80	
F42	i	2	?	○	×	×	○	34.8	-	3	-	2.1	1	24.3	2.2	3	×	AB	2.60	
F43	i	2	?	○	×	×	○	35.0	-	13	*26.5	2.0	1	23.5	2.2	3	×	ABCD	2.98	凸面にも糸切痕?
F44	i	2	2	○	×	×	○	-	21.0	1	26.5	2.2	1	-	-	-	×	CD	1.66	
F45	i	?	1	○	×	×	○	-	25.4	3	-	-	-	-	2.2	2	×	A	1.06	
F46	i	2	?	×	×	×	○	-	10.2	3	26.7	2.4	3	-	-	-	×	C	0.88	
F47	i	2	2	○	×	×	-	-	10.5	3	-	-	-	24.0	2.1	2	×	AB	0.94	狭端のみ残存、タタキ板に紐痕
F48	i	?	2	○	×	×	×	-	16.1	1・3	-	-	-	25.5	1.8	2	×	AB	1.28	
F49	i	5	2	○	×	×	○	-	15.0	1	-	-	-	26.5	2.3	1	×	AB	1.52	
F50	i	2	2	×	×	×	×	-	14.2	-	-	-	-	-	2.2	-	×	A	0.70	
F51	i	2	2	×	×	×	×	35.0	-	1	-	2.3	1	-	-	3	×	B D	1.28	
F52	i	2	2	○	×	×	○	-	17.5	2	-	-	-	24.7	2.7	3	×	AB	1.82	
F53	i	2	2	○	×	×	○	-	21.0	1	-	1.8	1	-	-	-	○	D	0.64	
F54	i	2	?	○	×	×	×	-	21.5	1	-	-	-	-	2.2	3	×	-	1.38	
F55	i	2	?	○	×	×	×	-	16.5	1	-	-	-	-	2.3	3	×	B	1.16	
F56	i	2	?	○	×	×	×	-	15.5	1	-	-	-	24.0	2.3	3	×	AB	1.28	
F57	i	2	2	○	×	×	-	-	25.9	1	-	-	-	22.0	1.5	3	×	-	1.80	
F58	i	4	2	×	×	×	-	-	6.9	1	24.0	2.1	1	-	-	-	×	D	1.10	
F59	i	1	2	○	×	×	×	-	22.0	3	-	-	-	-	1.5	2	×	B	1.34	狭端に紐痕
F60	i	2	2	○	×	×	×	-	28.0	3	-	-	-	-	2.1	1	×	A	1.64	
F61	i	2	2	○	×	×	○	34.8	-	2	26.8	1.8	1	-	1.9	3	×	A D	2.48	広端・側面に綴じた布端
F62	i	lor2	2	○	×	×	○	-	18.0	1	-	-	-	23.8	2.3	3	×	AB	1.14	
F63	i	?	?	×	-	×	○	-	11.0	1	-	-	-	-	2.0	1	×	A	0.74	
F64	i	?	2	○	-	×	○	-	18.8	2	-	-	-	-	2.2	1	×	-	1.09	
F65	i	?	?	○	×	×	○	-	18.8	2	-	-	-	-	2.2	3	×	B	1.12	
F66	i	lor2	2	×	×	×	○	-	21.7	2	-	-	-	*24.8	2.6	3	×	AB	1.78	
F67	i	2	?	○	×	○	○	36.1	-	1・3	-	-	1	-	1.4	2	×	D	2.12	側面に布端
F68	i	?	?	○	×	×	○	-	17.0	1	-	-	-	-	1.6	2	×	A	0.82	磨滅ひどい
F69	i	2	2	○	×	×	×	34.3	-	-	-	2.0	1	-	2.5	3	?	-	1.36	
F70	i	1	2	×	×	○	○	-	16.1	-	-	2.3	1	-	-	-	×	C	1.02	広端に紐痕
F71	iiia	1	2	○	×	×	×	-	16.5	3	-	2.3	2	-	-	2	×	ABC	1.46	
F72	iiia	1	2	○	×	×	×	33.2	-	3	24.6	1.7	2	18.3	1.4	2	×	A CD	2.16	

<凡例>

復原値 … \*

遺存していないなどで計測不能・判断不能… -

タタキの方向… 1：狭端から 2：狭端から複数回 3：広端から 4：広端から複数回

5：狭端後広端側から 6：広端後狭端側から

タタキの向き… 1：左→右 2：右→左

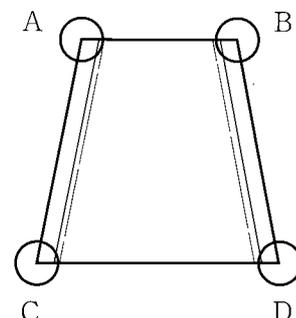
布端処理 … 1：まつり縫い 2：未処理

端面形状 … 1：未調整、成形台のあたりの痕跡有り

2：ケズリ

3：凹面ケズリ・面取り

残隅 … 凹面から見た各隅をA・B・C・Dとする（右図参照）



# 第7章 建物所用瓦の分析

## 第1節 基壇建物に伴う瓦の分析

IV区から出土した瓦の内、上層のものや下層の遺構内から出土したもの、後の中世の井戸などによって乱されていると考えられるものなどを除いた330箱（TS28コンテナ）を対象に、統計処理作業を行った。取り扱った資料は、IV区基壇建物周辺に堆積する瓦で、瓦群、瓦群北・東・下、北からの落ちなどとして取り上げたものである。また、これらの瓦群は西から1～5区の小区に区分して取り上げたが、1区のは、築地に接近しており小片が多いため、作業からは除いている。これらの瓦は基壇建物に伴う瓦として取り扱うことが許されるものとする。

### 1. 軒瓦の出土数

軒瓦はすでに抽出されており、IV区からの出土総点数は外縁部分の小片や瓦当が剥落したものを除くと、軒丸瓦351点、軒平瓦212点を数える。この中から上面出土のものや下層の遺構内から出土したものなどを除くと、

軒丸瓦289点（内訳 KNM 1 - 19点、KNM 2 - 32点、KNM 3 - 3点、KNM 4 - 235点）

軒平瓦174点（内訳 KNH 1 - 116点、KNH 2 - 4点、KNH 3 - 49点、不明 - 5点）となる。

但し、軒瓦も破片のものが多いため、瓦当部の面積を計測し（註1）、完形品の瓦当面積の平均値で除する作業をおこない、完形品に換算した数値を求めた。この数値は理論上、実数よりも少なくなる。

その結果、軒丸瓦については、

KNM 1 で  $1334.0\text{cm}^2 \div 214.1\text{cm}^2 = 6.23$  で、切り上げて7点。

KNM 2 で  $1349.0\text{cm}^2 \div 231.5\text{cm}^2 = 5.83$  で、6点。

KNM 3 では  $307.4\text{cm}^2 \div 180\text{cm}^2 = 1.71$  で、2点。

KNM 4 では  $13013.0\text{cm}^2 \div 233.5\text{cm}^2 = 55.73$  で、56点となり、

軒丸瓦の瓦当面積比換算個体数は合計で71点となる。

同様の作業を軒平瓦で行うと、

KNH 1 では  $1958.3\text{cm}^2 \div 155.2\text{cm}^2 = 12.62$  で、13点。

KNH 3 では  $2066.0\text{cm}^2 \div 120.0\text{cm}^2 = 17.22$  で、18点。

KNH 2 は  $154.1\text{cm}^2$  で、1点となり、

軒平瓦の瓦当面積比換算個体数は合計で32点となる。

また、KNH 1・2では瓦当の紋様の内外区を分ける界線の四隅を数え、4で割る作業をおこなったところ、KNH 1が26点、KNH 2が2点と算出できた。KNH 3は三日月形の瓦当面であるため界線の両端の二隅を数え、2で割ると、17点が算出でき、合計で軒平瓦45点となる。

### 2. 丸瓦・平瓦の出土数

丸瓦・平瓦の統計処理作業は各コンテナ内の摩滅が著しいものや、丸瓦・平瓦の判別すらできない小片を除いて、丸瓦と平瓦に分類した。

丸瓦は総重量を計測し、また、総破片数、広端部隅数、狭端部隅数を数えた。同時に点数の少ない玉

縁式丸瓦の玉縁部の破片点数も数えた。玉縁式丸瓦は丸瓦6199片中198片で、約3.19%の比率で含まれている。これは偶数ではなく判別しやすい玉縁部の破片の数量なので実数は異なるが、2割を超えるものではなからう。

平瓦は総重量を計測、また、総破片数、広端部偶数、狭端部偶数を数えた。同時に点数の少ない縄タタキをもつ平瓦の破片数も数えた。縄タタキをもつ平瓦は6533片中522片あり、約7.99%の比率をもつ。(註2)。

計測した瓦の総数は、丸瓦6199片、1107.2kg、平瓦6533片、1625.0kgとなる。

丸瓦の計算にあたっては、玉縁式丸瓦は出土比率が低く、完形に近い個体が少ないことから考慮しなかった。行基式丸瓦の平均重量が2.2kgと算出できたので、丸瓦総重量を除すると、丸瓦の重量比換算個体数504点の値が求められる。

また、丸瓦6199片中、広端偶数463、狭端偶数701、不明偶数67を数えた。

多いほうの数値で代表させ、2で割った数値を個体数とする偶数計算法では、丸瓦351点の値が得られる。

合計値を4で割った数値を個体数とする偶総数計算法では、丸瓦308点の値が得られた。

平瓦は完形に近い瓦の重量が3.0～3.7kgと型式差や個体差が著しいが、平均値を求めると3.3kgと算出できた。これにより総重量を除すると、平瓦の重量比換算個体数493点の値が求められる。

平瓦6533片中、広端偶数440、狭端偶数627、不明偶数157を数えた。多いほうの数値で代表させ、2で割った数値を個体数とする偶数計算法では、平瓦314点の値が得られる。

合計値を4で割った数値を個体数とする偶総数計算法では、平瓦306点の値が得られた(註3)。

### 3. 瓦から見た建物の構造

得られた数値から軒丸瓦：丸瓦の比率を求めると、

瓦当面積比換算軒丸瓦個体数：重量比換算丸瓦個体数=71：504≒1：7.1

瓦当面積比換算軒丸瓦個体数：偶数計算法丸瓦個体数=71：351≒1：4.9

瓦当面積比換算軒丸瓦個体数：偶総数計算法丸瓦個体数=71：308≒1：4.3

となり、丸瓦の数値が最も高いもので、軒丸瓦1点に丸瓦7点に対応している。

同様に軒平瓦：平瓦の比率を求めると、

瓦当面積比換算軒平瓦個体数：重量比換算平瓦個体数=32：493≒1：15.4

瓦当面積比換算軒平瓦個体数：偶数計算法平瓦個体数=32：314≒1：9.8

瓦当面積比換算軒平瓦個体数：偶総数計算法平瓦個体数=32：306≒1：9.6

瓦当偶数計算軒平瓦個体数：重量比換算平瓦個体数=45：493≒1：10.9

瓦当偶数計算軒平瓦個体数：偶数計算平瓦個体数=45：314≒1：7.0

瓦当偶数計算軒平瓦個体数：偶数計算平瓦個体数=45：306=1：6.8

となり、軒平瓦1点に平瓦7～16点に対応している。

通常、金堂などの総瓦葺建物の軒丸瓦：丸瓦は1：30～40の比率であり、塔などの多層の建物で軒完全に軒瓦を使用すると、1：6～7の比率になる(註4)。

今回検出された建物は、用いられた軒瓦の比率が丸瓦・平瓦に対して高く、塔などの多層の建物であ

ることを示唆している。

Ⅳ区で検出された基壇は上部を削られてはいるが、礎石瓦葺建物の基礎部分であり、現状では上幅約9.0m、裾幅約11.3m、高さは最も高い位置で約0.7mを測るが、削平前の高さは更に高く、また、上幅は狭くなることが想定される。

また、建物の南半部の状況は、Ⅲ区においてSK302などで瓦の出土は認められるものの、Ⅳ区のように近接して建物が存在したことを窺わせるものはない。削平が著しいことを勘案しても、Ⅳ区で検出された基壇建物がⅢ区まで延びていた状況は認められない。このことから、この基壇建物はⅣ区から県道下までの範囲に収まるものと考えられる。つまり、上縁幅9m以下の正方形に近い基壇上にある建物であったことが推定される。

また、隅平瓦や隅木蓋瓦の出土から、隅棟のある寄棟や入母屋、宝形造などの屋根であることが想定できる（註5）。以上のことから、Ⅳ区で検出された瓦葺の基壇建物は塔であったと推測できる。

## 第2節 軒瓦の分析

### 1. 軒瓦の出土比率

軒丸瓦は、Ⅰ区からⅣ区にかけて総数405点出土しており、4型式に分類できた。

軒丸瓦の小片を含めた各型式の出土比率は、

KNM1が37点で9.14%（細分内訳 KNM1aが7点、KNM1bが6点、不明24点）。

KNM2が41点で10.12%（細分内訳 KNM2aが4点、KNM2bが3点、不明34点）。

KNM3が4点で0.99%。

KNM4が322点で79.51%（細分内訳 KNM4aが12点、KNM4bが6点、KNM4cが18点、KNM4dが6点、KNM4eが2点、不明278点）。

型式不明が1点で0.25%となる。（図19左）

ちなみに、瓦当部分の面積を比較すると、KNM1が12.16%、KNM2が7.78%、KNM3が1.94%、KNM4が78.04%となる。（図19右）

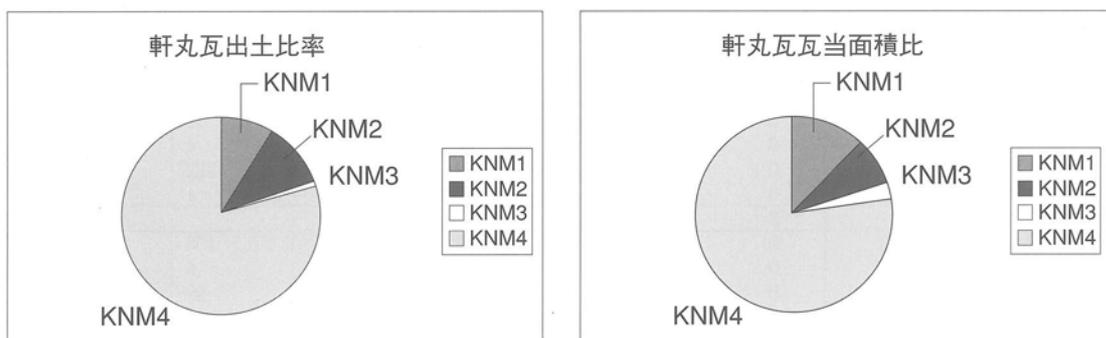


図19 軒丸瓦出土比率

軒平瓦は総数239点出土しており、3型式に分類できた。小片を含めた出土比率は、

KNH1が168点で70.29%。

KNH2が6点で2.51%。

KNH3が59点で24.69%。

型式不明が6点で2.51%となる。（図20左）

ちなみに、瓦当面積比では、KNH 1 が67.17%、KNH 2 が2.31%、KNH 3 が29.38%、不明が1.19% となる。(図20右)

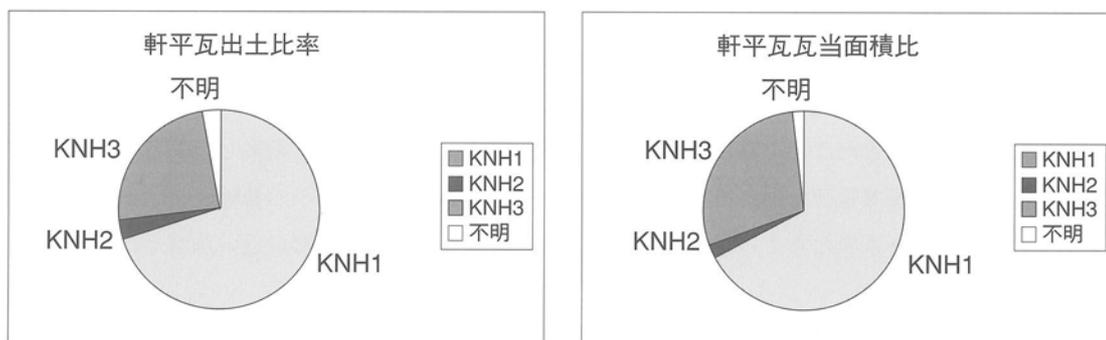


図20 軒平瓦出土比率

今回検出できた遺構の中で軒瓦を使用した建物は、IV区の基壇建物に限られている。軒瓦の9割近くはIV区から出土しており、また、III区出土のものもIV区基壇建物からもたらされたと考えられるなら、今回出土した軒瓦の内、97%以上がIV区基壇建物に伴うものと考えられるが、調査区外の別の建物跡からもたらされた可能性も残されている。

総じて軒瓦の型式数が限られていることが指摘できる。これは一つの建物跡のみを調査したことにもよるが、寺院の存続期間が短かったことも大きな要因であろう。寺院創建から廃絶までが短期間であった場合と、途中で断絶期間が挟まれた場合が考えられる。

また、播磨国府系瓦の古大内式の軒丸瓦 (KNM 3) と軒平瓦 (KNH 2) を除くと、軒瓦が他の寺院では全く認められないことも指摘できる。

軒瓦の主体を占める型式は、軒丸瓦ではKNM 4であり、軒平瓦ではKNH 1である。基壇建物に用いられた主たる軒瓦はこの両者であり、この建物の当初の造営に用いられた瓦はこの二種とすることができる。IV区基壇周辺の瓦群に限ってもKNM 4 が81.31%、KNH 1 が66.67%を占めており、同じ傾向を示している。

表11 軒瓦出土数

種別	型式	I区	II区	III区	IV区	地区不明	計	計
軒丸瓦	KNM1	3	1	6	27	0	37	
軒丸瓦	KNM2	0	0	2	38	1	41	
軒丸瓦	KNM3	0	0	1	3	0	4	
軒丸瓦	KNM4	0	0	35	282	5	322	
軒丸瓦	不明	0	0	0	1	0	1	
	計	3	1	44	351	6		405
軒平瓦	KNH1	0	1	21	146	0	168	
軒平瓦	KNH2	0	0	0	6	0	6	
軒平瓦	KNH3	0	1	5	53	0	59	
軒平瓦	不明	0	0	0	6	0	6	
	計	0	2	26	211	0		239

#### 播磨国府系瓦

この中で、軒丸瓦のKNM 3は東約700mの地点の布勢駅家でも多く用いられているNM01型式である(山根1986)。これは中房に1+5の蓮子を配した仮称小犬丸式と呼ばれるものであり、平安時代初期よりはさかのぼり得ないとされている(今里1982)。

同じく軒平瓦のKNH 2も布勢駅家で最も多く用いられているNH01型式であり、範傷が一致するもの

が確認されていることから同範のものが含まれる。

これらは「播磨国府系瓦」の中の「古大内式」のセットであり、中でも後行するもの（小犬丸式）で、布勢駅家における主たる軒瓦である。古大内式軒瓦は播磨における山陽道駅家推定地のほとんどからこのセット或いは一方が出土しており、また、播磨国庁と推定されている姫路市の本町遺跡からも出土している。これらの播磨国における官衙の他に、播磨国分僧寺や国分尼寺からも出土しており、まさしく「播磨国府系瓦」の主軸をなす軒瓦である。

また、この古大内式瓦は明石市の太寺、姫路市見野、同市之郷、同辻井、赤穂郡上郡町与井などの白鳳期創建の私立系寺院址からも出土しており、これらの寺院が奈良末から平安初期に定額寺に列せられていたものと解釈されている（今里1985）。今回の小犬丸中谷廃寺からの出土はその類例を追加したことにはなるが、これらのセットは、出土比率が2%に止まり、またⅣ区からのみ出土している。Ⅳ区の基壇建物（塔）の補修瓦として持ち込まれたと考えるのが妥当であろう。しかしながら、播磨国庁主導の下成立したとされる「播磨国府系瓦」そのものが用いられた時期に、小犬丸中谷廃寺がそれまでと大きく変貌した可能性は高い。

### 軒丸瓦

KNM 4 は最も出土数の多い型式である。更に5段階に細分することができ、瓦当範を彫りなおして軒丸瓦を作り続けていたことがわかる。この軒丸瓦の瓦当紋の作範にあたっては、一部に子葉を囲む輪郭線が残り、間弁を子葉に改変した痕跡が見られることから、子葉を囲む輪郭線や中房まで届く大きな間弁をもった単弁蓮華紋の紋様をもつ範を改範した可能性が高い。この紋様はKNM 1 やKNM 2 の内区紋様の特徴と一致している。その改範元の範がKNM 1 ・KNM 2 である確証は得られなかったが、同じ系列にのるものであり、KNM 4 はKNM 1 ・KNM 2 の後行形式とすることができる。

素紋縁で細弁をもつものとして、KNM 3 である小犬丸式やその先行型式である古大内式を模して作範された可能性も考えられる。古大内式軒丸瓦から派生した後続型式には、同じ旧龍野市の布勢駅家軒丸瓦や旧新宮町香山廃寺軒丸瓦B類（今里1987）、旧御津町碓岩南山瓦窯軒丸瓦B・C類（今里2000）など多くみられる。先に述べたように新しく範を興したのではなく、改範であるために弁数が多いなどの異同はあるが、何故改範が要求されたかの背景には、播磨国庁の影響といった大きな事由が隠されているのではなからうか。仮に古大内式軒丸瓦を目指したものであれば、その時期は8世紀末をさかのぼり得ないことになる。

KNM 4 b段階からの柵型の使用による外枠二段型範も、NM01型式と共通する技法である。但しこの技法は川原寺の段階で用いられた可能性が指摘されており（近藤1982）、播磨では姫路市市之郷廃寺の軒丸瓦01形式（7世紀後半）で確認されている（山田2004）。

KNM 1 及びKNM 2 は共に面違い鋸歯紋縁をもつ単弁の軒丸瓦で、KNM 1 の小片が布勢駅家で出土している以外は共に同紋のものの類例は知りえなかった。（註6）弁の扁平化や鋸歯紋の退化などからKNM 1 からKNM 2 への時間差を伺うことができる。

これらは面違い鋸歯紋縁をもつことから広い意味で川原寺式軒丸瓦に属するものと考えられるが、内区における蓮弁は、複弁ではなく単弁であり特異な紋様である。播磨における川原寺式軒丸瓦については複弁八葉蓮華紋で、蓮子を二重に配列するものに限定されるが、鋸歯紋縁から素紋縁へ、蓮子の周囲の有るものから無いものへ、蓮子の多いものから少ないものへと推移したものとされている（今里1997）。

KNM1・KNM2では面違い鋸歯紋縁と古相を示すが、蓮子は少なく、周環はない。

京都府相楽郡山城町高麗寺跡の、川原寺と同範のものから変遷した高麗寺系列軒丸瓦では、中房が小さくなり、三重に配していた蓮子を二重に配するようになる。最も新しいと考えられるKMM26では面違い鋸歯紋を残しながら、単弁の十六弁となり、この変遷は670年前後から7世紀末の間に見られるものとされている。この後、奈良時代の補修瓦では突線鋸歯紋や凸鋸歯紋で外縁を飾るようになる（中島1989）。この単弁への変化は、間弁が省略され複弁同士がくっついたためと思われるので、KNM1の単弁とは成り立ちが異なるが、面違い鋸歯紋は奈良時代には用いられなくなることがわかる。

面違い鋸歯紋縁をもつ軒丸瓦は、播磨では龍野市（現たつの市）伝大道寺、同小神、加西市吸谷、飾磨郡香寺町溝口、姫路市姫山、同多田、加古川市野口、小野市広渡寺、揖保郡揖保川町（現たつの市）金剛山などで見られる。また、面違い鋸歯紋縁複弁六葉蓮華紋を配する鷗尾が姫路市下太田や伝伊勢村から出土している（今里1985）。

これらの中で、伝大道寺出土のものが、最も川原寺式に忠実なものとされている。出土地は小犬丸と同じ揖西町で、山中の小平坦地に単堂形式の寺院があったと推定されている（今里1978）。蓮弁などを見ても直接の祖形とはならないが、周辺の地域で伝大道寺出土のものとKNM1との間を埋めるものを見出すことも困難である。面違い鋸歯紋だけを見ると、KNM1は伝大道寺出土のものに比べて退化が見られるが、まだ立体的な面違い鋸歯紋というものを理解して範を彫っている。理解できないとKNM2のような刻み目様になってしまうのであろう。刻み目様の面違い鋸歯紋は小野市広渡寺廃寺では平安時代まで残るといふ（高井1979）が、播磨においても大方の面違い鋸歯紋縁は奈良時代になると見られなくなるとしてよいだろう。

丸瓦の接合方法は、KNM1・2が瓦当外周に沿った位置に接合しているのに対して、KNM3・4では瓦当のかなり内側の位置に接合している。KNM1・2では丸瓦の広端部凸面や凹凸両面にケズリを施して接合している。これに対してKNM4では丸瓦の広端部は不調整で、技法の簡略化と捉えることができる。KNM3では接合状況は観察できなかったが、布勢駅家出土のものでは丸瓦の広端部凸面側にケズリを施している。

補充粘土もKNM1・2に比べるとKNM4では内外に多く使用しており、そのため丸瓦凹面に及ぶ位置まで縦方向のナデの調整が見られる。この調整はKNM3でも認められる。KNM1・2の瓦当裏面の調整は、下半に横方向の丁寧なナデを施して堤状突帯や中膨らみの形状を作り出している。これに対してKNM4では丸瓦凹面までの縦方向のナデや横方向のケズリなど調整方法が異なり、仕上がりが粗雑な感は否めない。調整方法を含めた技法から見て、KNM1・2とKNM3・4間には大きな差異が認められ、簡略化・粗雑化からみて前者から後者へと時期的変遷が認識できる。

以上の点から、軒丸瓦はKNM1、KNM2、KNM3、KNM4の順に新しくなるものと考えられる。

## 軒平瓦

軒平瓦ではKNH2が播磨国府系瓦古大内式であり、範傷が現れた段階のものが認められる。

KNH1は中心飾りなどその紋様の特徴からKNH2と同系統であることがわかる。外区の珠紋が小さいことや、蕨手紋の巻きが深く、蕾形が楕円形であることなど古相も見られるが、右端に紋様の省略が見られることや、瓦当面より幅の小さい範であることなど（註7）から、KNH2より後行するものと考えられる。但し、KNH2－布勢駅家KH01で特徴的に見られる平瓦部凹面両側面に残された棒状圧痕（乾燥時

の2本の棒の痕跡と推測されている) など播磨国府系瓦に特徴的な技法は認められず、製作技法面での系譜は認められない。

KNH 3 は以上の2型式とは全く別の系統に属している。この三日月形の瓦当に極度に便化した唐草紋を施した軒丸瓦は、紋様からの系譜は辿り難いが、類似した幾何学紋的な紋様をもつものは播磨でもいくつかわかる。加古川市西条廃寺、西脇市の八坂廃寺や上ノ段遺跡、加東郡社町の喜田・清水遺跡、宍粟郡山崎町（現宍粟市）の千本屋廃寺、揖保郡新宮町（現たつの市）の香山廃寺などからは曲線の間珠紋を散らした瓦当紋をもつ軒平瓦が出土している。

距離的にも最も近い香山廃寺出土のものは、KNH 3 とは炭手の変じた曲線の巻く方向が上下逆であるが、2つの珠紋を曲線内に配すなどの類似点があり、9世紀の中葉あたりのもたとされている。(今里1986) この瓦は凸面にタタキを残す点でもKNH 3 と似ており、顎部に直線状の圧痕も認められ、技法の面からも近い。KNH 3 もほぼ同じ時期のもたと見てよいのではなかろうか。このKNH 3 は出土点数からも補修瓦であることが推測され、軒丸瓦KNM 4 が幾度かの範の彫り直しをおこなっている過程の或る段階で採用されたものであろう。

以上のことから、軒平瓦はKNH 2、KNH 1、KNH 3 の順に新しくなるものと考えられる。

### 第3節 丸瓦・平瓦の分析

#### 丸瓦の分析

丸瓦の大多数が行基式丸瓦であることは、すでに述べた。築地では96%以上が行基式丸瓦で、建物でも96%以上が行基式丸瓦である。玉縁式丸瓦は建物の目立たない位置の数列分、補修の際に用いられたものであろう。もしかしたら、KNM 3 を軒先に使う瓦列にだけ使用されたのかもしれないが、出土状況からは判断できなかった。

KNM 4 の軒丸瓦に接合できた丸瓦も行基式丸瓦であったということは、この小犬丸中谷廃寺では行基式丸瓦を選択し続けていたことになる。創建時の丸瓦や軒丸瓦が行基式を使用していたことが、小犬丸中谷廃寺における丸瓦採用のひとつの方向性を決定したのであろう。これは軒丸瓦の供給においても同じ系統の範を彫り直して使用していたことと共通した背景をもつものではなかろうか。また、先に推測したようにKNM 4 が8世紀末であるなら、播磨においても奈良時代後半まで行基式丸瓦が用いられていた確実な例を示すことになるが、前代に用いられていた型式を引き続き採用したというこの寺院だけの内的理由であるため、あくまでも特異な例であろう。

布勢駅家にも行基式丸瓦が併存している(岸本2004) という。布勢駅家の正式報告書が未刊であるため複数ある瓦葺き建物のうち一棟が行基式丸瓦を用いたものか、玉縁式丸瓦の中に補修的に用いられたものか詳細は不明であるが、昭和58年度、昭和60年度調査分の丸瓦はすべて玉縁式丸瓦である。基本的に播磨国における駅家の丸瓦は玉縁式丸瓦が主流であり、小犬丸中谷廃寺とは全く別の系列であることがわかる。

#### 平瓦の分析

平瓦には桶巻き作りのものと一枚作りのものが存在する。正確な出土比率は測らなかったが、桶巻き作り平瓦は、平瓦全体の2割以下であろう。一般に北部九州など一部の地域を除けば、日本では8世紀には桶巻き作りから一枚作りに移行している(佐原1972、上原1997)。

播磨国内の状況を見てみると、布勢駅家では昭和58・60年度調査分では桶巻き作りの平瓦は確認されておらず、すべて凸型台の一枚作りによるものとされている。その後の調査で桶巻き作りのものが出土している可能性はあるが、基本的に8世紀の中頃以降に瓦葺に整備された駅家では一枚作り平瓦を用いているものと考えられる。

多哥寺遺跡（多可町中区）では7世紀代には桶巻き作り平瓦を用いている。また、8世紀代の上ノ段遺跡（西脇市）では桶巻き作り、一枚作り両者が見られ、塔跡出土のものは一枚作りが多数を占めているが、桶巻き作りのものは近くの八坂廃寺から持ち込まれたものと考えられている。

加古川市野口廃寺では桶巻き作りと一枚作り両者が出土している。この寺は白鳳時代末に創建され、播磨国府系瓦も出土していることから後に定額寺のひとつとなったとされている（西川2004）。

姫路市市之郷廃寺では桶巻き作りが主となるが、一枚作りも見られるようである。7世紀第3四半期に創建され、9世紀中葉まで存続した寺院であり、播磨国府系瓦が出土していることから定額寺に列せられた可能性がある。

播磨においても平瓦の第1次成形は桶巻き作りから一枚作りへ8世紀代で移行していることがわかる。少なくとも播磨国府系瓦が出土する官衙や寺院では一枚作りが用いられるようになることは確実であろう。播磨における軒平瓦の段顎から曲線顎への転換や、桶巻き作りから一枚作りへの転換は、おそらく范型を伴って中央から導入されたもので、730年を相前後する年代が考えられている（今里1997）。平瓦の一枚作りへの転換はさらに遡ることが考えられる（註8）。

平瓦のうち、タタキ⑬種は熨斗瓦にも用いられているものであるが、布勢駅家でも熨斗瓦や平瓦で確認できた。特に平瓦では南西部にあった礎石建物において主体となるAⅢa種のタタキと同じものと思われる。このタタキは斜行する刻線に比べて縦位の刻線が太く、叩き板の1ヶ所に×形の刻線がはいるので、特徴的である。この他、②種がAⅠa種に該当する可能性が高い。①種と思われるタタキをもった小片も見られるが、確定できなかった。②①種いずれも少数の出土である。桶巻き作りに伴う④～⑥種や基壇建物で主体となる③種のもは確認できなかった。

タタキの比較検討が正しいとすれば、小犬丸中谷廃寺で用いられた平瓦の中で、古相を示す桶巻き作りのものと、最も新しいと思われる軒平瓦KNH3に伴うものと同じタタキの平瓦は布勢駅家では見られないことになる。縄タタキ⑭⑮種や丸瓦では検討をおこなっていない。

先に述べたようにKNH3が9世紀中頃とすれば、この軒平瓦に用いられたタタキ③種をもつ平瓦も同時期かそれ以前に用いられたものであろう。

以上のように、軒瓦については「播磨国府系」に系譜を求めることができる一群と、全く別の紋様をもち、技法的にも大きく異なる軒丸瓦の型式が存在することがわかった。さらに丸瓦・平瓦でも大きく2群に分かれることが判明し、小犬丸中谷廃寺造営において大きな転機があったことが推測できる。

#### [註]

註1 瓦当部の拓影から、コンピュータープランメーター（株小泉測機製作所 PLACOM KP-90）を用いて計測し、2回の計測の平均値を使用した。

註2 刻線によるタタキごとの点数も数える予定であったが、タタキの分類が完成していなかったため断念した。作業はひとりで短期間におこなったので、ある程度の傾向は把握することができた。

註3 丸瓦と平瓦の比率が1：0.89～0.98とほぼ同数か、丸瓦の数量が多くなる。飛鳥藤原地域の寺院址あるい

は宮殿中枢部では、1：3を前後する数値を示しており（花谷2002）、平瓦の比率が多くなるのが通例である。平瓦の凹面に観察できた風蝕痕のほとんどが全長の半分以上を占めており、平瓦の葺足が長く、平瓦2枚重ねを採用していたことがわかる。このことにより、通常よりも平瓦の数量は少なくはなるが、丸瓦より少なくなることはない。

当初、統計処理から除外していたIV区上面出土のものや下層遺構出土のものなどの内、破片の比較的大きなものが見られる一部のコンテナ68箱についても同様の作業をおこなった。

丸瓦 965片、重量160.2kg、広端隅数57、狭隅数108、不明隅数18、玉縁数42片

平瓦 1241片、重量295.5kg、広端隅数66、狭隅数90、不明隅数86、縄タタキ数100片

また、Ⅲ区の築地側溝や柱穴出土以外の包含層出土などのコンテナ12箱についても同様の作業をおこなった。

丸瓦 141片、重量21.3kg、広端隅数11、狭隅数16、不明隅数0、玉縁数4片

平瓦 211片、重量48.9kg、広端隅数8、狭隅数22、不明隅数2、縄タタキ数21片

註4 上原真人氏のご教示による。

また、軒丸瓦破片数：丸瓦破片数=289：6199≒1：21.4、軒平瓦破片数：平瓦破片数=174：6533≒1：37.5の数値を挙げておく。今後、寺院址などの調査において、破片数を数える作業だけでも何らかの傾向を認めることができる可能性を考えたからである。軒丸瓦・軒平瓦は破片の接合を行っている。

註5 道具瓦には熨斗瓦・隅平瓦・隅木蓋瓦がある。これらはいずれも焼成前の平瓦に加工して成形したもので、普通の平瓦や丸瓦を焼成後に加工したものは確認抽出できなかった。IV区基壇建物に用いられた瓦の中にももっと多くの熨斗瓦やその他の道具瓦が存在したはずである。統計処理をおこなった平瓦・丸瓦の中にはこれらの道具瓦や、一部の軒平瓦や軒丸瓦の狭端部の破片が含まれている。

布勢駅家では均正唐草紋軒丸瓦のNH02Bに平瓦部左隅を焼成前に切り取った隅軒平瓦が1点出土しているが、本遺跡では確認できなかった。平瓦部左隅を割ったKNH1（T124）が1点出土しており、可能性を残している。

註6 4分の1ばかりの破片であったためか、播磨国府系瓦の国分寺式軒丸瓦からの伝流が考えられている（今里1992）が、国分寺式軒丸瓦は素紋の直立縁であり、中房径が小さく、間弁が中房まで達していないなど新しい要素が見られる。

註7 右端の紋様の省略や瓦当両端まで達しない紋様範であっても、実際に軒先に葺いた場合には軒丸瓦によって隠されてしまう部分が省略されている。姑息ではあるが、極めて合理的であり、瓦のことを良く知った人間が範作製に参画していることがわかる。

註8 桶巻き作り平瓦に用いられた斜格子タタキ④⑤⑥は、写真・拓本で見たとく奥村廃寺軒平瓦A1類に用いられたタタキと斜格子や用いられ方が似ている。この軒平瓦A1類はへら描き偏向唐草紋の瓦当をもつもので、7世紀末葉のものとしてされている（今里1997）。

[参考文献]

- 五十川伸矢 1985「平瓦の数量計測方法の分析」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和58年度 京都大学埋蔵文化財研究センター
- 今里幾次 1978「龍野付近の古代寺院と駅制」『龍野市史』第1巻 龍野市  
「竜野付近の古代寺院」(『播磨考古学研究』1979再録 今里幾次論文集刊行会)
- 今里幾次 1984「龍野近傍の古代寺院」『龍野市史』第1巻 龍野市
- 今里幾次 1985「播磨・金剛山廃寺の古瓦」『兵庫史の研究』『松岡秀夫傘寿記念論文集』刊行会
- 今里幾次 1987「播磨・香山廃寺の古瓦」『香山』新宮町文化財調査報告7 新宮町教育委員会
- 今里幾次 1988「古代寺院とその檀越」『加古川市史』第1巻 加古川市  
「加古川市の古代寺院とその檀越」(『播磨古瓦の研究』1995再録 真陽社)
- 今里幾次 1992「龍野市小犬丸遺跡の古瓦」『布勢駅家』龍野市文化財調査報告8 龍野市教育委員会
- 今里幾次 1997「龍野市奥村廃寺の古瓦」『奥村廃寺』龍野市文化財調査報告18 龍野市教育委員会
- 今里幾次 2000「律令社会の変動」『御津町史』第1巻 御津町
- 岩本正二・西口寿生 1977「飛鳥・藤原地域の出土遺物」『考古学雑誌』第63巻第1号
- 上原真人 1984『恭仁京跡発掘調査報告』瓦編 京都府教育委員会
- 上原真人 1987「平安貴族は瓦葺邸宅に住んでいなかった」『歴史学と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念事業会
- 岸本一郎 2001「上ノ段遺跡と八坂廃寺—まともにかえて—」『上ノ段遺跡(野村廃寺)発掘調査報告書』  
西脇市文化財調査報告書第11集 西脇市教育委員会
- 高井悌三郎 1979「軒瓦」『播磨広渡寺廃寺跡発掘調査報告』小野市教育委員会
- 中島 正 1989「軒瓦からみた高麗寺の沿革」『史跡 高麗寺跡』山城町教育委員会
- 中谷雅治・上原真人・大槻真純 1977「恭仁京昭和52年発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』(1978)京都府教育委員会
- 西川秀樹 2004「考察」『野口廃寺発掘調査概要報告書』加古川市文化財調査報告19 加古川市教育委員会
- 西川雄大 1997「出土瓦の検討」『多哥寺遺跡Ⅱ』中町文化財報告15 中町教育委員会
- 花谷 浩 2002「出土瓦をめぐる諸問題」『吉備池廃寺発掘調査報告』奈良文化財研究所創立50周年記念学報第68冊 奈良文化財研究所
- 菱田哲郎 1994「多哥寺創建瓦について」『多哥寺遺跡』中町文化財報告9 中町教育委員会
- 菱田哲郎 2002「考古学から見た古代社会の変容」『日本の時代史5 平安京』吉川弘文館
- 山田清朝 2004「瓦」『市之郷遺跡』兵庫県文化財調査報告第286冊 兵庫県教育委員会
- 山根実生子 1986「瓦」『小犬丸遺跡Ⅰ』兵庫県文化財調査報告書第47冊 兵庫県教育委員会
- 恵那市教育委員会 1995『1100年ぶりに眠りからさめた幻の塔跡』正家廃寺発掘調査現地説明会
- 龍野市教育委員会 1997『奥村廃寺』龍野市文化財調査報告18
- 向日市教育委員会 1986『長岡京古瓦聚成』向日市埋蔵文化財調査報告書 第20集
- 平安博物館 1977『平安京古瓦図録』
- 埋蔵文化財研究会 1997『古代寺院の出現とその背景』第42回埋蔵文化財研究集会
- 第3回播磨考古学研究集会 2001『古代寺院からみた播磨』

以下の方々の教示・助言を得たが、充分咀嚼、活用できなかった。記して感謝すると共にお詫びする次第である。

(敬称略、順不同)

今里幾次、上原真人、岩戸晶子、菱田淳子、池田征弘

## 第8章 まとめと考察

### 第1節 小犬丸中谷廃寺と昌福寺について

小犬丸中谷廃寺は1996年度の確認調査で、初めて瓦が出土し、その後の調査によって、古代寺院址と認識された。それまでは、鎌谷木三次氏の「播磨上代寺院址の研究」でも、現在、布勢駅家とされている地点を小犬丸廃寺とされている。また、播磨の古代瓦研究の第一人者である今里幾次氏も認知されていなかった遺跡である。

ところが、実はここに寺院址があることは、地元の人々はご存知であった。1982年の小犬丸遺跡つまり、布勢駅家跡の発掘調査の際に、調査でお世話になっていた地元のおばさんが何気なく「わたしの家のそばでも瓦が出てくるよ」と話しておられた。そのときは、圃場整備が行われた際に、あちこちに瓦が散布されてしまったのだと思っていたが、今考えれば今回調査をおこなったこの小犬丸中谷廃寺のことだったのであろう（註1）。

寺院址が存在することを記録した江戸時代の文献が地元に残っていた。これは、内海雨川著「通俗鯉丸誌」（文化十四年）で、小犬丸自治会が平成5年に編集再録した「解説 通俗鯉丸誌」によって大変わかりやすく解説されている。

それによると、小犬丸（鯉丸）の宿、長尾、東村はもともと一村であった。小犬丸にある楠用山昌福寺は延暦二十三年（804年）の建立で、かつては七堂伽藍を誇り、いまの寺の上にあったが、嘉吉年間に兵火のために焼亡した。その後、中谷農家のうしろの山の麓に再興され、明和三年（1767年）には今の位置に下ろされ、東西四間、南北三間の御堂を建立した。と記されている。

また、今の寺の西、往来の所の田地の畔から、丸く浅い穴をほった大石が掘り出され、それは俗に伽藍石という大塔の真柱の石であるとしている。また、田の中や街道の土中に堂塔の屋根瓦の片面に波を彫った破片があり、いたって硬いものである、との記述も見られる。さらに今の寺の西方で田地普請の際に多量の瓦が掘り出されたことが記されており、その中に巴瓦の形をした鼠色の菊瓦が1点あり、その図が載せられている。それは軒丸瓦を表したもので、素紋縁をもち、子葉のある細弁十六弁蓮華紋を瓦当紋としてもつものと見て取れる。（図22）

この軒丸瓦は今回の調査で最も多く出土したKNM4として間違いないであろう。また、文献に見られる楠用山昌福寺は、現在も調査地点Ⅳ区の東約100mの位置にあり、県道姫路・上郡線ができるまではⅡ区・Ⅲ区間の里道にまで参道が続いていたらしく、石積みの小径が今も残されている。（写真図版47）おそらくこの文献が書かれた文化十四年（1817年）からはその位置は変わっていないと思われるので、文献に見える塔心礎や軒丸瓦が出土した地点は、今回の発掘調査区のⅢ区とⅣ区のあたりに該当するものと思われる。

この文献によって調査範囲の周辺に塔心礎が存在していたことがわかり、発掘調査で検出された基壇や築地塀、瓦群などの遺構は寺院址に関係したものであることは確実となった。また、第7章で述べたように、Ⅳ区で検出された多量の瓦を伴う基壇建物は、塔であることが推定された。これは塔心礎が掘り出されたことと符合し、ここに塔があったことを裏付けている。（註2）

## 第2節 出土遺物について

### 1. 土器について

発掘調査では、縄紋時代から近世に至る土器が出土しているが、寺院址や古墳を含めた小犬丸中谷遺跡の性格は大きく3時期に分かれる。それは、瓦葺の施設を構築した時期（小犬丸中谷廃寺期）と、その前後の時期である。出土した遺物から遺跡を概観してみる。

まず寺院以前には縄紋時代中期及び後期の土器が僅かではあるが出土しており、サヌカイト製の石器や黒曜石製の石器が出土している。遺構は不確かではあるが、陥し穴状の土坑などがその時期のものであろう。黒曜石製の石器は稀な出土である。（今里1952）（松本1978）弥生時代中期の土器も少量出土しているが、遺構は確認できなかった。

V区で確認された小犬丸中谷古墳は7世紀前半頃の小型の横穴石室墳と考えられ、周辺の崖面にも石室材様の石が露出していることから、小型墳複数基で一群を成していたものであろう。後の寺院造営に関わる氏族の墓とするには疑問が残る。I・II区からも古墳時代後期頃の須恵器片や金属器が出土しているが、その時期の遺構は特定できなかった。

次に小犬丸中谷廃寺に関する時期の土器について触れておきたい。一般に寺院址内からの土器の出土は少ない傾向にあり、本遺跡でも出土土器の量は多くはない。調査範囲内では、意図的に埋納されたものなどの一括性を示すような資料は見られないことから、溝や瓦群、包含層などの土器を含めて概観するほかない。そこでまず、築地側溝出土の土器を取り上げる。

築地側溝の埋土上層から出土した土器48・55が11世紀代とされ、築地側溝が完全に埋没し、築地本体も削平された段階の土器は12世紀以降のものである。側溝下層から出土した土器はそれらよりは古く、臆のように8世紀の前半にまで遡りうるものも見られるが、須恵器壺QやLは平城Vから平安Ⅱ古、稜椀は9世紀の第2四半期まで残る。このことから築地側溝埋土下層の土器は8世紀前半から9世紀中頃にかけてのものと判断される。遺構の性格上、溝掘削以前の遺物も含まれる可能性は残る。

瓦葺基壇建物周辺で出土した土器を概観すると、基壇上面の小柱穴からも小片ではあるが11～12世紀頃の土器が出土しており、築地塀と同様12世紀には建物は削平されたものと考えられる。瓦群内から出土した煮炊具が10もしくは11世紀のものであることから、遅くとも11世紀には寺院としての性格を失っていた可能性が指摘できる。

包含層出土の遺物の中には8世紀前半以前のものとしてもよい口頸部に波状紋をもつ須恵器甕などが含まれるが、きわめて少ない。これらの出土土器から概観すると、小犬丸中谷廃寺期は長く見て7世紀末から12世紀までであり、盛行する時期は8世紀中頃から9世紀後半であったと言えよう。

小犬丸中谷廃寺期に含まれる特徴的な土器がある。IV区から出土した鉄鉢形の須恵器（148・149）は佛鉢として用いられたものであろう。特に149は内面に暗紋風にヘラミガキを施す特殊なものである。

また、口縁部に煤が付着した須恵器杯（58・76）も仏事における灯明皿として用いられた可能性が高い。（木立1997）他にも獸脚や唐草紋で装飾した陶製宝塔なども寺院に相応しい遺物であり、これらは基壇建物内に納められていた可能性がある。

12世紀には寺院に関連した瓦葺の構造物はすべて削平され、集落が営まれた。掘立柱建物や井戸によって構成される集落は16世紀頃まで続き、一部には小鍛冶を有している。鉄滓や炉壁、鉄製品の多くはこの時期のものと考えられるが、一部には前代の寺院に伴った鍛冶が存在したことも考えられる。

## 2. 陶製宝塔について

陶製宝塔と呼ぶものは、出土当初、大型の火舎香炉ではないかと考えていた。加古川市の白沢3号窯（飛鳥時代末～奈良時代初頭）から出土した円筒形容器は、身と蓋で一組になるもので、身蓋とも突帯を巡らせており、身の底径26.9cmと大きさもほぼ等しい。小片であるため透かし孔があるかは不明であるが、奈良県の山田寺から蓋に透かし孔を穿孔した類似資料が出土しており、火舎香炉と考えられている。蓋が傘形ではなく帽子形で大きく屈曲し、円筒形の身に透かし窓がないなど、今回の資料とは異なる部分がある。また、今回の資料は小さいながらも底に穿孔が見られることや、火を受けた形跡がないことも火舎香炉とは異なる性格のものであろう。

また、関東・東海・北陸地方に出土例の多い瓦塔の可能性も考えられたが、瓦屋根の表現をもち、小建築物としての性格をもつ瓦塔とは作りや性格が異なっているようである。瓦塔は関西以西では出土例は著しく少ない。

播磨では多可郡中町（現多可町中区）の多可寺遺跡から須恵質で突帯が巡る小片が出土しており、瓦塔の一部とされている。また、小野市広渡寺廃寺跡からは屋蓋部、相輪部など20点の破片が出土している。塔身部は円形平面をなしており、屋蓋部も円形平面の可能性をもつと考えられている。これは小犬丸中谷廃寺例と類似するが、屋蓋部には行基丸瓦を表現した瓦棒が乗り、より瓦塔に近い。また、姫路市下太田廃寺からも行基丸瓦を表現した屋蓋部などが出土している。

寺院以外では、9世紀後半頃の相生市緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯の窯体から中央部に円孔を有し、笠形を呈する須恵器が出土している。これは上面に放射状に粘土紐を貼り付けて、丸瓦の表現かヘラの痕跡が見える。同様のものが西後明出土として有年考古館に収蔵されており、蓮華紋らしきヘラ描き紋様が施されている。ヘラ描きの筆致は小犬丸のものとは異なっているが、この地域の陶製宝塔にヘラ描きの紋様が施される例として類似する。緑ヶ丘、西後明とも相生・龍野窯址群に属しており、小犬丸からは卑近の位置にある。

全容がわかり最も良く似たものに、宍粟郡山崎町（現宍粟市）の千本屋廃寺跡から出土した円筒形土製品がある。これは笠形をなす破片とその下部の円筒形をなす破片である。笠形の上部には放射状に突帯がつけられている様子は小犬丸中谷廃寺例とは異なり、瓦塔や緑ヶ丘例に近い形態である。瓦の表現は見られない。笠形の下に伸びる円筒部に透かしを入れているが、縦長のものである。底径約30cmの円筒形の破片は底がなく、突帯が巡るものである。ハケによって調整され、表面に赤色顔料を塗布している。これも今回の資料とは若干異なる箇所がある。

円筒形の上に笠がのる形態が共通する千本屋廃寺例や緑ヶ丘例と共に、揖保川流域に分布する特殊な仏教的器物とすることができる。また、内面に当て具の痕跡を残すものや、ハケ状の調整を施すもの、緑ヶ丘例のようにタタキの痕跡が見られるものがあり、須恵器の工人が製作に携わっている。瓦塔も寺院址などから出土し、仏具或いは仏教に関係した器物である点は一致しているが、平面形が円形を呈し、建物を模して作られたものではない点が大きな相違と考えられる。そのため、形態から金銅製の優品が知られる宝塔や鉄製の納経塔に類するものとして、陶製宝塔と呼称することとした（註3）。

塔はもともと仏舎利を納めるための施設であったが、次第にその役割が変化し、経典を納めておくことがおこなわれるようになった。この宝塔も舎利塔とするには素朴であるが、円筒形をした身の底に穿たれた多数の小孔に軸を差し込んで経巻を収納したと想像すれば、法舎利宝塔となり、陶製の経筒や外容器に通ずるものとなる。

### 3. 風鐸について

IV区の瓦群から出土した風鐸は瓦葺の基壇建物（塔）に付属したものであろう。兵庫県内では伊丹市の伊丹廃寺から小型の風鐸・風招、多可郡中町（現多可町中区）の多可寺遺跡から小型の風鐸、加古川市の西条廃寺から小型の風鐸、同じく加古川市の石守廃寺塔跡からは小型の風鐸9点、城崎郡日高町（現豊岡市日高町）の但馬国分寺跡から大型の風鐸と風招の出土例が知られる。小犬丸中谷廃寺から出土した風鐸は小型のものであり、伊丹廃寺鐸の現高17cmと比べても小さい。高さ11.2cmの奈良県山村廃寺鐸、14.4cmの茨城県新治廃寺鐸などは、塔の相輪から垂下された露盤鐸と称されるものか、宝鎖などから垂下されたものとされており、小型のものは幡などにも伴うという。本製品は塔跡から出土していることから、相輪に伴った可能性が高い。

通常、青銅や金銅製であるが、鉄製の風鐸は京都府周山廃寺の例や岐阜県正家廃寺例があり、正家廃寺からは金銅製の風鐸も出土しており、鉄製のものは創建時の金銅製が破損した際の補充品とされている。京都府南春日廃寺塔跡からは鉄製風鐸と鉄製風招が出土している。いずれも小型のものである。また、出土例の多くは共に鋳出された鈕によって吊り下げられるが、風招を吊り下げる金具に紐が連結している例は見られない。音色にも影響があると思う。鈕がないものには京都府山城国分寺例がある。小犬丸中谷廃寺のものも後補の風鐸かもしれない。

風を受ける舌部である風招の出土例は少なく、県内では伊丹廃寺で小型の鉄製、但馬国分寺で大型の鐸に伴う銅製の例がある。鉄製の例には他に千葉県萩ノ原遺跡のものが知られる。今回のように一遺跡で4点の出土は極めて稀であるが、共に孔を穿って吊り手金具を通した簡単な構造である。両端の裾先が外側に反転するものと、直に垂れる2形態の風招が出土したが、両者とも小型のもので軒先に吊るされた大型の風鐸に伴うものではない。相輪と宝鎖など小型の風鐸が吊り下げられる場所によって、異なる形態の風招が用いられたものであろうか。

風鐸の鐸身は裾の広がり少ないものであり、古式の様相を示している。風招も裾先の反転のないものと少ないものであり、8世紀でも古い段階の形態を残しているといえる（稲垣1970）（岩本・西口1977）。

### 4. 瓦について

#### 瓦類の並行関係

小犬丸中谷廃寺に用いられた瓦類の時期や並行関係を推測してみよう。まずその紋様や製作技法から最も古相をもつ軒丸瓦にはKNM1とそれに続くKNM2が挙げられる。

これらの軒丸瓦に伴う軒平瓦は確認できない。平瓦を利用していただのものであろう。丸瓦は行基式丸瓦、平瓦はタタキ④⑤⑥種の桶巻き作りのものが伴い、これをI期とする。小犬丸中谷廃寺の創建期にあたるが、この時期の建物は不明である。軒丸瓦については、その紋様からKNM1とKNM2の時間差は存在する。また、KNM1で1回、KNM2でも1回の範の彫り直しが認められ、ここにもある程度の時間幅が存在するため、I期の中でも小時期区分は可能である。

播磨国府系古大内式軒瓦の垂式とも呼称され、その後行型式である小犬丸式のKNM3とKNH2は間違いのない並行関係である。これをII期とする。この軒丸瓦に接合する丸瓦は、布勢駅家でも見られるように玉縁式丸瓦であるため、この時期に伴う丸瓦も玉縁式丸瓦である。平瓦は布勢駅家で搬出してい

ることからタタキ⑬種や②種を当てはめることができよう。

続くⅢ期の軒丸瓦にはKNM 4 aが挙げられるが、KNM 3と同時期となる可能性も残している。軒丸瓦にはKNH 1が対応する。KNM 4 aには行基式丸瓦が接合し、その焼成などの特徴が築地所用丸瓦に一致することから、南面築地の造営はこの時期と考えられる。南面築地で見られるように、対応する平瓦はタタキ①種をもつものであり、一枚作りとなる。

続くⅣ期の軒丸瓦KNM 4 bcはこの型式中出土数の最も多いもので、塔建立の主たる軒丸瓦である。軒平瓦はKNH 1が引き続き対応するものと思われる。丸瓦は行基式丸瓦。平瓦では塔所用で最も数量の多いタタキ③種のものが用いられるようになる。この時期南面築地ではこの平瓦をもって補修が行われる。

更に軒丸瓦KNM 4 がdeと範の彫り直しをおこなっており、一部は補修瓦として用いられたものであろう。その時期（Ⅴ期）に同様に補修瓦として用いられた軒平瓦がKNH 3となる。丸瓦は軒丸瓦KNM 4 に接合したものと同行基式丸瓦と考えられる。平瓦はKNH 3に用いられた③種タタキのものや、一部の縄タタキなどが当てはまるのではなかろうか。

### 瓦類の時期

Ⅰ期の軒丸瓦についてはその時期を決定できるものがない。技法的には古い要素をもつが、面違い歯紋から川原寺式の系譜を考慮すれば、670年代を遡ることはなく、むしろかなり下るものである。Ⅰ期については桶巻き作り平瓦や行基式丸瓦の一般的傾向に考慮して7世紀末から8世紀初頭としておく。わずかではあるが、8世紀前半までの土器が出土していることにも齟齬をきたさない。

Ⅱ期については、軒瓦のセットが8世紀の第4四半期ころとされており、Ⅰ期からの時間差が大きい。続くⅢ期も播磨国府系瓦の影響下で成立している。軒丸瓦では当初、Ⅰ期の軒丸瓦を継承する瓦当紋様を画策したもの、細弁の古大内式軒丸瓦に極めて類似した瓦当紋に変更している。各種瓦類の製作技法もⅠ期とは全く異なるものとなることから、Ⅰ期とⅡ・Ⅲ期の間には大きな隔たりが存在すること

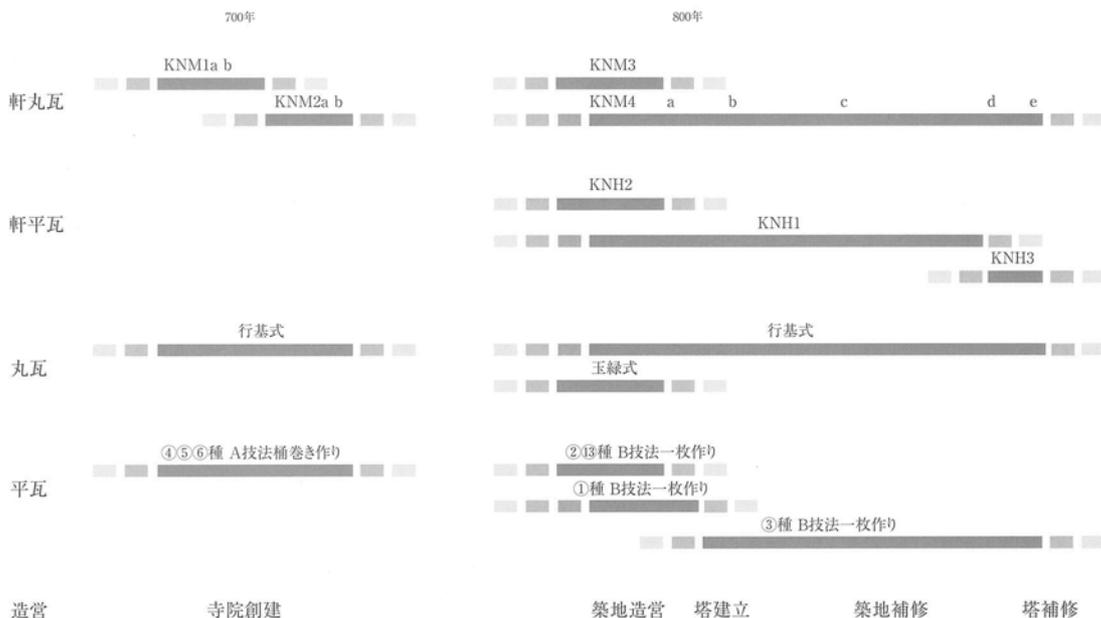


図21 瓦類の並行関係

が指摘できる。ひとつ丸瓦のみが前代からの伝統を保つ。この時期には瓦葺の南面築地が完成しているものと思われる。

Ⅳ期には塔が建立された。一般的に中央においても塔の建立は伽藍の中では遅れる傾向が指摘されており、小犬丸中谷廃寺においても塔が最後に作られたものと考えられる。塔で主として用いられる平瓦の型式が南面築地では補修用に用いられていることから、塔が建ち上がるのは築地より遅れるものとした。塔が建ち上がり、伽藍が完成するのが8世紀末～9世紀初頭の時期と考えられ、「通俗 鯉丸誌」の昌福寺創建年代とも合致する。

V期になり、塔の補修用軒平瓦として用いられたのが、KNH3である。この軒平瓦は9世紀中頃のものだと推定されることから、寺院は少なくともこの頃までは補修しながら運営されていたことが窺われる。軒瓦からはその後の補修の状況はみられない。

### 第3節 寺域の推定

今回の発掘調査では、瓦葺の推定塔跡と南面築地、西面築地が検出された。築地塀の検出された範囲は南北約71m、東西約21mであり、寺域の西端部を検出したことになる。

寺域はさらに東側にひろがるが、通常寺域の中軸にある南門を検出していないため、東西方向の広がりも不明である。また、南北方向も築地塀が北端で山裾にぶつかって終わっているため、さらに北側にも寺域が広がる可能性を残している。Ⅱ区の東隣の水田で1997年12月に探査を実施したが、南門や築地のまがりは検知できなかった。

検出できたⅡ区南面築地の東西両端部とⅣ区西面築地北端部で、築地の中心と思われる位置の座標(旧測地系)を測定している。a地点はⅡ区南面築地の西端と西面築地の南端が交わる位置、b地点は南面築地の東端部で、この部分は側溝の幅が広がるため、少し西の位置を求めた。更にⅣ区の西面築地北端部で同様に築地中心c地点を求めた。座標は以下のとおりである。

a地点 X = -127014.863、Y = 14084.517

b地点 X = -127015.592、Y = 14002.945

c地点 X = -126944.243、Y = 14090.432

これにより、a c間の距離は70.867mが算出される。実際は南端では築地塀本体の中心を測っているため、実際は71m以上の距離で塀が築かれていたものであろう。南北の築地の方位は座標北から4度47分16秒05東に傾いており、東西の築地との角度も87度28分39秒4と直交しないことがわかった。(註4)

寺域を推定するにあたっては、周辺の地形を中心に推定するほかならう。現在の水田区画や家敷地の土地割りも旧状を踏襲していることが多く、圃場整備前の土地割り図(図版2)とともに参考になるものとする。

小犬丸中谷廃寺はちょうど大谷と中谷に挟まれた丘陵の南先端に位置を占めている。この丘陵の先端はV区の地点で小さな谷地形を抱え込んでいる。大谷や中谷から流れ出る河川の影響をできるだけ受けない立地が寺院を造営するに相応しい選地と考える。

周辺の土地割りを見ると、南面築地を東へ延長してみると、同方向の土地境と水路が走っているのがわかる。この土地境は圃場整備前の地形図でも看取でき、丘陵東端を延長した位置で終わっている。寺域がここまで広がっておれば、現在の昌福寺もその中に含まれるが、東西170mとなり、播磨国分寺を

も凌駕する寺域を有していることになり、考えがたい。

この水路の西端は北側に方向を変えるが、この方向は西面築地の方向と一致する。現水路は30mほどで再び西へと方向を変えるが、圃場整備前の土地割りでは同じ位置に丘陵裾まで真っ直ぐ続き、さらに丘陵上の平坦面まで続いている土地境が看取できる。この平坦面はV区の東側にあたり、現在では果樹園や畑地などとなっている。「通俗鯉丸誌」では昌福寺はこの平坦地から今の位置へと下ろされたと考えられており、寺域に含まれてもおかしくはない。寺域の東限がこの位置とするなら、東西約102mの範囲を占めることになる。

後者の範囲が寺域であるとすれば、ちょうど丘陵先端の小谷地形を中心に、両翼をなす丘陵突端部に東西の両築地が取り付くことになり、寺域として均整のとれた占地である。しかしながら、この寺域の中に僧地である伽藍がどのように配置されていたのであろうか。塔の位置が極めて偏っている点が特異である。塔址が寺域の北東部に位置する寺院には、龍野市（現たつの市）奥村廃寺、氷上郡市島町（現氷上市）三ツ塚廃寺、城崎郡日高町（現豊岡市）但馬国分寺などがあるが、きわめて稀な伽藍配置である。

奥村廃寺は、北に山塊を控え、山陽道から分岐した美作道に南面して作られた立地である。東西両塔と金堂が東西中軸線上に一直線状に並んでおり、金堂の背後に講堂が配される伽藍配置をもつ。寺域南限は美作道に接して開門していた可能性が指摘され、北限は講堂の北の山裾とし、東限と考えられる溝と金堂中軸線から東西を復元すると、金堂を中心として約150m方形の範囲が寺域と推定できる。南半部は調査が及んでいないが、主要堂塔は北半に集中する。

奥村廃寺と小犬丸中谷廃寺にはその立地や寺域南半部の空間など共通する点が多い。そこで、小犬丸中谷廃寺を奥村廃寺の伽藍配置と対比すると、小谷の奥、V区の南側に講堂が想定でき、その前面、検出された塔址の東側に金堂が、更に東側に東塔址が想定できる。東塔が存在するかは疑問であるが、塔・築地を備えた寺院では、中心伽藍のひとつである金堂や講堂は存在するであろう。講堂を小谷の最も奥まった位置に推定すると、南北も100m強の方形区画の寺域が想定できる（註5）。

#### 第4節 古代山陽道の復元

この地域を通過する古代山陽道は、これまでは県道姫路上郡線の1本南側を走る里道、今回の調査区のⅡ区とⅢ区間を東西に通る幅約3mの道の位置を走っていたと推定されていた。この道は現県道を作る直前の道で、昌福寺の門から続く参道が現県道に分断されながらも、この里道に取り付いていることから見て、近世までは主たる街道であったことが推定できる。調査地点の西側の字が宿垣内であることから重要な街道であったことがわかる。中世の山陽道（筑紫大道）は東の揖保郡太子町では絵図や発掘調査によって検出され、揖西町でも南に約1kmルートを変更していることが想定されているが、揖保川を渡り龍野市揖西町に入ると直前を光明山が遮るため、迂回して古代山陽道へと合流するらしい。古代から近世に至るまでこの地は東西の大動脈であり続けたのであろう。

今回の発掘調査によって築地塀が検出され、古代寺院址が北側の山裾から南に向かって広がっていることが判明した。これにより、これまで推定されていたルートでは寺域を分断して通過することになってしまう。発掘調査で検出された南面する築地塀にのみ瓦を葺いていたことから、古代山陽道は、寺域の南側を通過していたことは間違いない。

発掘調査中は、東西方向に走る溝、帯状に広がる整地層や踏み締まった面などの道路状遺構の検出に

努めたが、確認することができなかった。その理由には、1、後世に削平されてしまった。2、河川の氾濫によって消失した。3、I区とII区間にある農道下に存在する。4、南の山裾を通過していた。などが考えられる。

古代山陽道は東側の布勢駅家周辺でその痕跡が検出されている。1985年の調査で検出された山陽道の遺構は、駅家本体（駅館院）の東側で検出されたもので、幅約5～7mで山側は地山を削り、谷側には盛土を施した平坦面で、山側に側溝をもつものである。また、駅家本体の南側でも東西方向に連続すると想定される小溝が数箇所検出されている。検出されたこれらの溝は同一方向にほぼ平行して走っており、更に延長線上にのる現在の水田畦畔は駅家本体の西方でも続いている。

更に西側へこの溝の方向を延長させ、小犬丸中谷廃寺の近辺で探ると、現在の昌福寺の前の地割りが平行していることに気が付く。これはII区で検出された南面築地の方向やI区のSD101の方向と一致していることになる。南面築地の方向は座標上でほぼ東西方向に設定されている。SD101は近世以降の溝であるが、古い地割りを継承している可能性がある（註6）。

更に西方へとたどると、南側の飯盛山や光明山の山塊のちょうど北裾を抜け、（註7）現在の長長寺池の南池畔を通り、相生市境の二木峠を通過する。東西に長く細く形作られた小犬丸の谷の東端で検出された道路痕跡を単純に西方に延長したものが、直線を意識して策定された道として、この谷を抜ける最も理想的なルートであることがわかった。これはまた、復元された条里地割り（渡辺1978）の十四坊・十五坊坊間にほぼ一致する。

## 第5節 小犬丸中谷廃寺と布勢駅家

今回の発掘調査で検出された寺院址の遺構は塔と築地塀に限られている。築地塀が先行して完成し、塔がその後完成している。また、出土瓦や土器の分析から、それ以前に瓦葺の施設が存在したことが想定された。今回の調査範囲の東側におそらく単堂形式の瓦葺の仏堂が建立されたのが、この小犬丸中谷廃寺の創建期の状況ではなかろうか。その時点では築地塀も存在していない（註8）。

その後、駅家を初めとする山陽道の各施設の整備がおこなわれるに従って、この寺院に大きく改修の手が入る。築地塀によって広い範囲が寺域として囲まれ、山陽道に面した南面には瓦が葺かれる。遅れて完成した塔には、播磨国府系瓦のKNM3とKNH2がわずかではあるがセットで持ち込まれ、主体を成すKNM4とKNH1のセットはともに播磨国府系瓦の古大内式の影響が認められる。このことは、播磨国府がその造営に何らかの形で関与していたことを示しているのではなかろうか。

小犬丸中谷廃寺と布勢駅家は狭小な小犬丸の谷の中に600m足らずの距離に位置している。平安時代の初め頃に山陽道を行き来した人々には、建ち並ぶ瓦葺きの両施設に目を見張ったことであろう。しかしながら、奈良時代の前半では、瓦葺きではあるがおそらくお堂がひとつ建つだけの私立寺院と、官衙とはいえおそらく草葺きや板葺きの掘立柱建物が、掘立柱の塀に囲まれていた駅家が設営されていた。

私立寺院と官衙が共に相前後して、瓦葺きの大規模な施設に改修された事実は何を物語っているのだろうか。官衙である布勢駅家が中央の命令により「本備蕃客、瓦葺粉壁」とした執行者は当然、播磨国府であり、そこに「播磨国府系瓦」をもって修築されていることから窺われるのである。

では、何ゆえ私立寺院までもが大きく改修されたのか。そこに用いられた瓦の一部は「播磨国府系瓦」であり、最も多く用いられた軒瓦にも播磨国府の影が見え隠れするのである。

白鳳寺院を建立した地方の有力者たちは、寺院を通じて土地や労働力といった経済資本を私有化する

ことを継続できるようになった(間壁1969)。しかしながら、有力者たちが郡領層として官人化した段階で、寺院を保有する経済的な意味合いは薄れ、かえってその維持・補修・経営に費やされる費用は大きな負担となった。これに対して律令国家のとった施策は8世紀前半の寺院併合令であり、その後の定額寺の制度であろう。定額寺に列せられると「資材の管理・造営修理は檀越と国司とが検校し、その費用は官給された」(今里1988)ため、地方の有力者にとっては願ってもないことである。かえって律令国家側のねらいは、「郡領以下の造営する寺院について国司が一定の権限を行使することを可能にする施策」(菱田2002)の一環であり、国家による地方支配体制の宗教面での政策であった。

小犬丸中谷廃寺が定額寺に列せられた確実な証拠はないが、もともと仏堂だけの小規模な寺院を播磨国府がなぜ大規模な寺院に作り変えようとしたのか。それは、大道である山陽道に面し、布勢駅家に隣接していることに重要な意味があるものと思われる。

駅家は「蕃客」と呼ばれた唐使や新羅使などの海外からの使節や、駅使や朝集使などの官人の宿泊施設として一面を有する。駅家に隣接した寺院にはこれを補完する機能があったと考えられる。駅家に宿泊できない官人や、使節に随伴する構成員はここを利用したのであろう。中国では僧尼が旅する際には寺院が宿泊地となり、また寺院が過所を檢めるといふ。また、鴻臚寺という使節を迎えるための施設が存在している。

播磨国府は山陽道の駅家に近接した寺院を修築するに当たって築地塀をもって寺域を大きく区画した。築地塀は北端が山裾に取り付き、南は山陽道を挟んで河川と山が迫っている。それは寺域を示すのと同時に小犬丸の谷を築地塀に囲まれた寺院が塞ぎ止めるかのようである。この谷を通行する者は必ず、寺院の前の大道を通過することになる。同じ状況は布勢駅家と山陽道の位置関係においても見られる。この谷においては、寺院と官衙が相補完しながら、あたかも山陽道の「関」のように配置されている(別府2001)。播磨国府は官衙と寺院の両者を監督・掌握することによって、大道そのものと大道を通過する人や物資を管理していったのではなかろうか。そして律令国家として、地方の有力者を郡領化し、その私立寺院を半官営化することによって彼らを懐柔し、また、反面その既得権益を徐々に削ぐことによって地方政治を推進していったのであろう。

播磨国、特に揖保郡に多数の古代寺院が存在し、一郷一寺のような状況を示していることや、郡衙や駅家といった官衙に近接して存在する寺院や神社を理解するには、各地域の前代の有力者の状況を古墳群や集落址によって分析するとともに、中央からの大きな力の存在を認識し、その地域がどのような過程を踏んで律令国家体制に組み込まれていったかを見極めることが重要となろう(註9)。

今回の小犬丸中谷廃寺では、播磨国府の影響力を布勢駅家との関係を絡めて考察したが、本来この地で力を振るったこの寺の檀越氏族の姿はまだ、おぼろげである。布勢駅長はおそらくこの氏族から輩出しているであろうし、その墓と目される長尾薬師塚古墳の存在も知られている(岸本2001)。考古学的な情報は充分とは言えないが、かなりそろっている。

また、古代の一大窯業地である相生・龍野窯址群が卑近の距離に存在し、鉄・銅の鋳業地帯もその背後にひかえている。渡来系の遺物も散見されるこの地域は、揖保郡衙推定地である小神の地とも近い。今後はこのような周辺の状況をも加味して、揖西地域から揖保郡、そして播磨国の古代について考えを深めていきたい。

[註]

- 註1 「解説 通俗鯉丸誌」の編集を企画推進された勝原正夫さんも1982年の布勢駅家発掘調査の際に大変お世話になった方で、東村にある布勢駅家で「ここから瓦が出るのですか。わたしははっきりもっと西の今のお寺のそばだと思っていました。」とおっしゃっていた。まさか同じ小犬丸の地域に二つも古代の瓦葺きの施設が存在するなんて思いもよらなかったのですが、それは調査にあたった者でも同感です。
- 註2 この塔心礎は掘り出され、昌福寺の庭先に引きすえられたとあるが、確認することができなかった。Ⅳ区の機械掘削時に多量の瓦と共に出土した一辺が60cm大の塊石は四天柱などの礎石であった可能性が高いが、これらの石には柱あたりなどは認められなかった。
- また、この「通俗鯉丸誌」には瓶焼（かめやき）の地名が見られ、古窯址の存在が窺われる。小犬丸中谷廃寺と布勢駅家との中間の北側の丘陵付近とされており、瓦窯址であれば廃寺や布勢駅家との関係が深いものであろう。
- 註3 もちろん陶土を用いて作られたものではない。金属製や瓦塔との区別のための名称である。緻密な胎土で白色硬質に焼成されており、軒丸瓦KNM4のbcなどに類似している。このため時期的にも塔造営に近いものと考えられる。
- 註4 座標北は真北から0度5分東に振れている。また、磁北は真北から7度0分西に振れている。国土座標は図版19を含めて調査時点における測地系を用いている。
- 註5 同じように北から迫る山裾に伽藍を配置した寺院には広島県の小山池廃寺がある。これは山裾に西から講堂・塔・金堂が横一列に並んでいる。
- 註6 小犬丸中谷廃寺の南東、飯盛山の麓に「馬越橋」がかかっている。この橋は圃場整理前にはより北側にあったそうで、現在でも「川のない橋」が存在している。推定される古代山陽道もこの地点付近を通過している。駅家から続く道に設けられた橋にふさわしい名前であるが、この橋の名前が古代にまで遡るとするのはいささか大胆すぎるかもしれない。
- 註7 飯盛山の北麓の道は今では使われていないが、戦時中には軍隊が行進していたと地元の方にお聞きした。
- 註8 日本における築地塀の初現は川原寺跡東辺築地であり、天智朝に遡る可能性が示されているが、確実なものは平城宮跡のものとされている。大宰府政庁や多賀城などでも8世紀前半代に築地が採用されているが、一般的にそれまでの掘立柱塀から築地塀が採用されるのは奈良時代の後半になってからといわれている（黒崎1997）。
- 布勢駅家で築地痕跡と考えられた遺構は小礫の高まりであった。小犬丸中谷廃寺の南面築地側溝に礫が多く含まれていたことと共通点をもつ。また塔基壇の構造が掘り込み地業を行わず、地山を削りだした上に築土している点も布勢駅家の礎石建ち瓦葺建物の基壇構造に類似している。
- 註9 奥村廃寺でも「播磨国府系瓦」前後で「かなり大きな断層が横たわっており」、この寺院ではその「檀越の一族が、技術者として播磨国府系瓦の創設に参画した」可能性が考えられている（今里1997）。これも播磨国における律令国家体制に包含されていくひとつの姿であろう。

参考文献

- 池田敏宏 1998 「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討」『研究紀要』第7号  
栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 池田征弘 1996 「摂津西部・播磨」『古代の土器4・煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会
- 石田善人 1978 「風土記の世界」『龍野市史』第1巻 龍野市
- 石田善人 1978 「中世の龍野」『龍野市史』第1巻 龍野市
- 稲垣興治 1970 「その他の建築資材」『新版考古学講座』第7巻有史分化（下）雄山閣出版
- 今里幾次 1952 「播磨における黒耀石器及び石材の分布」『播磨郷土文化』8 播磨郷土文化協会  
(1979『播磨考古学研究』再録 今里幾次論文集刊行会)
- 今里幾次 1984 「龍野近傍の古代寺院」『龍野市史』第1巻 龍野市
- 今里幾次 1985 「播磨・金剛山廃寺の古瓦」『兵庫史の研究』『松岡秀夫傘寿記念論文集』刊行会
- 今里幾次 1988 「古代寺院とその檀越」『加古川市史』第1巻 加古川市
- 今里幾次 1992 「龍野市小犬丸遺跡の古瓦」『布勢駅家』龍野市文化財調査報告8 龍野市教育委員会
- 今里幾次 1997 「龍野市奥村廃寺の古瓦」『奥村廃寺』龍野市文化財調査報告18 龍野市教育委員会
- 今里幾次 2000 「律令社会の変動」『御津町史』第1巻 御津町
- 岩本正二・西口寿生 1977 「飛鳥・藤原地域の出土遺物」『考古学雑誌』第63巻第1号
- 上原真人 1987 「平安貴族は瓦葺邸宅に住んでいなかった」『歴史学と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念事業会
- 小川真理子 1999 「稜椀研究の再検討」『瓦衣千年—森郁夫先生還暦記念論文集—』
- 小川真理子 2001 「播磨」『古代の土器研究 律令的土器様式の西・東6』古代の土器研究会
- 鎌谷木三次 1942 『播磨上代寺院址の研究』
- 河田 貞 1989 「仏舎利と経の荘厳」『日本の美術』第280号 至文堂
- 岸本道昭 1992 「瓦溜め出土土器の時期」『布勢駅家』龍野市文化財調査報告8 龍野市教育委員会
- 岸本道昭 1993 「再び布勢駅家駅館院の復元について」『布勢駅家Ⅱ』龍野市文化財調査報告11  
龍野市教育委員会
- 岸本道昭 2001 「龍野市長尾薬師塚古墳（初代布勢駅長の墓）」『ひょうご考古』第7号 兵庫考古研究会
- 木立雅朗 1997 「北陸」『古代寺院の出現とその背景』第42回埋蔵文化財研究会
- 黒崎 直 1997 「掘立柱塀と築地塀—藤原宮と平城宮の外周施設をめぐる—」『立命館大学考古学論集Ⅰ』
- 高井悌三郎、五十川伸矢他 1981 『播磨千本屋廃寺跡』山崎町教育委員会、千本屋廃寺跡発掘調査団
- 高崎光司 1988 「瓦塔小考」『考古学雑誌』第74巻第3号
- 花谷 浩 2002 「出土瓦をめぐる諸問題」『吉備池廃寺発掘調査報告』  
奈良文化財研究所創立50周年記念学報第68冊 奈良文化財研究所
- 菱田哲郎 2002 「考古学から見た古代社会の変容」『日本の時代史5 平安京』吉川弘文館
- 菱田哲郎、宮原文隆他 1994 『多哥寺遺跡』中町文化財報告9 中町教育委員会
- 別府洋二 2001 「駅家の構造と機能」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第2号  
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 間壁菫子 1969 「官寺と私寺」『古代の日本』第4巻 角川書店
- 松本正信 1978 「黒耀石の謎」『龍野市史』第1巻 龍野市
- 森内秀造・深江英憲 1998 『白沢3・5号窯』兵庫県文化財調査報告第184冊 兵庫県教育委員会
- 森内秀造 1994 「相生窯址群における平安期の遺物について」『相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅱ』  
兵庫県文化財調査報告第139冊 兵庫県教育委員会

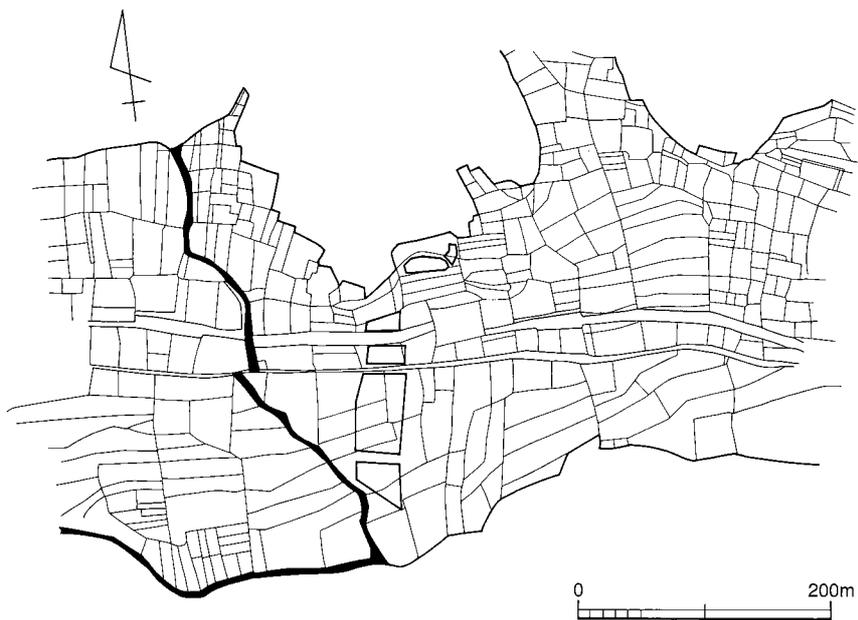
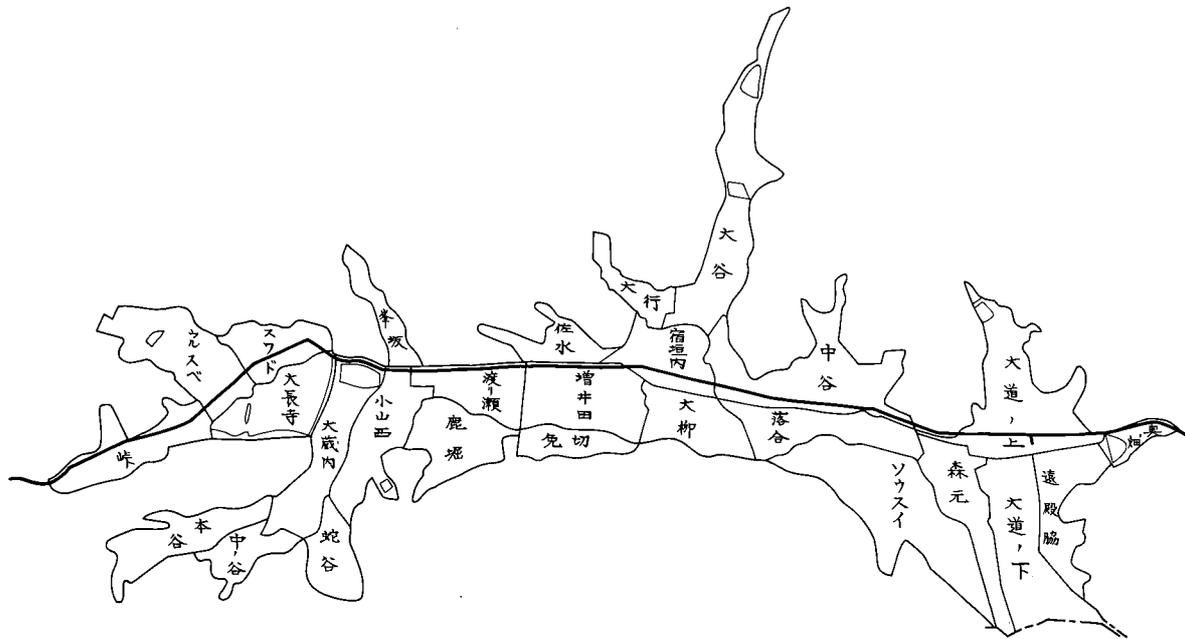
- 山中敏史 2002「築地塀」『古代の官衙 I 遺構編』奈良文化財研究所
- 山根実生子 1986「瓦」『小犬丸遺跡 I』兵庫県文化財調査報告書第47冊 兵庫県教育委員会
- 渡辺久雄 1978「龍野市域の条里」『龍野市史』第1巻 龍野市
- 西播流域史研究会 1991『有年考古館藏品図録』財団法人有年考古館
- 広渡寺廃寺跡発掘調査団 1979『播磨広渡寺跡発掘調査報告』小野市教育委員会
- 龍野市教育委員会 1997『奥村廃寺』龍野市文化財調査報告18
- 広島県教育委員会 1979『小山池廃寺発掘調査概報』
- 伊丹市教育委員会 1965『摂津伊丹廃寺跡』
- 恵那市教育委員会 1995『1100年ぶりに眠りからさめた幻の塔跡』正家廃寺発掘調査現地説明会
- 向日市教育委員会 1986『長岡京古瓦聚成』向日市埋蔵文化財調査報告書第20集



図22 小犬丸自治会編集発行「解説 通俗鯉丸誌」より

# 図 版



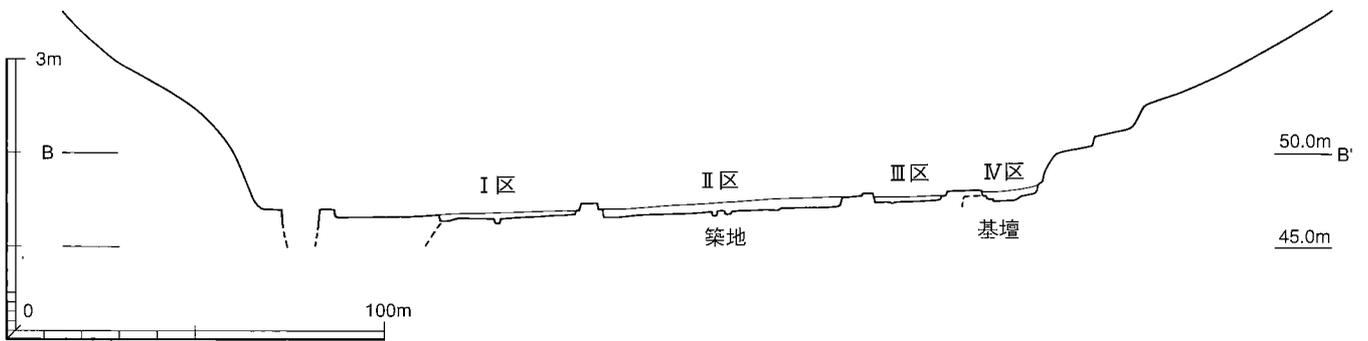
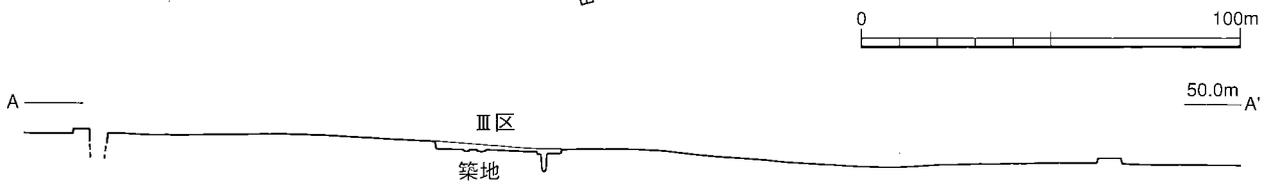


小犬丸字境図、遺跡周辺の旧地割

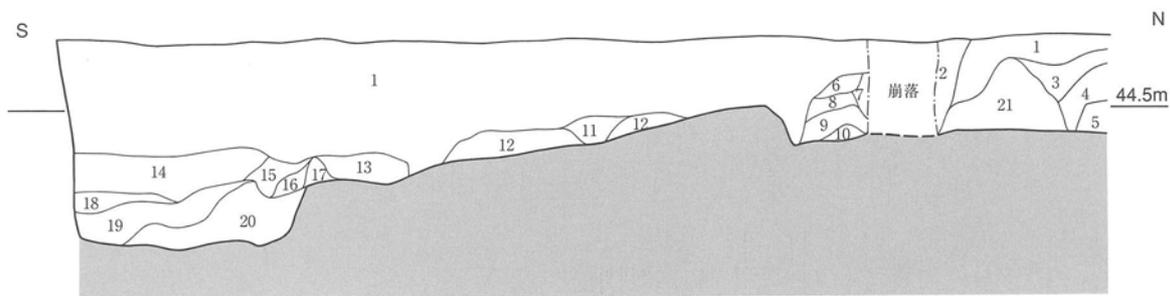


- 凡例
- 平成8年度 (調査番号960438)
  - 平成9年度 (調査番号970154)
  - ▨ 平成10年度 (調査番号980033)
  - ▩ 平成10年度 (調査番号980125)

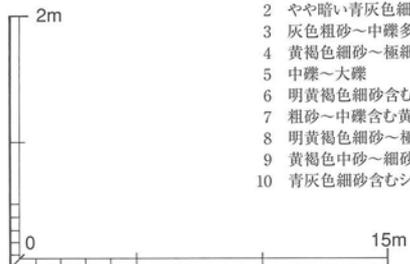
確認調査範囲



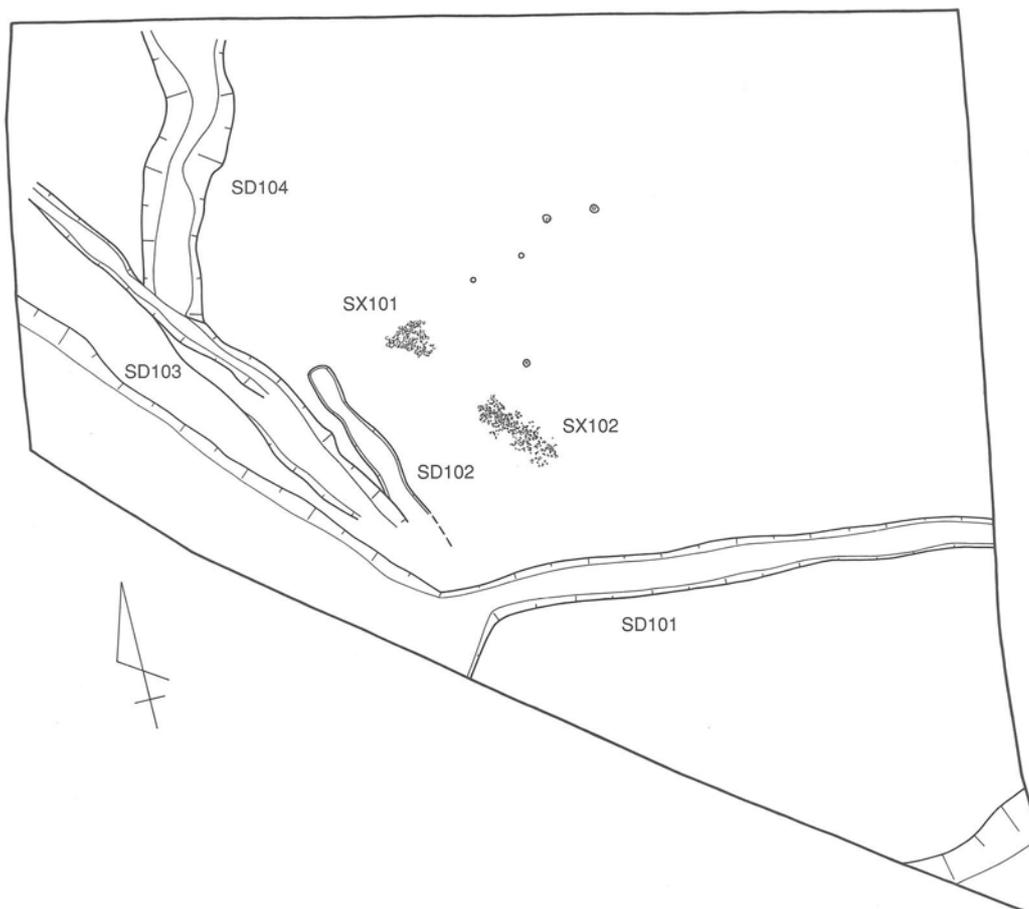
調査地区と周辺の地形



- |                       |                      |
|-----------------------|----------------------|
| 1 耕土・客土               | 11 暗黄褐色粗砂～中礫含む細砂～極細砂 |
| 2 やや暗い青灰色細砂含むシルト質極細砂  | 12 黄褐色中砂～粗砂含むシルト質極細砂 |
| 3 灰色粗砂～中礫多く含む細砂～極細砂   | 13 黄褐色中砂～粗砂含むシルト質極細砂 |
| 4 黄褐色細砂～極細砂           | 14 大礫                |
| 5 中礫～大礫               | 15 青灰色中礫～大礫含むシルト質極細砂 |
| 6 明黄褐色細砂含む極細砂         | 16 灰白色細砂多く含むシルト      |
| 7 粗砂～中礫含む黄褐色細砂～極細砂    | 17 暗褐色中砂～粗砂          |
| 8 明黄褐色細砂～極細砂          | 18 暗褐色粗砂～中礫          |
| 9 黄褐色中砂～細砂多く含むシルト質極細砂 | 19 暗青灰色細砂含むシルト質極細砂   |
| 10 青灰色細砂含むシルト質極細砂     | 20 浅黄色細砂含むシルト質極細砂    |
|                       | 21 大礫多く含む黄褐色極粗砂～粗砂   |



確認トレンチ西壁



遺構配置図と基本土層図



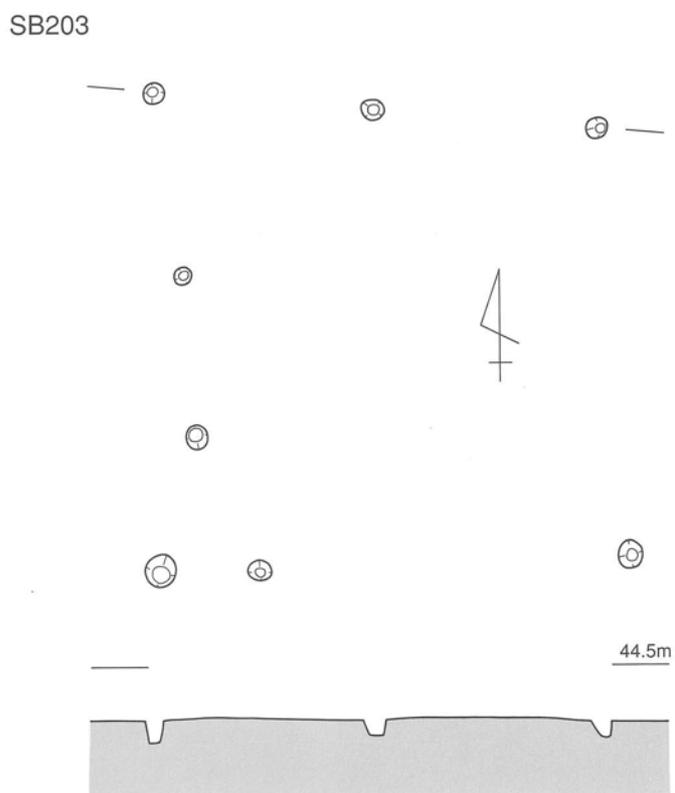
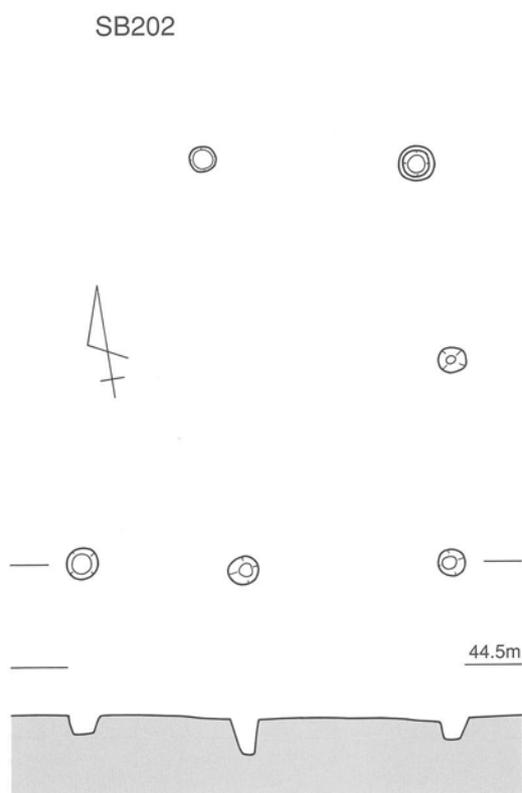
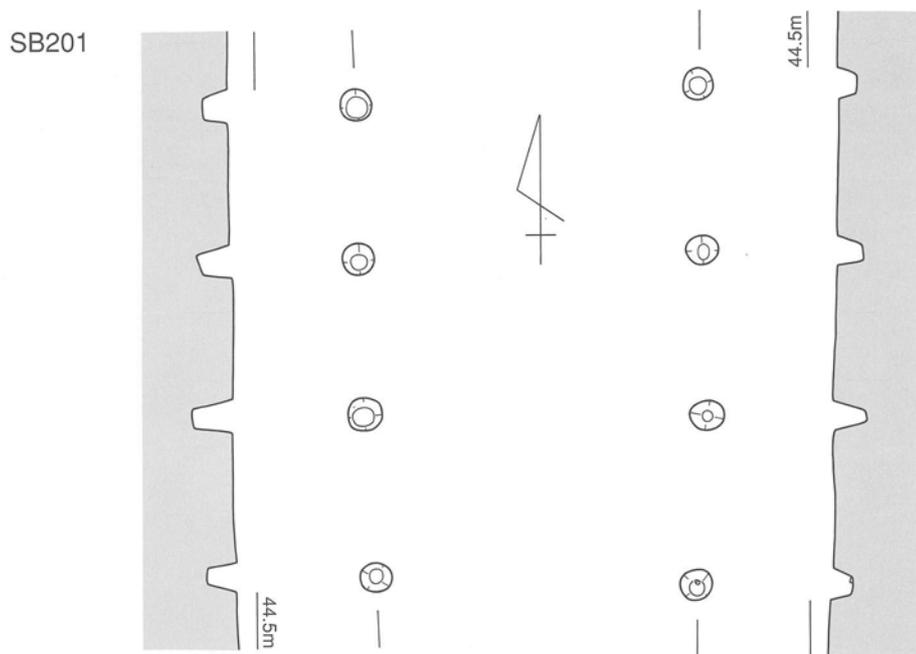
上面遺構配置図と基本土層図



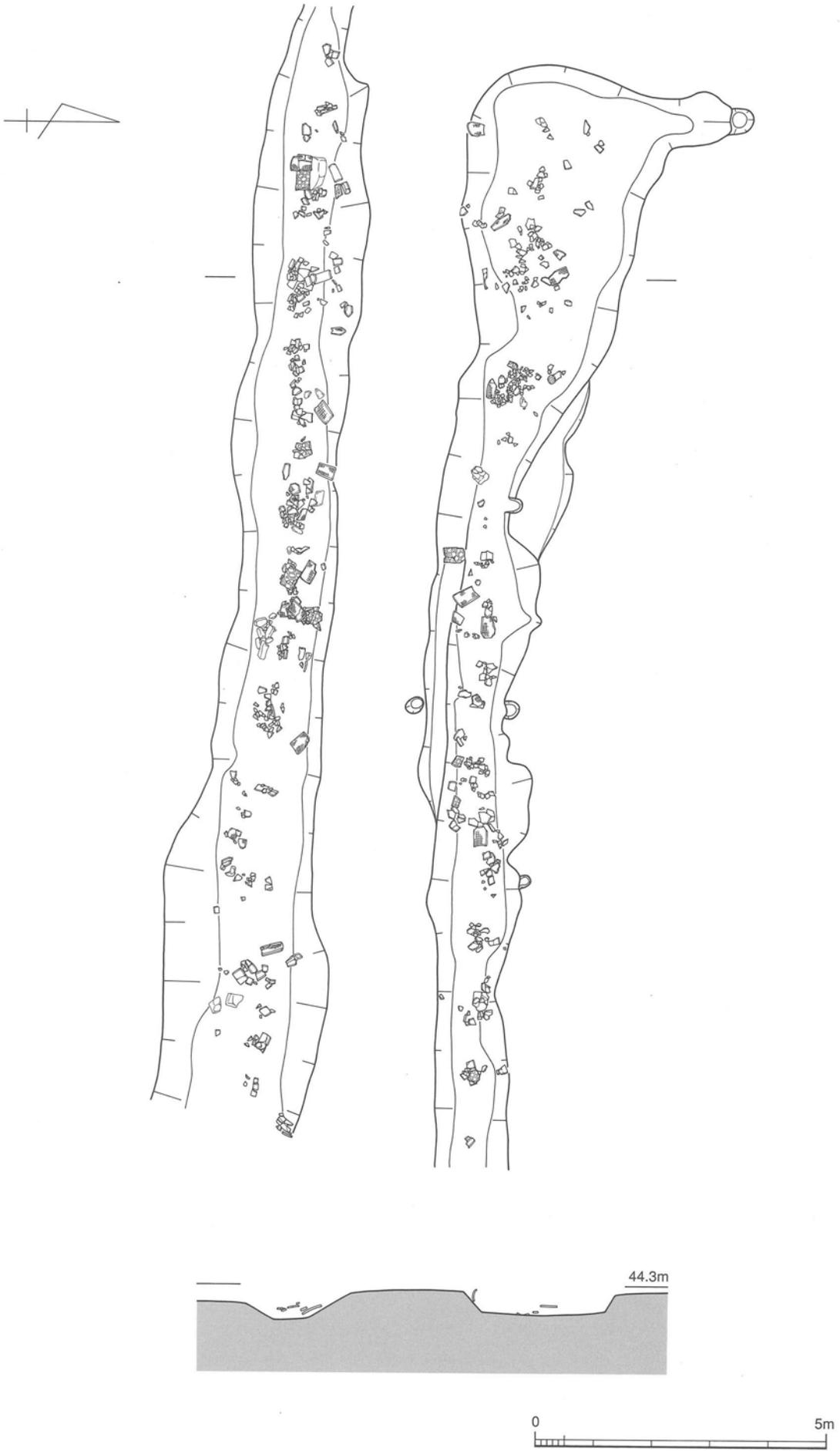
下面遺構配置図と基本土層図

## II区基本土層

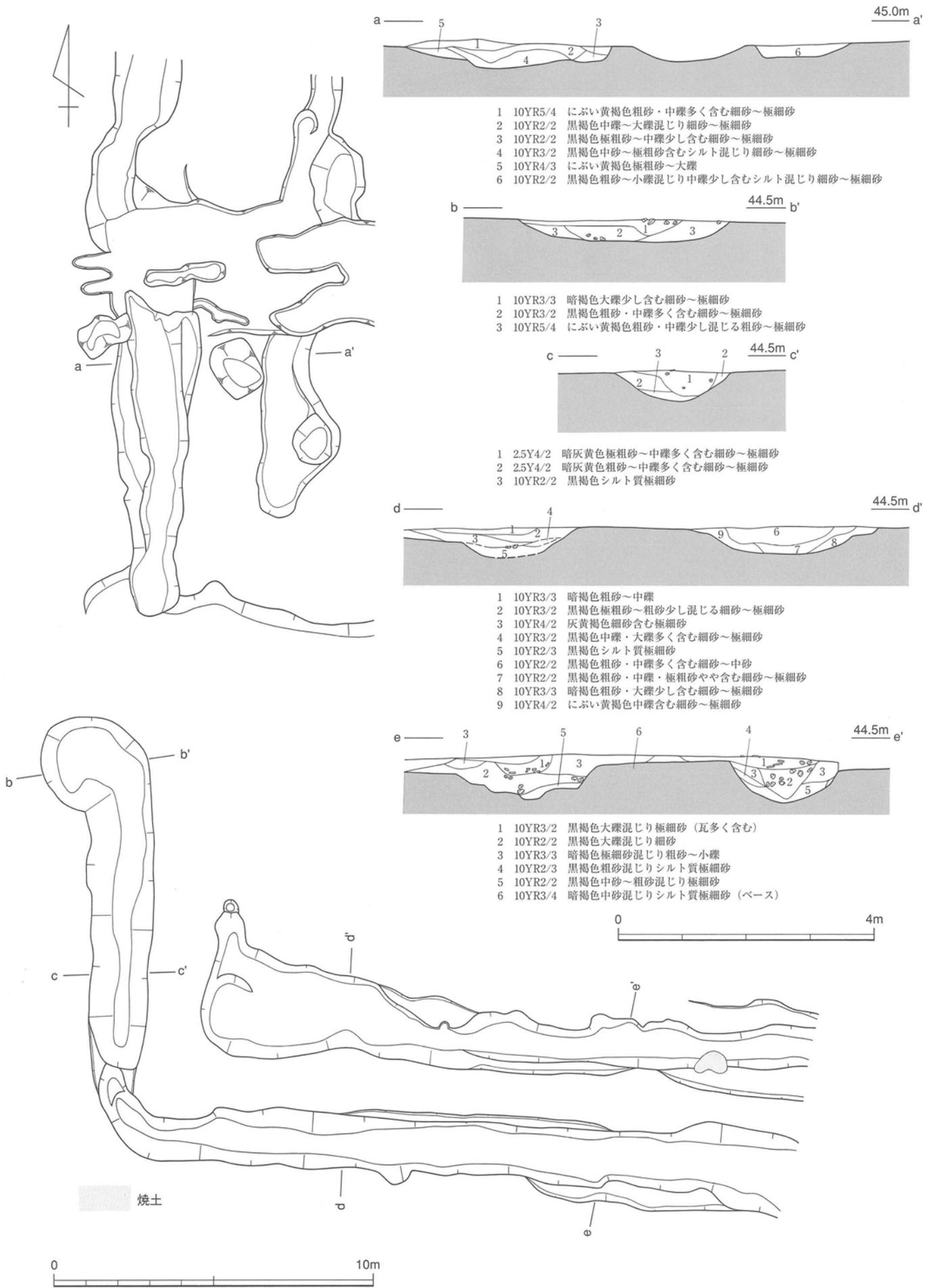
- 1a 耕土・床土    1b 床土
- 2 盛土
- 4a 10YR3/2 黒褐色粗砂～大礫ラミナー
- 4b 10YR3/2 黒褐色極細砂～大礫ラミナー
- 4c 5Y4/3 暗オリーブ色シルト
- 5 10YR4/6 褐色極細砂（鉄分）
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色中礫混じり極細砂
- 7 10YR3/1 黒褐色シルト混じり粗砂～粗礫ラミナー
- 8 10YR4/4 褐色中砂混じり極細砂
- 9 10YR3/4 暗褐色極細砂混じり粗砂～大礫
- 10 中礫～大礫
- 11 5Y3/2 オリーブ黒色シルト（炭・土器含む）
- 12 中礫～大礫
- 13 10YR5/1 褐灰色粗砂～中礫ラミナー
- 14 10YR3/3 暗褐色極細砂混じり中礫
- 15 10YR2/1 黒色中礫混じりシルト質極細砂
- 16 10YR2/3 黒褐色シルト質極細砂混じり砂礫
- 17 10GY5/1 緑灰色シルト細砂～極細砂多く含む（粗砂～中礫ラミナー部あり）
- 18 5GY2/1 オリーブ黒色粘土
- 19 10YR4/6 褐色粗砂混じり極細砂（旧水田土壌）
- 21 10YR5/4 にぶい黄褐色礫混じり極細砂
- 21 5YR7/6 橙色粗砂混じり極細砂（焼土か）
- 22 10YR2/2 黒褐色小礫混じり極細砂
- 23 10YR3/2 黒褐色大礫混じり極細砂（瓦多く含む） 築地外側溝
- 24 10YR2/2 黒褐色大礫混じり細砂 築地外側溝
- 25 10YR2/2 黒褐色大礫混じり細砂 築地内側溝
- 26 10YR2/2 黒褐色中砂～粗砂混じり極細砂 築地内側溝
- 27 10YR2/1 黒色極細砂混じり小礫
- 28 10YR2/1 黒色粗砂～礫混じりシルト質極細砂
- 29 10YR3/2 黒褐色シルト質極細砂混じり粗砂～中礫ラミナー
- 30 10YR2/1 黒色シルト質極細砂
- 31 10YR3/2 黒褐色極細砂混じり砂礫（ベース）



上面掘立柱建物SB201・202・203

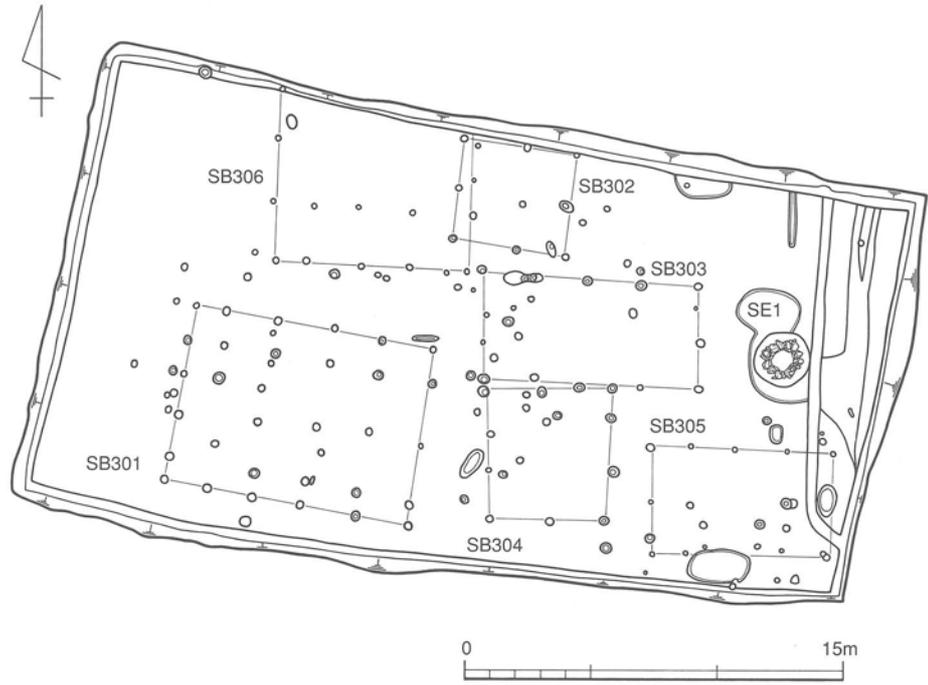


南面築地塀側溝瓦出土状況図

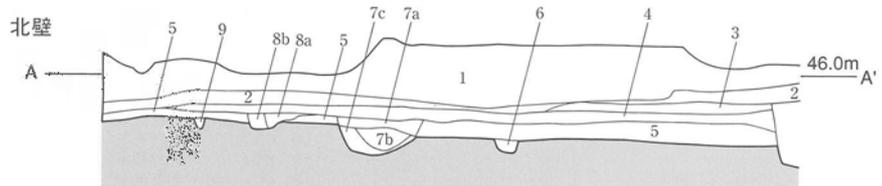


築地塀平・断面図

上面

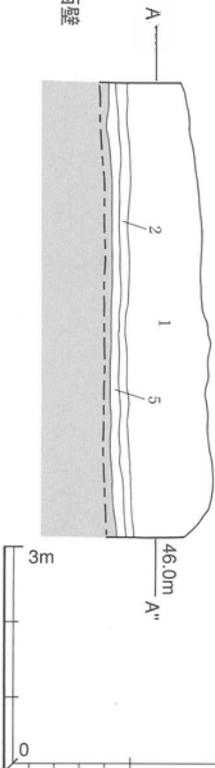


下面

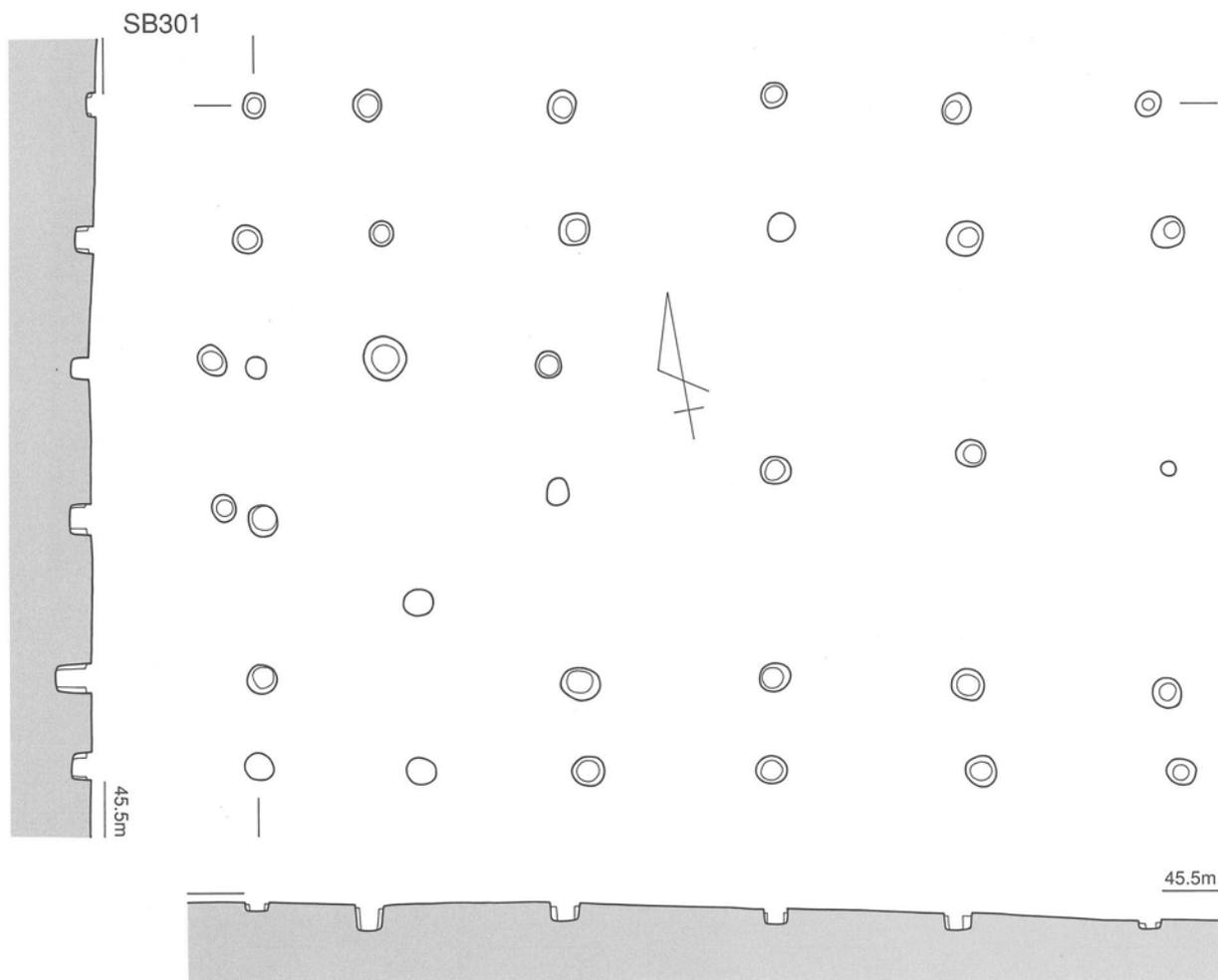


- |                       |                           |
|-----------------------|---------------------------|
| 1 盛土                  | 7a 10YR3/1 黒褐色細砂小礫混じり     |
| 2 2.5Y4/1 黄灰色細砂 (旧耕土) | 7b 10YR2/2 黒褐色細砂小礫混じり     |
| 3 2.5Y6/6 明黄褐色細砂 (床土) | 7c 2.5Y2/1 黒色シルト質極細砂      |
| 4 2.5Y5/2 黄褐色細砂       | 8a 2.5Y3/2 黒褐色細砂 (小礫多く含む) |
| 5 10YR2/1 黒色細砂小礫混じり   | 8b 2.5Y3/1 黒褐色細砂 (瓦片少し含む) |
| 6 10YR1.7/1 黒色細砂小礫混じり | 9 2.5Y3/1 黒褐色細砂           |

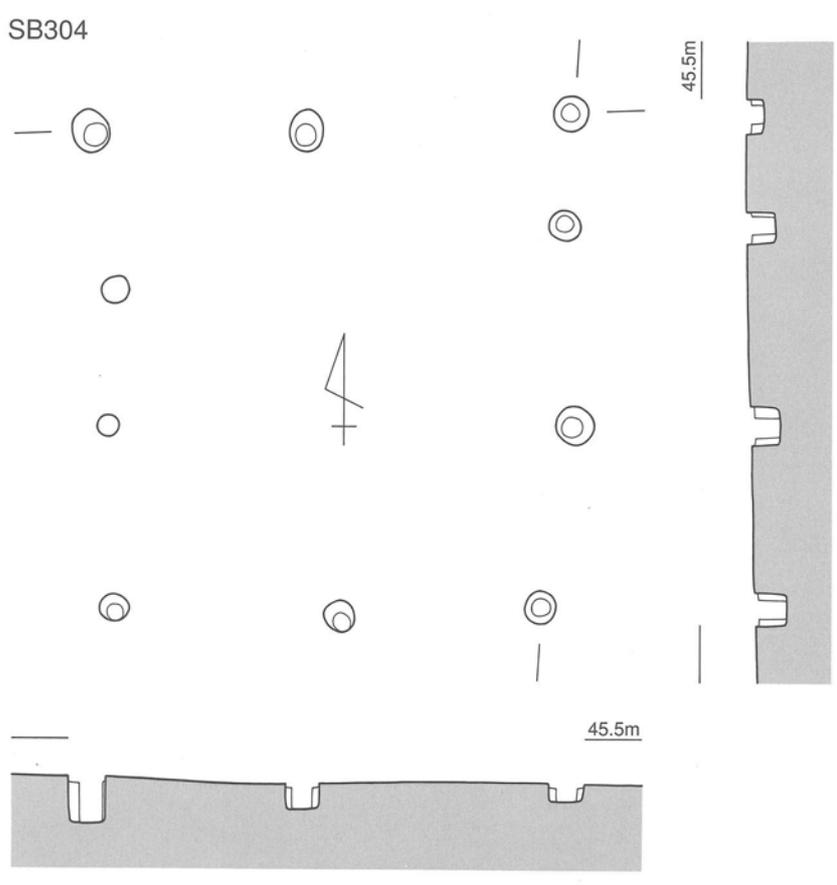
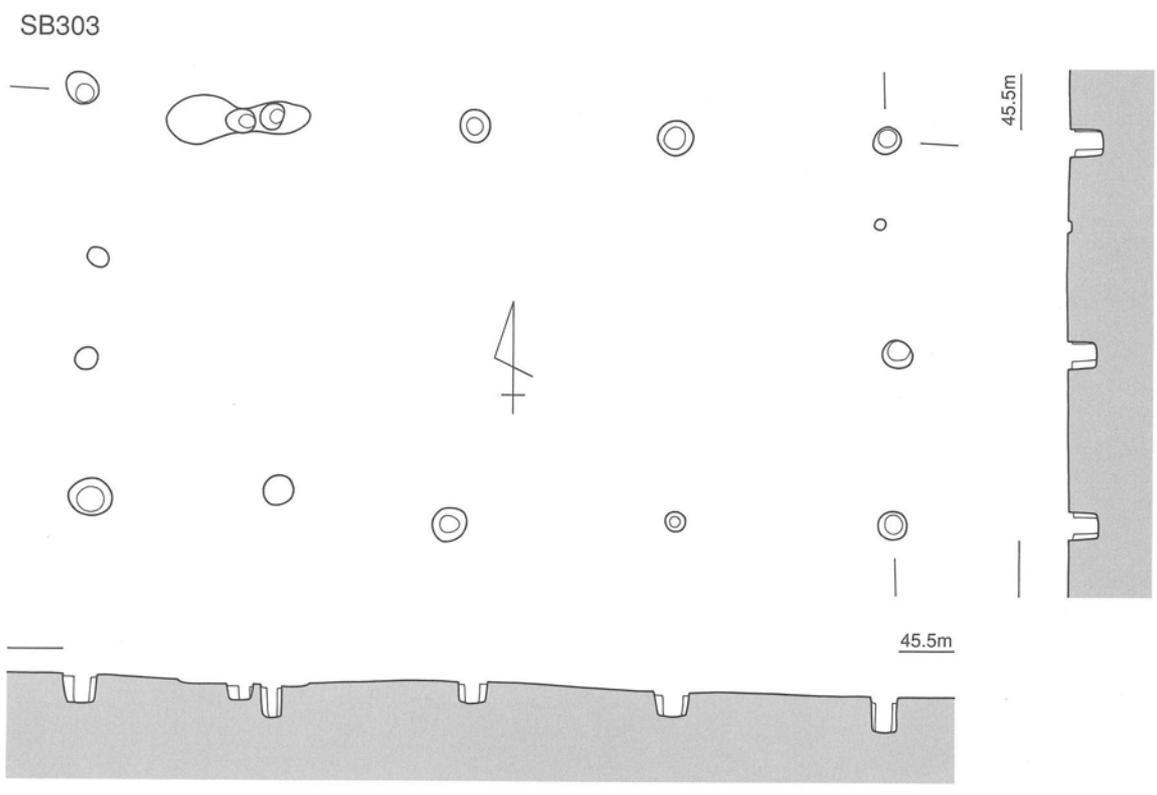
西壁



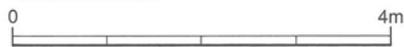
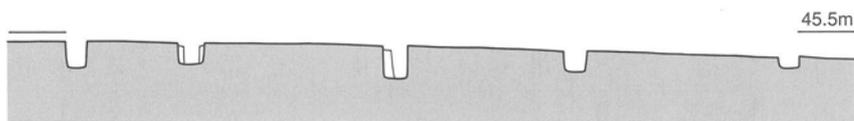
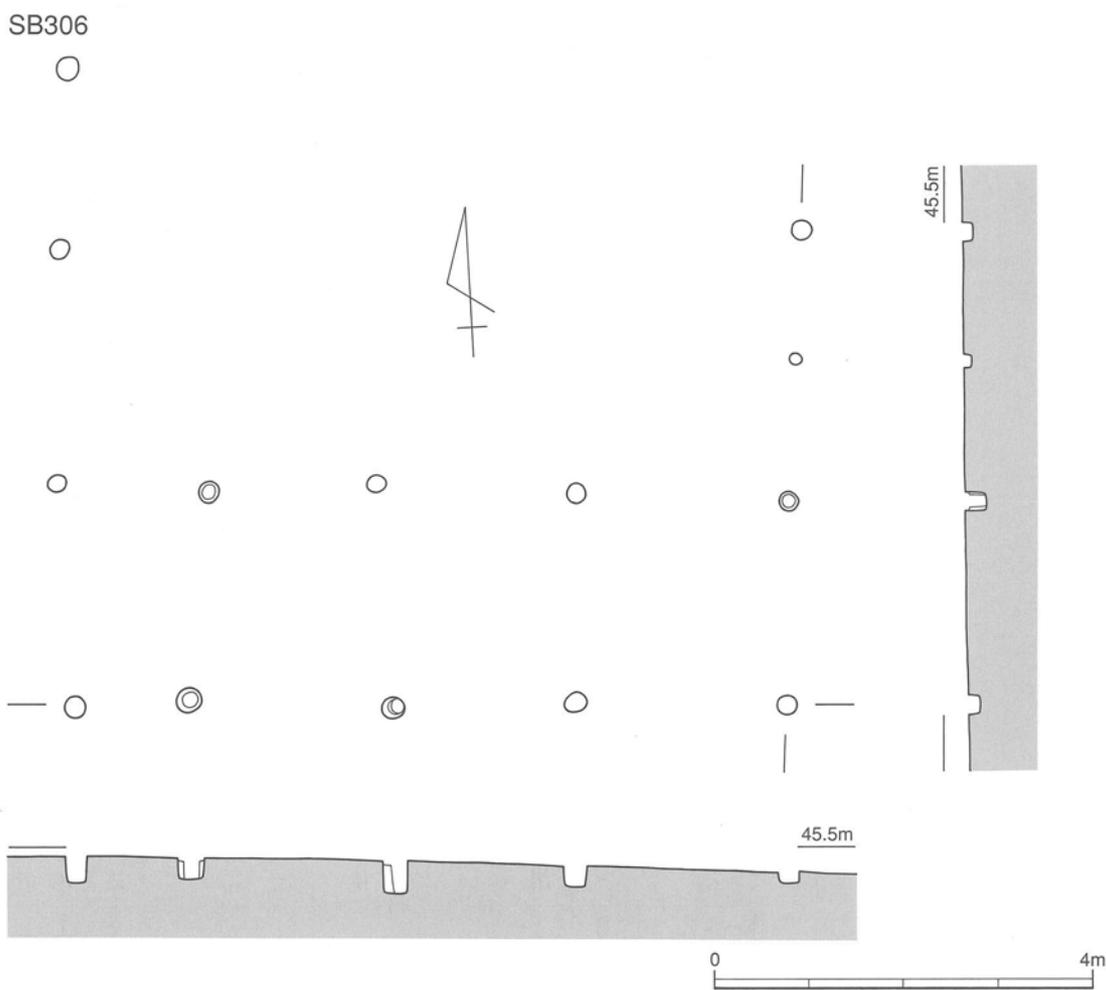
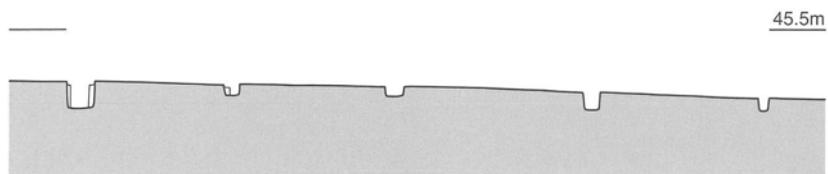
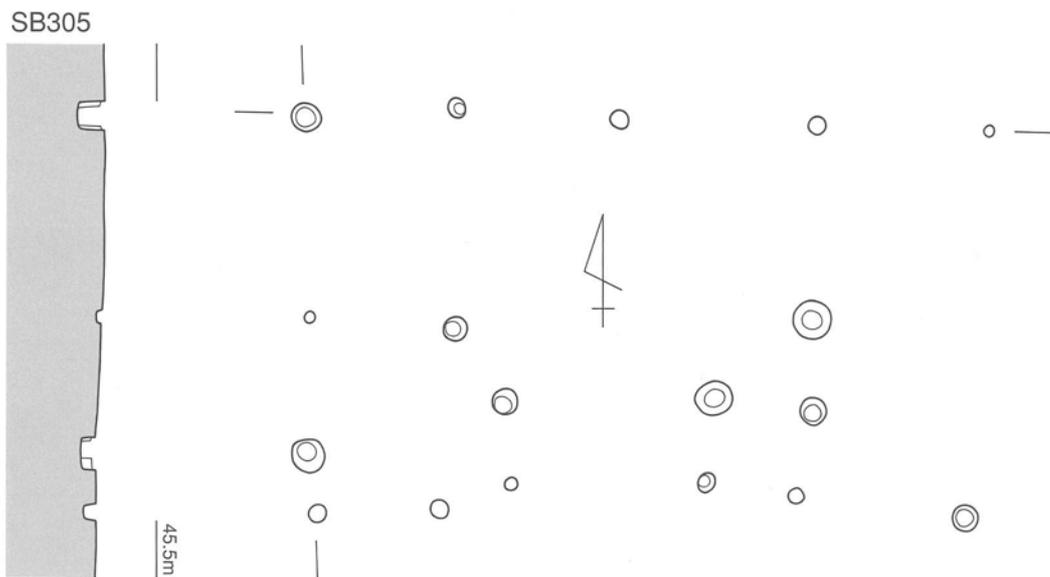
上面遺構配置図、下面遺構配置図と基本土層図



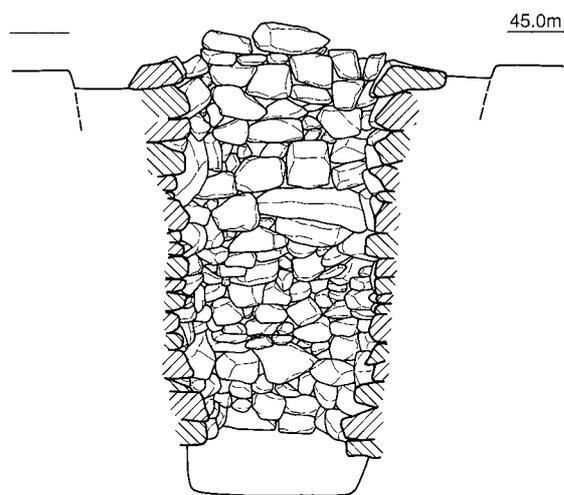
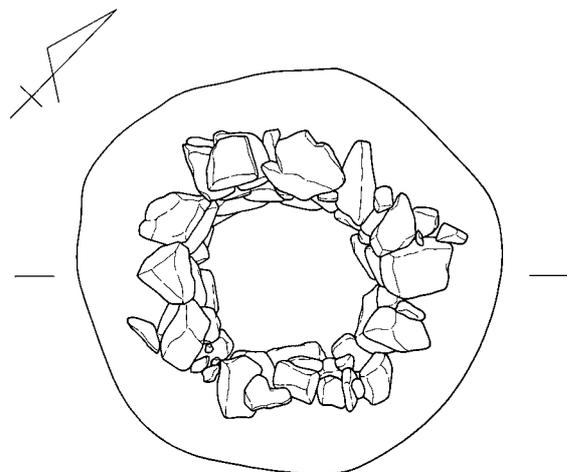
上面掘立柱建物SB301・302



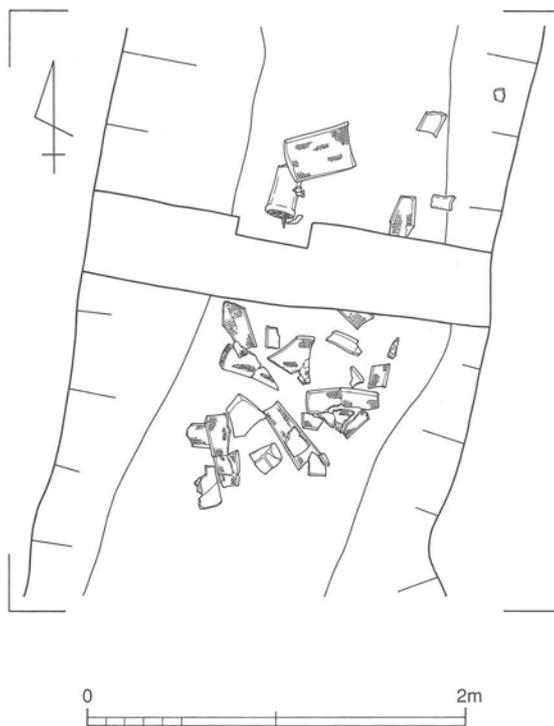
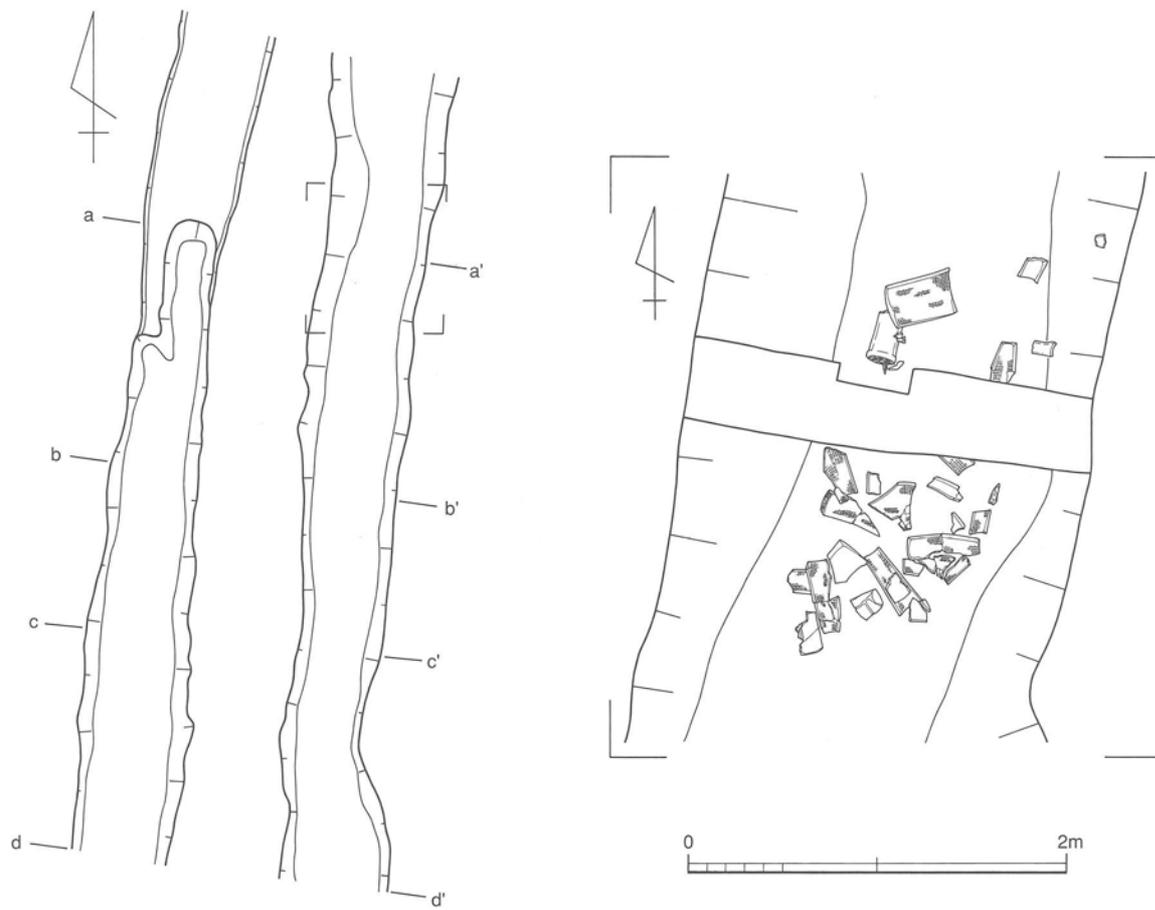
上面掘立柱建物SB303・304



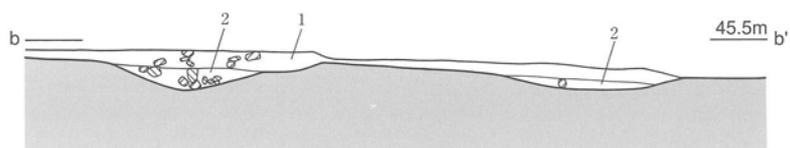
上面掘立柱建物SB305・306



井戸SE1



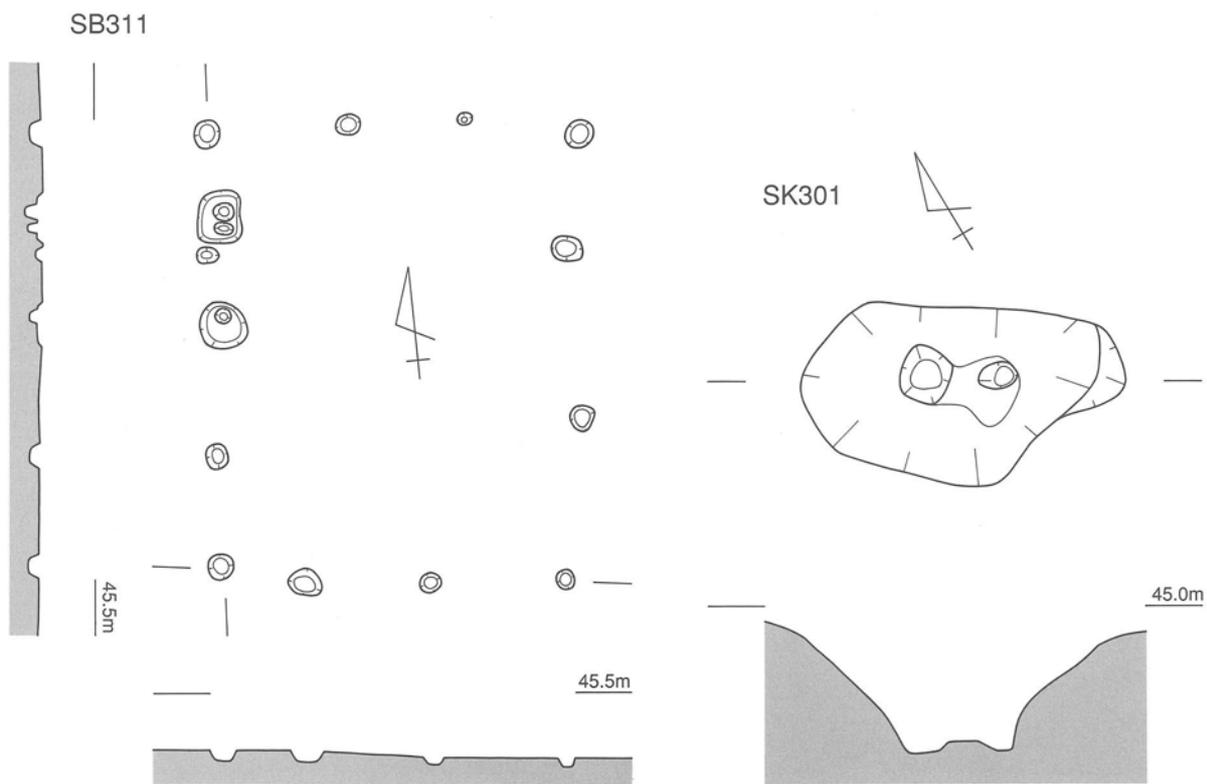
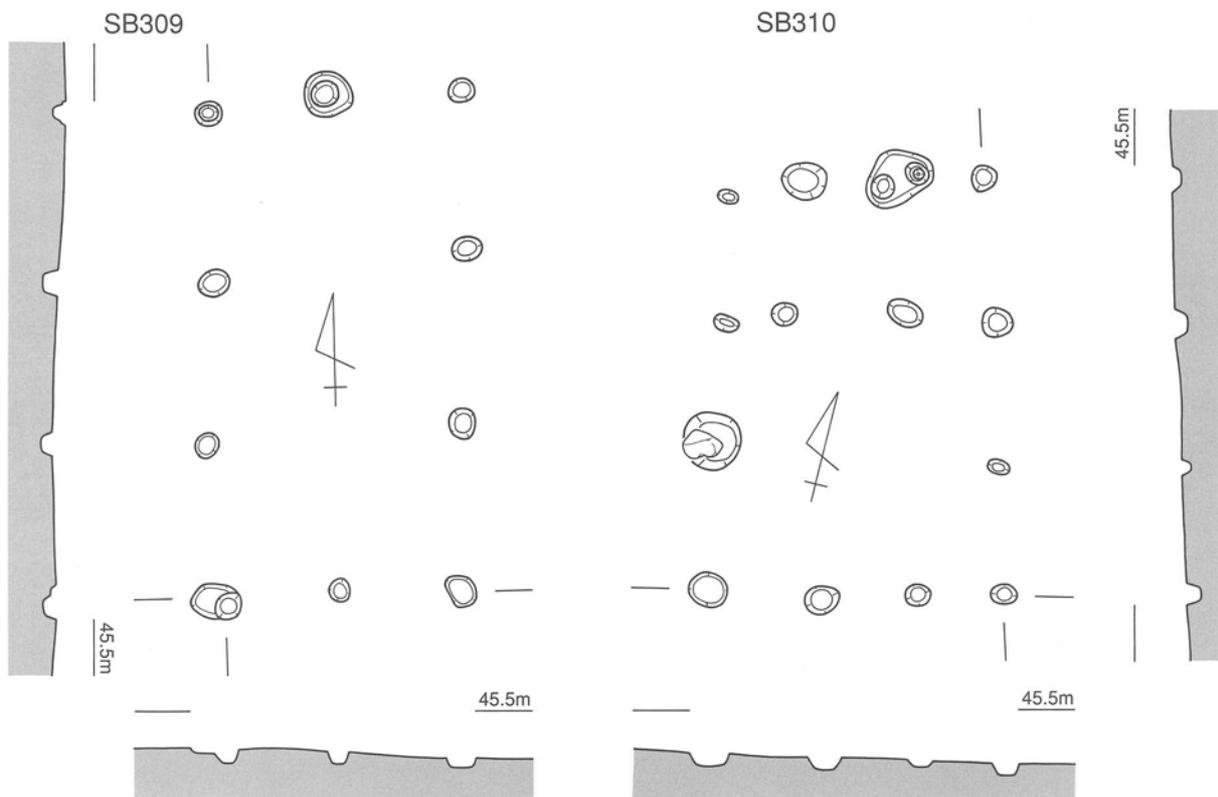
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色小礫多く混じる極細砂
- 2 10YR3/4 暗褐色極細砂



西面築地塀平・断面図、内側溝瓦出土状況図



下面掘立柱建物SB307・308

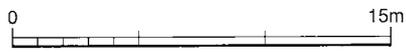
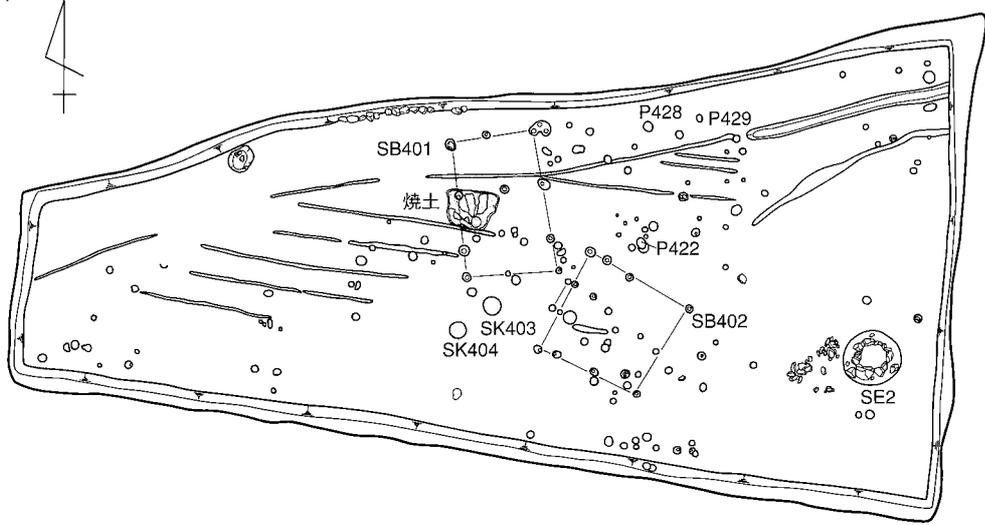


上面掘立柱建物SB309・310・311、土杭SK301

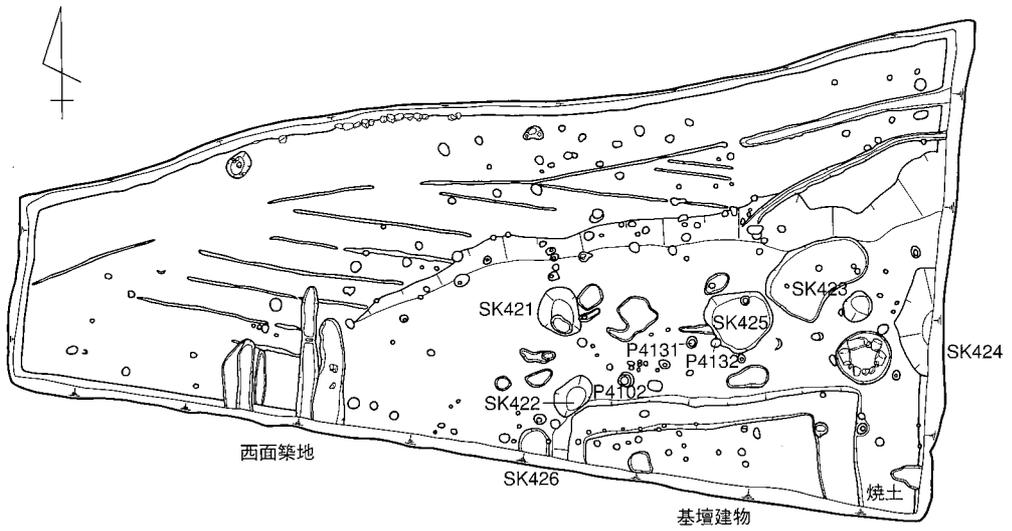


III・IV区平面図

上面



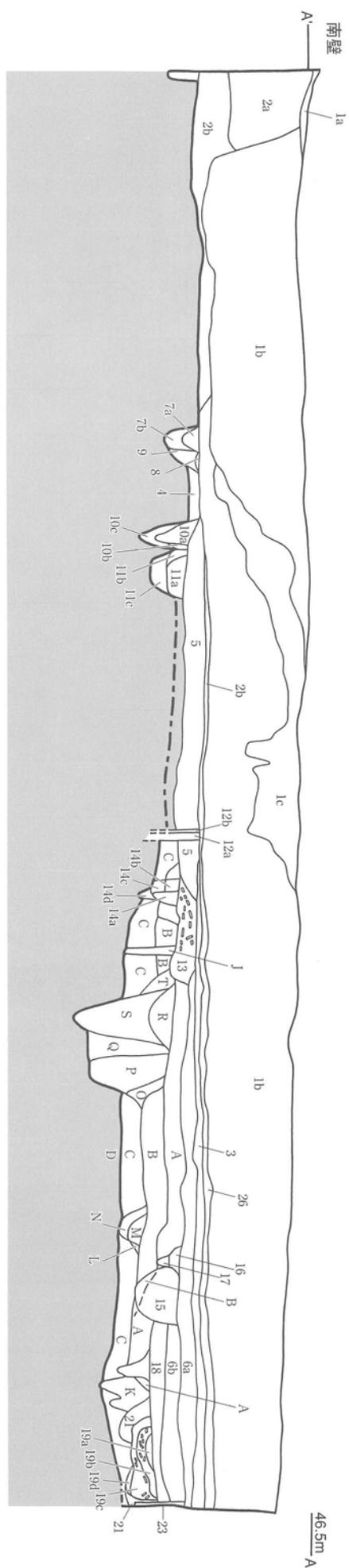
下面



上面遺構配置図、下面遺構配置図



下面地形图

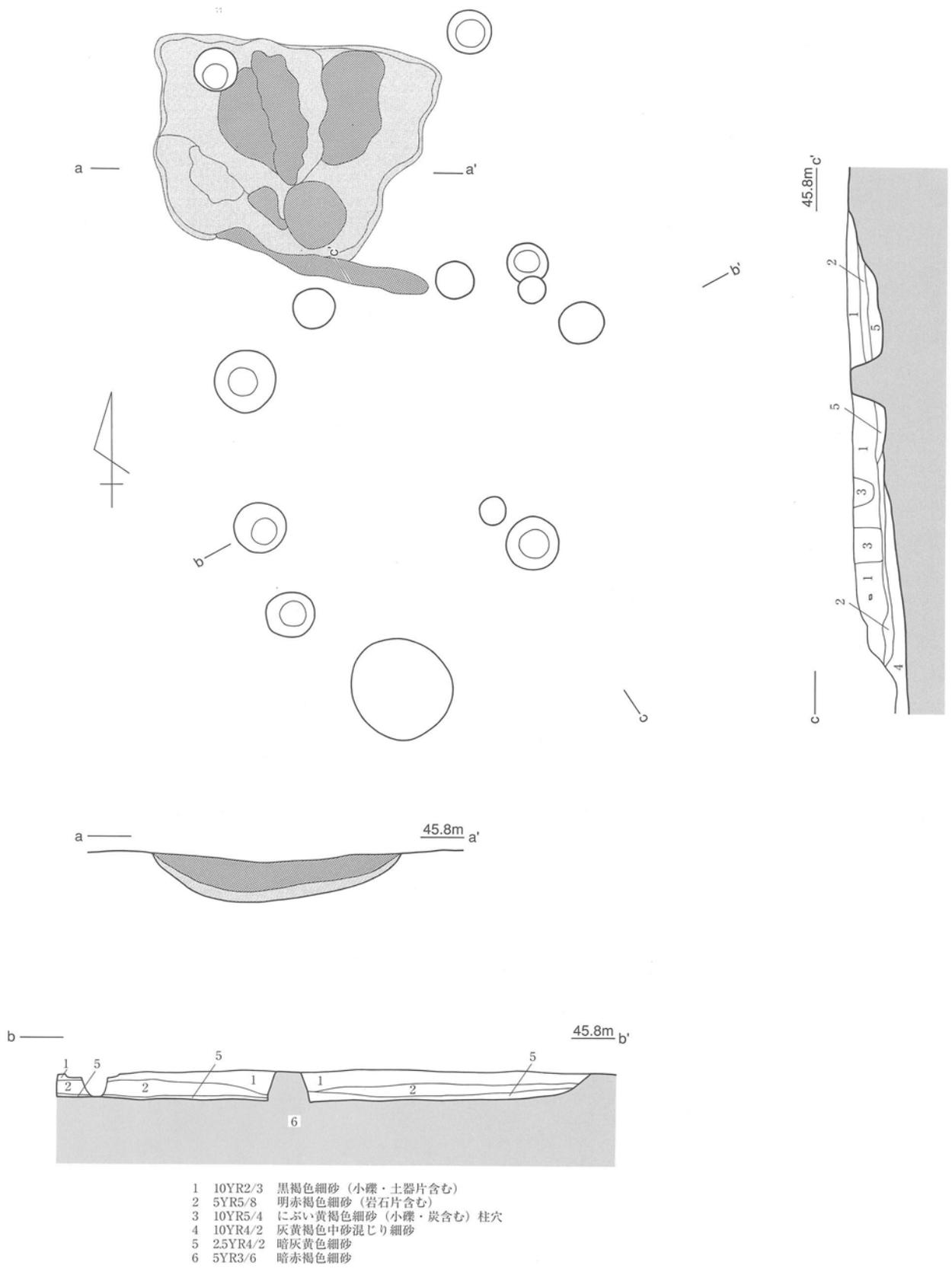


東壁  
46.5m  
A  
南壁  
46.5m  
A

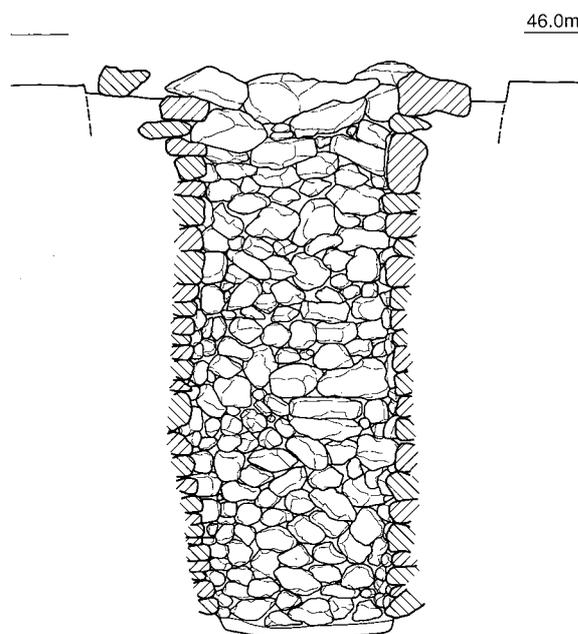
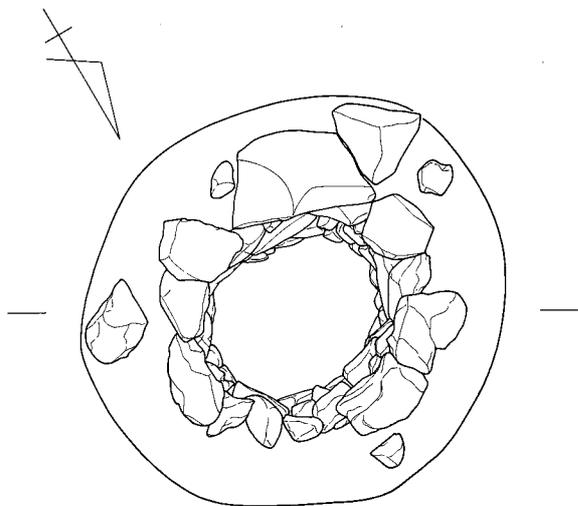
- 20 10YR2/1 黒色細砂 (瓦を多量に含む)
- 21 5Y2/1 オリーブ黒色細砂
- 22 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト質細砂 (小礫少し含む)
- 23 10YR3/4 暗褐色細砂
- 24 10YR4/2 灰黄褐色細砂
- 25 10YR3/3 暗褐色細砂
- 26 10YR3/4 に近い黄褐色細砂
- 27 5YR4/8 赤褐色細砂
- 28 10YR4/3 に近い黄褐色細砂
- 29 10YR3/3 暗褐色細砂
- 30a 10YR4/4 褐色細砂
- 30b 10YR3/1 黒褐色極細砂
- 30c 10YR2/2 黒褐色極細砂
- 30d 10YR2/1 黒褐色極細砂
- 30e 10YR2/1 黒褐色極細砂
- 30f 10YR3/4 暗褐色極細砂 (瓦多く含む)
- 31 10YR3/3 暗褐色極細砂 (瓦多く含む)



基本土層図



上面焼土平・断面図

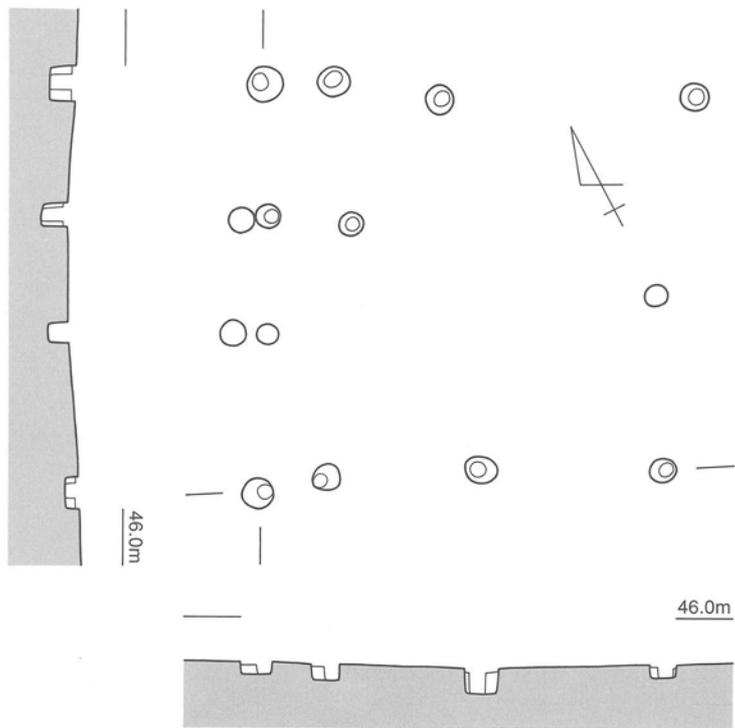


井戸SE2

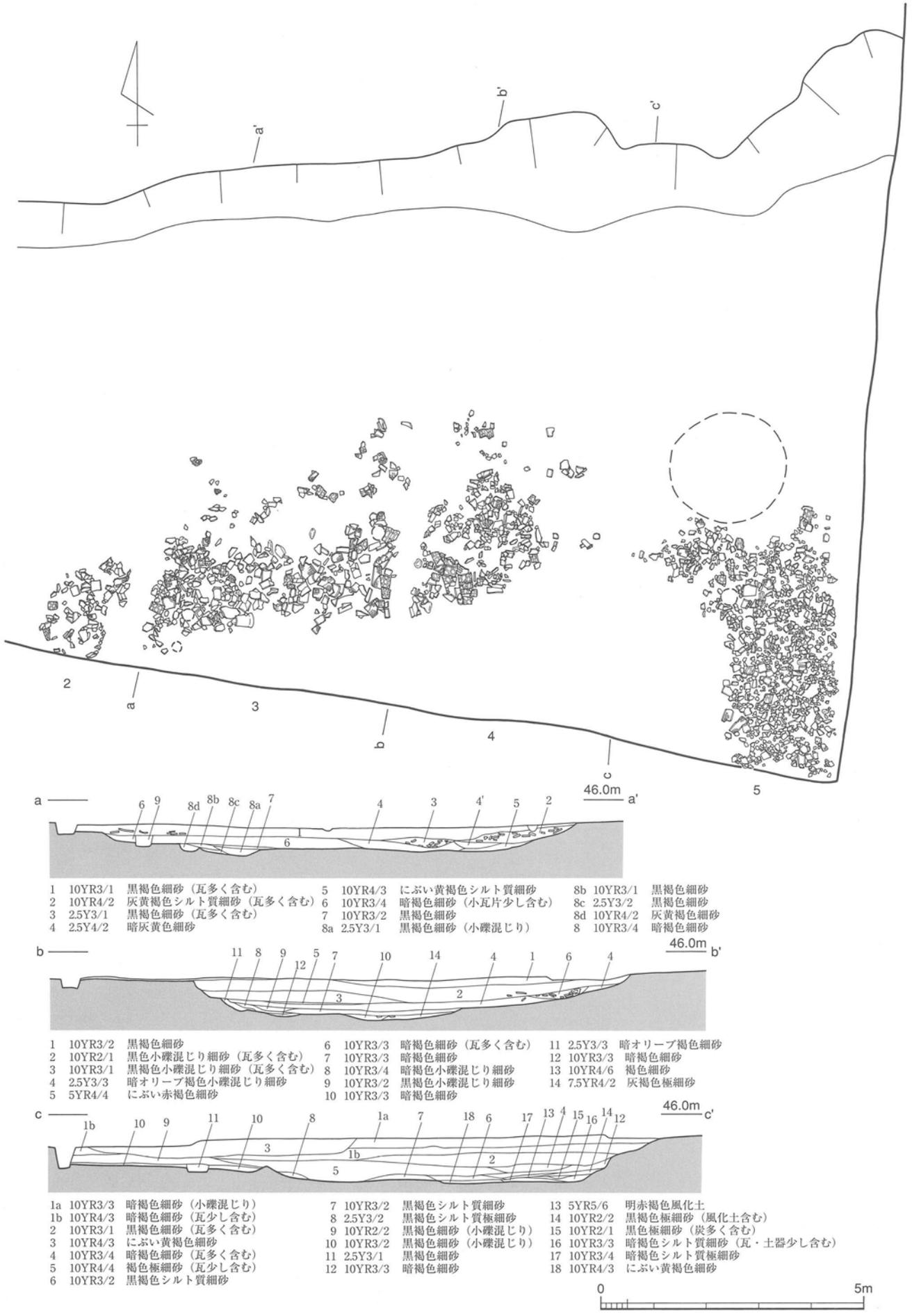
SB401



SB402



上面掘立柱建物SB401・402

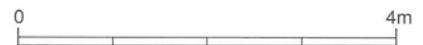
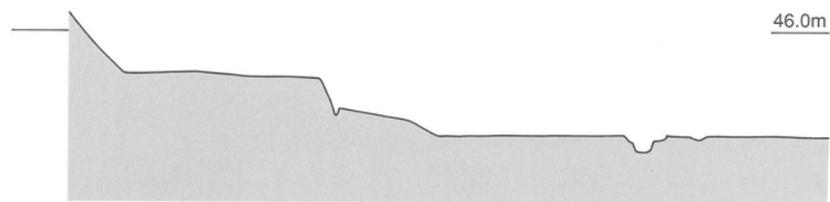
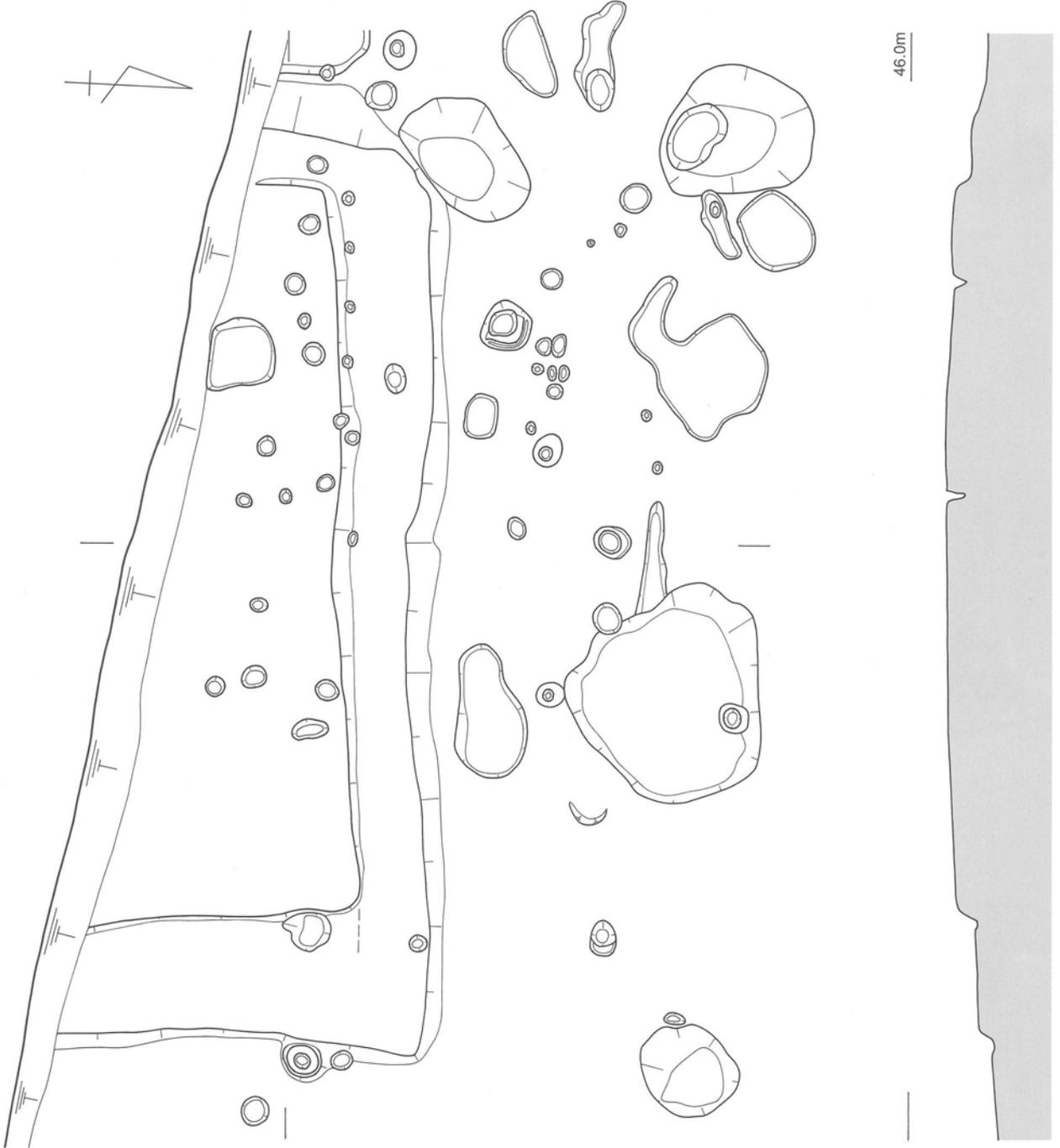


- |                              |                           |                   |
|------------------------------|---------------------------|-------------------|
| 1 10YR3/1 黒褐色細砂 (瓦多く含む)      | 5 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質細砂    | 8b 10YR3/1 黒褐色細砂  |
| 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト質細砂 (瓦多く含む) | 6 10YR3/4 暗褐色細砂 (小瓦片少し含む) | 8c 2.5Y3/2 黒褐色細砂  |
| 3 2.5Y3/1 黒褐色細砂 (瓦多く含む)      | 7 10YR3/2 黒褐色細砂           | 8d 10YR4/2 灰黄褐色細砂 |
| 4 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂             | 8a 2.5Y3/1 黒褐色細砂 (小礫混じり)  | 8 10YR3/4 暗褐色細砂   |

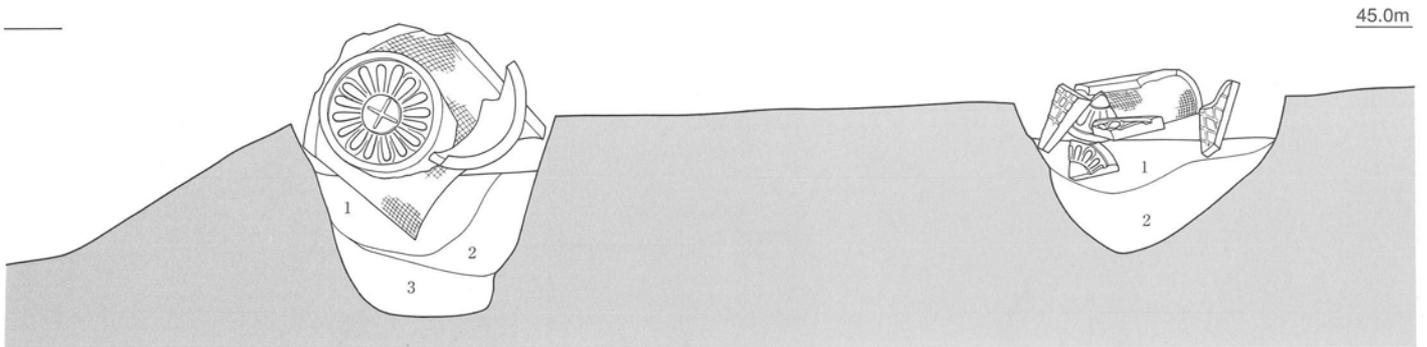
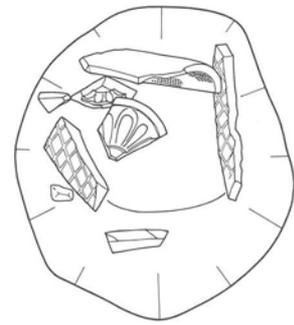
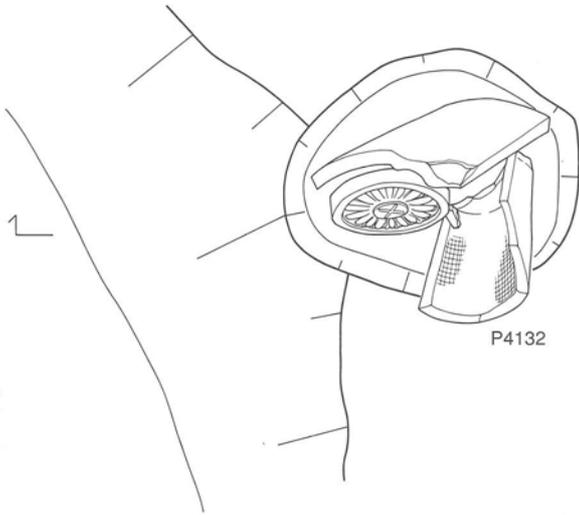
- |                              |                         |                      |
|------------------------------|-------------------------|----------------------|
| 1 10YR3/2 黒褐色細砂              | 6 10YR3/3 暗褐色細砂 (瓦多く含む) | 11 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂 |
| 2 10YR2/1 黒色小礫混じり細砂 (瓦多く含む)  | 7 10YR3/3 暗褐色細砂         | 12 10YR3/3 暗褐色細砂     |
| 3 10YR3/1 黒褐色小礫混じり細砂 (瓦多く含む) | 8 10YR3/4 暗褐色小礫混じり細砂    | 13 10YR4/6 褐色細砂      |
| 4 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色小礫混じり細砂     | 9 10YR3/2 黒褐色小礫混じり細砂    | 14 7.5YR4/2 灰褐色極細砂   |
| 5 5YR4/4 にぶい赤褐色細砂            | 10 10YR3/3 暗褐色細砂        |                      |

- |                          |                          |                                 |
|--------------------------|--------------------------|---------------------------------|
| 1a 10YR3/3 暗褐色細砂 (小礫混じり) | 7 10YR3/2 黒褐色シルト質細砂      | 13 5YR5/6 明赤褐色風化土               |
| 1b 10YR4/3 暗褐色細砂 (瓦少し含む) | 8 2.5Y3/2 黒褐色シルト質極細砂     | 14 10YR2/2 黒褐色極細砂 (風化土含む)       |
| 2 10YR3/1 黒褐色細砂 (瓦多く含む)  | 9 10YR2/2 黒褐色細砂 (小礫混じり)  | 15 10YR2/1 黒色極細砂 (炭多く含む)        |
| 3 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂       | 10 10YR3/2 黒褐色細砂 (小礫混じり) | 16 10YR3/3 暗褐色シルト質細砂 (瓦・土器少し含む) |
| 4 10YR3/4 暗褐色細砂 (瓦多く含む)  | 11 2.5Y3/1 黒褐色細砂         | 17 10YR3/4 暗褐色シルト質極細砂           |
| 5 10YR4/4 褐色極細砂 (瓦少し含む)  | 12 10YR3/3 暗褐色細砂         | 18 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂             |
| 6 10YR3/2 黒褐色シルト質細砂      |                          |                                 |

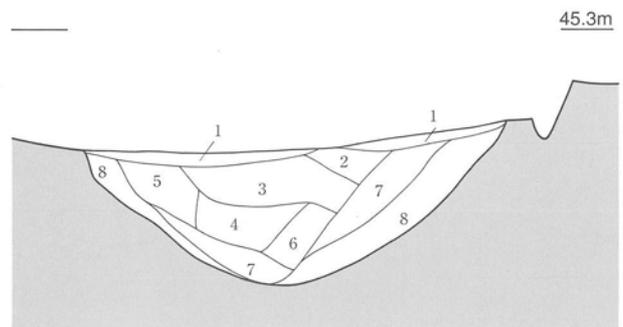
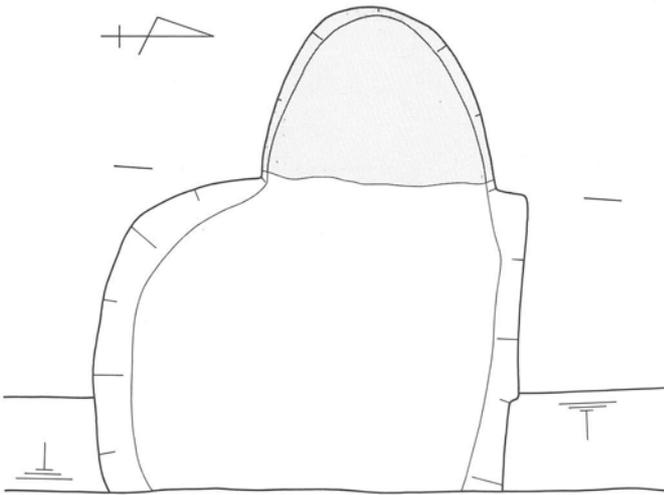
下面瓦群平・断面図



基壇平・断面图



- 1 10YR3/4 暗褐色シルト質極細砂    2 10YR3/3 暗褐色シルト質極細砂    3 10YR3/4 暗褐色シルト質極細砂



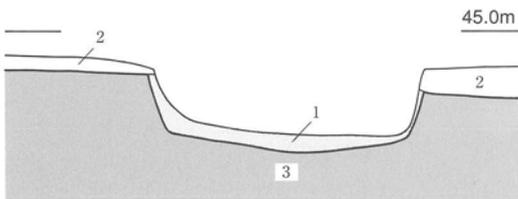
SK422

- 1 10YR3/4 暗褐色シルト質細砂  
 2 10YR4/4 褐色シルト質極細砂  
 3 10YR3/2 黒褐色細砂  
 4 10YR3/1 黒褐色細砂  
 5 10YR2/2 黒褐色細砂  
 6 10YR3/2 黒褐色細砂  
 7 10YR3/3 暗褐色シルト質細砂  
 8 10YR3/2 黒褐色細砂

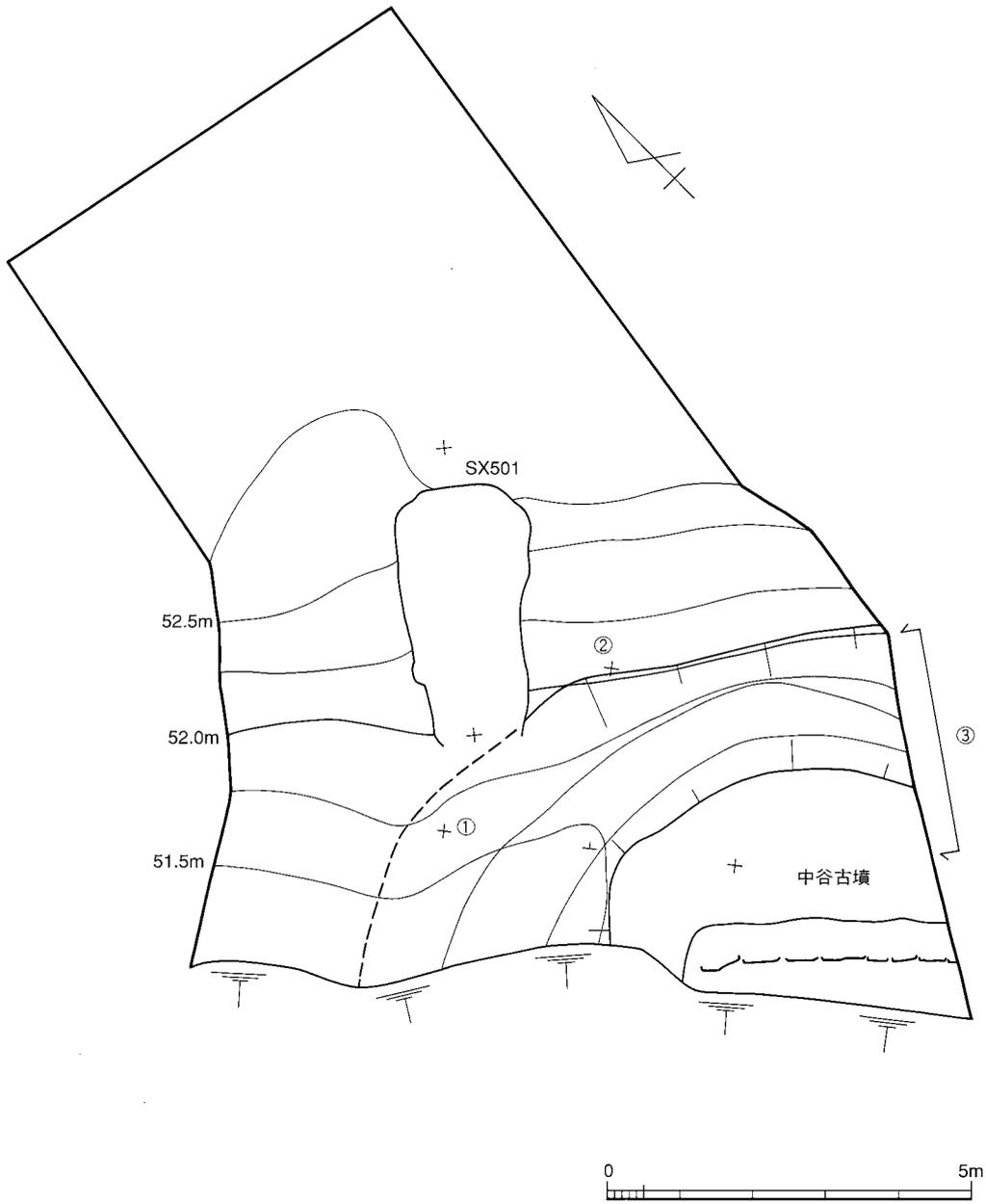
焼土

下面焼土坑

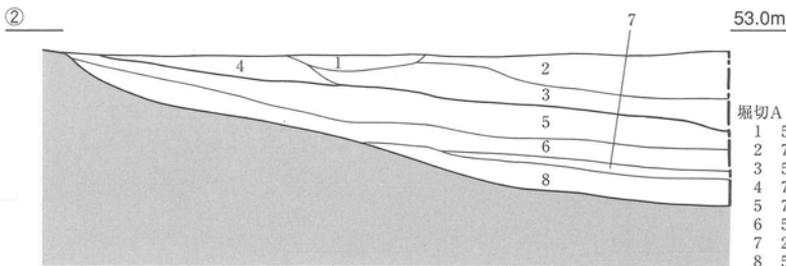
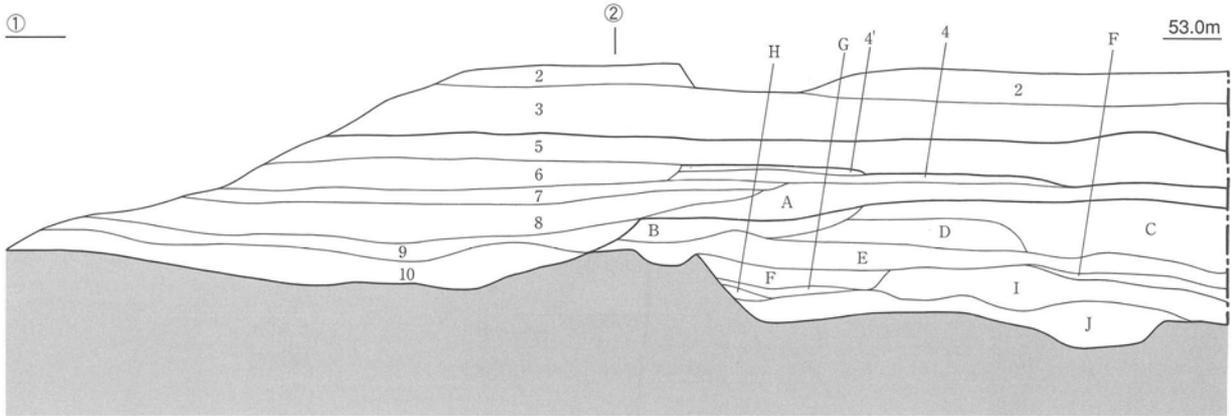
- 1 5YR4/6 暗赤褐色極細砂 (焼土)  
 2 10YR3/1 黒褐色細砂  
 3 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 (ベース)



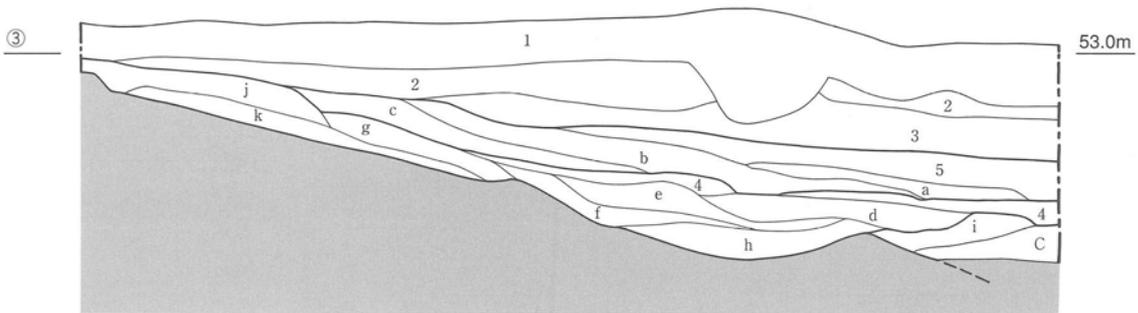
下面柱穴P4131・4132、土坑SK422断面図、焼土坑



中谷古墳墳丘測量図



- 堀切A
- |   |          |              |            |
|---|----------|--------------|------------|
| 1 | 5YR4/4   | にぶい赤褐色シルト質粗砂 | 風化岩盤による整地層 |
| 2 | 7.5YR4/4 | 褐色シルト質粗砂     |            |
| 3 | 5YR4/4   | にぶい赤褐色シルト質細砂 |            |
| 4 | 7.5YR4/4 | 褐色シルト質細砂～粗砂  |            |
| 5 | 7.5YR3/4 | 暗褐色シルト質粗砂    |            |
| 6 | 5YR3/3   | 暗赤褐色シルト質粗砂   |            |
| 7 | 2.5YR4/6 | 赤褐色シルト       | 風化岩盤による整地層 |
| 8 | 5YR3/4   | 暗赤褐色シルト質細砂   |            |



堀切B

- 墳丘共通  
堀切内埋土および墳丘削平後の整地層
- |    |          |              |            |
|----|----------|--------------|------------|
| 1  | 7.5YR4/4 | 褐色細砂(表土)     |            |
| 2  | 7.5YR4/4 | 褐色シルト質粗砂     |            |
| 3  | 5YR4/4   | にぶい赤褐色シルト質細砂 |            |
| 4  | 7.5YR3/3 | 暗褐色シルト質細砂    |            |
| 4' | 7.5YR4/4 | 褐色シルト質細砂     | 風化岩盤による整地層 |
| 5  | 7.5YR3/4 | 暗褐色シルト質粗砂    |            |
| 6  | 5YR3/3   | 暗赤褐色シルト質粗砂   |            |
| 7  | 2.5YR4/6 | 赤褐色シルト       | 風化岩盤による整地層 |
| 8  | 5YR3/4   | 暗赤褐色シルト質細砂   |            |
| 9  | 7.5YR3/3 | 暗褐色シルト質粗砂    | 遺物を多く含む    |
| 10 | 7.5YR4/3 | 褐色シルト質細砂     |            |

- 墳丘盛土およびその下位の地層
- |   |          |              |                  |
|---|----------|--------------|------------------|
| A | 7.5YR4/3 | 褐色シルト質粗砂     | 風化岩盤を多く含む        |
| B | 7.5YR4/4 | 褐色シルト質細砂     |                  |
| C | 5YR4/4   | にぶい赤褐色シルト質細砂 | 風化岩盤を極めて多く含む古墳盛土 |
| D | 7.5YR4/4 | 褐色シルト質細砂     |                  |
| E | 7.5YR4/4 | 褐色極細砂        |                  |
| F | 7.5YR3/3 | 暗褐色極細砂       | 炭を多く含む           |
| G | 5YR4/4   | にぶい赤褐色シルト質粗砂 | 風化岩盤を多く含む        |
| H | 7.5YR3/3 | 暗褐色極細砂       | 炭を多く含む           |
| I | 5YR4/4   | にぶい赤褐色シルト質細砂 | 風化岩盤を多く含む        |
| J | 7.5YR4/4 | 褐色シルト質極細砂    |                  |

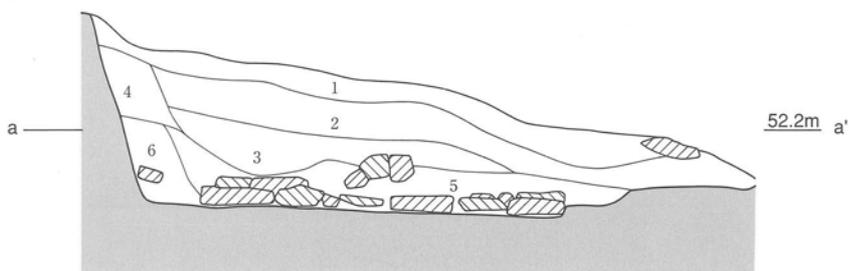
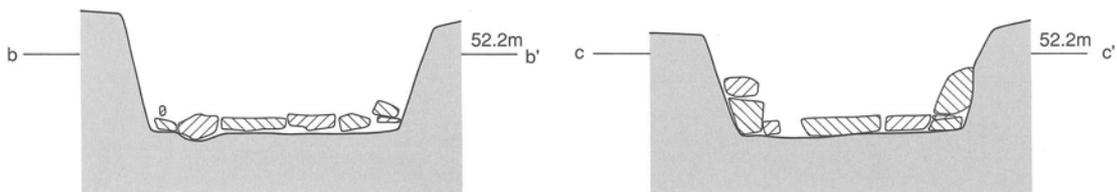
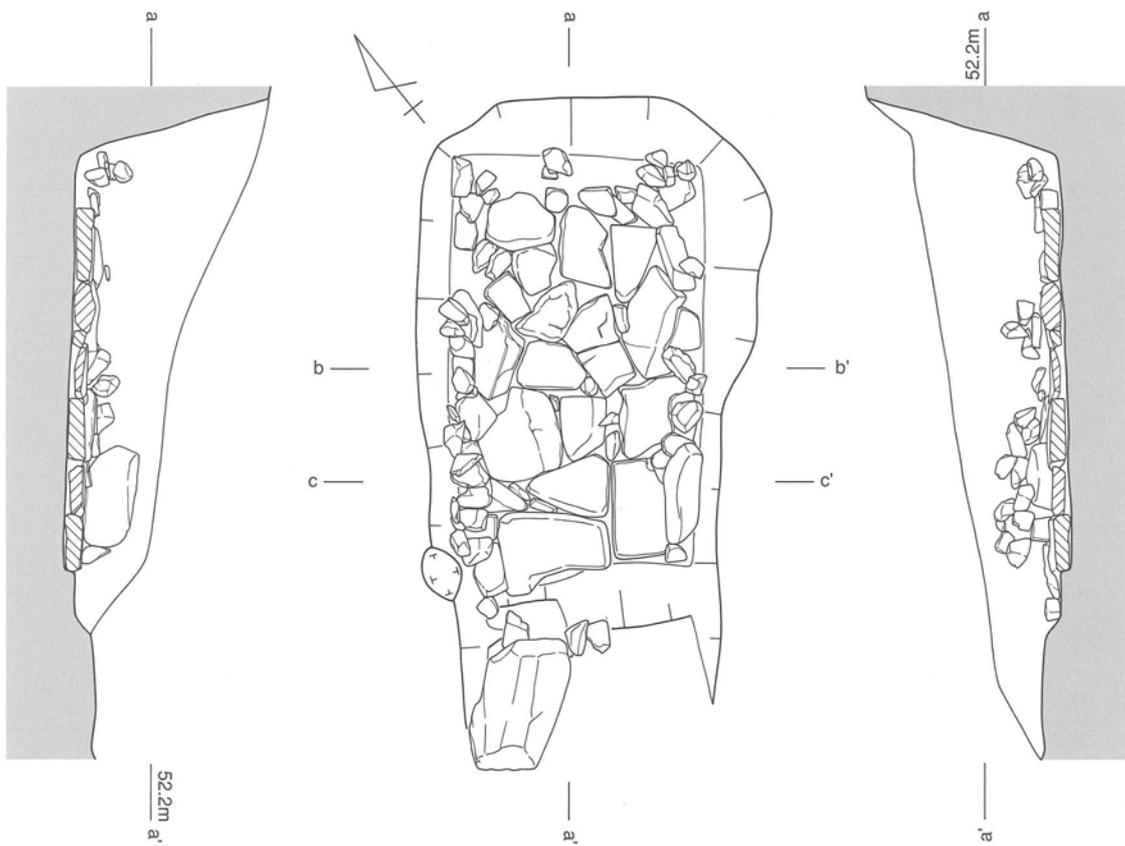
堀切内埋土およびその下位の地層

- |   |          |               |                   |
|---|----------|---------------|-------------------|
| a | 5YR4/3   | にぶい赤褐色細砂      |                   |
| b | 5YR3/3   | 暗赤褐色細砂        |                   |
| c | 7.5YR4/4 | 褐色細砂          |                   |
| d | 7.5YR4/4 | 褐色細砂          |                   |
| e | 5YR4/4   | にぶい赤褐色シルト質細砂  |                   |
| f | 5YR3/4   | 暗赤褐色シルト質粗砂    |                   |
| g | 5YR4/4   | にぶい赤褐色細砂      |                   |
| h | 5YR4/4   | にぶい赤褐色シルト質細砂  | 風化岩盤を含む           |
| i | 5YR4/6   | 赤褐色細砂～粗砂      | 風化岩盤の破片を多く含む 炭混じり |
| j | 5YR4/3   | にぶい赤褐色細砂      |                   |
| k | 5YR4/4   | にぶい赤褐色シルト質極細砂 |                   |



中谷古墳墳丘・堀切断面図



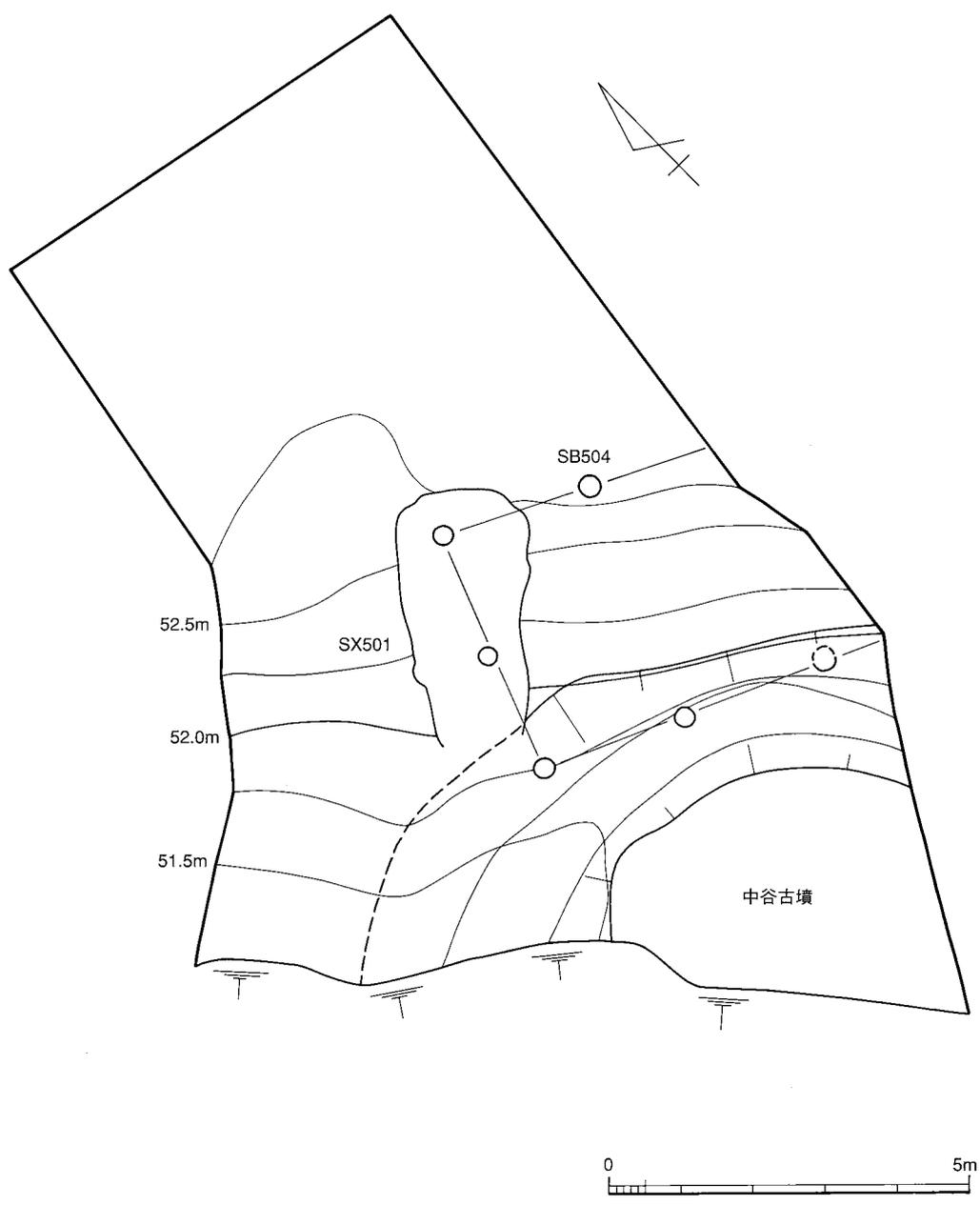


SX501

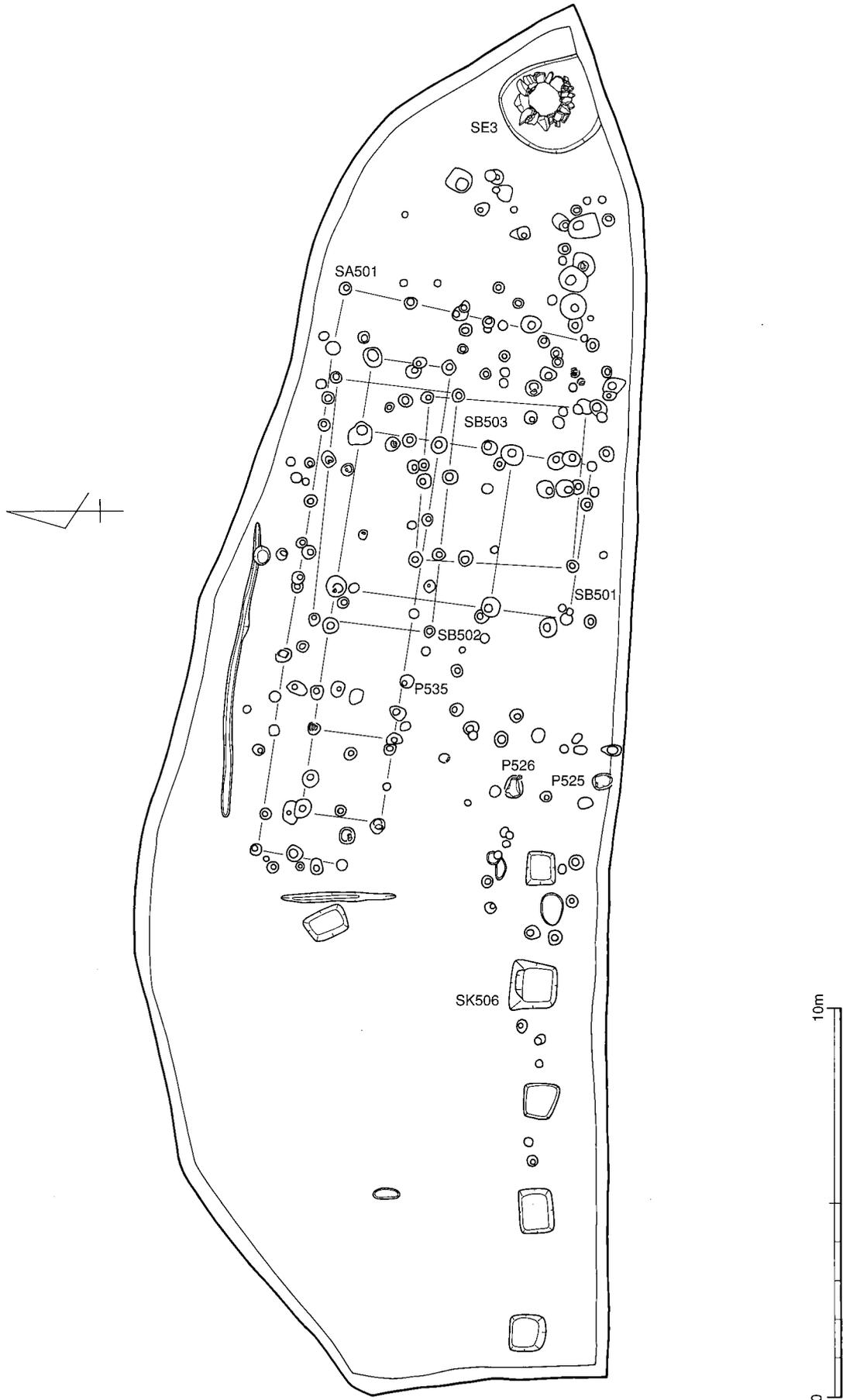
- 1 7.5YR3/4 暗褐色シルト質細砂
- 2 5YR3/4 暗赤褐色シルト質極細砂
- 3 7.5YR4/4 褐色砂質シルト
- 4 7.5YR4/3 褐色砂質シルト
- 5 5YR4/4 暗赤褐色砂質シルト
- 6 5YR4/4 暗赤褐色砂質シルト 風化岩盤の破片を多く含む



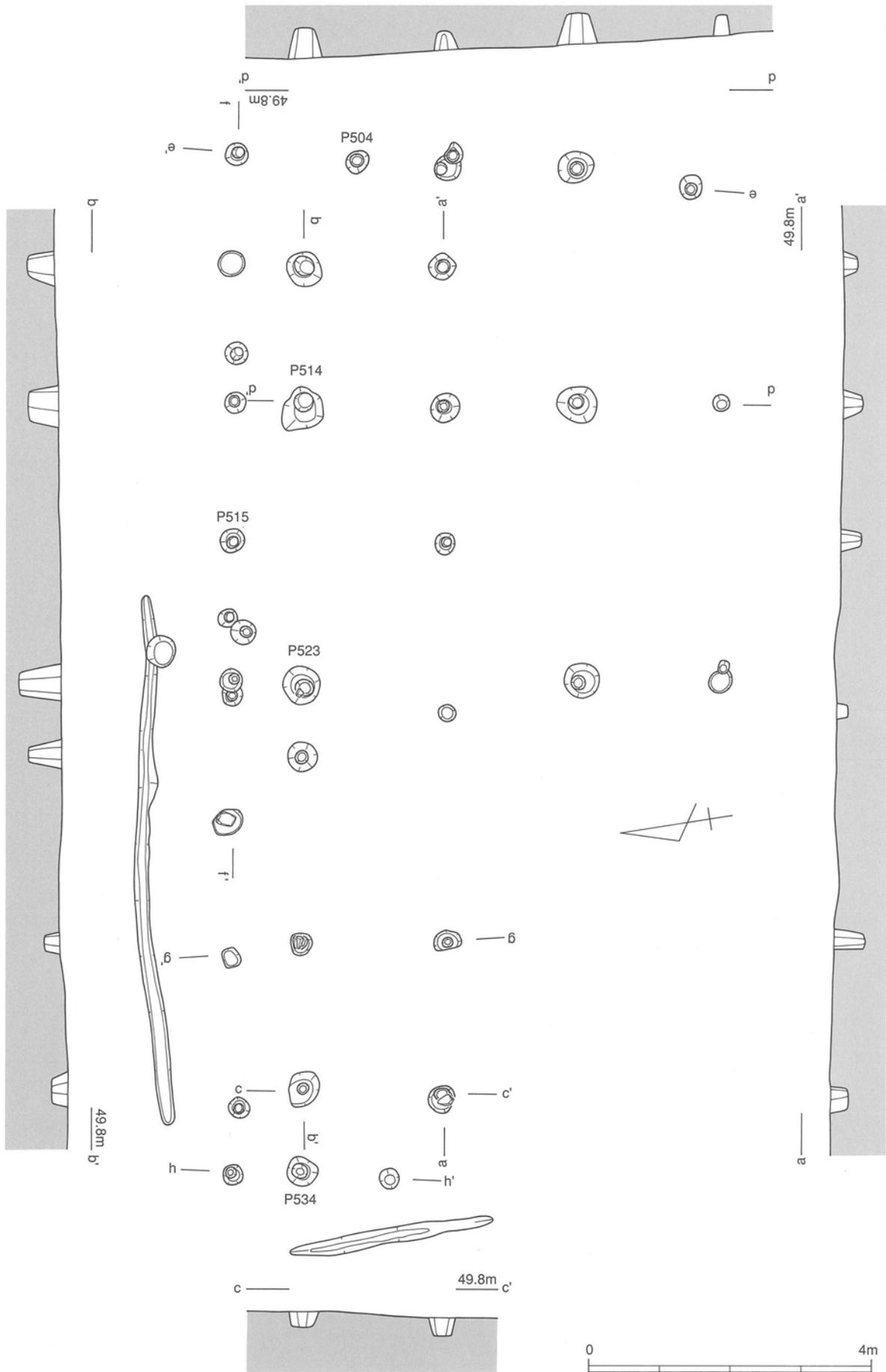
SX501 実測図



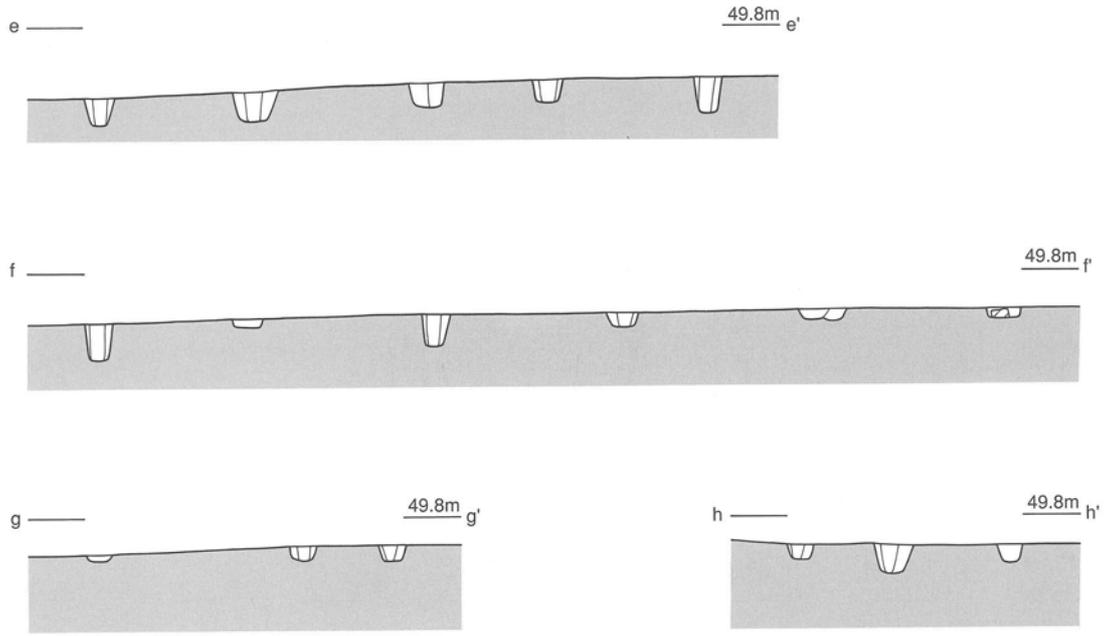
上位斜面部平面図



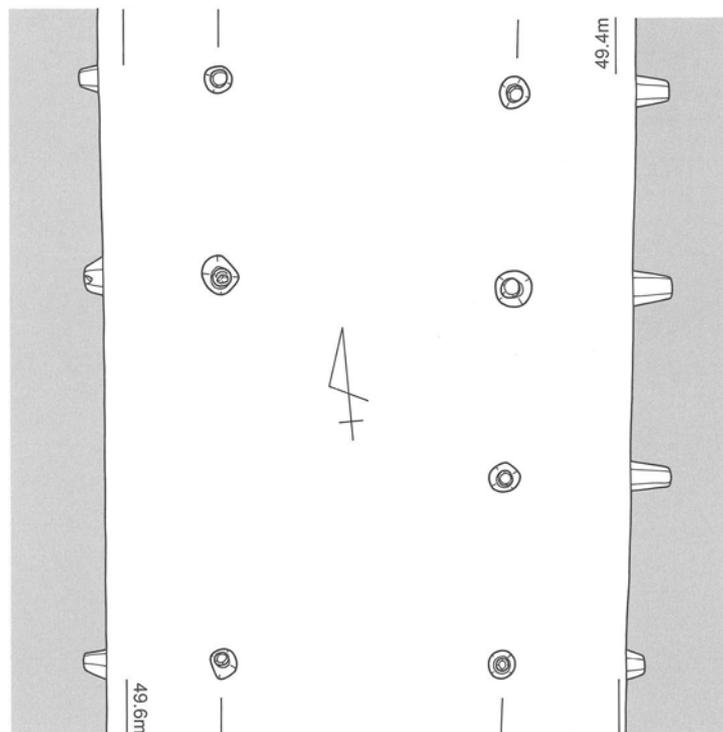
下位平坦面平面図



掘立柱建物SB502、柵SA501

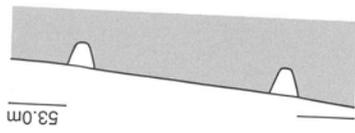
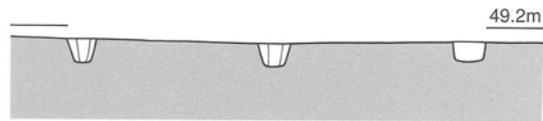
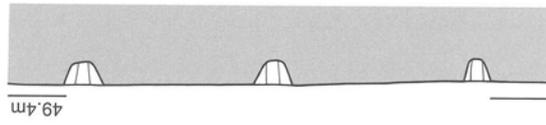


SB501

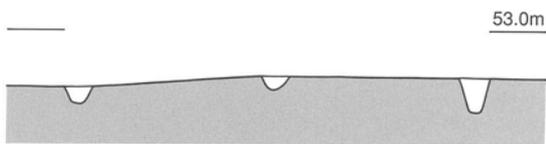
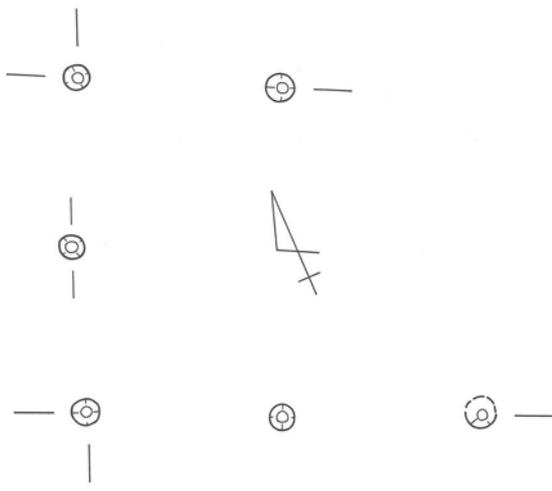
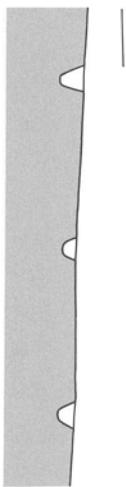


柵SA501 断面図、掘立柱建物SB501

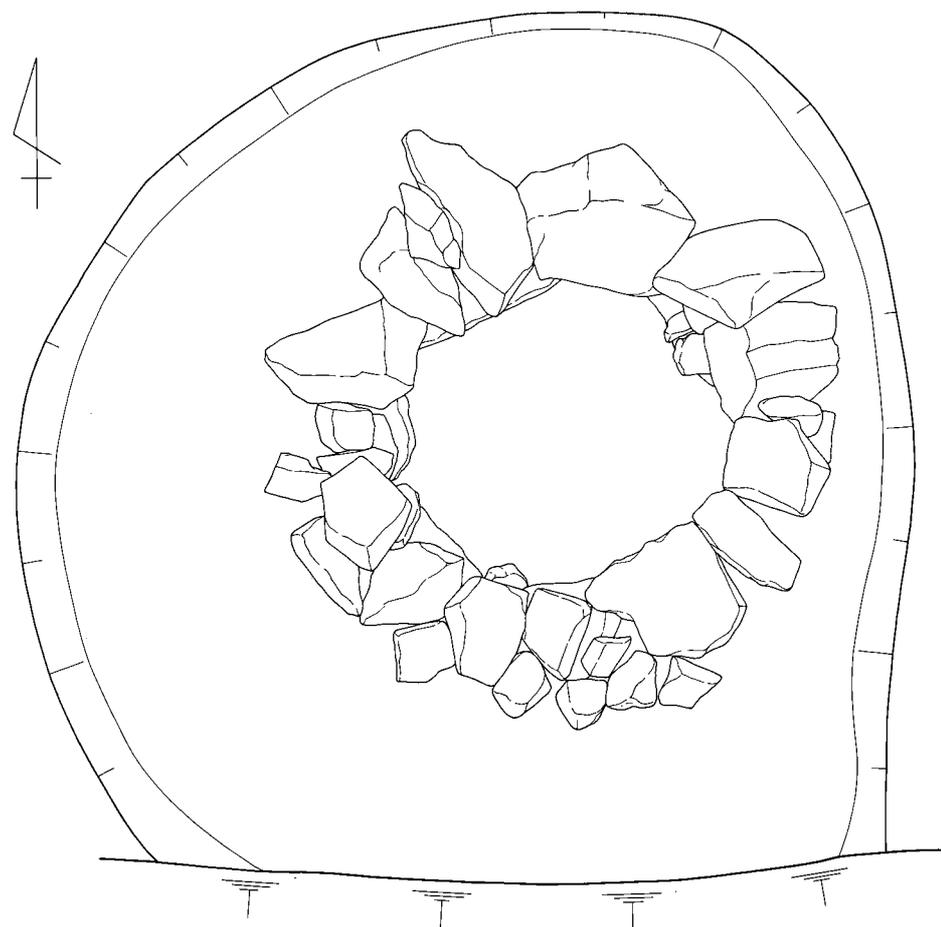
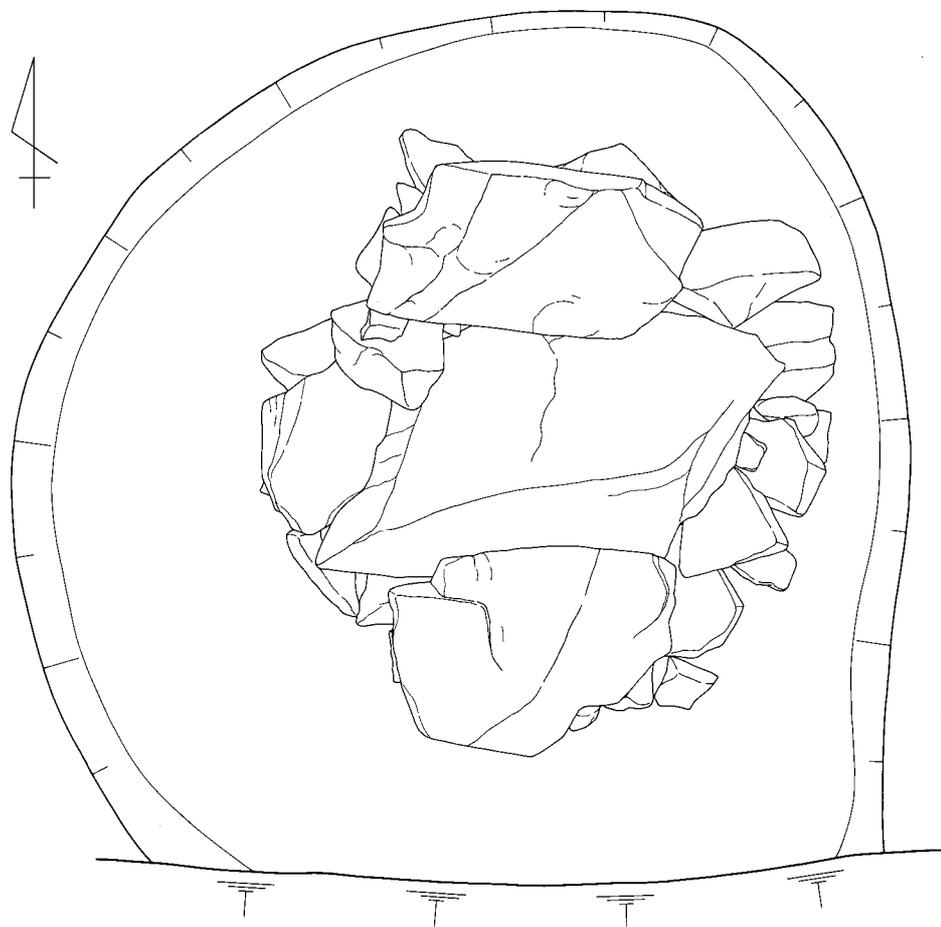
SB503



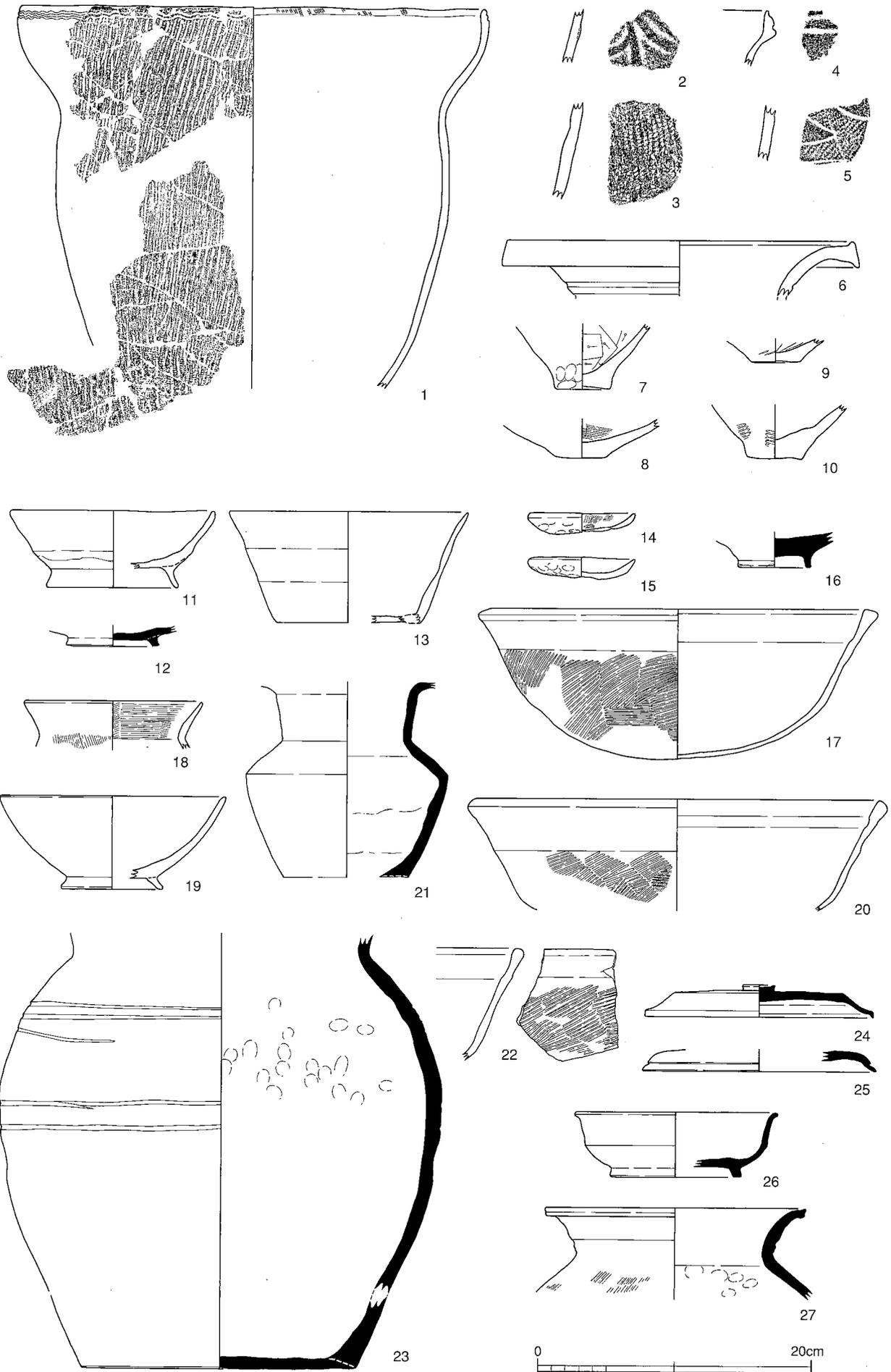
SB504



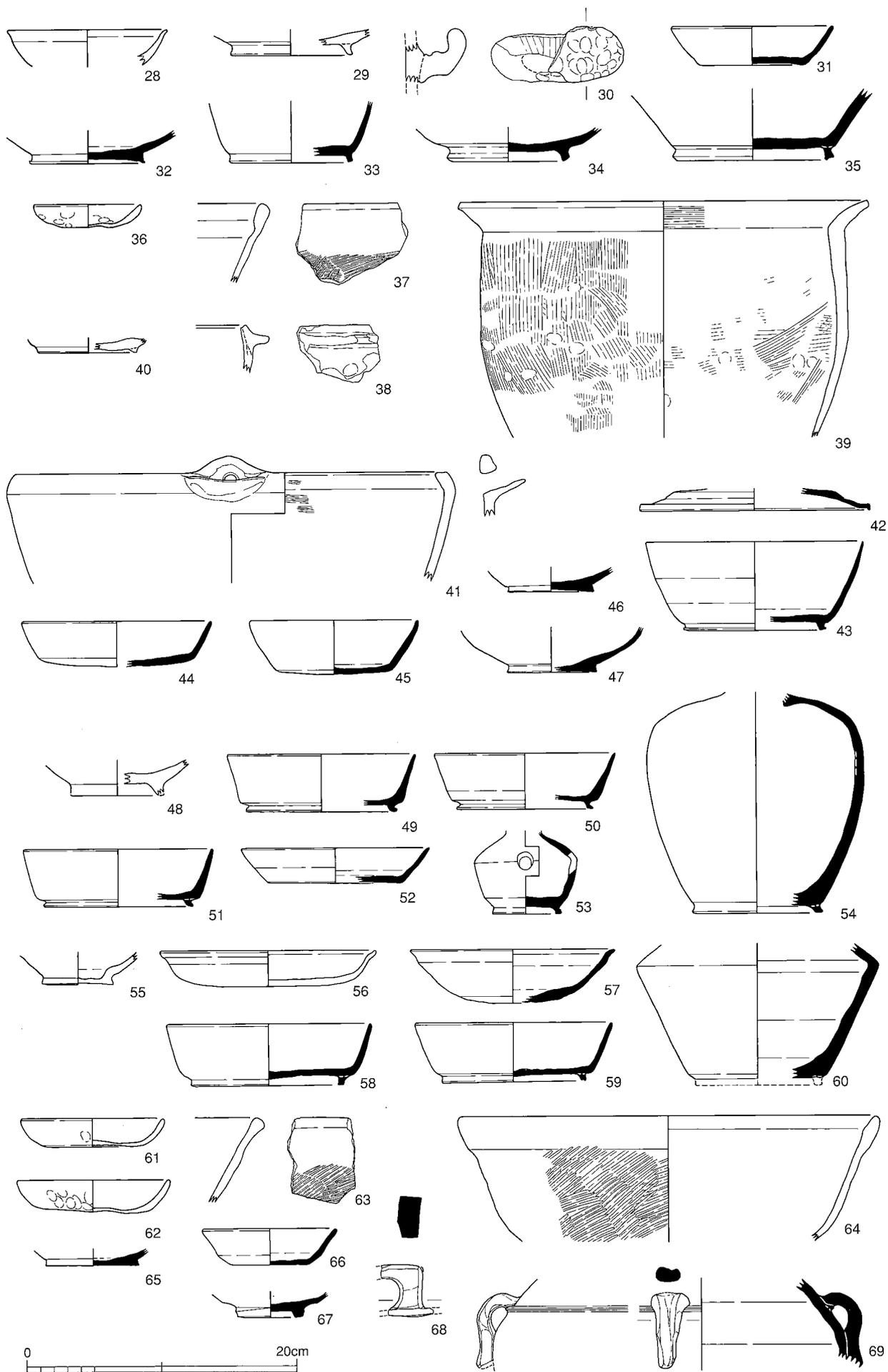
掘立柱建物SB503・504



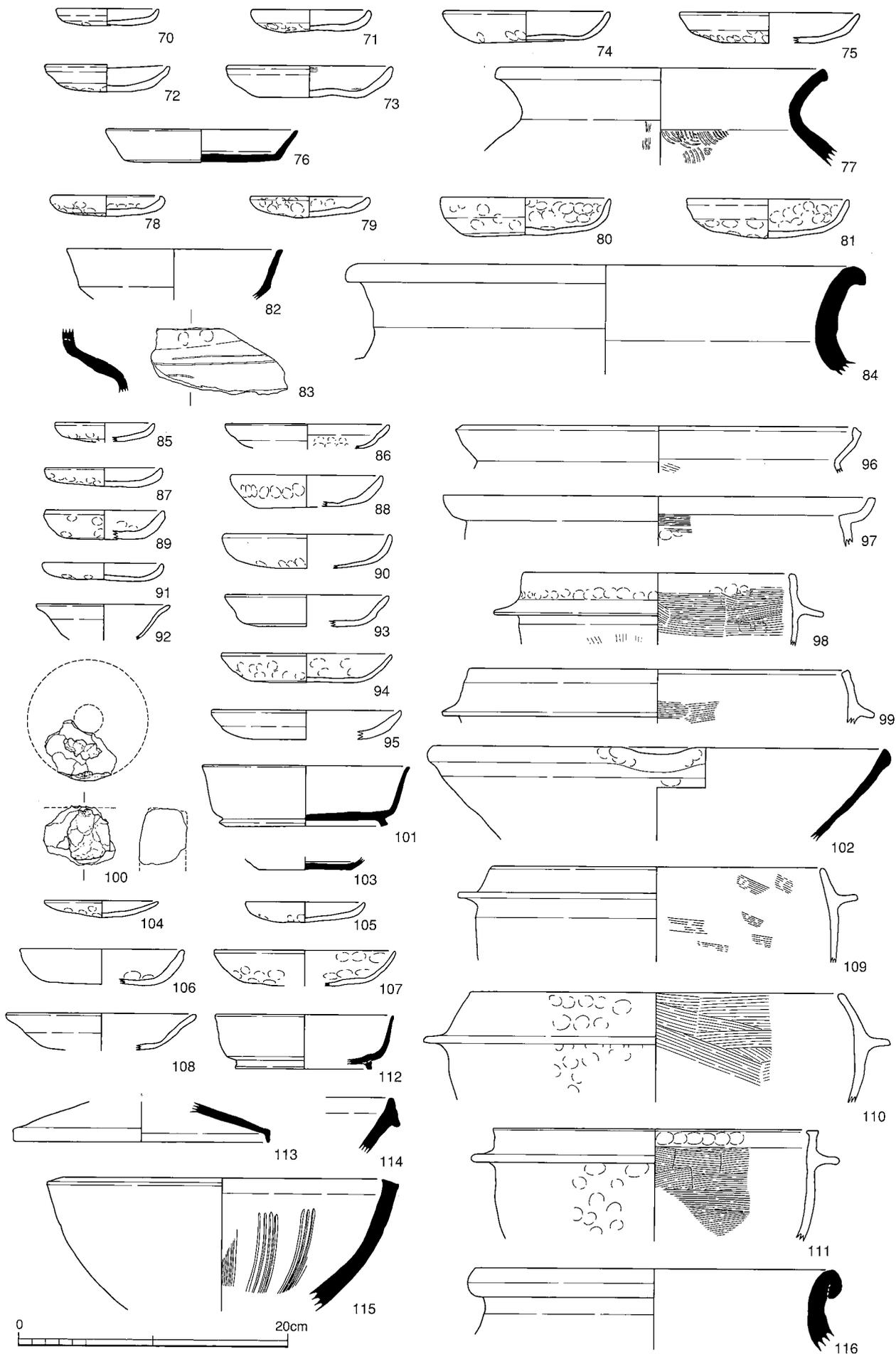
井戸SE3検出状況（上）・蓋除去後（下）



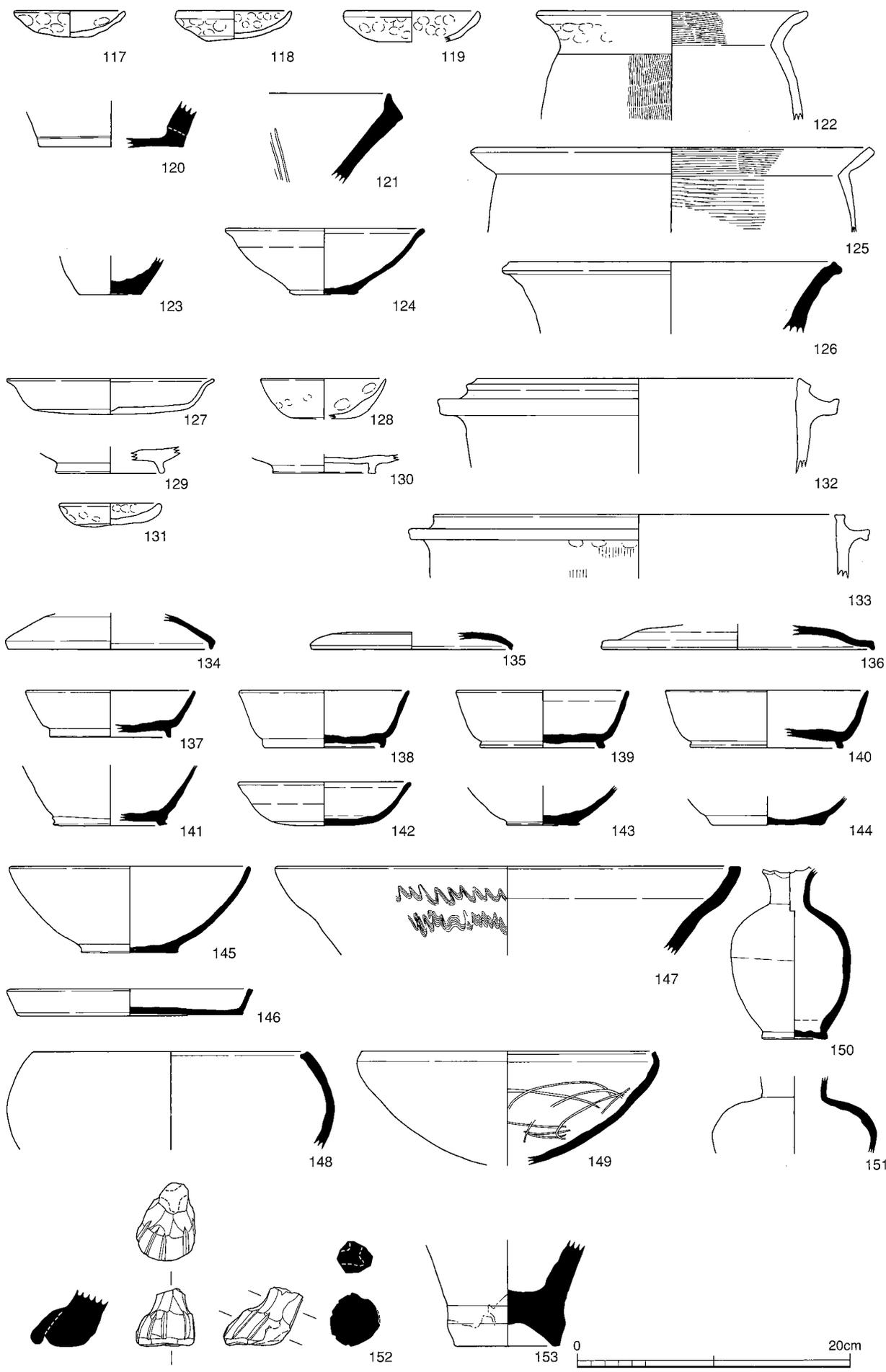
繩紋土器・弥生土器・I区出土土器



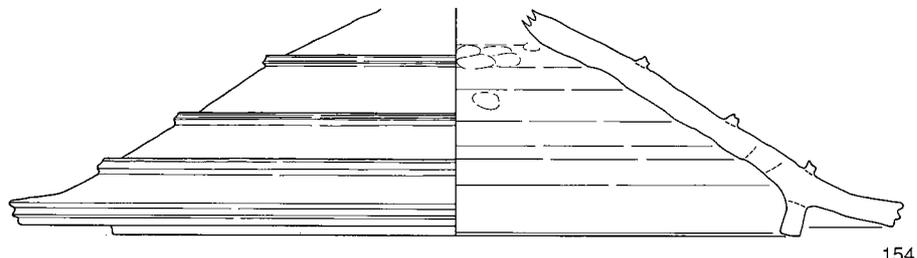
I · II 区出土土器



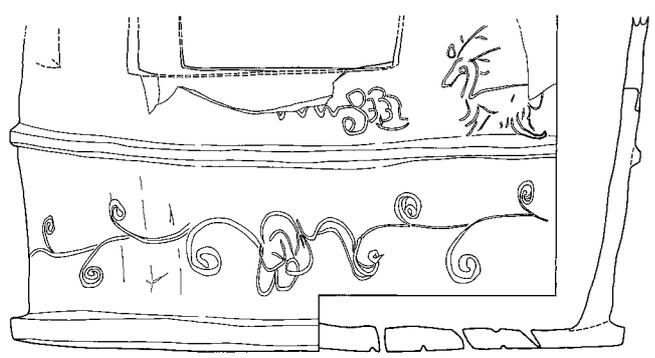
Ⅲ区出土土器



M区出土土器



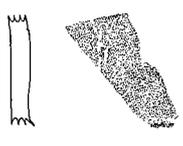
154



155



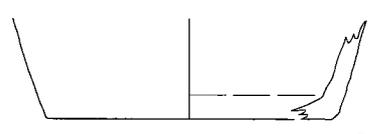
156



157



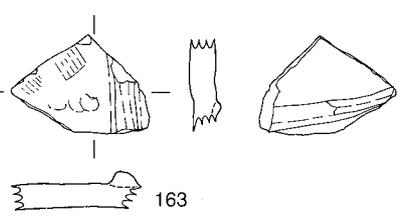
158



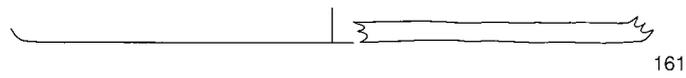
159



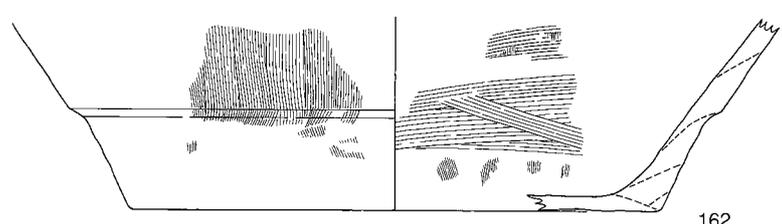
160



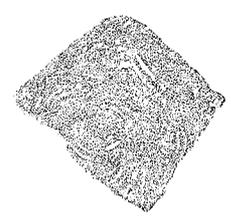
163



161

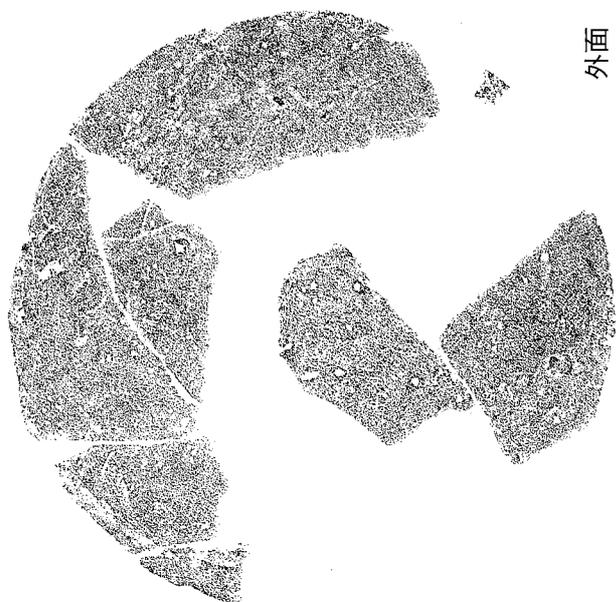


162



164

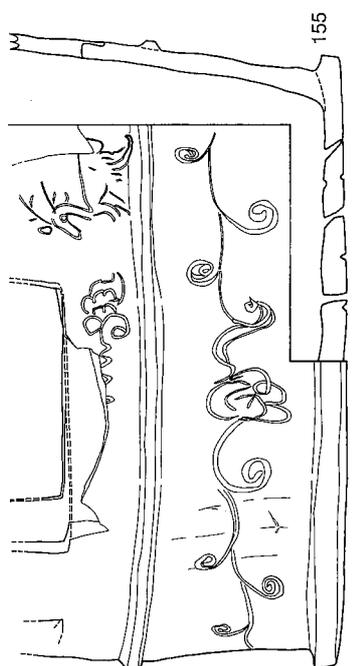
陶製宝塔



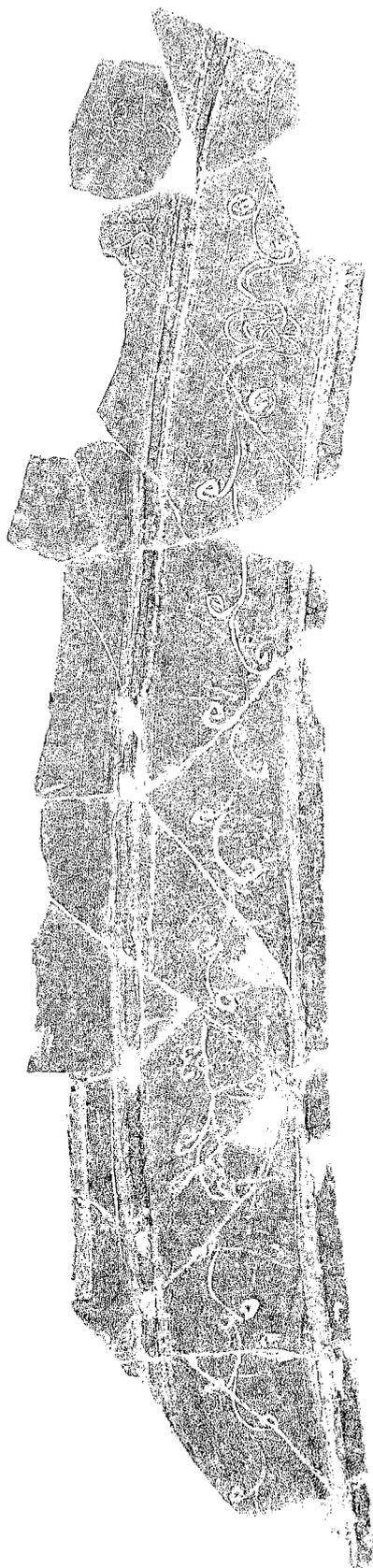
外面

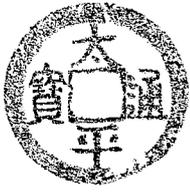


内面

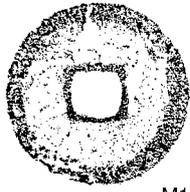


陶製宝塔

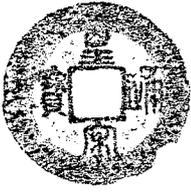
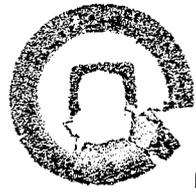




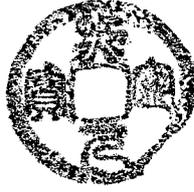
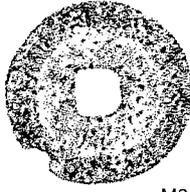
M1



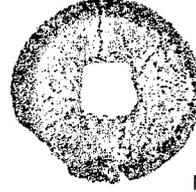
M2



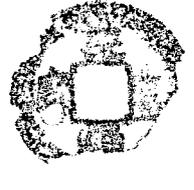
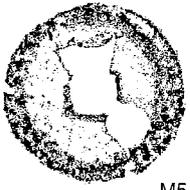
M3



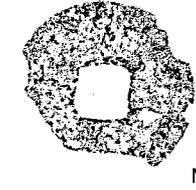
M4



M5



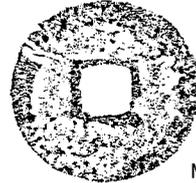
M6



M7



M8



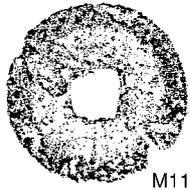
M9



M10



M11



M12

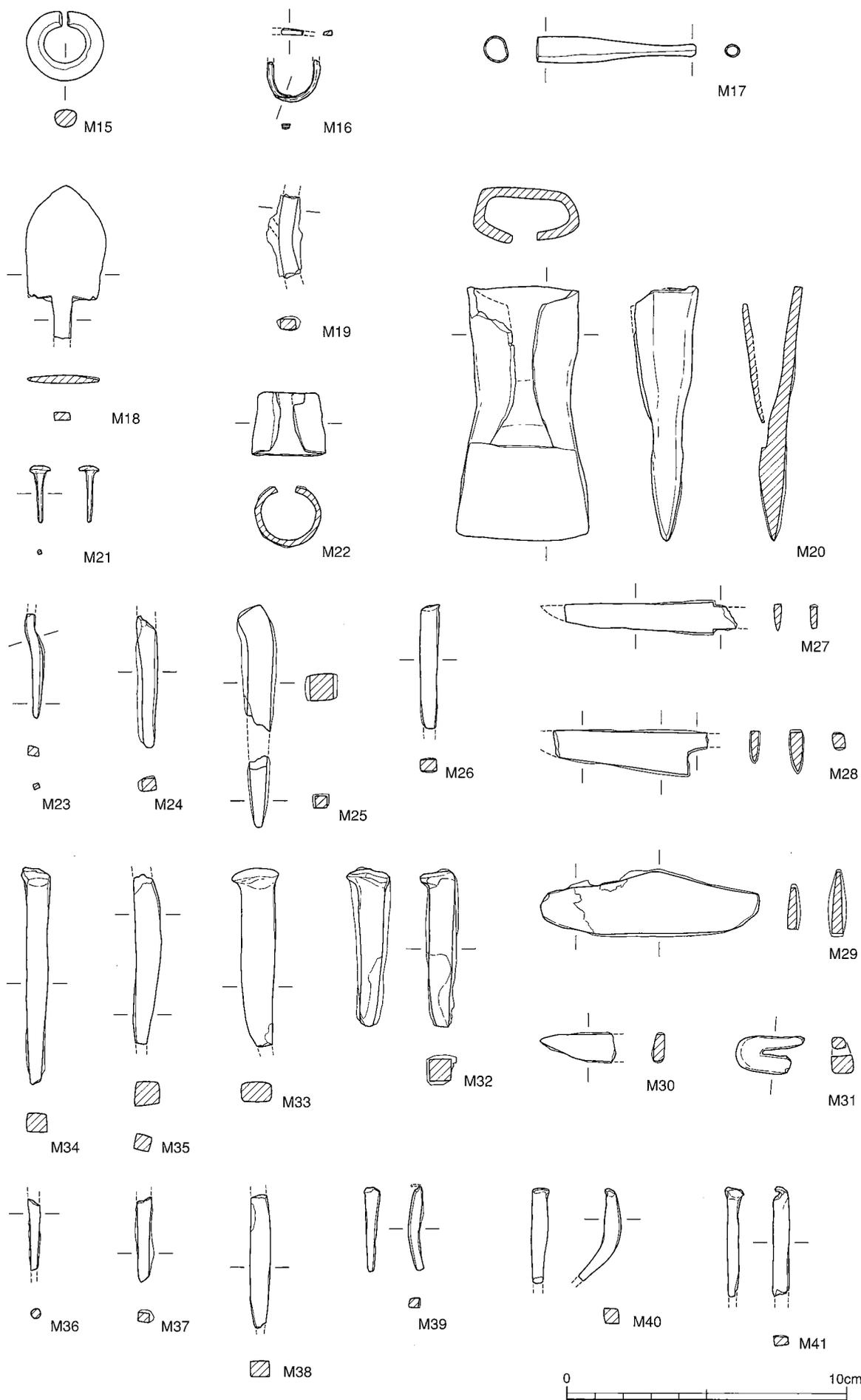


M13

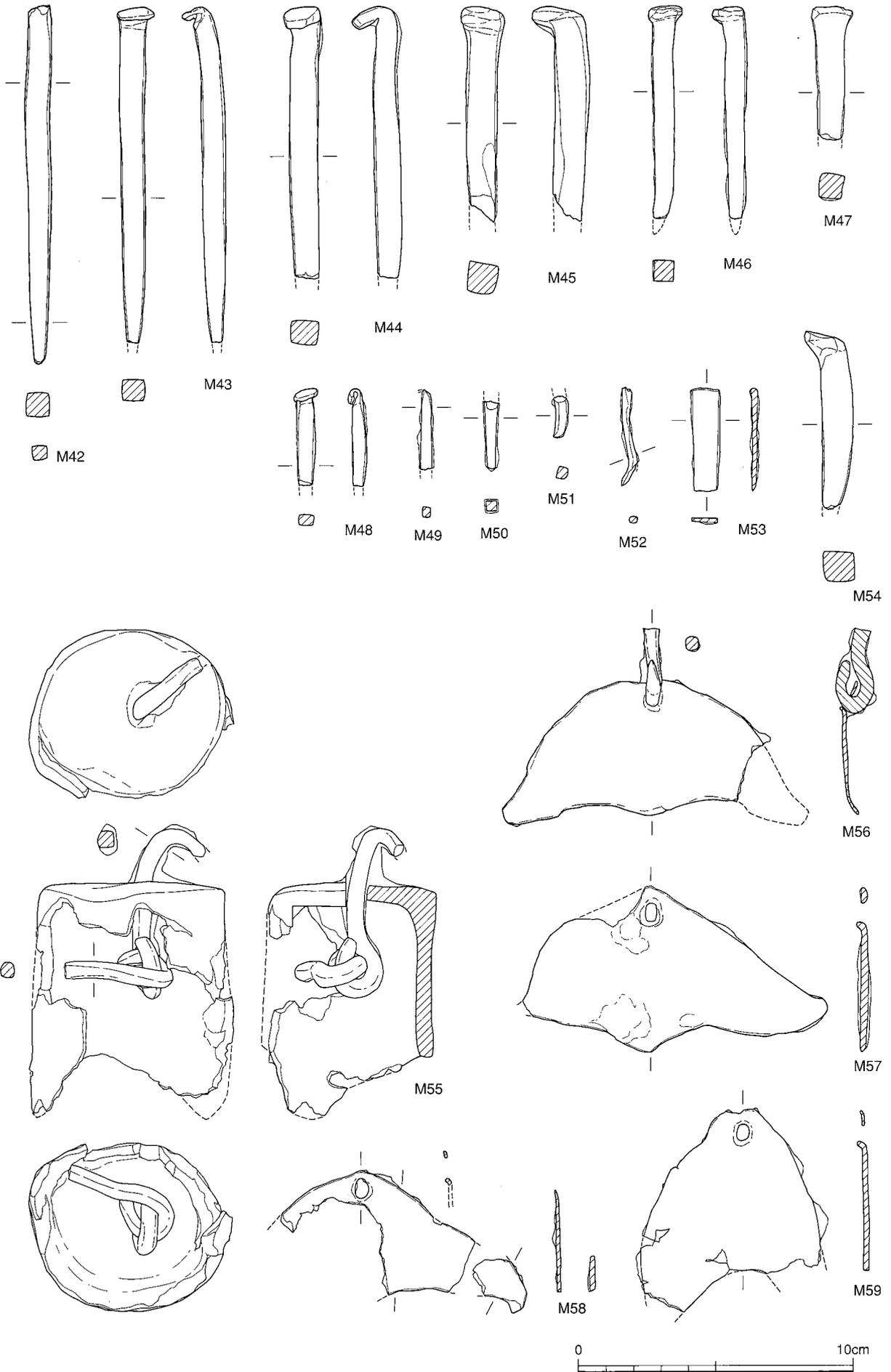


M14

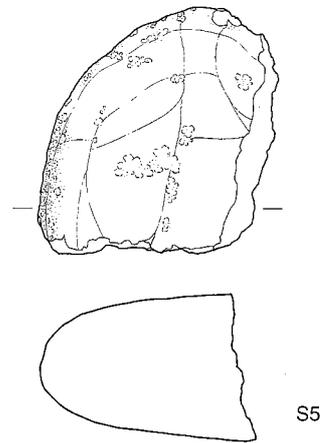
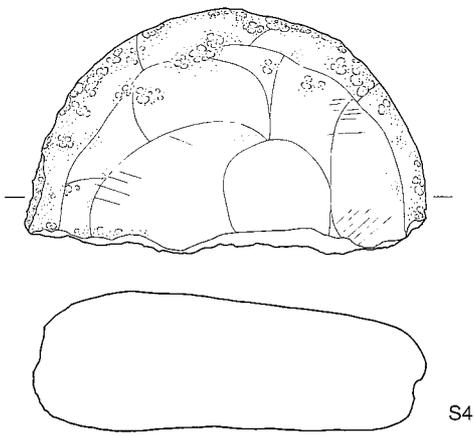
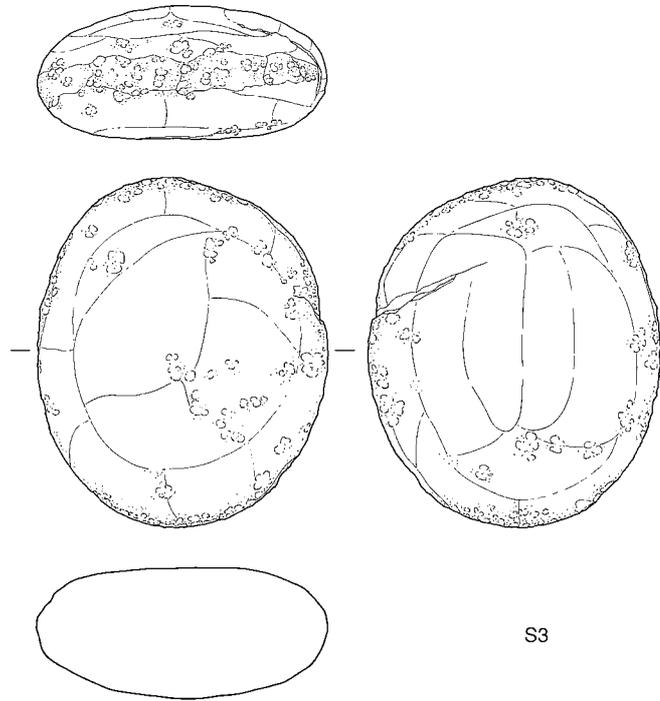
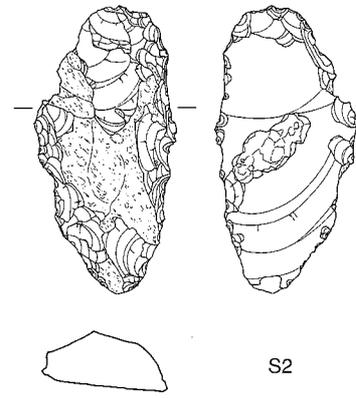
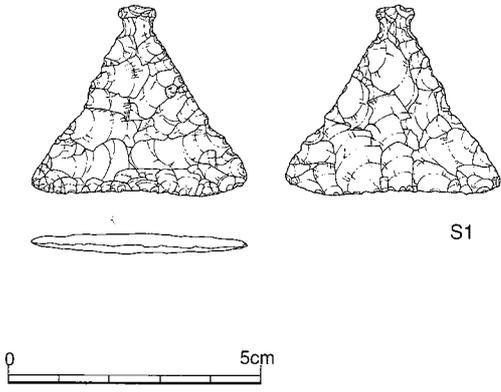


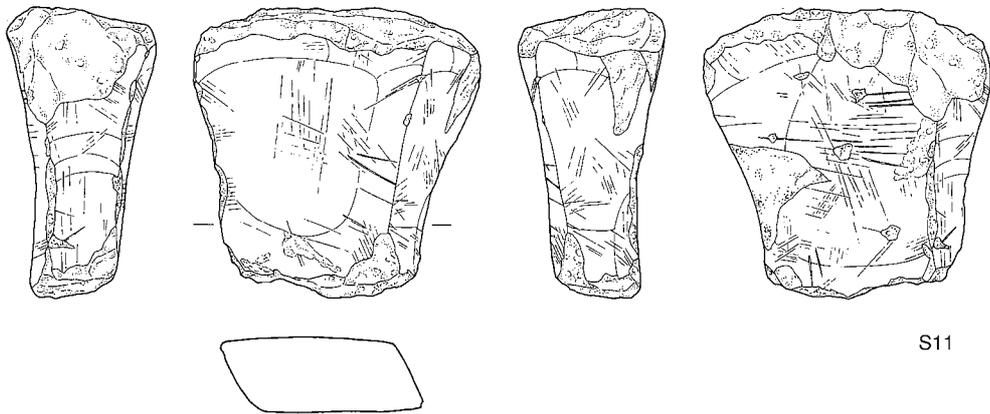
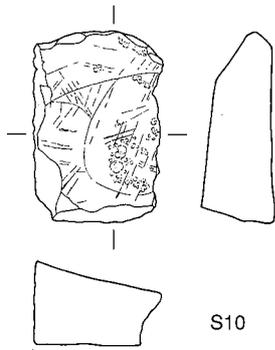
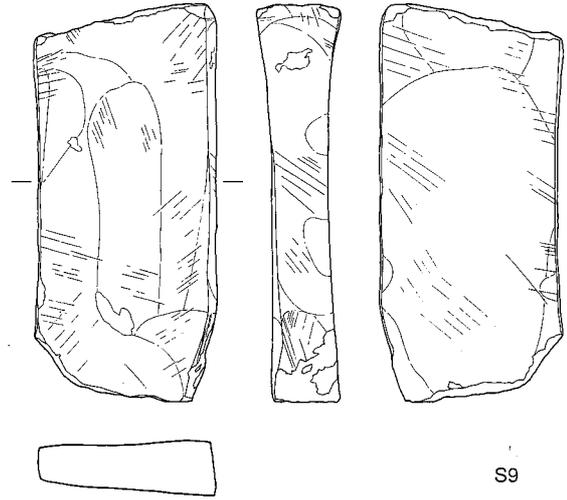
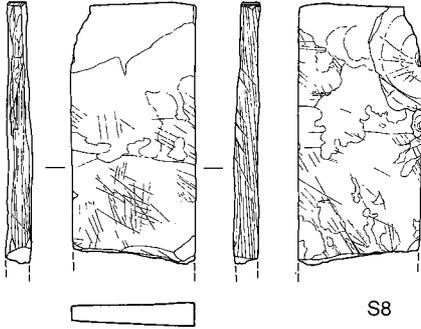
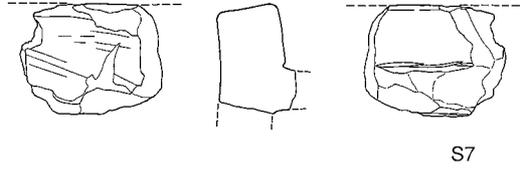
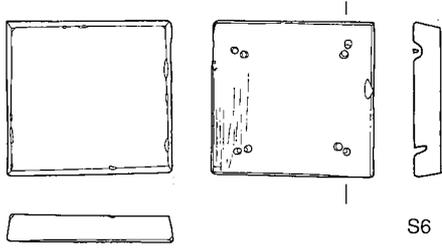


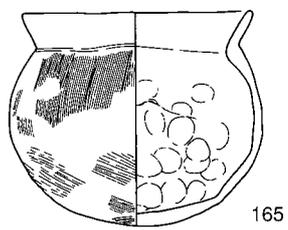
銅製品・鉄製品



風鐸・鉄製品



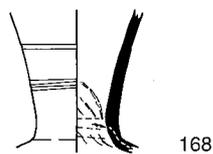




165



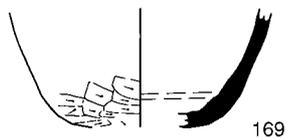
166



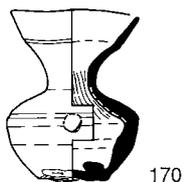
168



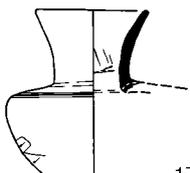
167



169



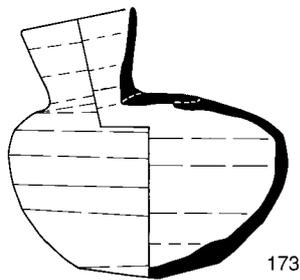
170



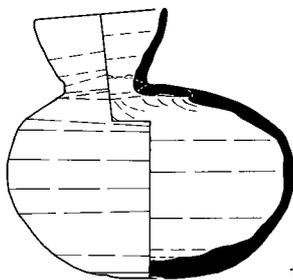
171



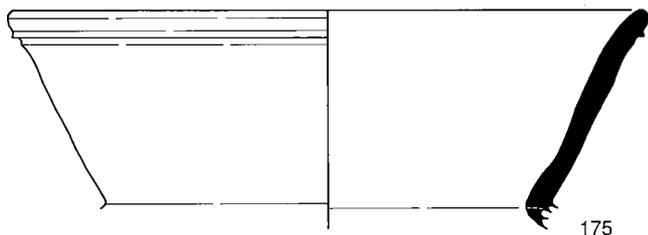
172



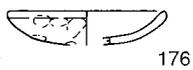
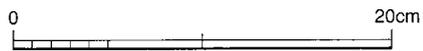
173



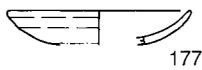
174



175



176



177



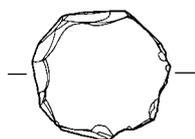
178



179



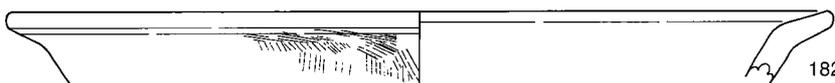
180



183



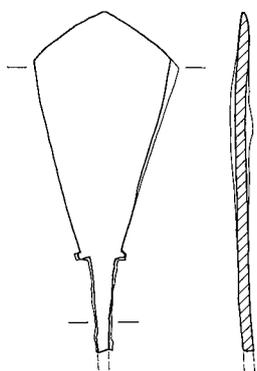
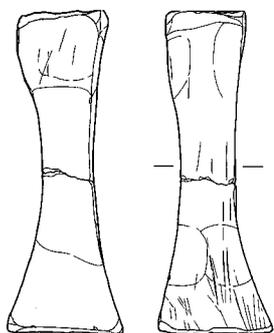
181



182



V区出土土器



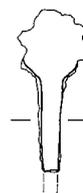
M60



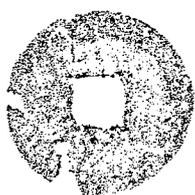
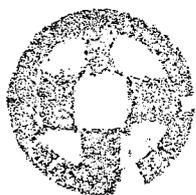
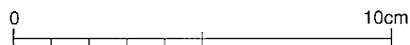
M61



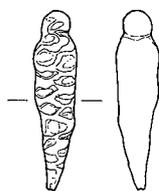
M62



M63



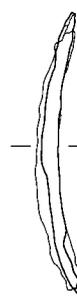
M64



M65



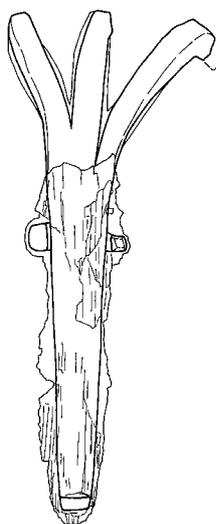
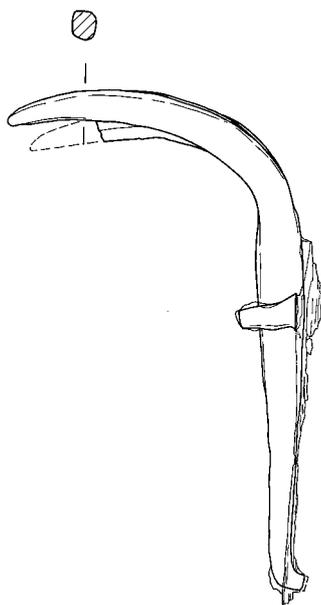
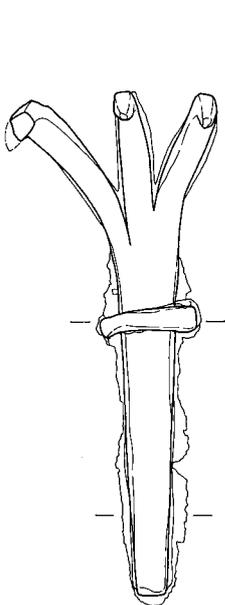
M66



M67



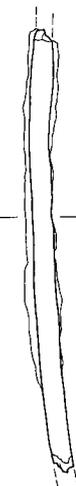
M68



M71

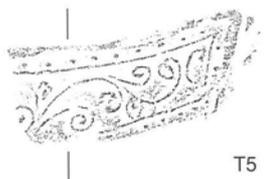
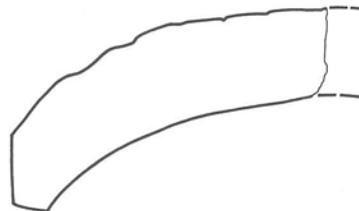
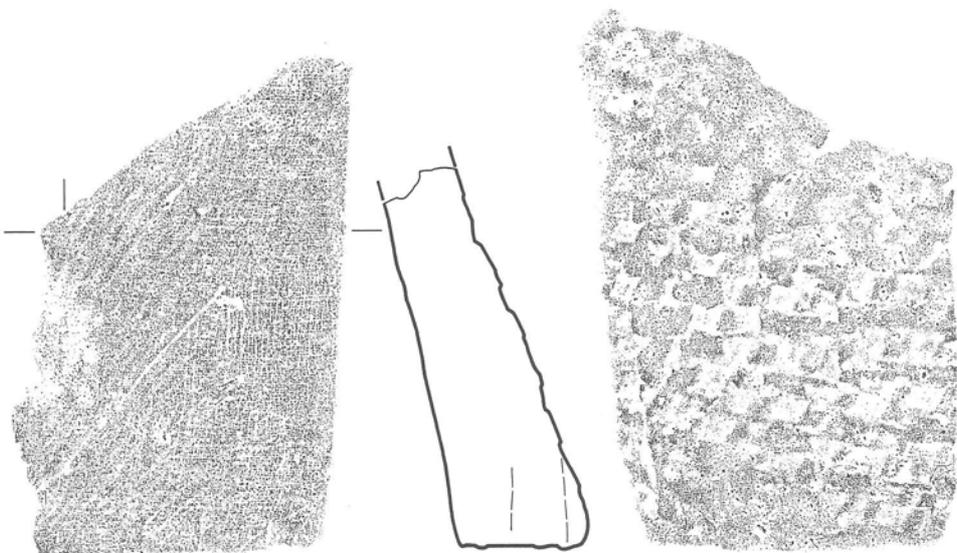
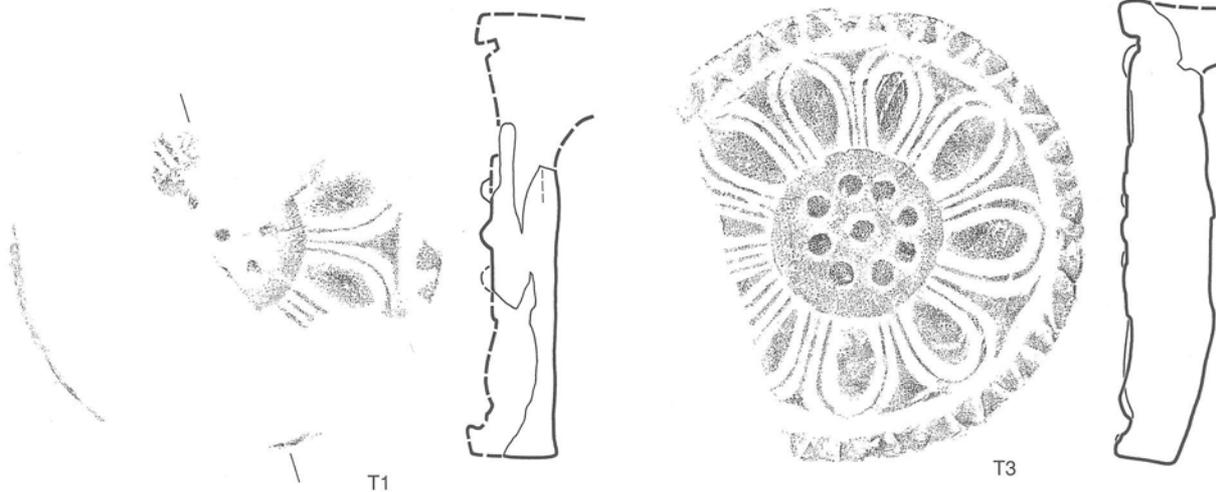


M69



M70





I · II区出土瓦



T6



T7



T8



T9



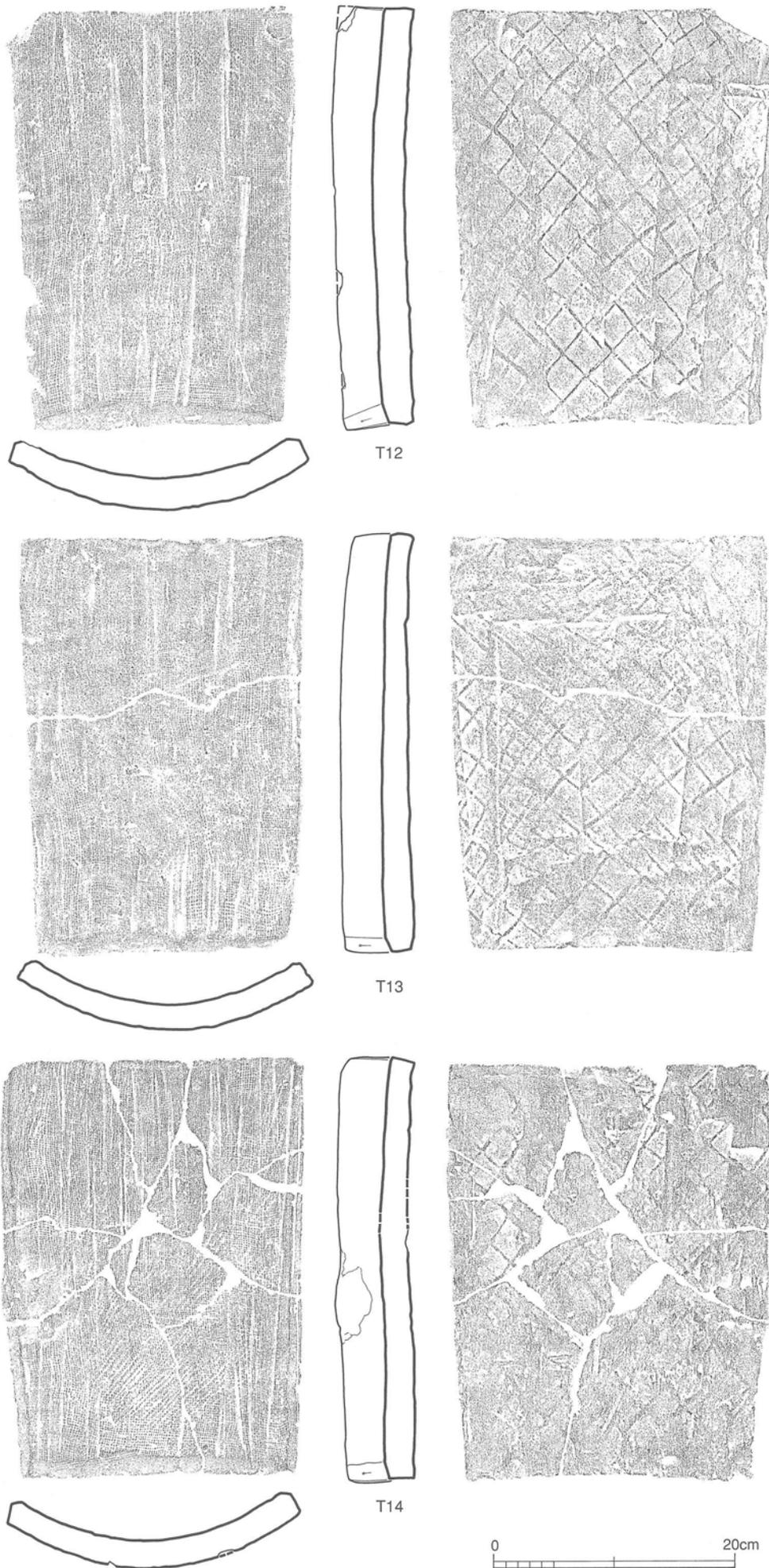
T10



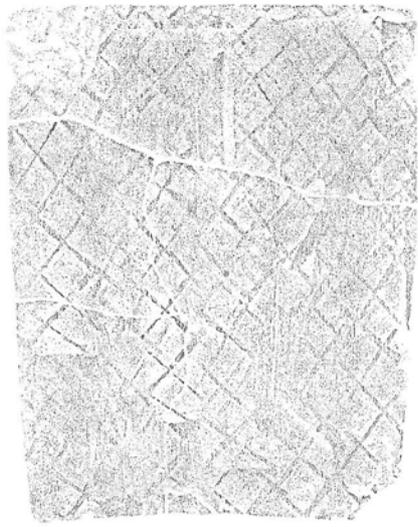
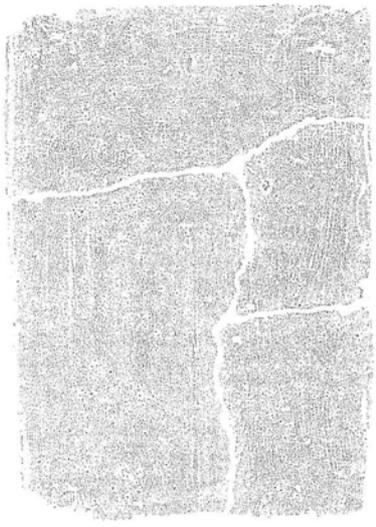
T11



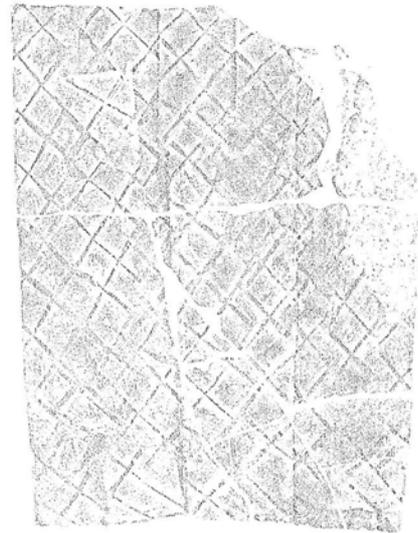
II区出土丸瓦



Ⅱ区出土平瓦1 (①種)



T15

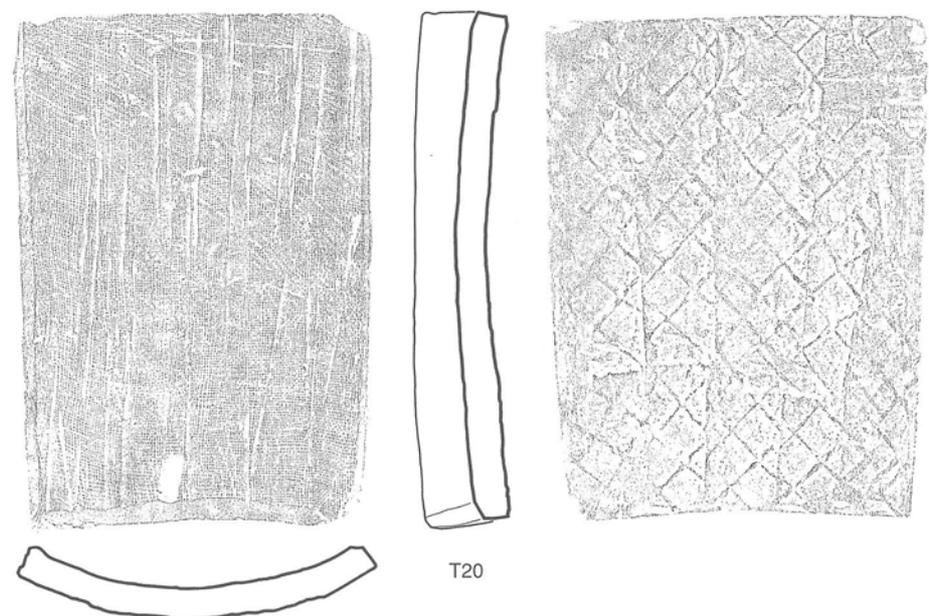
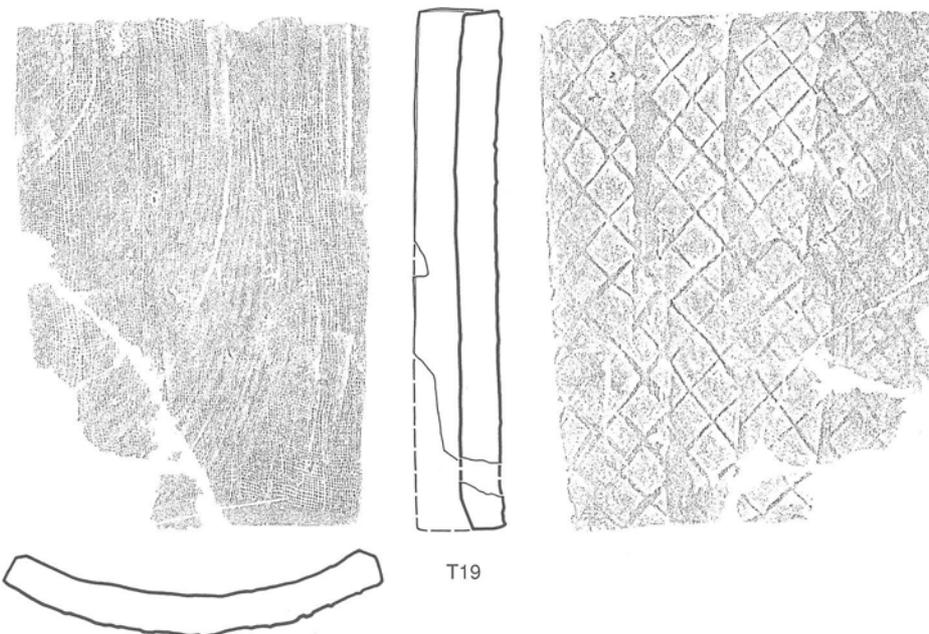
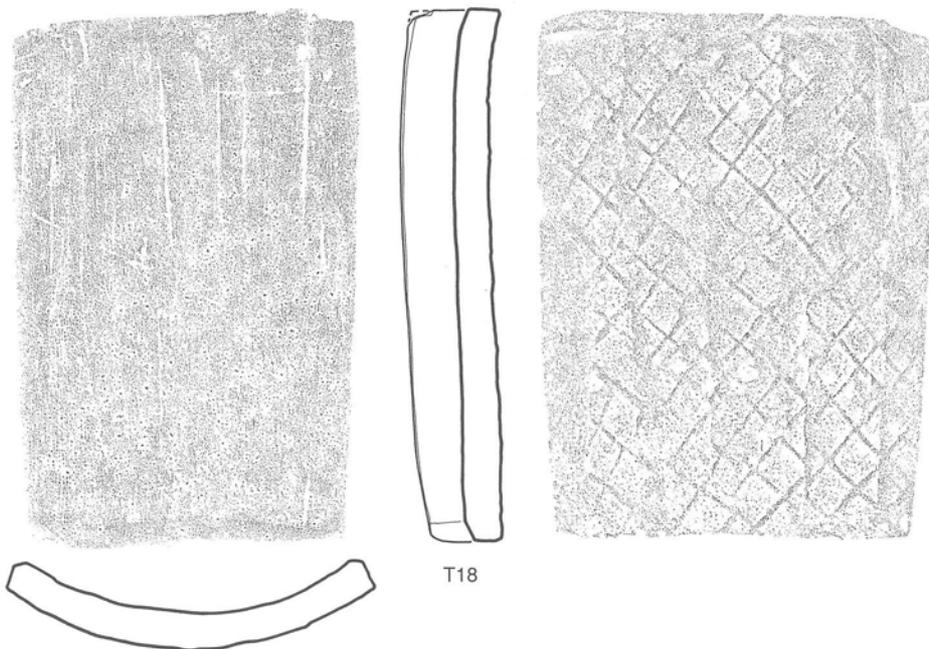


T16

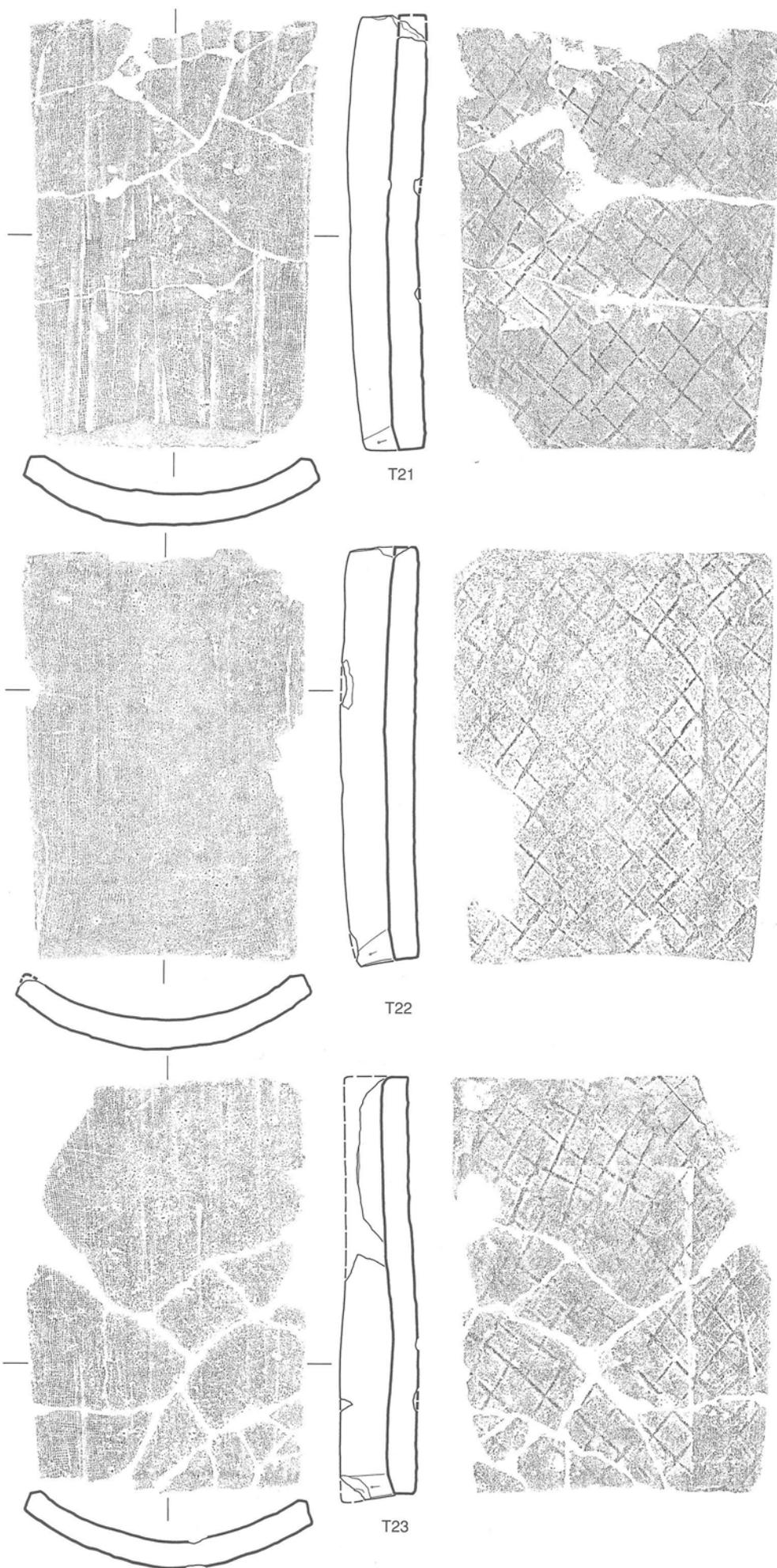


T17

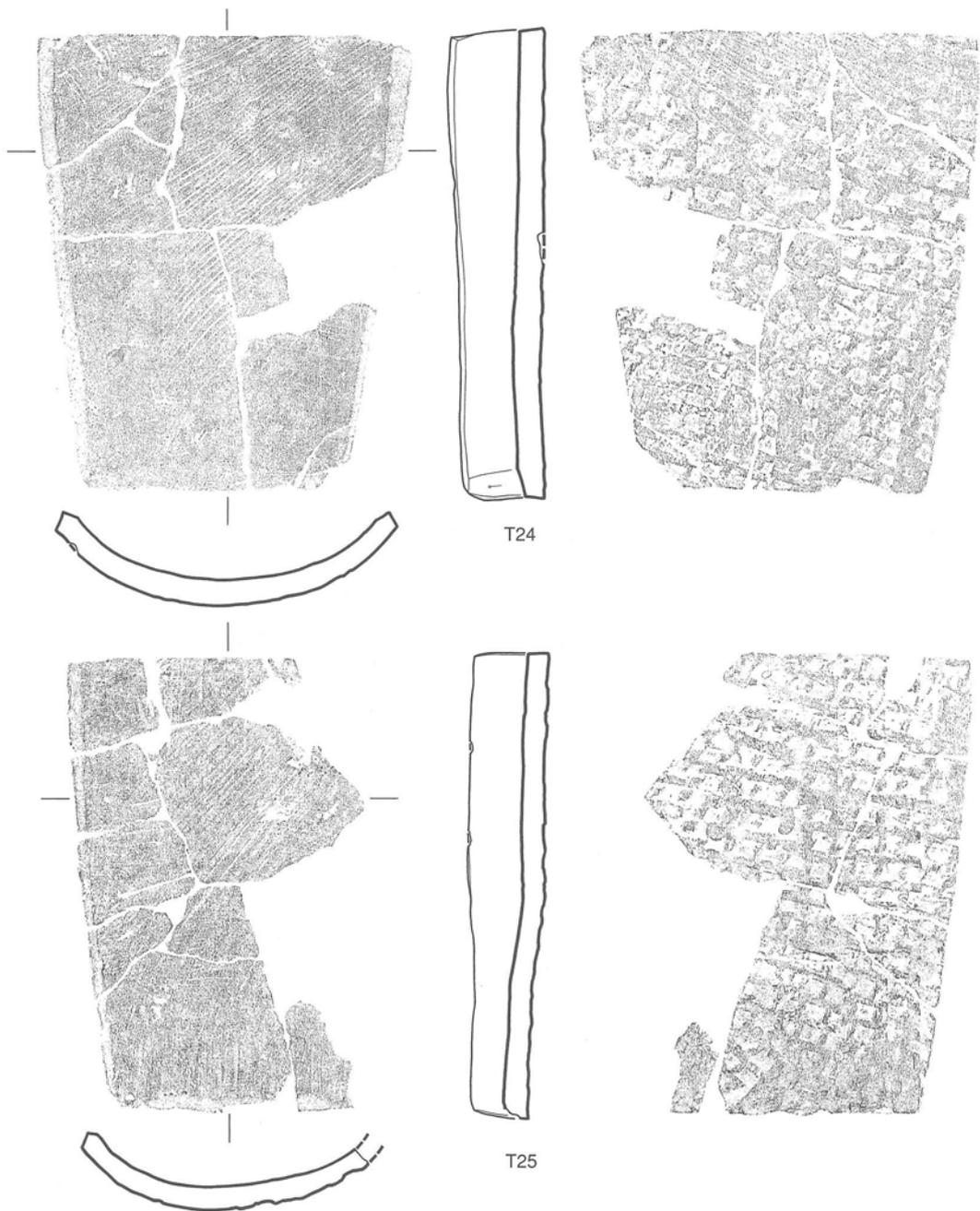
Ⅱ区出土平瓦2 (①種)



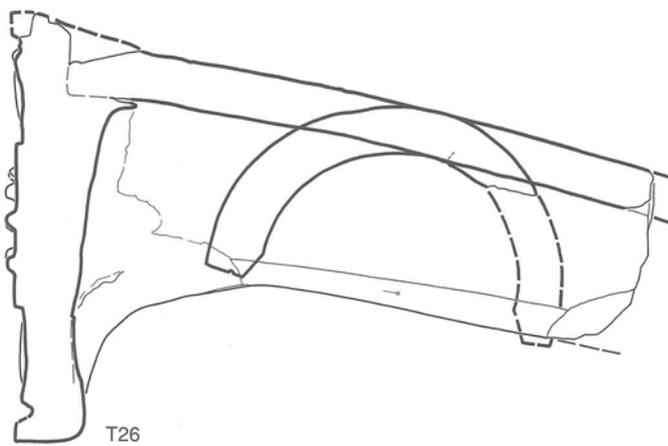
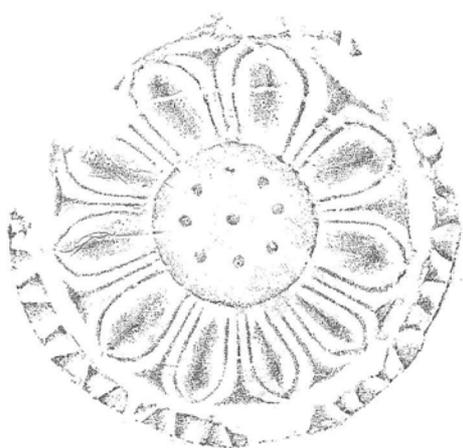
Ⅱ区出土平瓦3 (①種)



Ⅱ区出土平瓦4 (①種)



Ⅱ区出土平瓦5 (③種)



T26



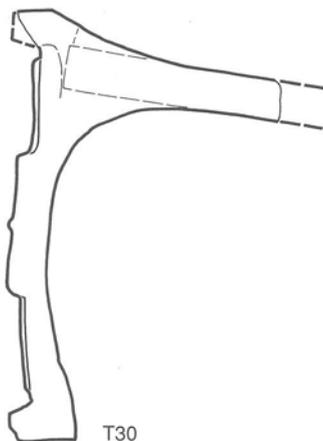
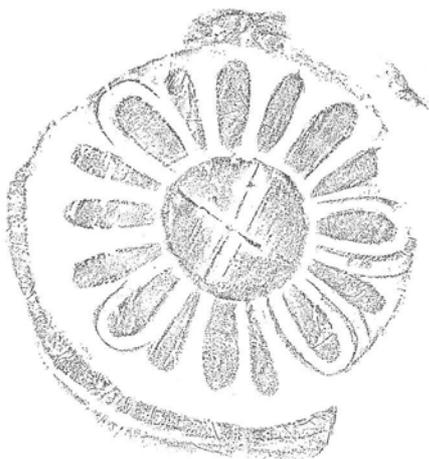
T27



T28



T29



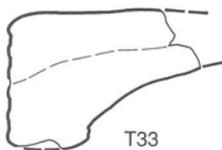
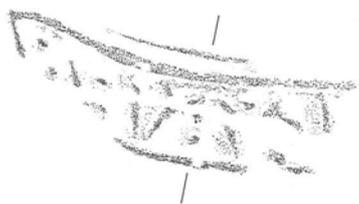
T30



T31



T32



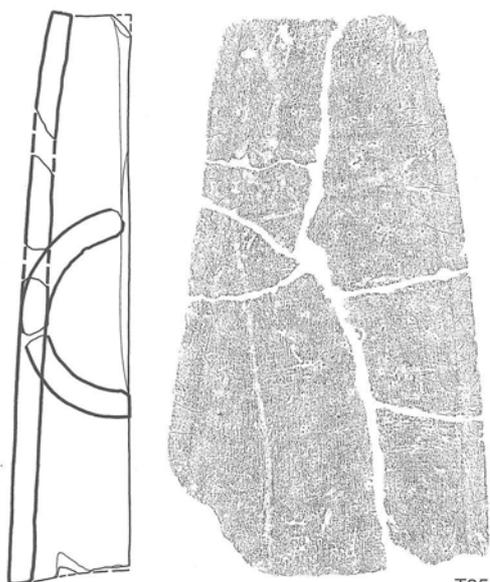
T33



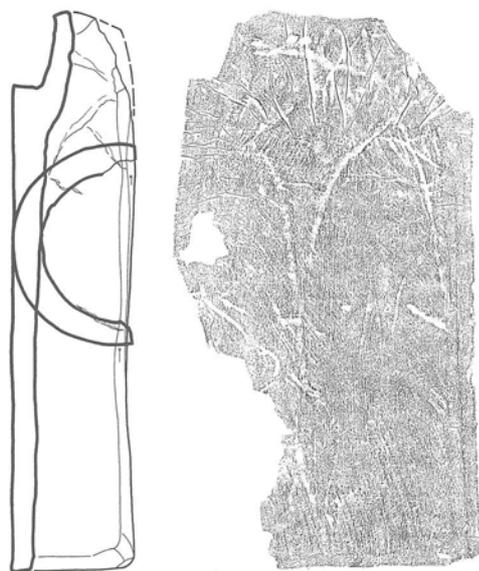
T34



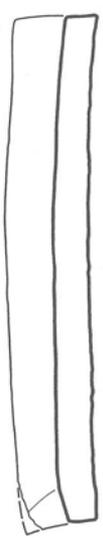
Ⅲ区出土軒瓦



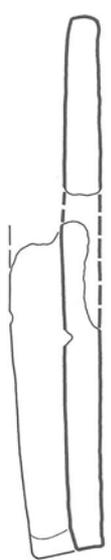
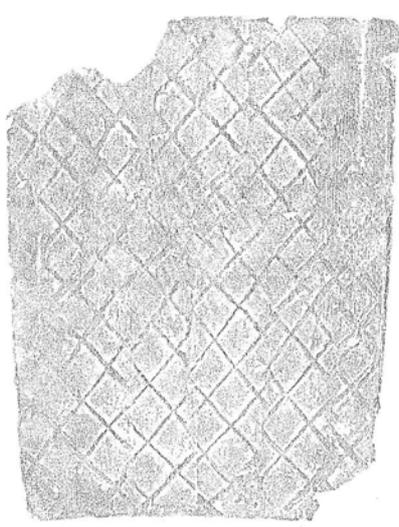
T35



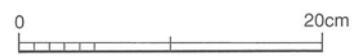
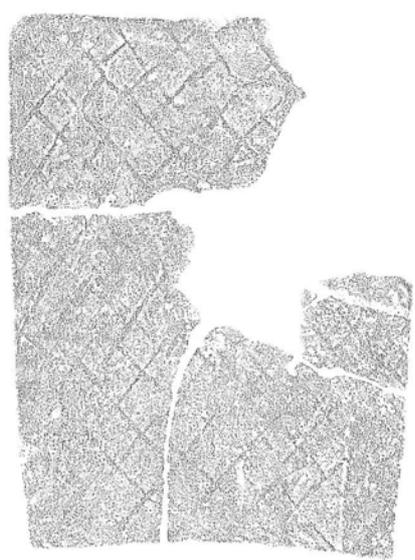
T36



T37



T38



Ⅲ区出土丸・平瓦



T39



T40



T41



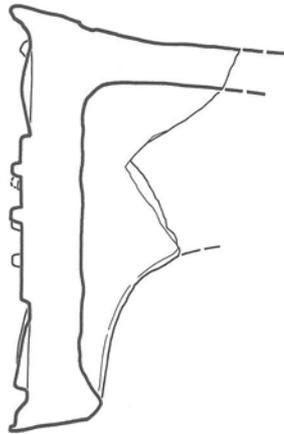
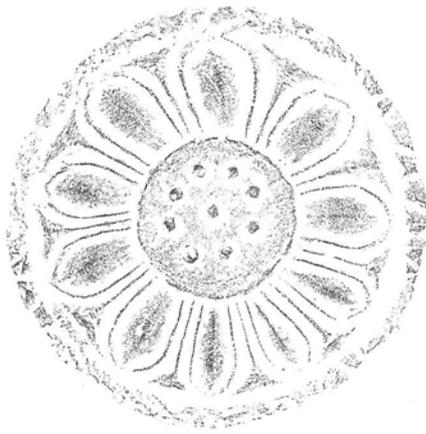
T42



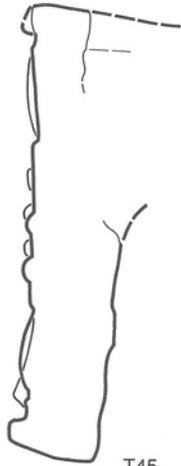
T43



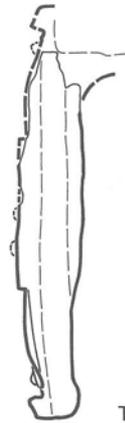
Ⅲ区出土道具瓦（熨斗瓦·隅平瓦）



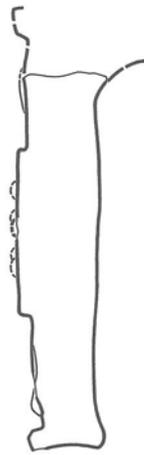
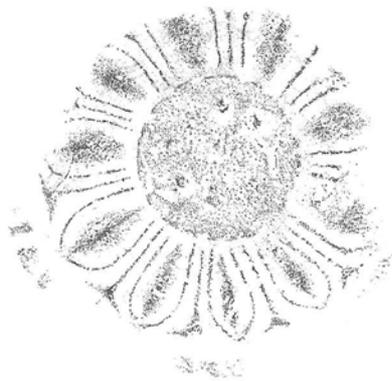
T44



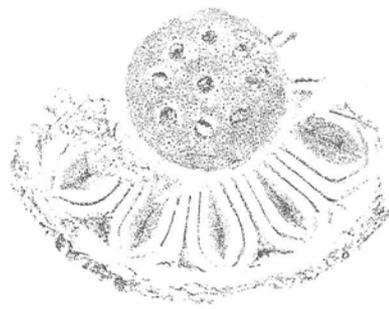
T45



T47



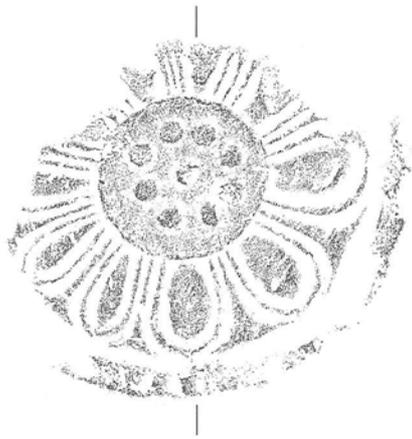
T46



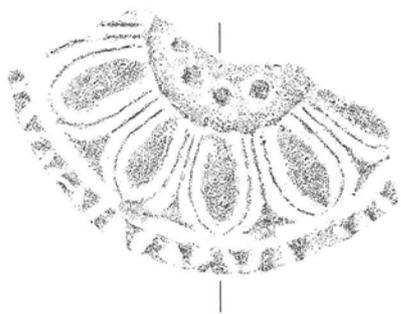
T48



IV区出土軒丸瓦1 (KNM1)



T49



T50



T52

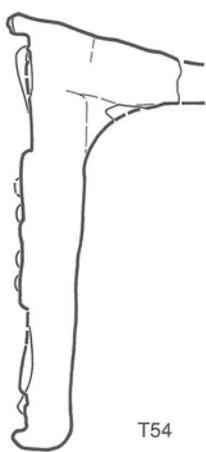
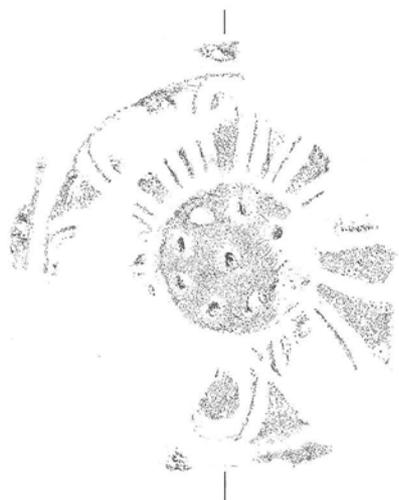


T51



T53

IV区出土軒丸瓦2 (KNM1)



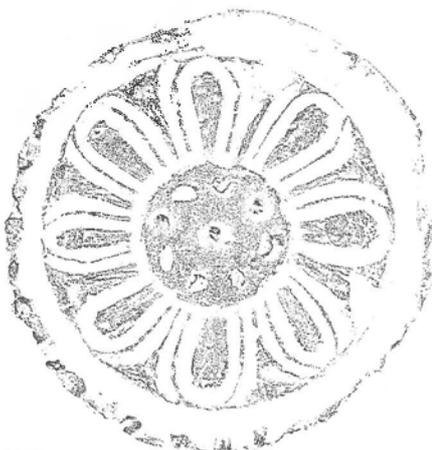
T54



T55

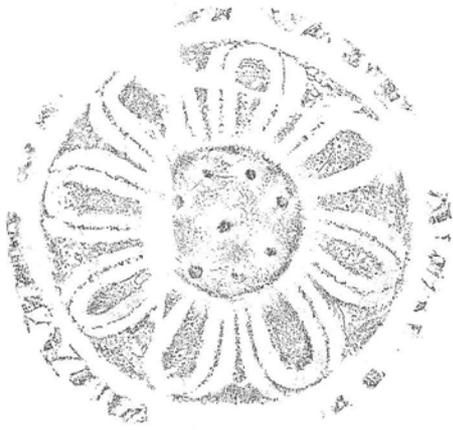


T56



T57

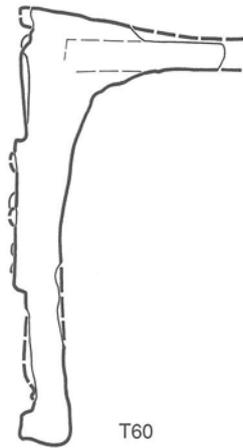
IV区出土軒丸瓦3 (KNM2)



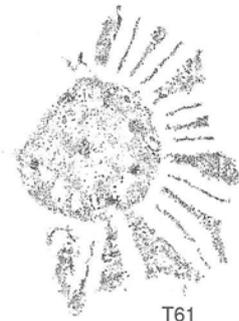
T58



T59

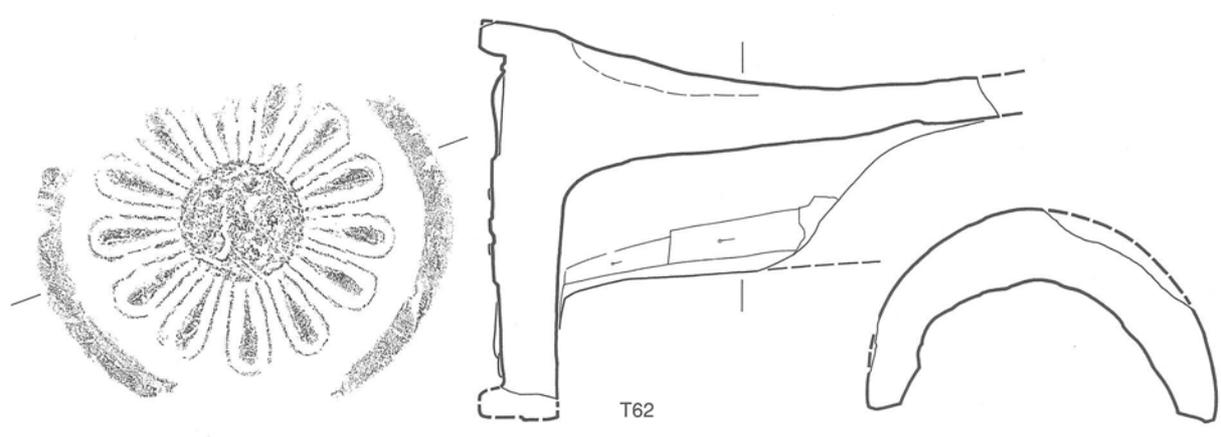


T60

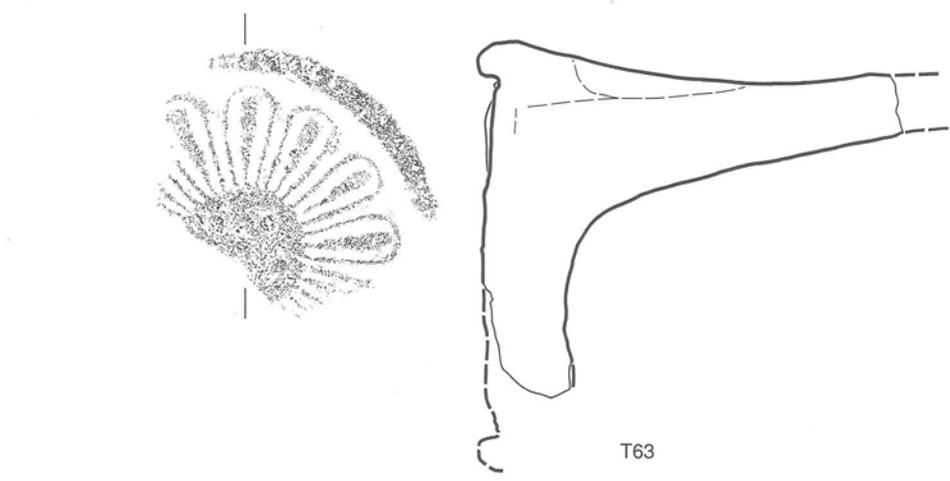


T61

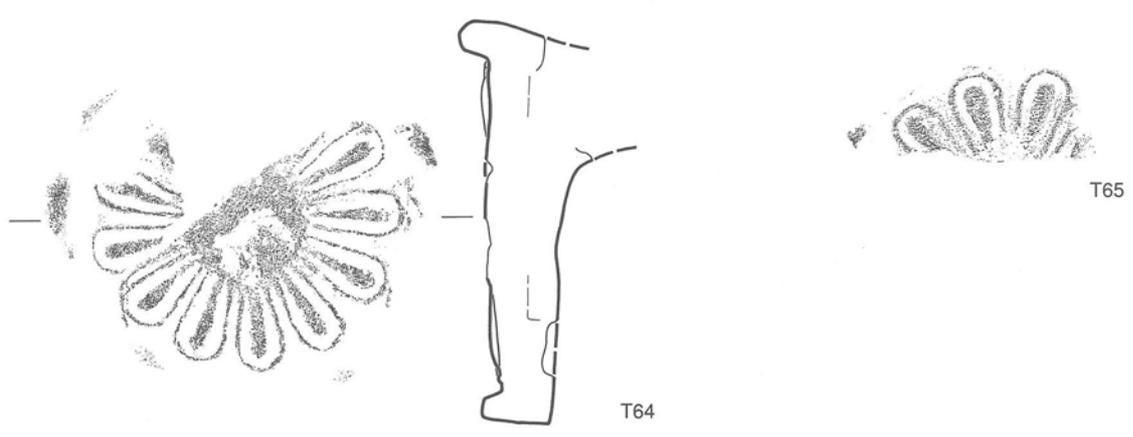
IV区出土軒丸瓦4 (KNM2)



T62



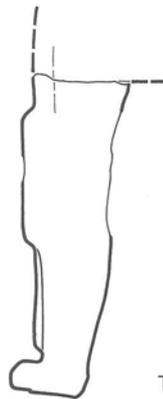
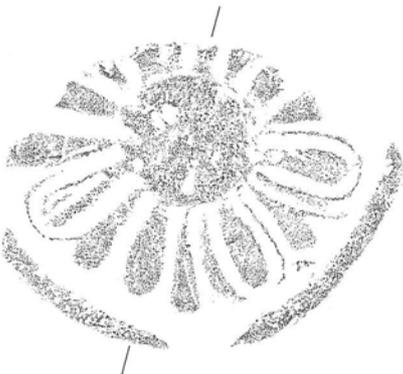
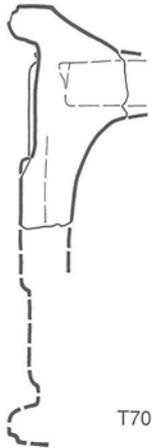
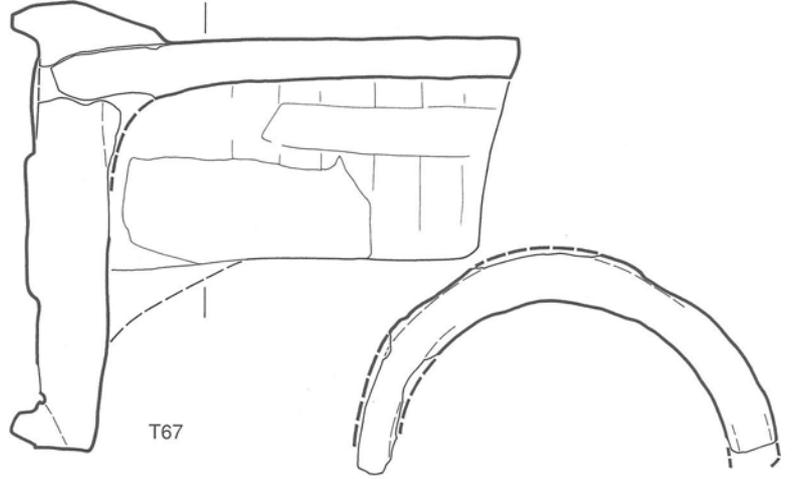
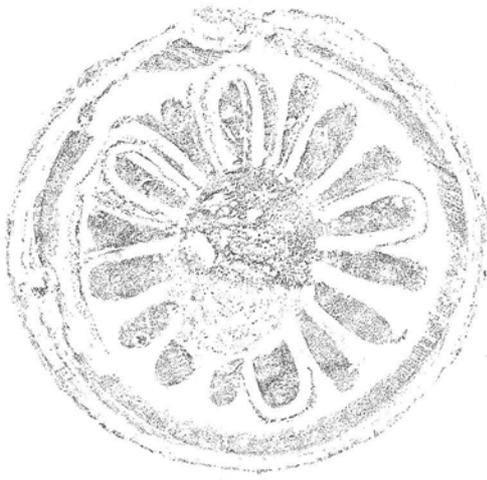
T63



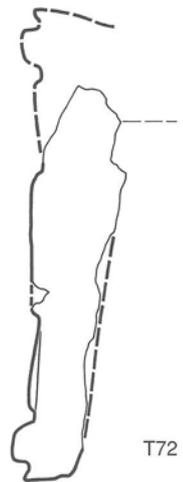
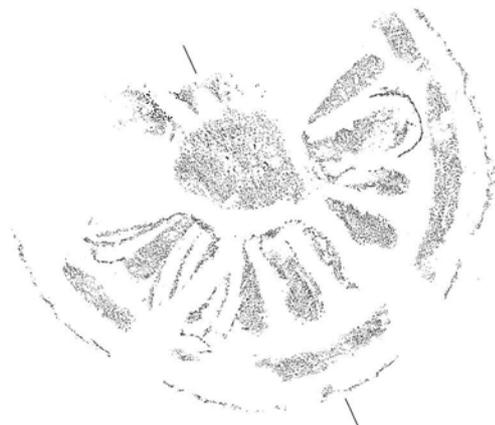
T65

T64

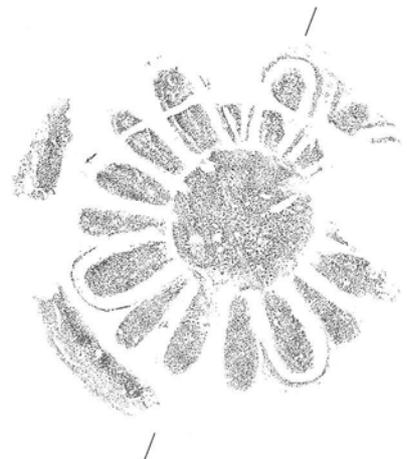
IV区出土軒丸瓦5 (KNM3)



IV区出土軒丸瓦6 (KNM4a)



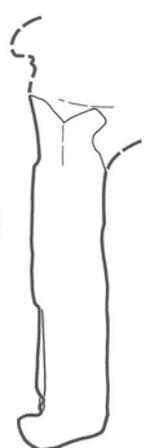
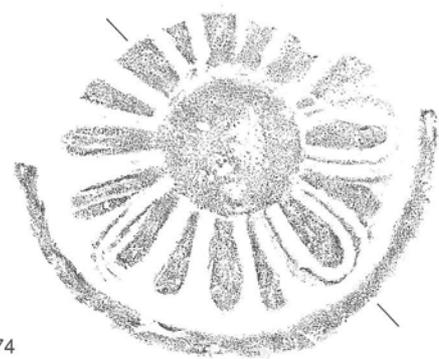
T72



T73



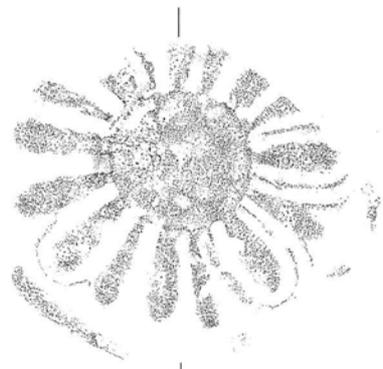
T74



T76

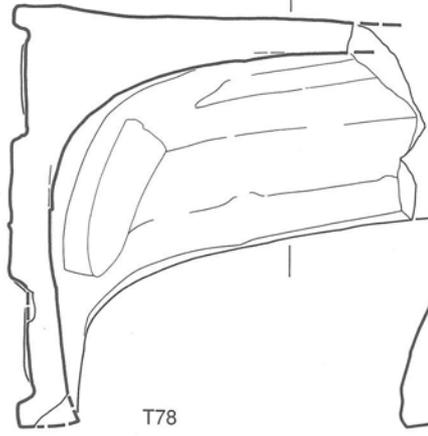


T75

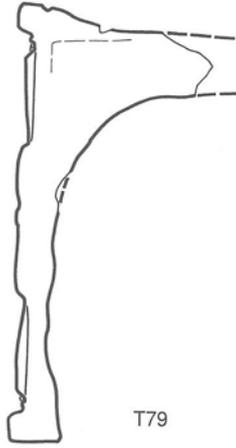
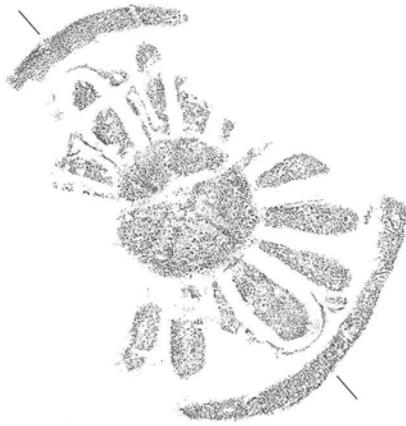
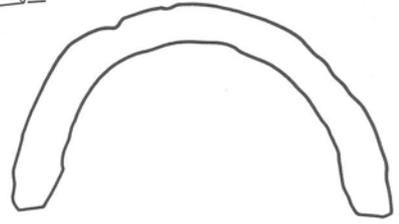


T77

IV区出土軒丸瓦7 (KNM4a)



T78



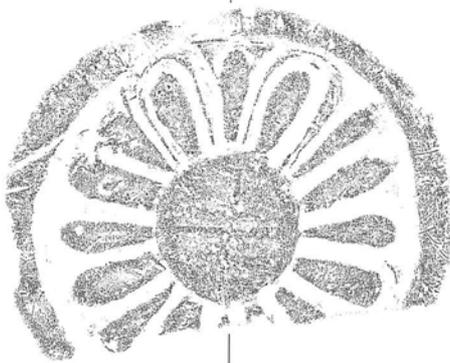
T79



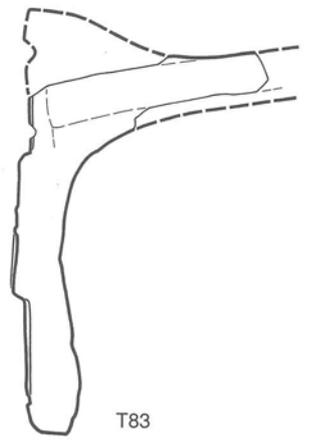
T80



T82

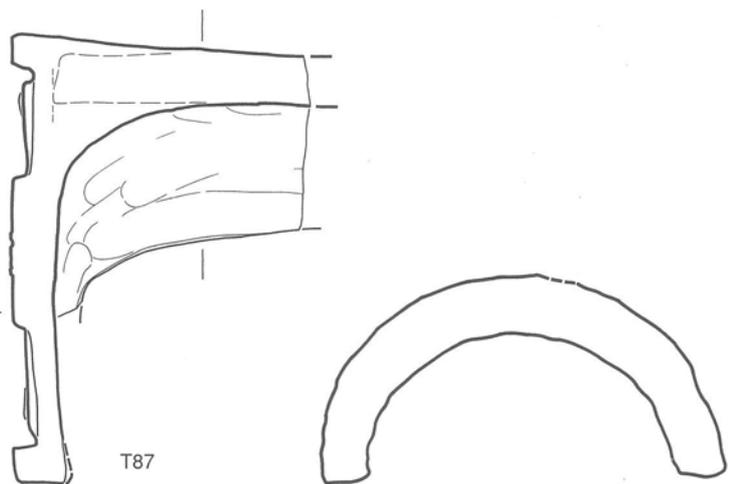
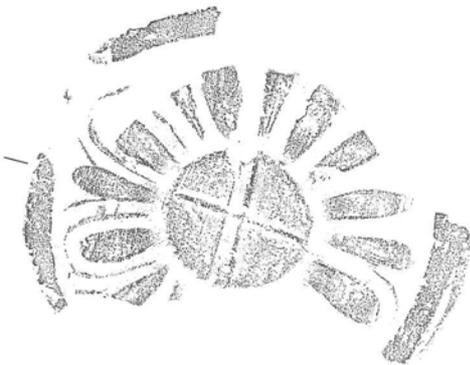
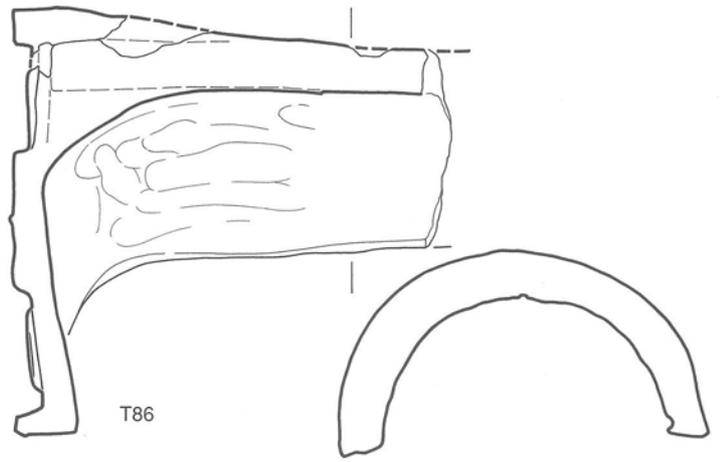
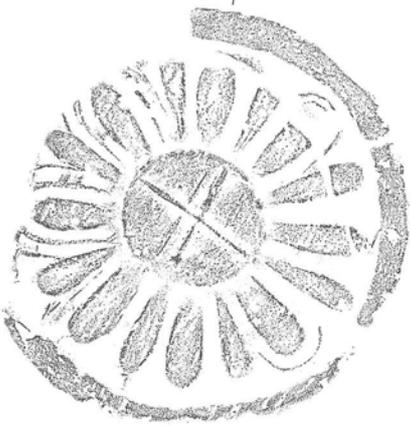
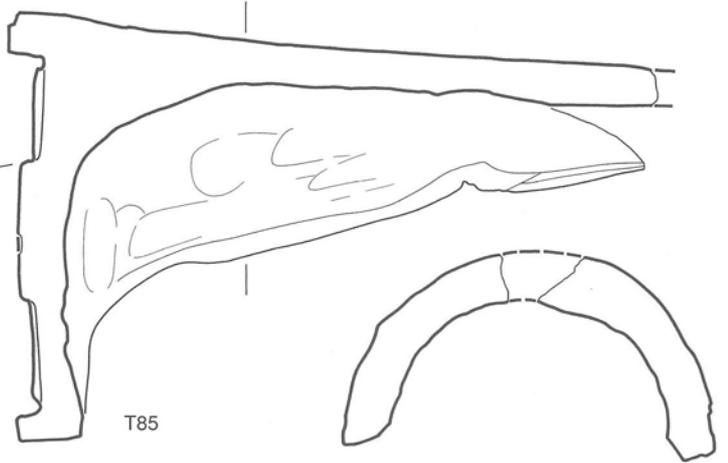
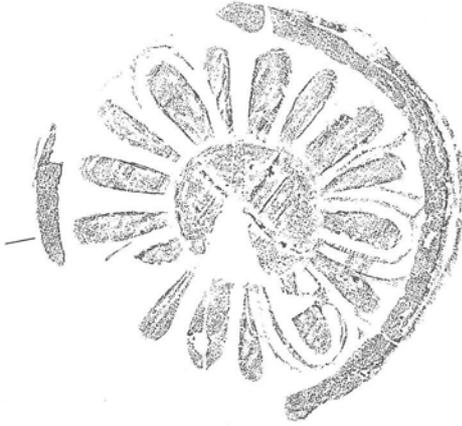
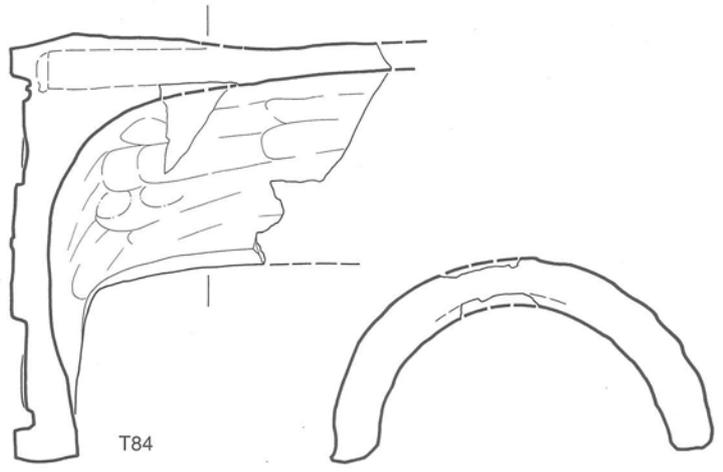
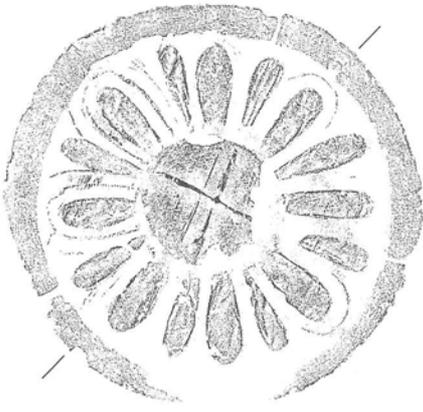


T81

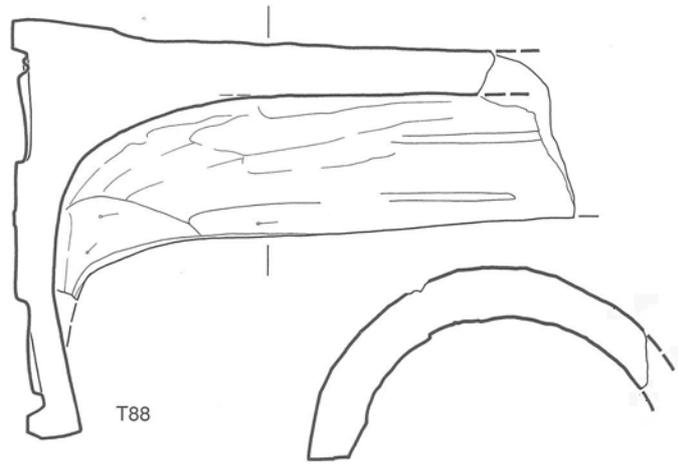
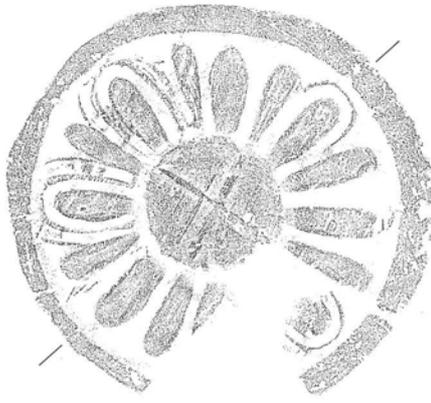


T83

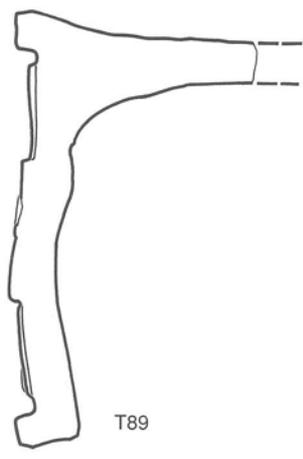
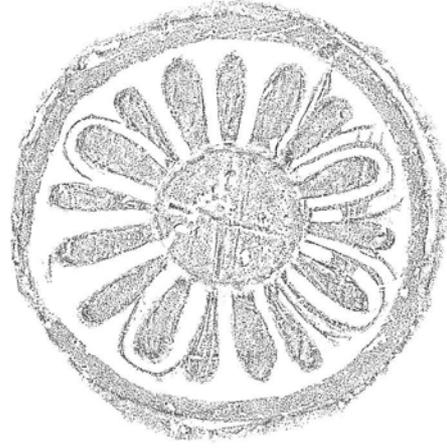
IV区出土軒丸瓦8 (KNM4b)



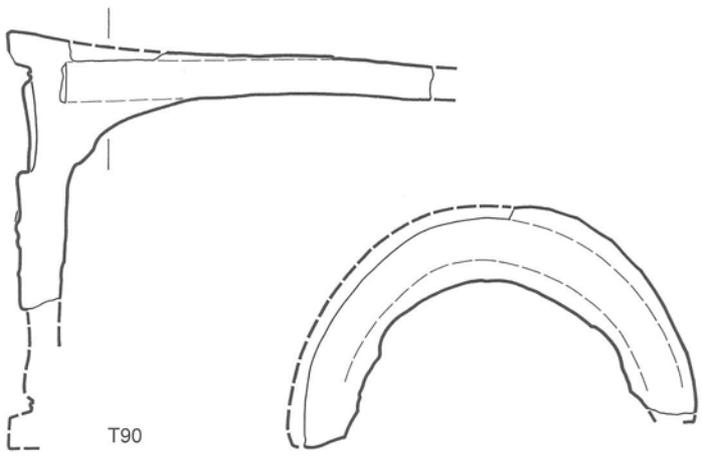
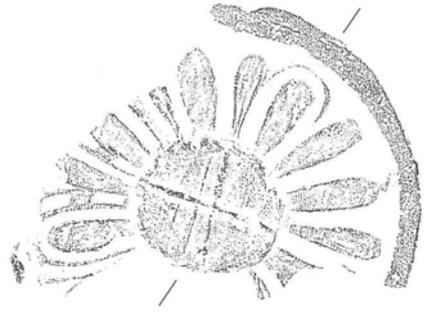
IV区出土軒丸瓦9 (KNM4c)



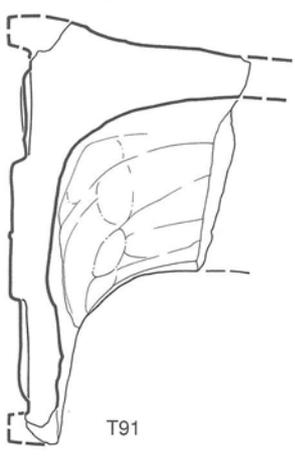
T88



T89

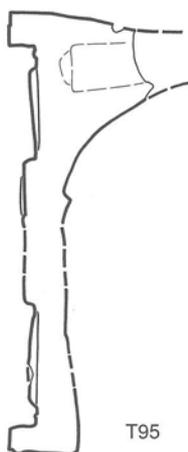
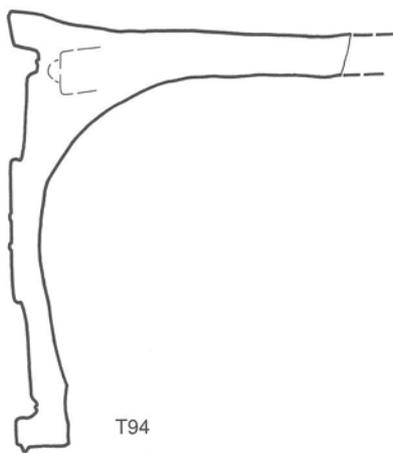
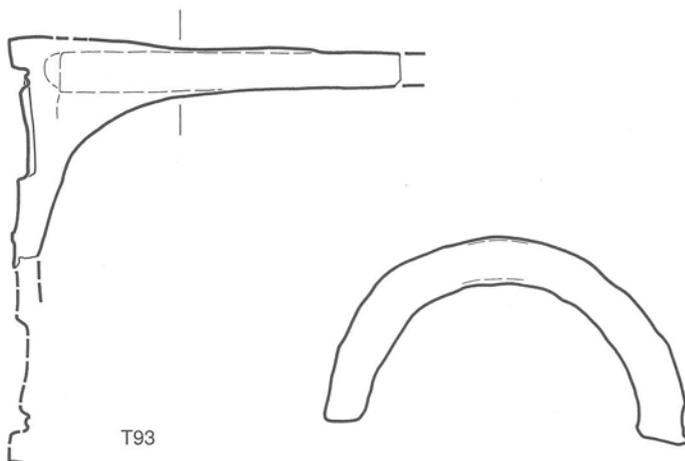
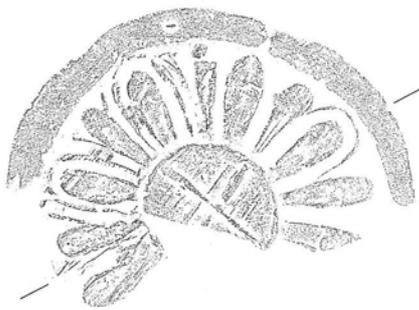
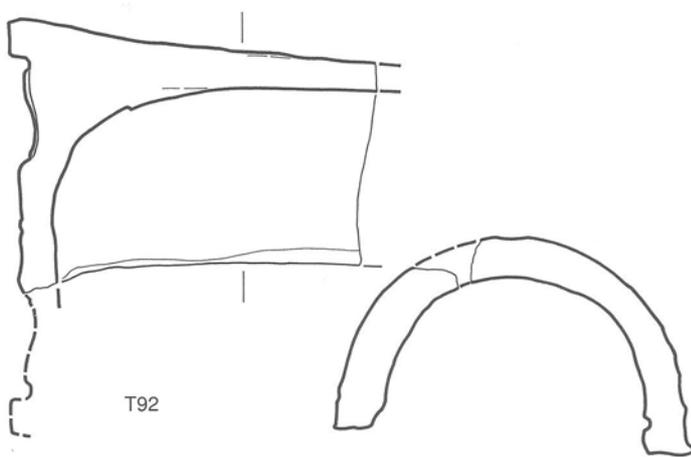
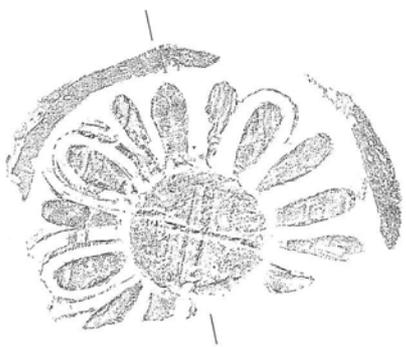


T90

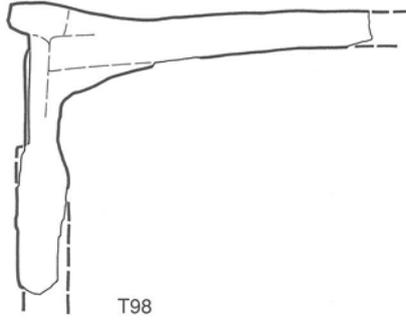
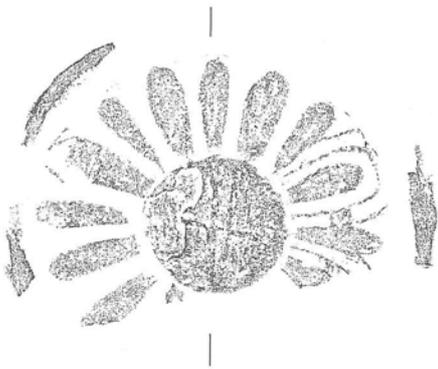
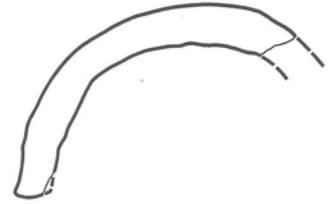
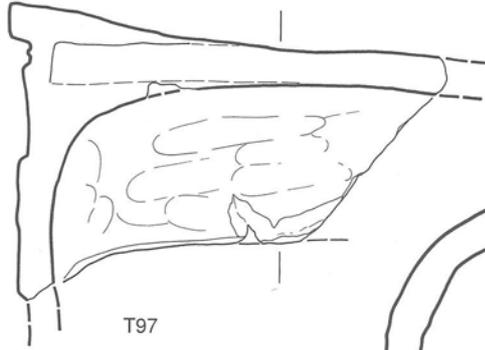
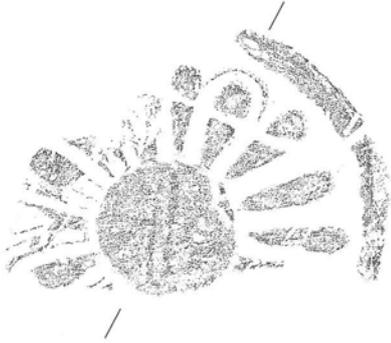
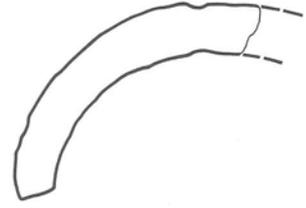
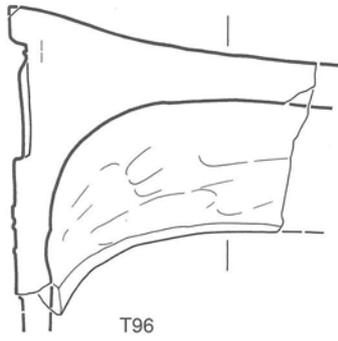
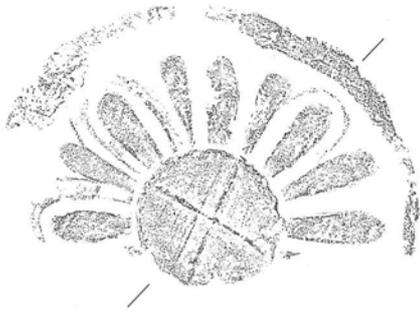


T91

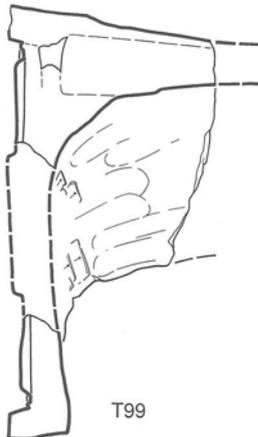
IV区出土軒丸瓦10 (KNM4c)



IV区出土軒丸瓦11 (KNM4c)

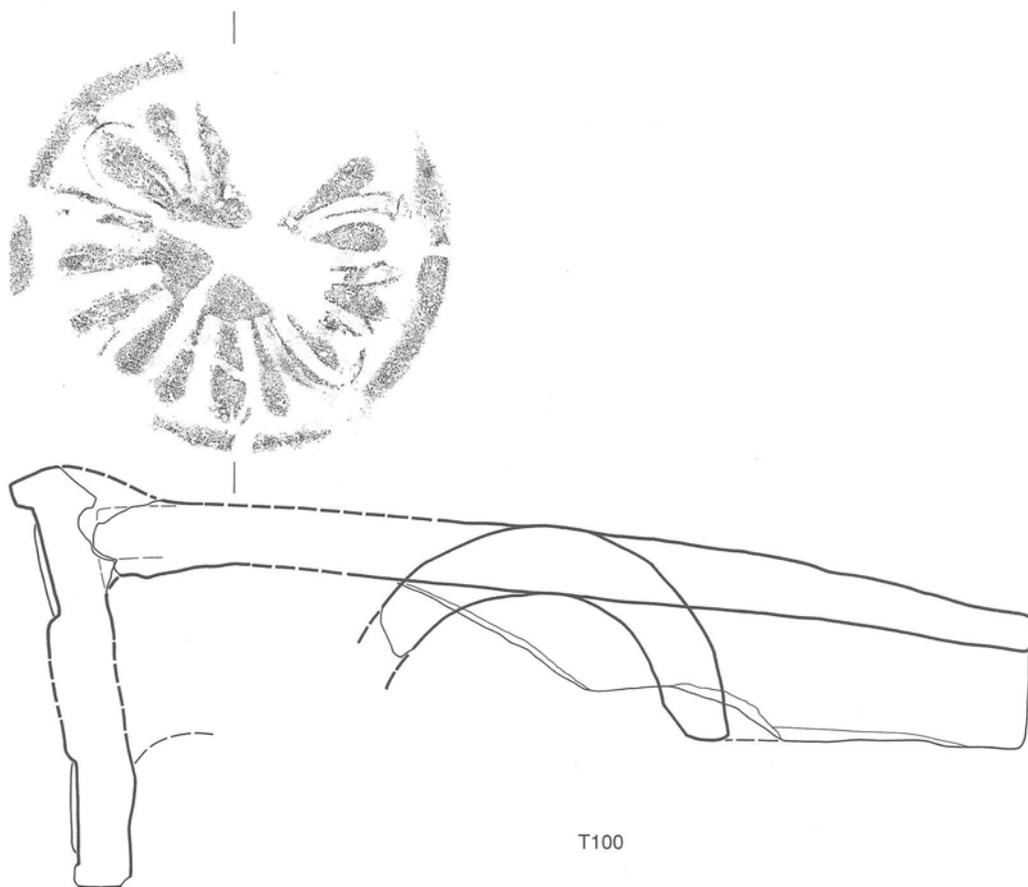


T98

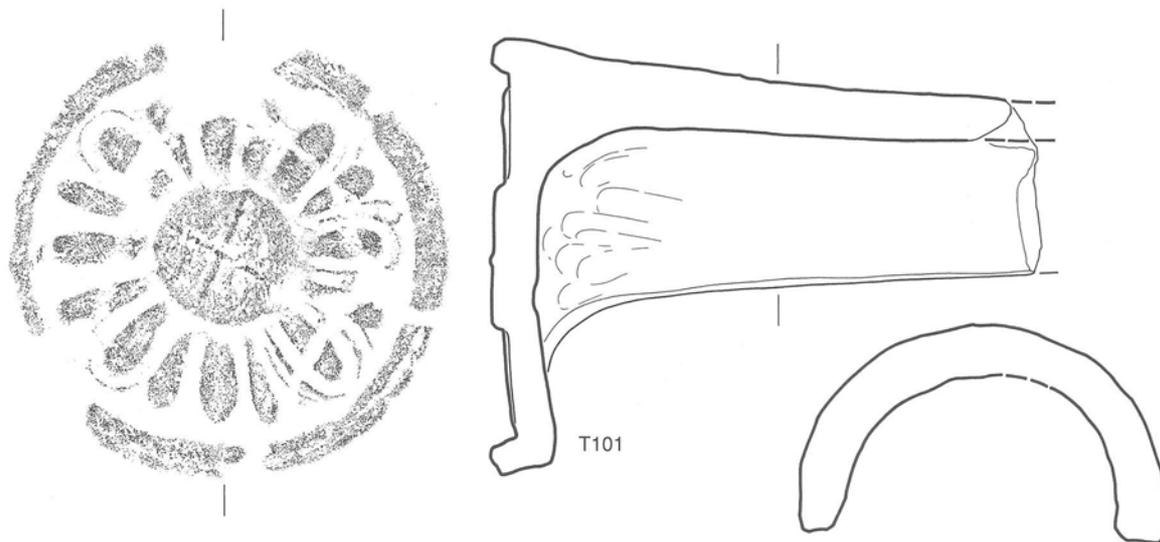


T99

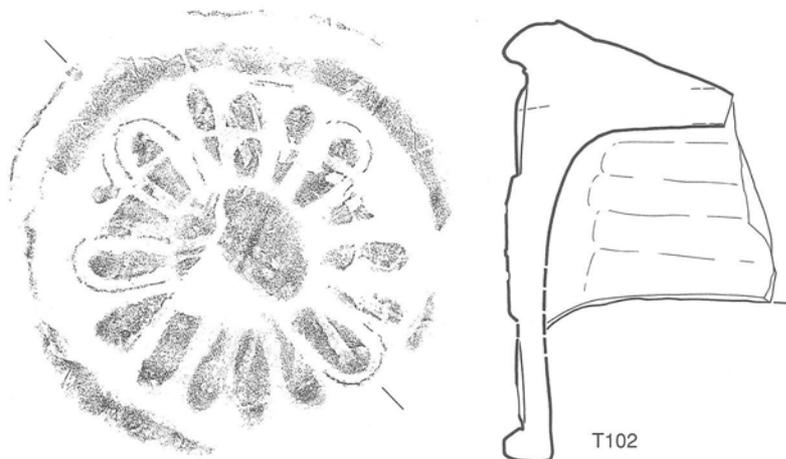
IV区出土軒丸瓦12 (KNM4c)



T100

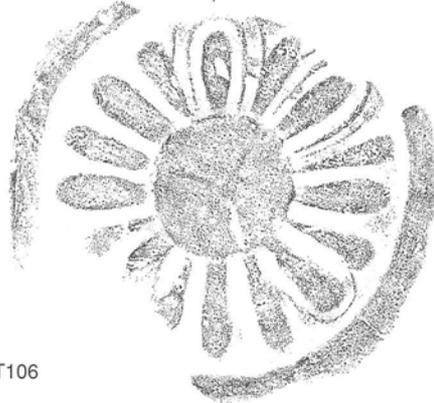
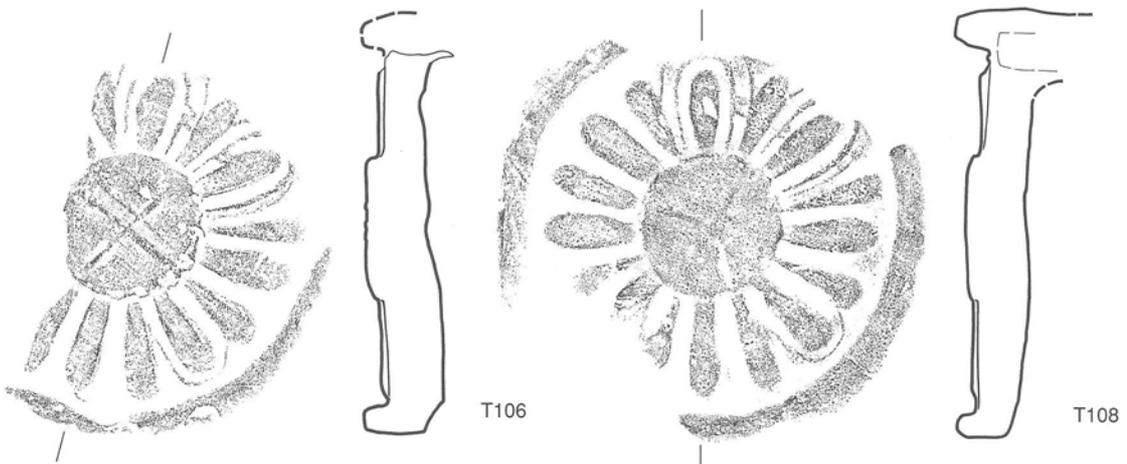
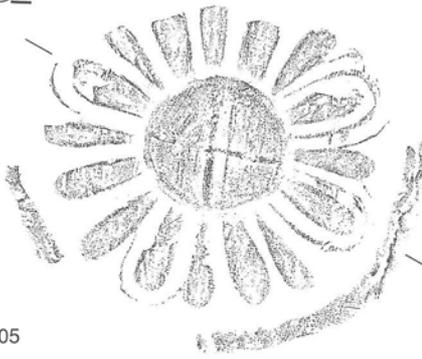
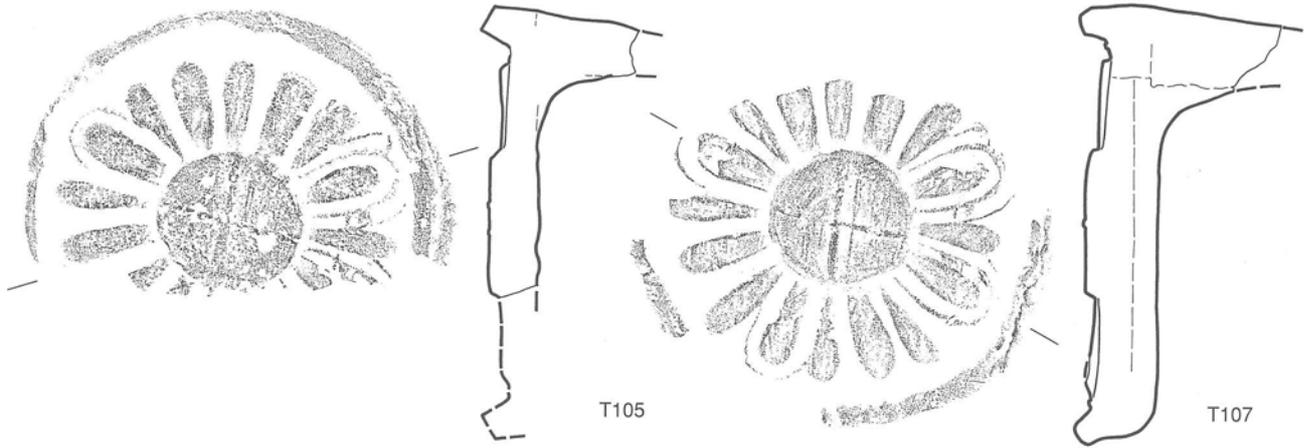
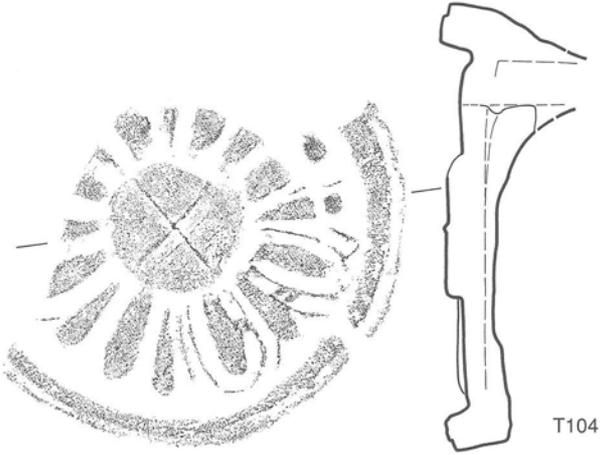
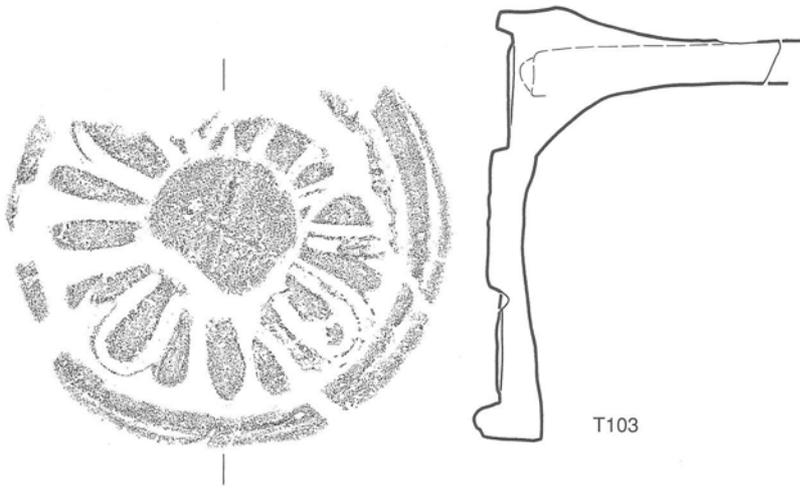


T101

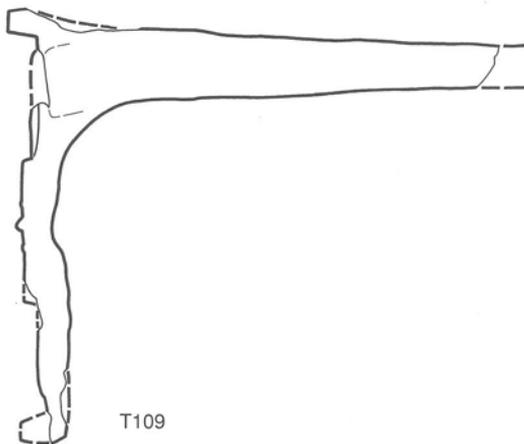


T102

IV区出土軒丸瓦13 (KNM4d)



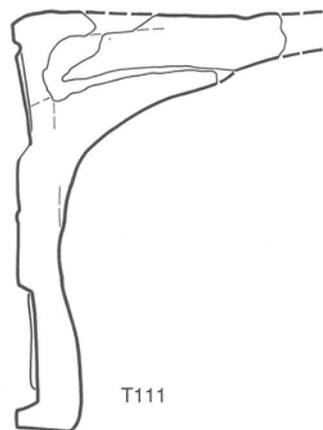
IV区出土軒丸瓦14 (KNM4d)



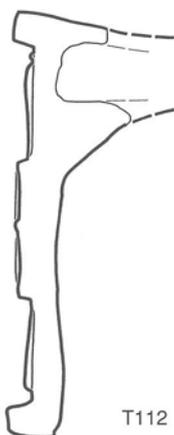
T109



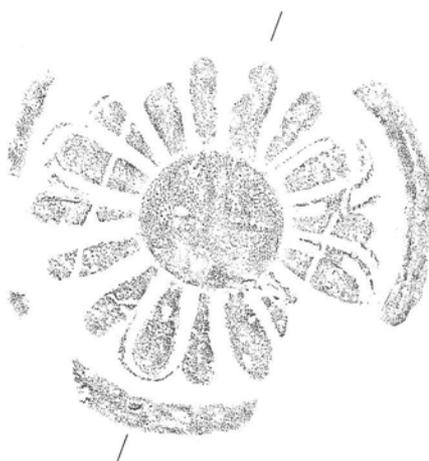
T110



T111



T112



T113

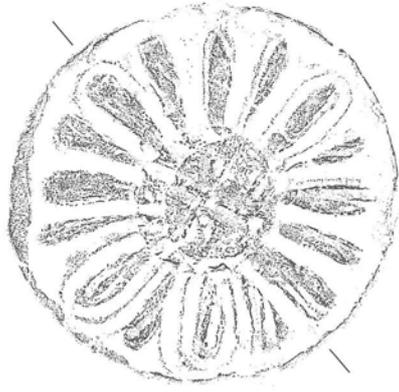
IV区出土軒丸瓦15 (KNM4bかc,cかd)



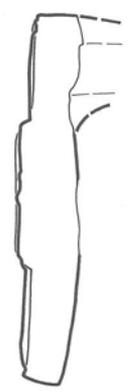
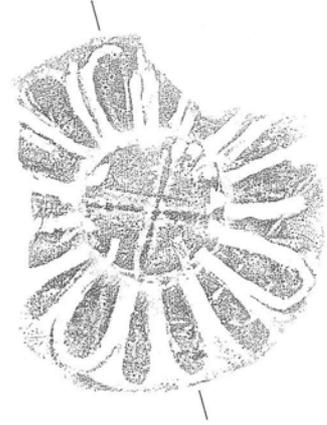
T114



T115



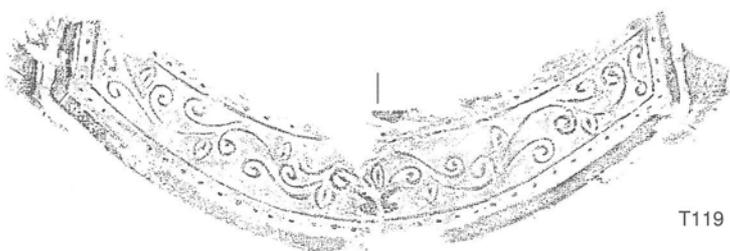
T116



T117



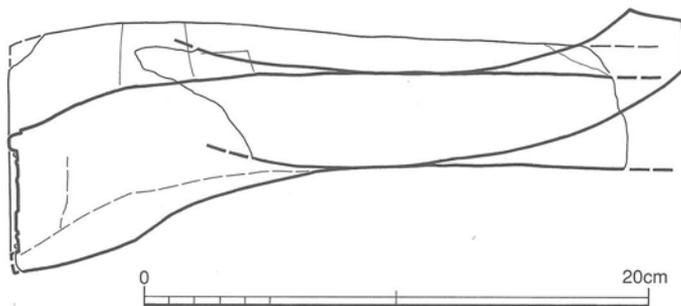
T118



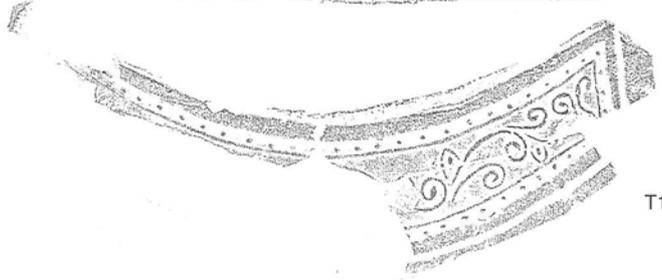
T119



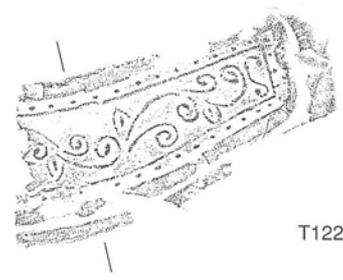
T120



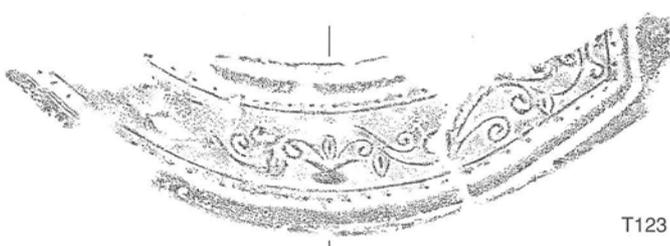
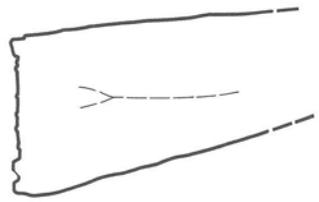
IV区出土軒平瓦1 (KNH1)



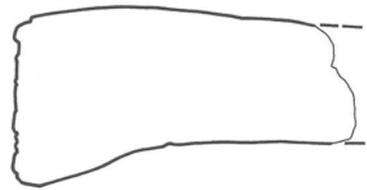
T121



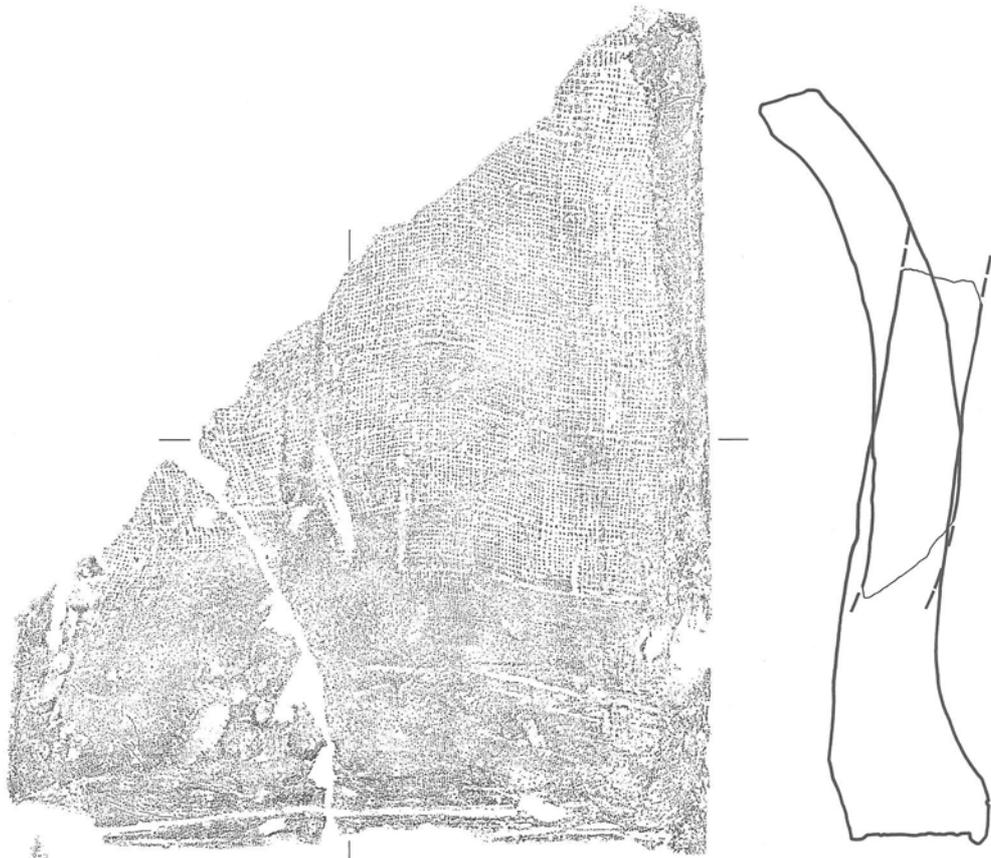
T122



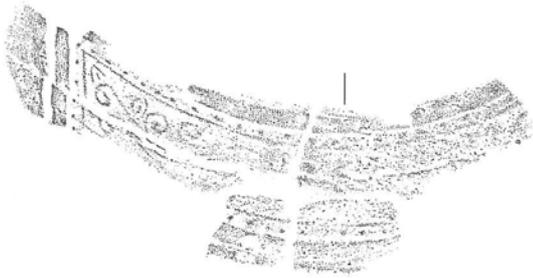
T123



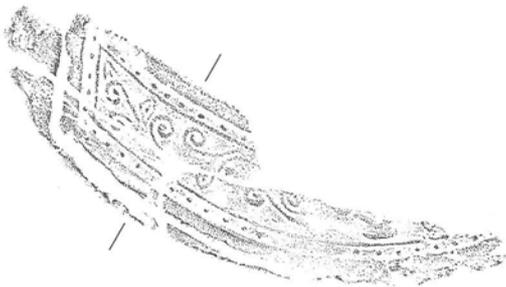
IV区出土軒平瓦2 (KNH1)



T124

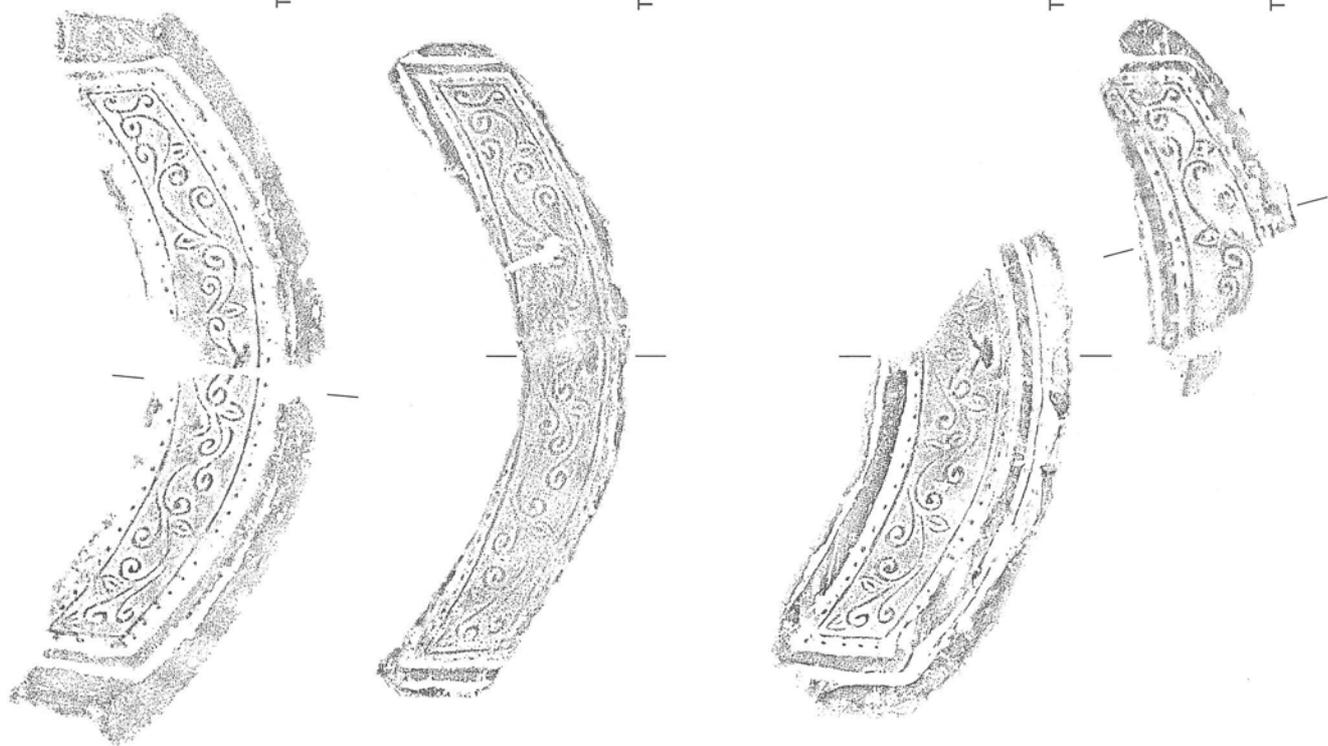
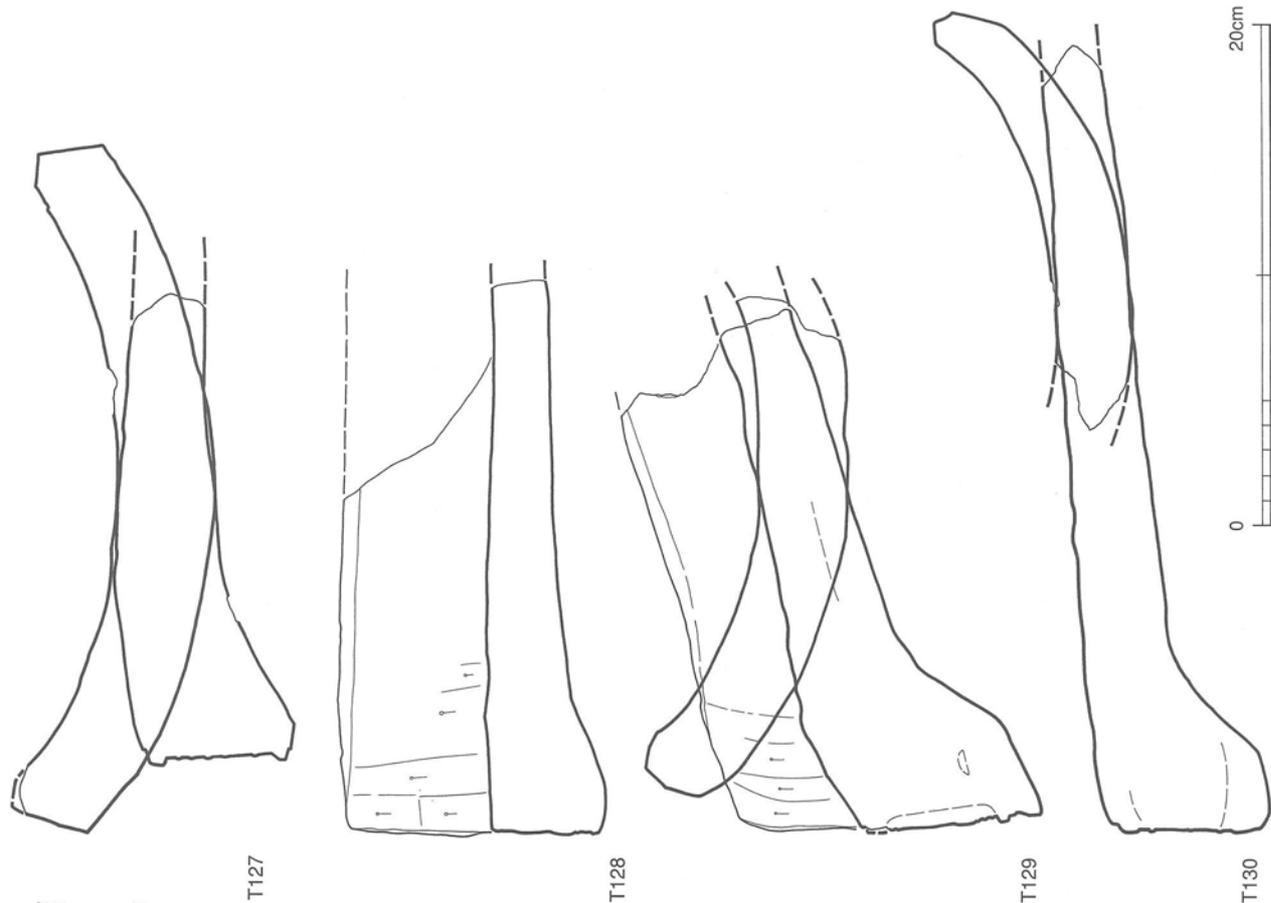


T125



T126

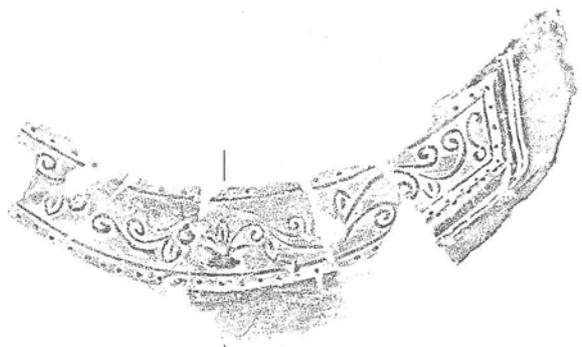
IV区出土軒平瓦3 (KNH1)



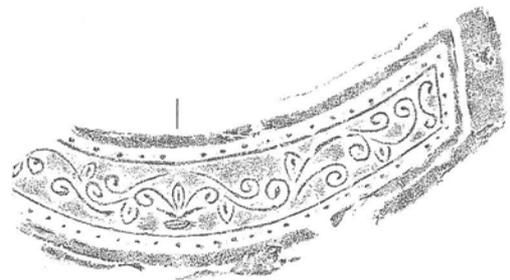
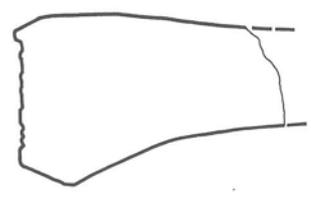
IV区出土軒平瓦4 (KNH1)



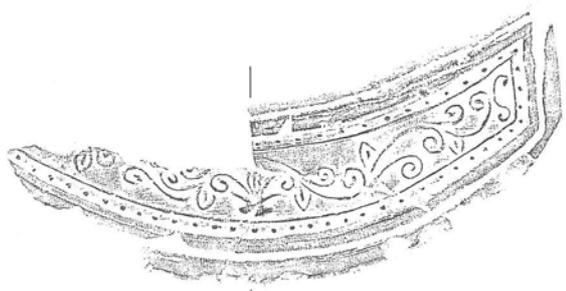
T131



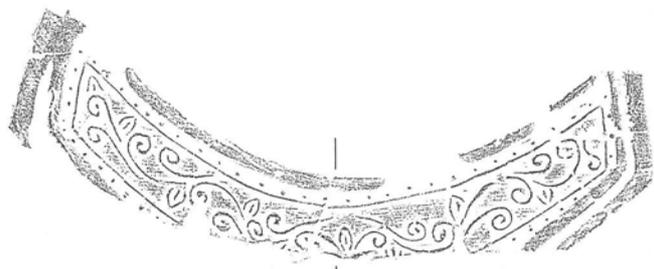
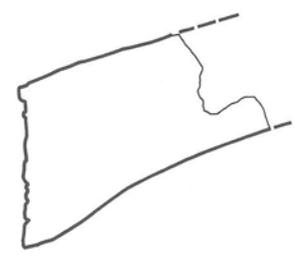
T132



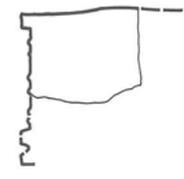
T133



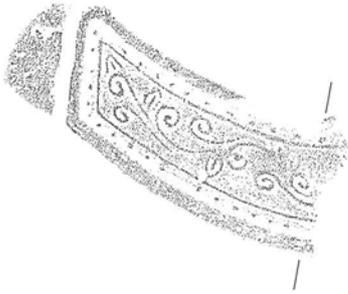
T134



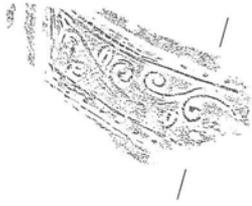
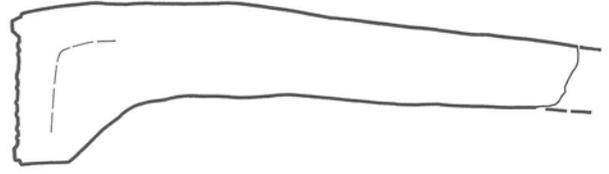
T135



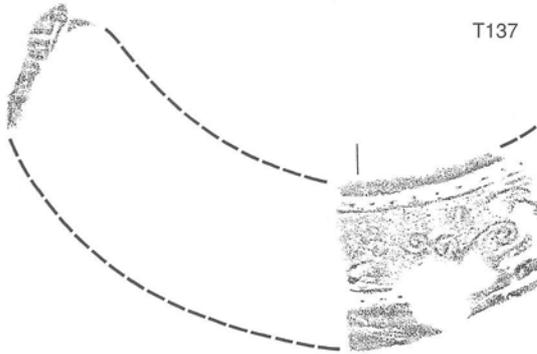
IV区出土軒平瓦5 (KNH1)



T136



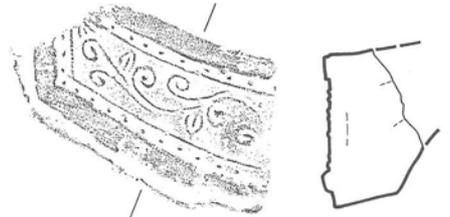
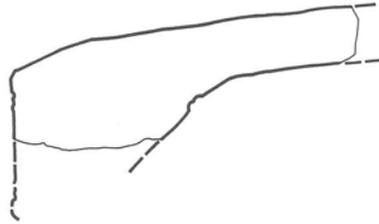
T137



T138



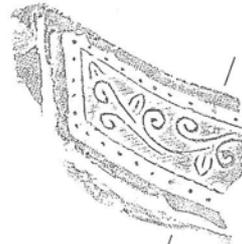
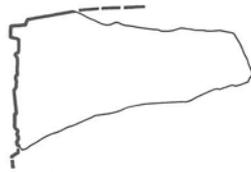
T139



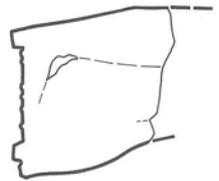
T140



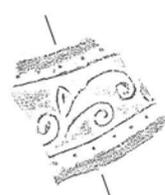
T141



T142



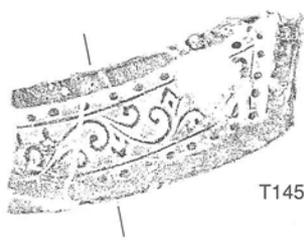
T143



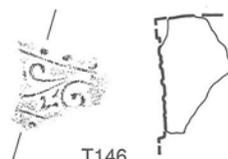
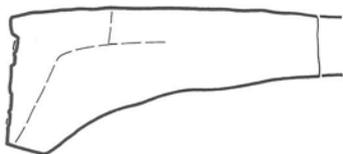
T144



IV区出土軒平瓦6 (KNH1)



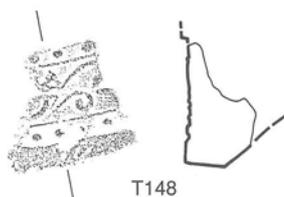
T145



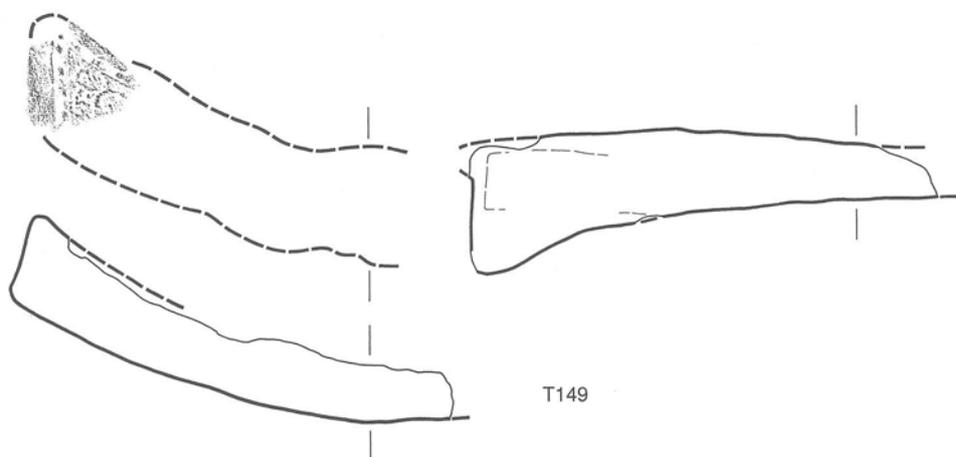
T146



T147



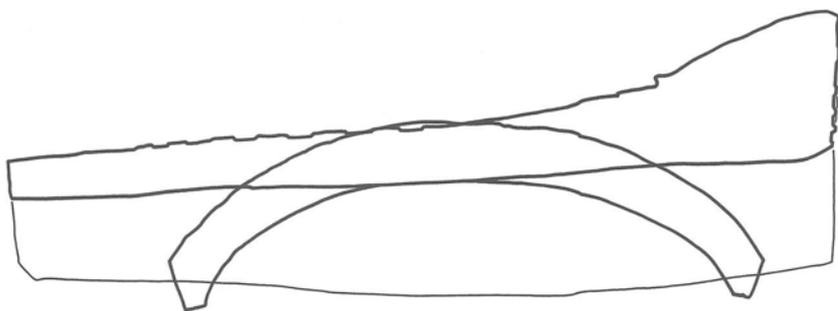
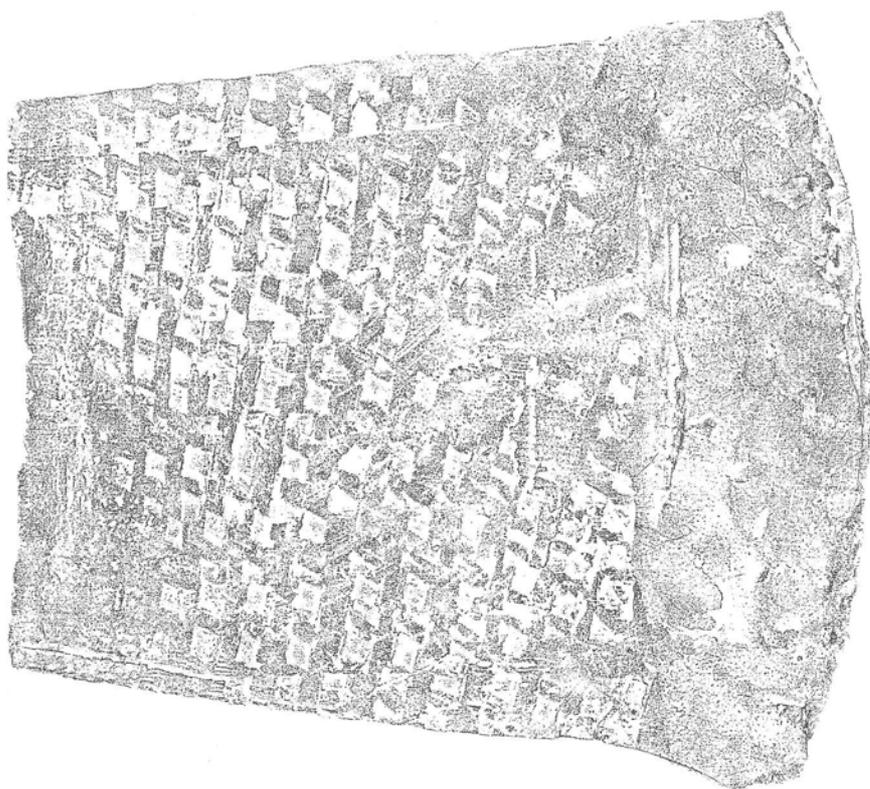
T148



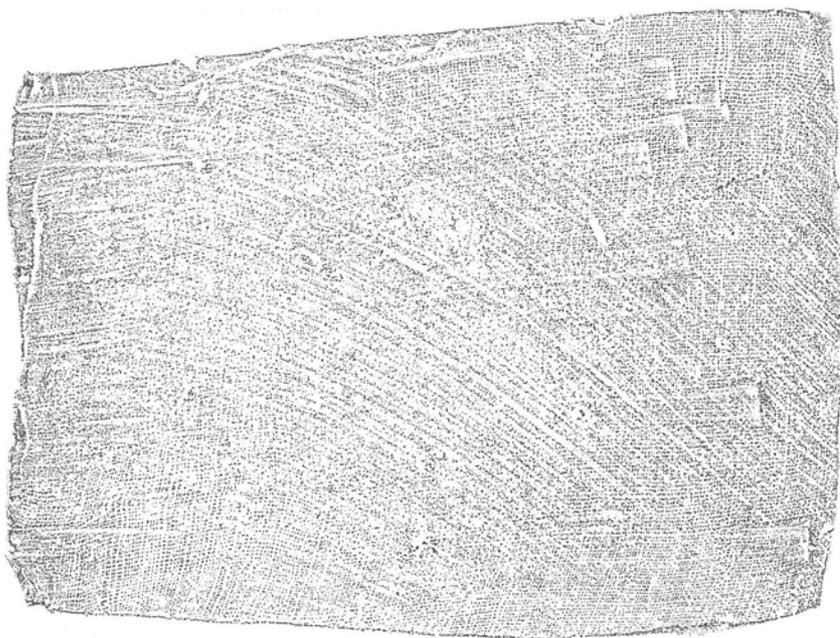
T149



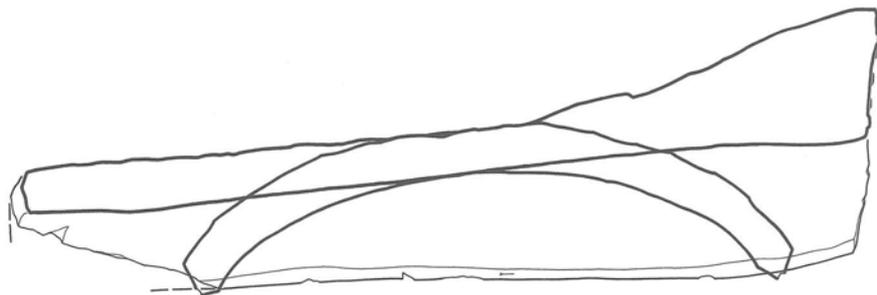
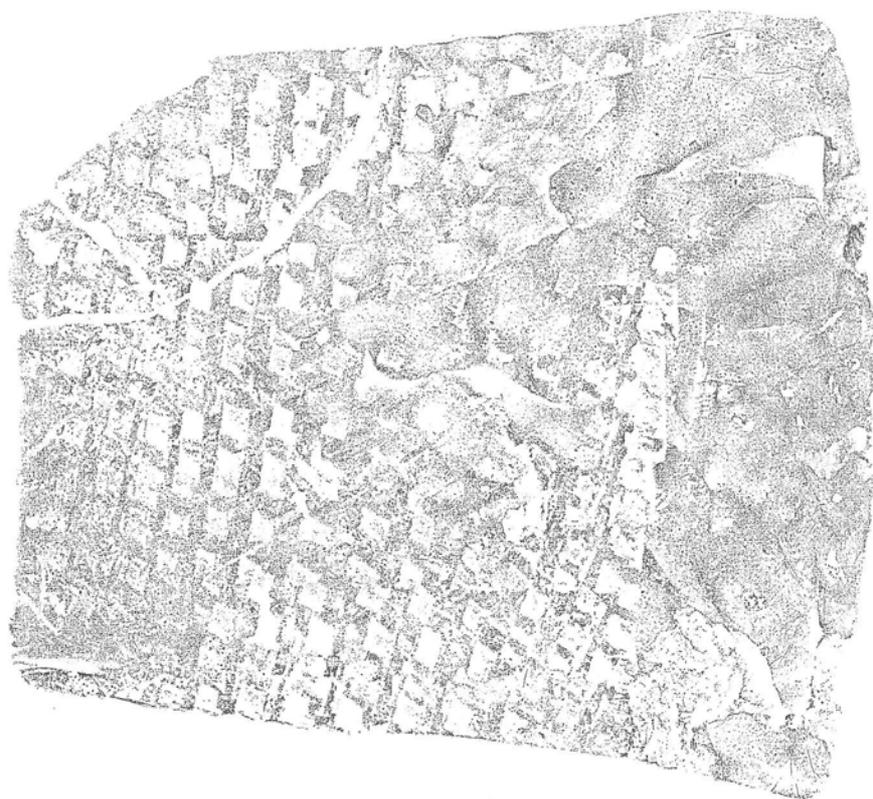
T150



T151



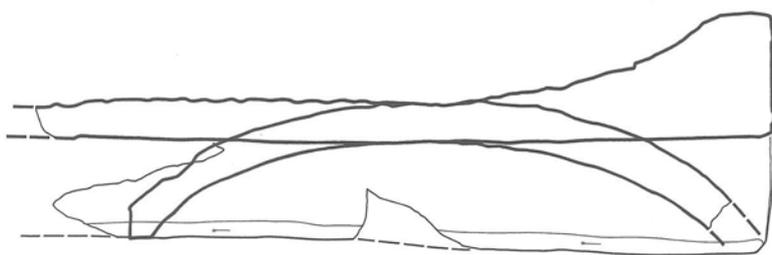
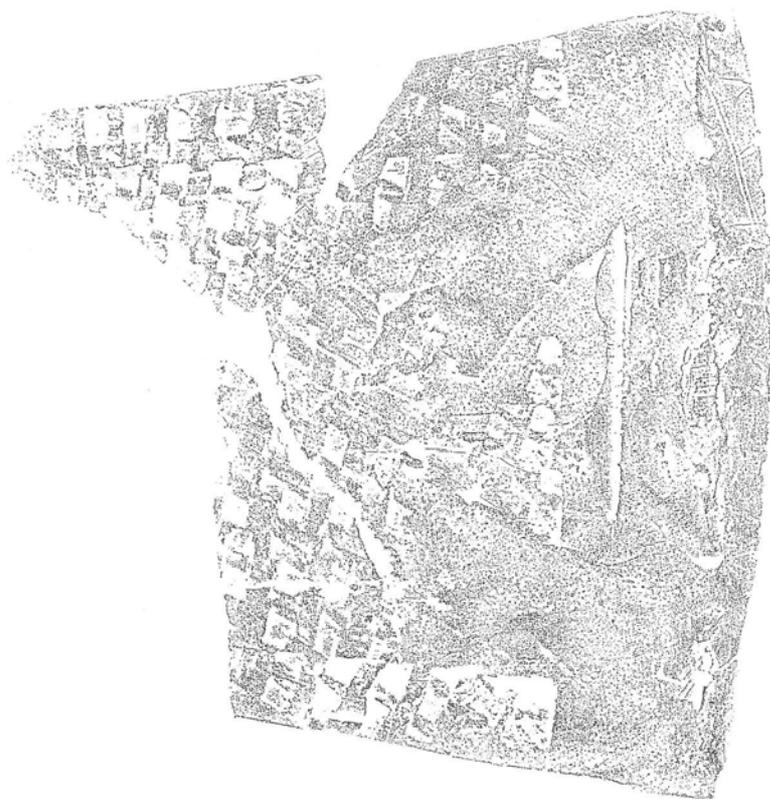
IV区出土軒平瓦8 (KNH3)



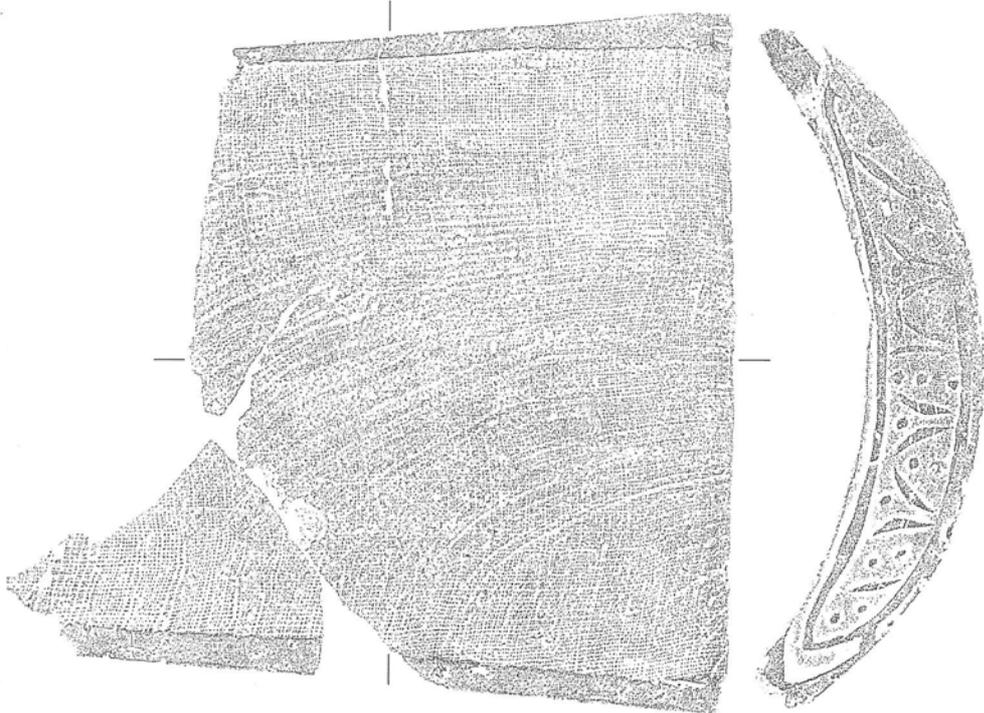
T152



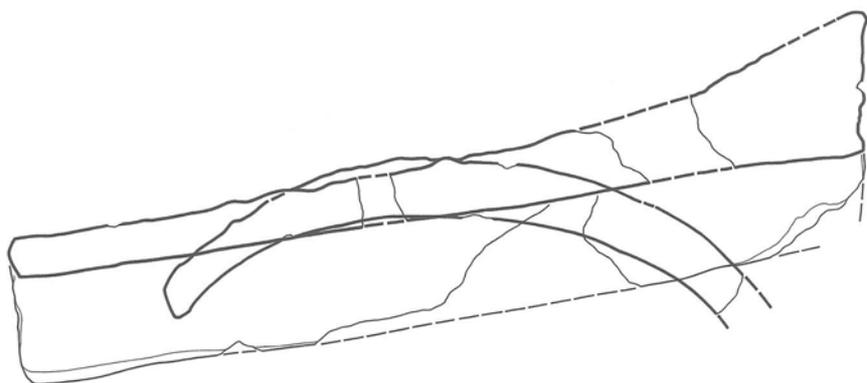
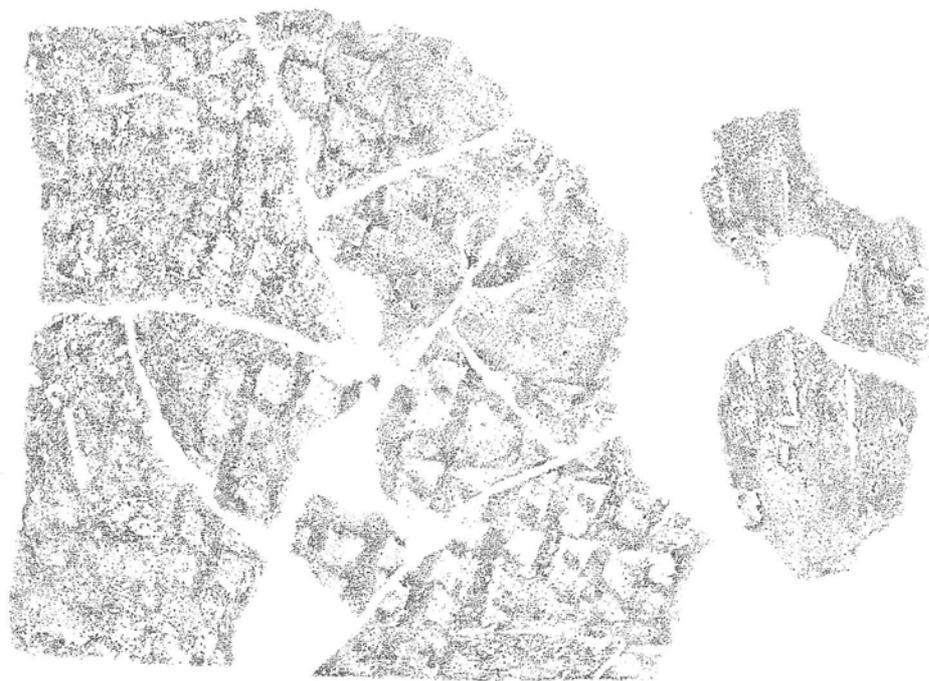
IV区出土軒平瓦9 (KNH3)



T153



IV区出土軒平瓦10 (KNH3)



T154



IV区出土軒平瓦11 (KNH3)



T155



T156



IV区出土軒平瓦12 (KNH3)



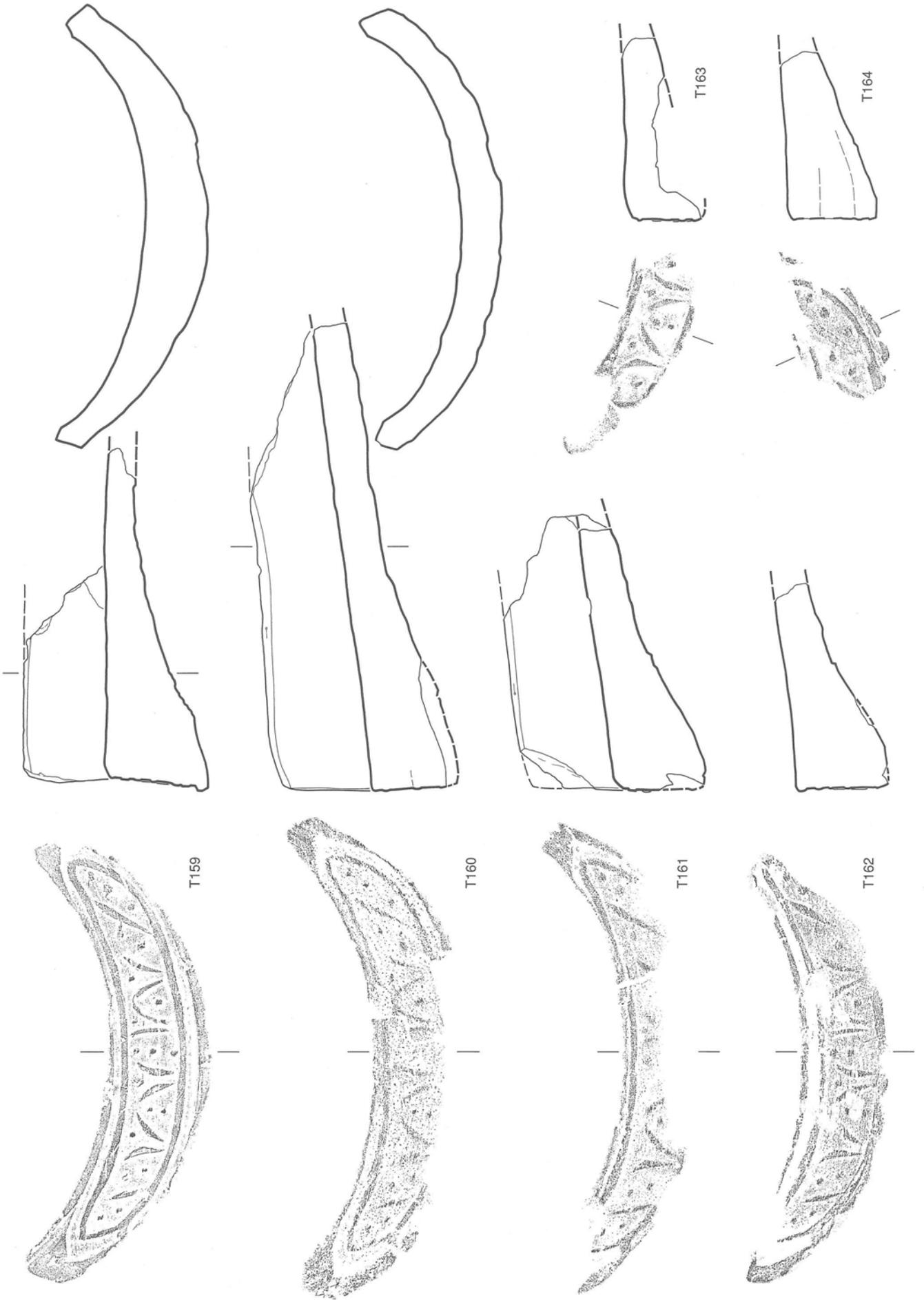
T157



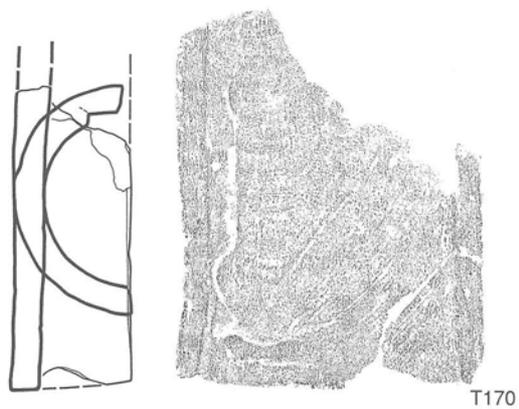
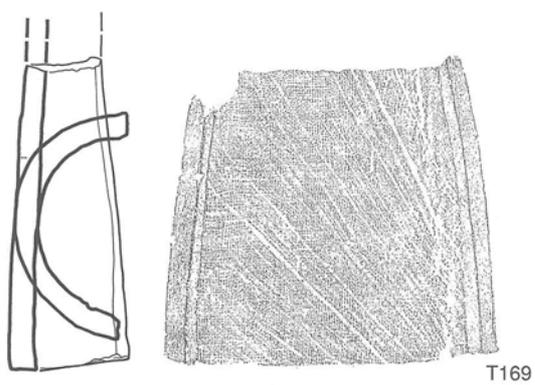
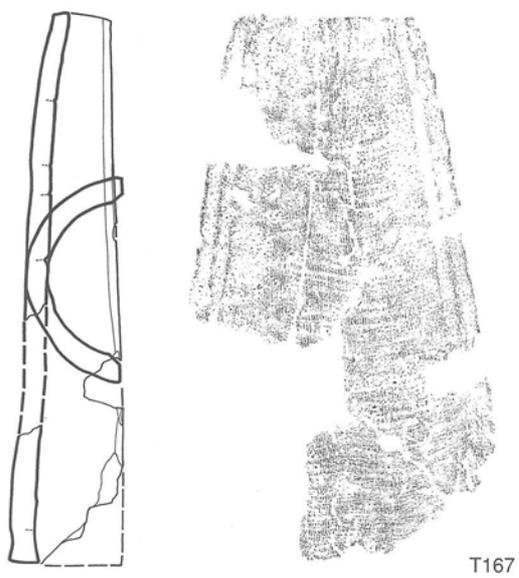
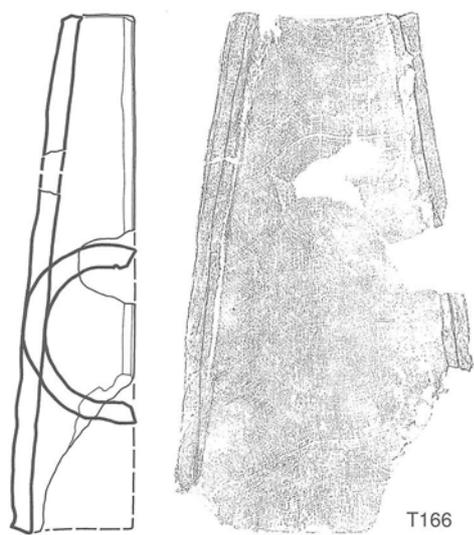
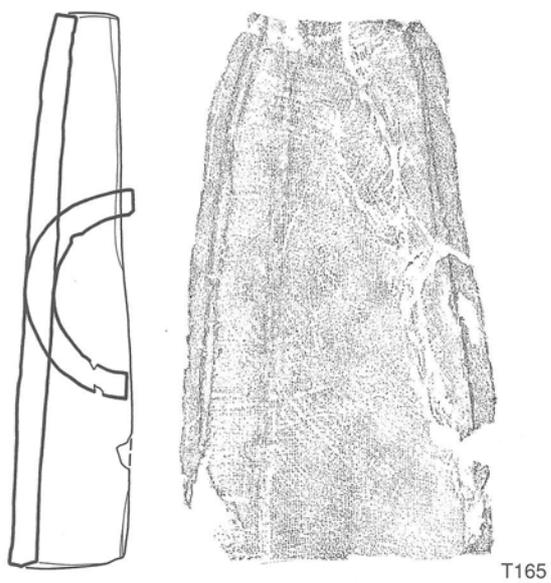
T158



IV区出土軒平瓦13 (KNH3)



IV区出土軒平瓦14 (KNH3)



IV区出土丸瓦1 (行基式丸瓦)



T171



T172



T173



T174

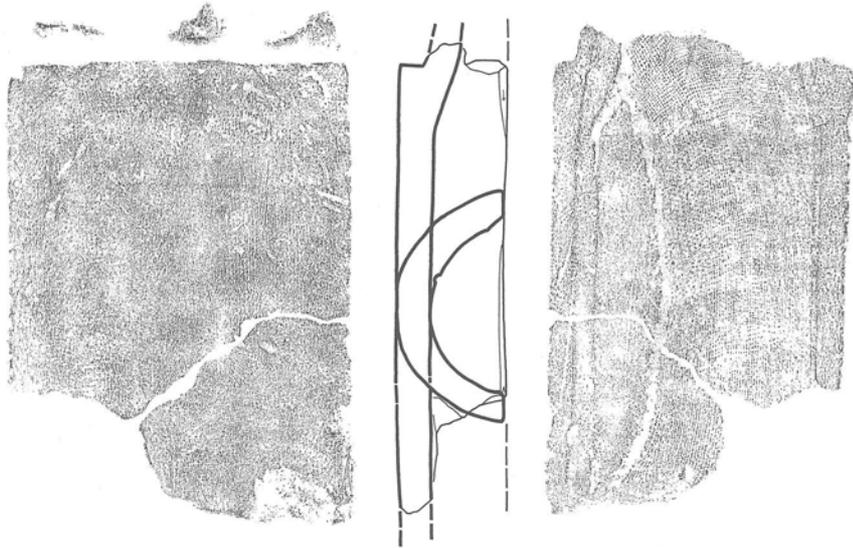


T177

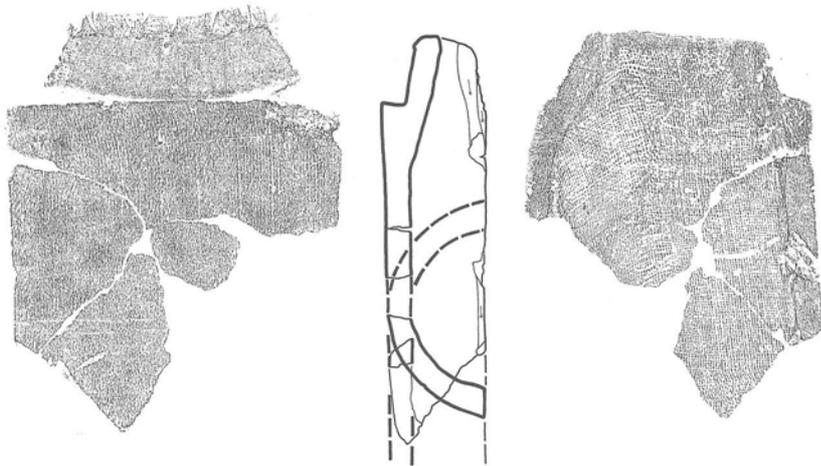


T176

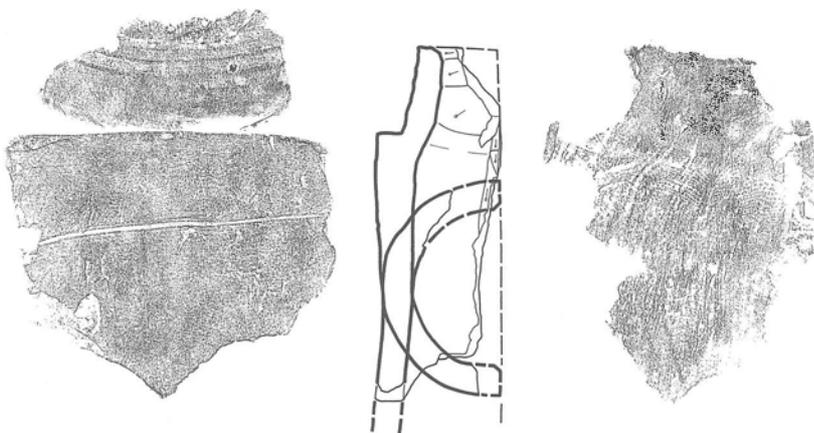
Ⅳ区出土丸瓦2 (玉縁式丸瓦)



T177

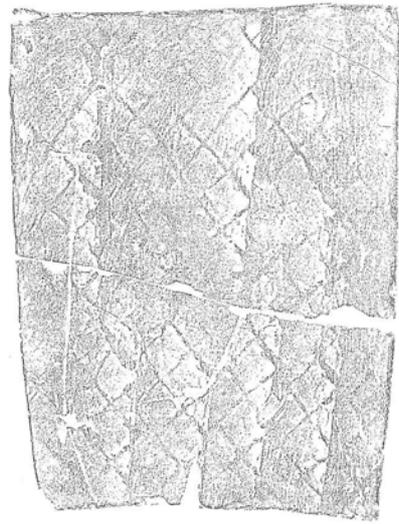
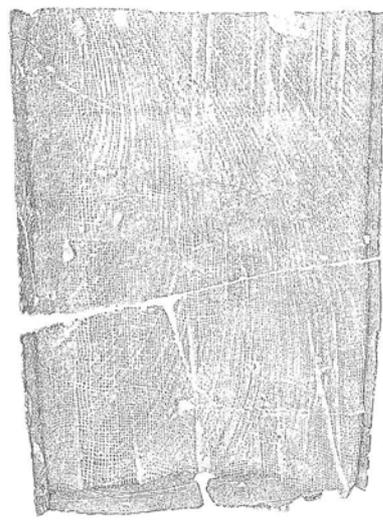


T178

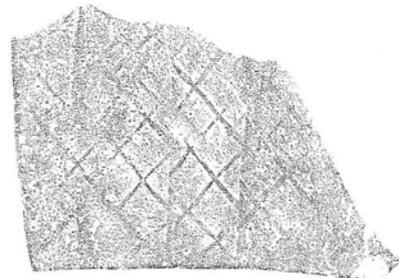


T179

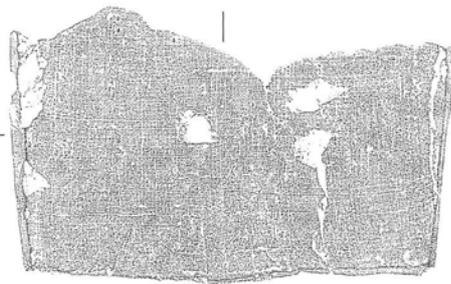
IV区出土丸瓦3 (玉縁式丸瓦)



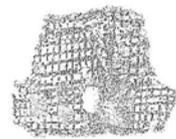
T180



T181



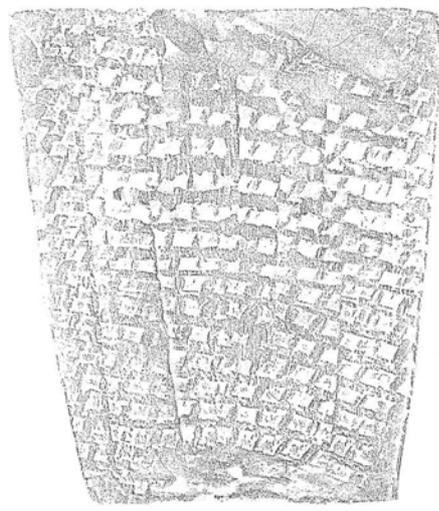
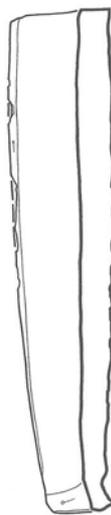
T182



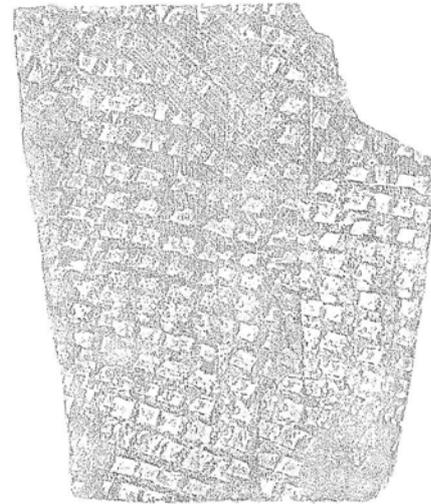
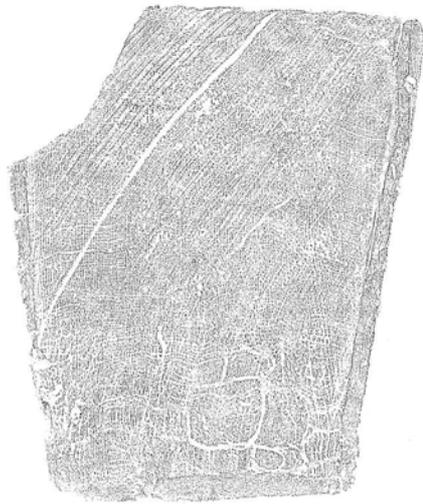
T183



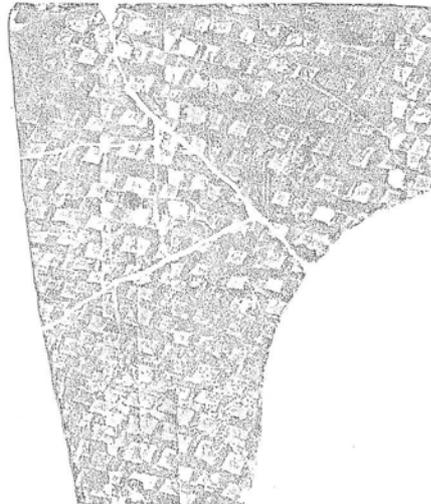
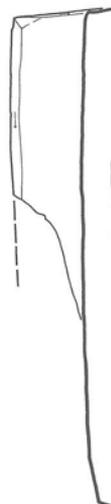
IV区出土平瓦1 (①②種)



T184

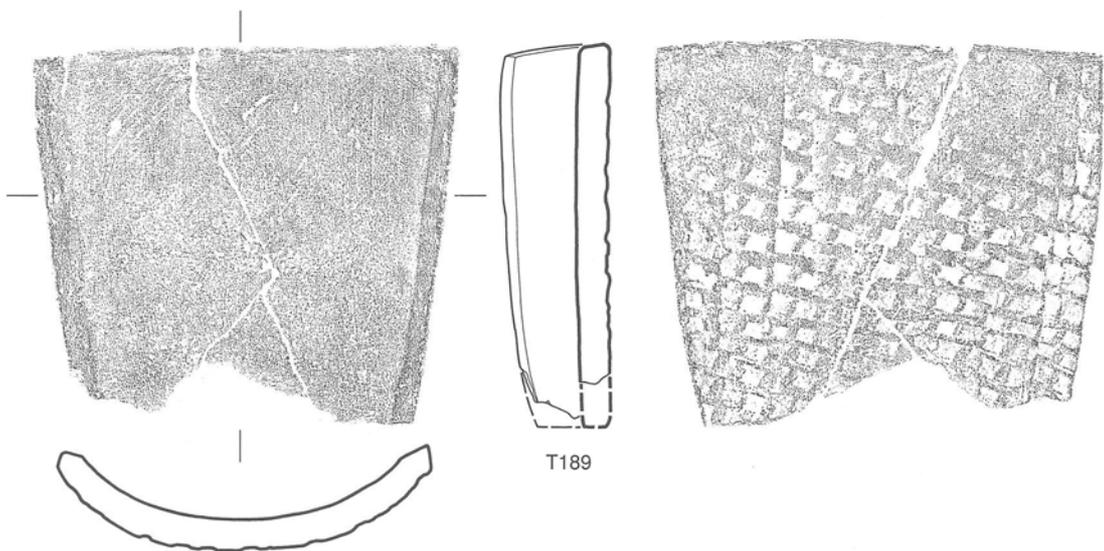
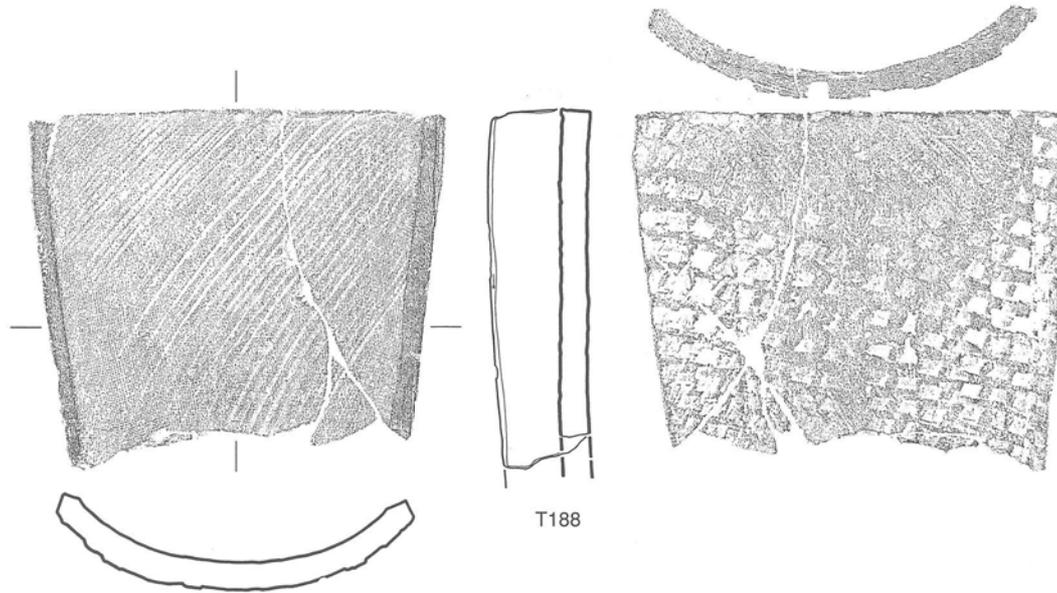
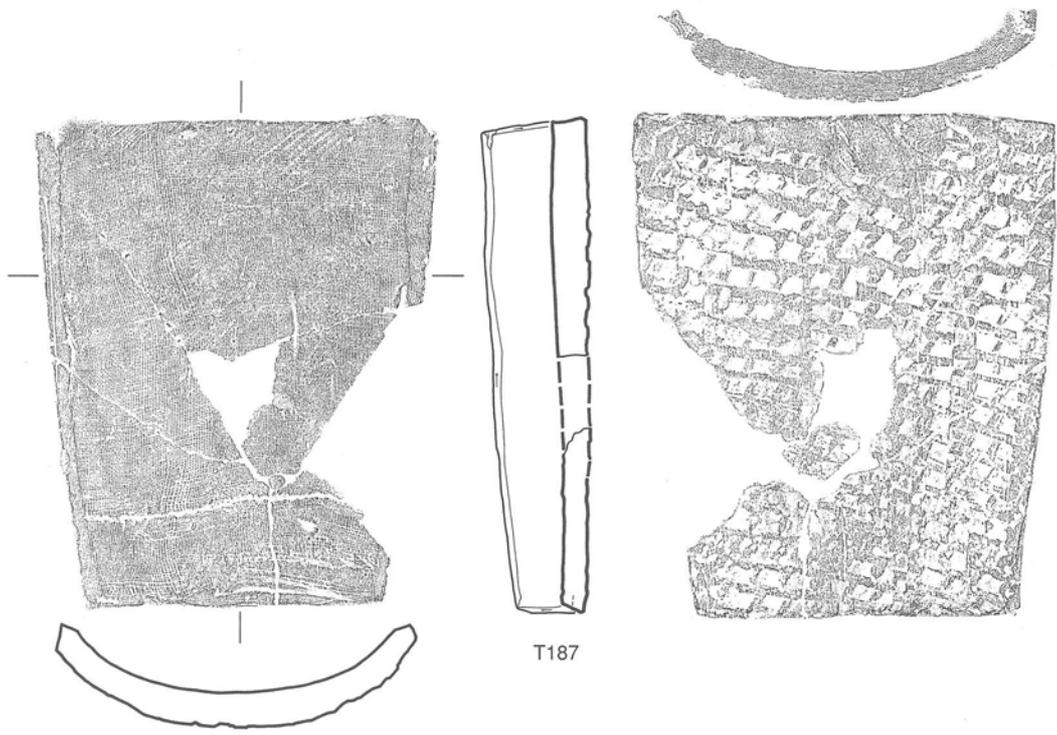


T185

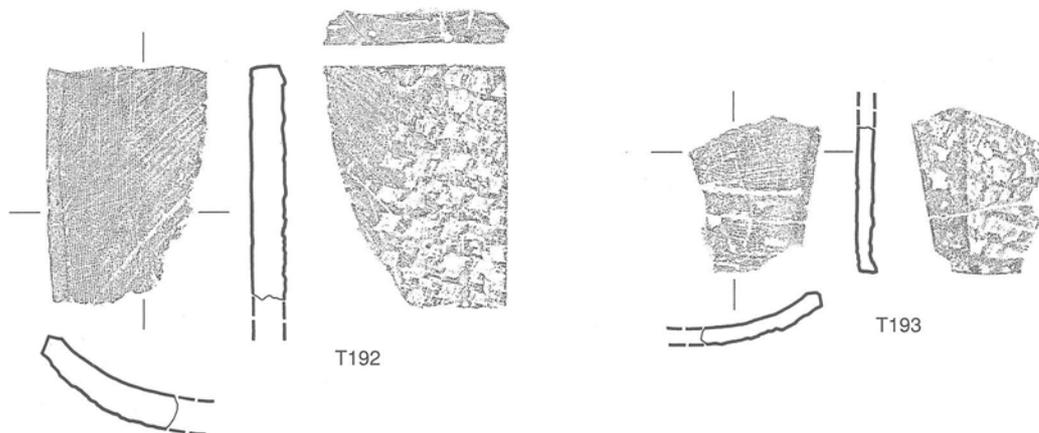
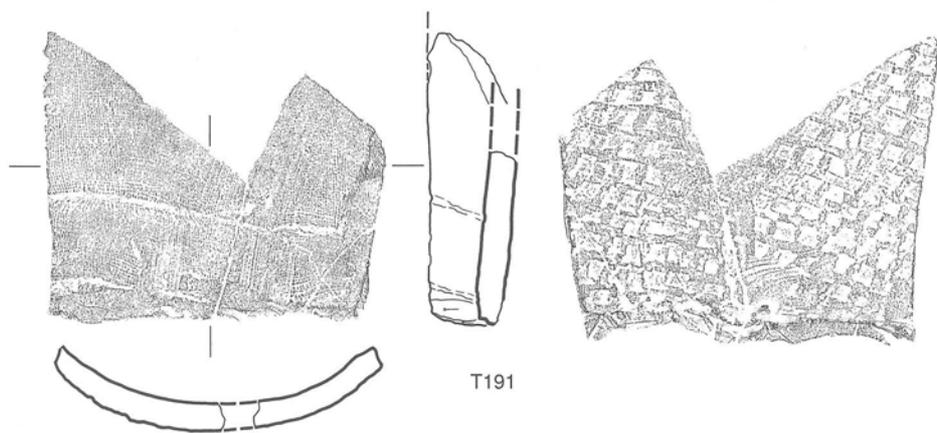
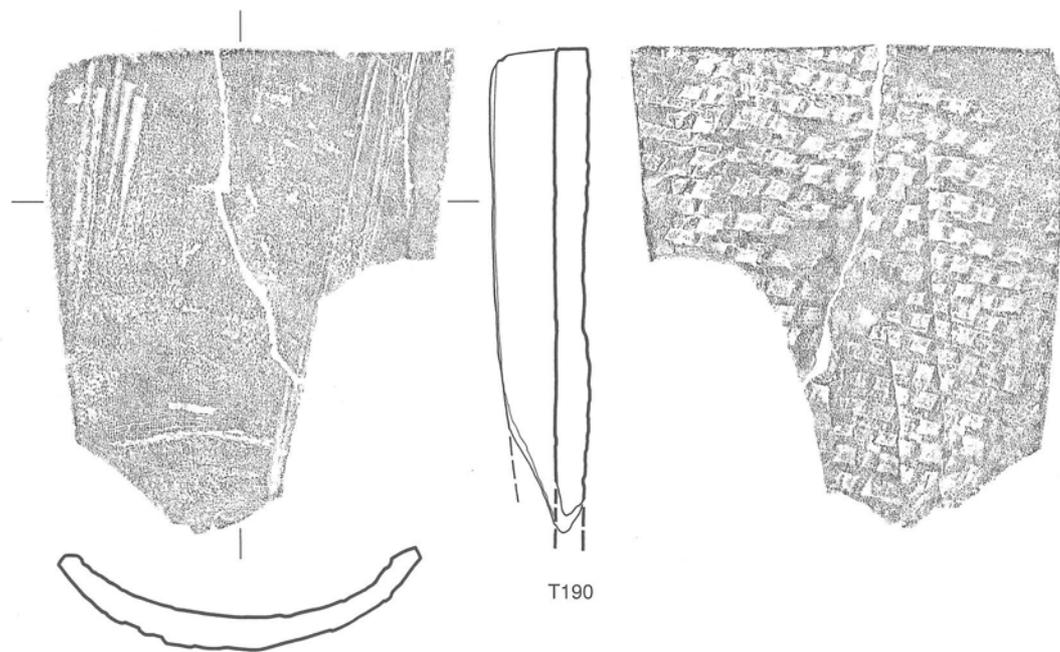


T186

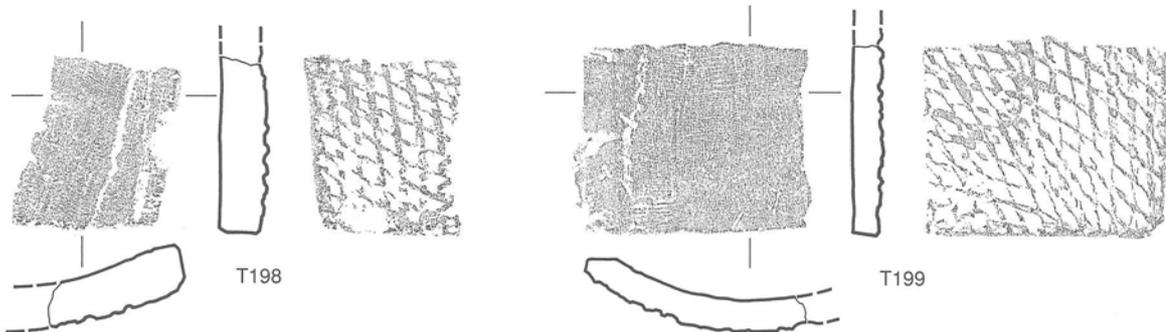
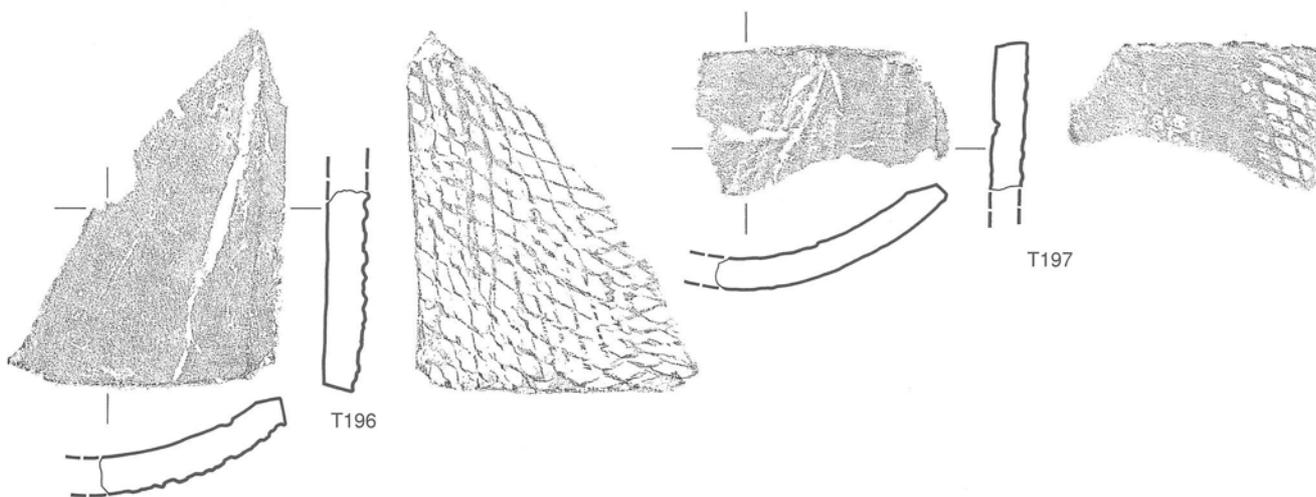
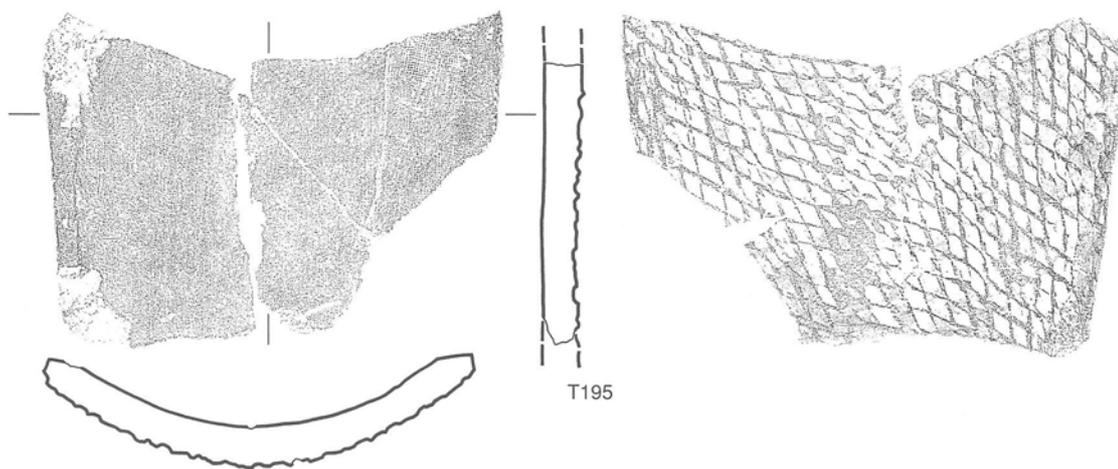
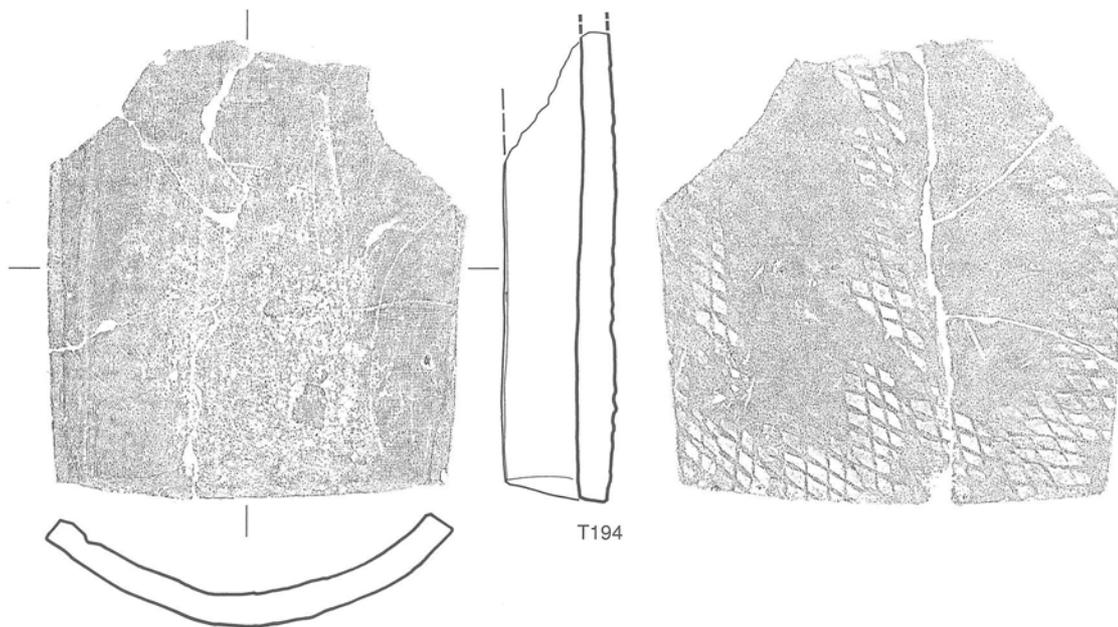
IV区出土平瓦2 (3種)



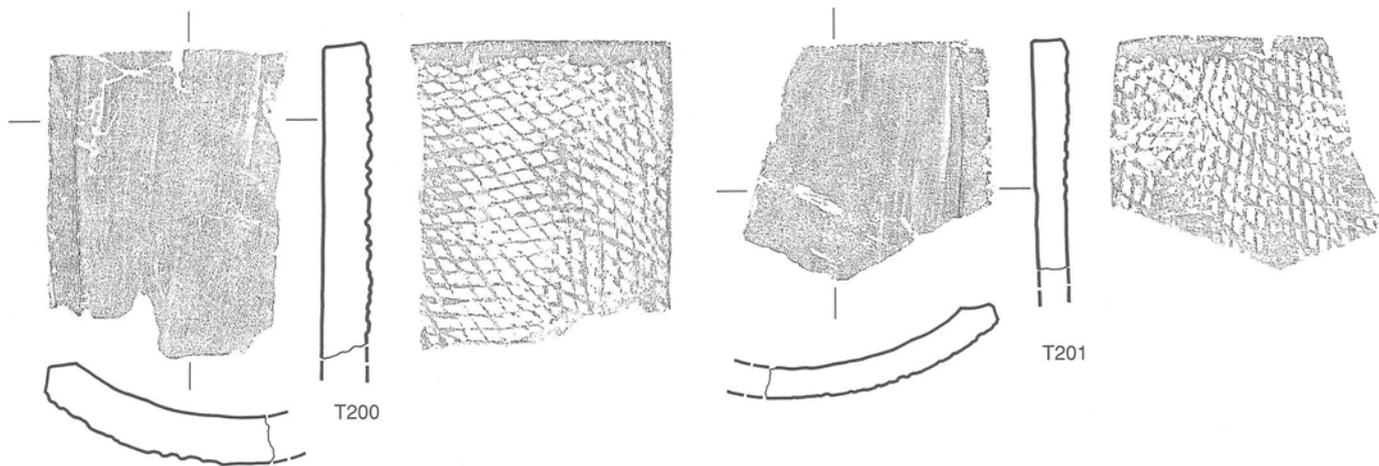
IV区出土平瓦3 (3種)



IV区出土平瓦4 (③種)

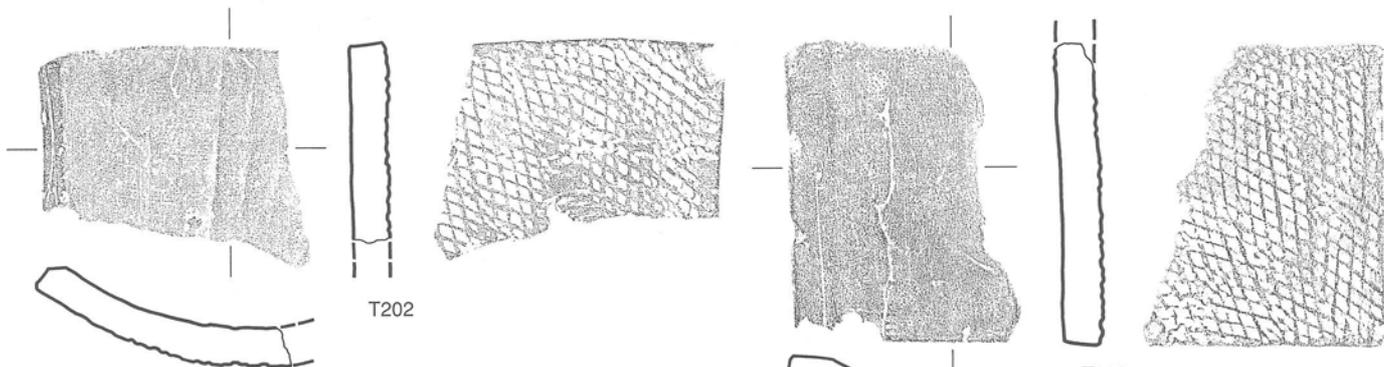


IV区出土平瓦5 (4種)



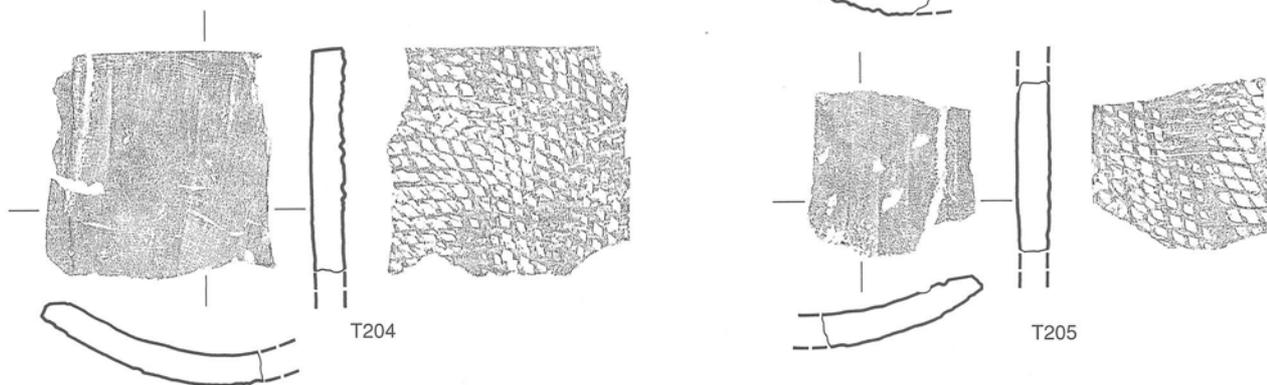
T200

T201



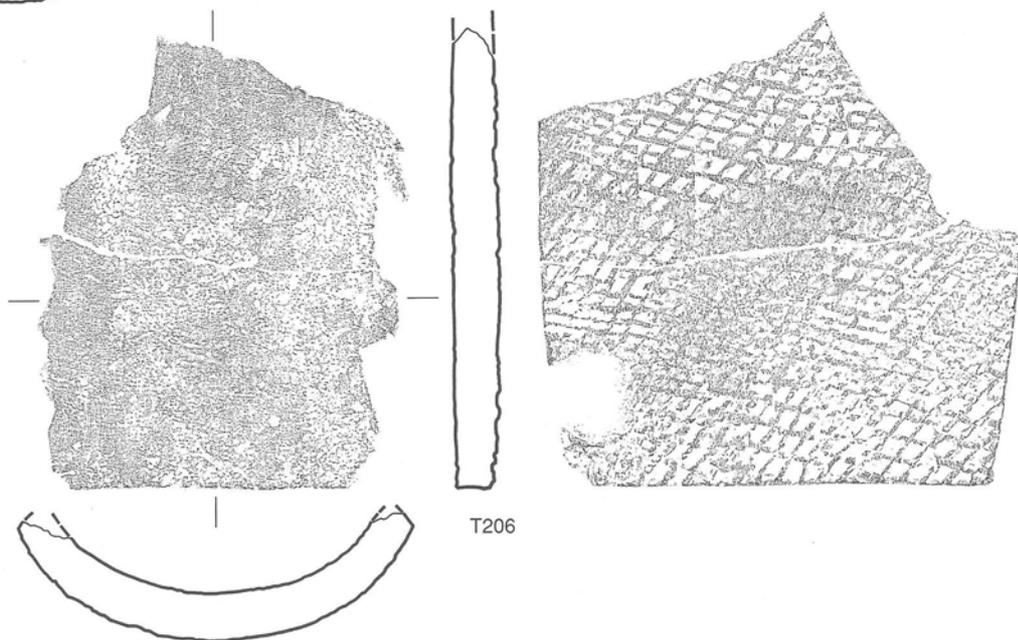
T202

T203



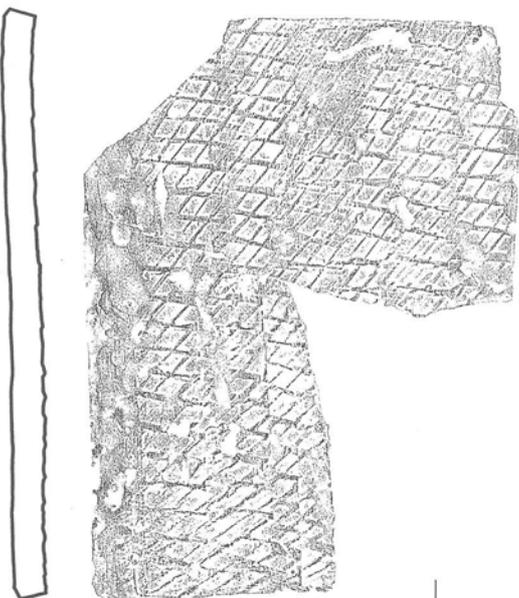
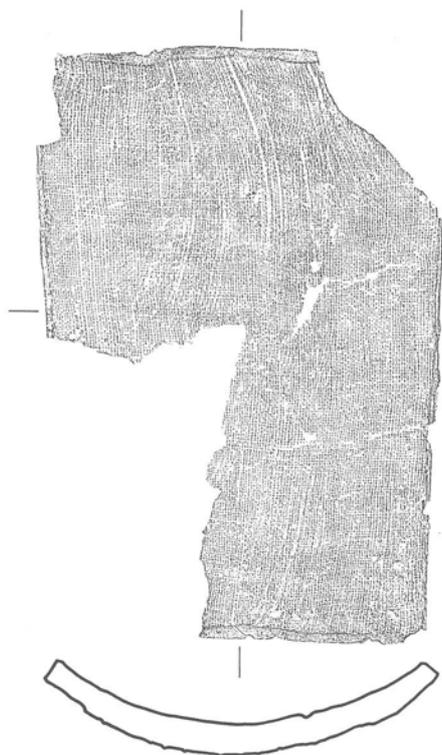
T204

T205

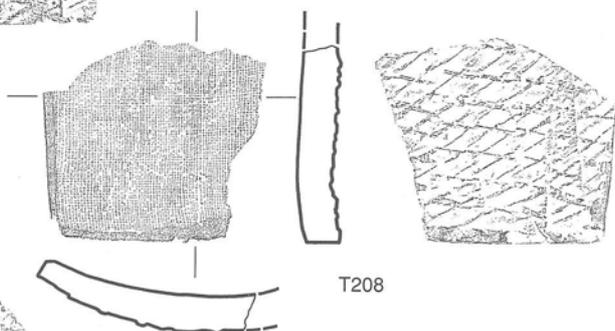


T206

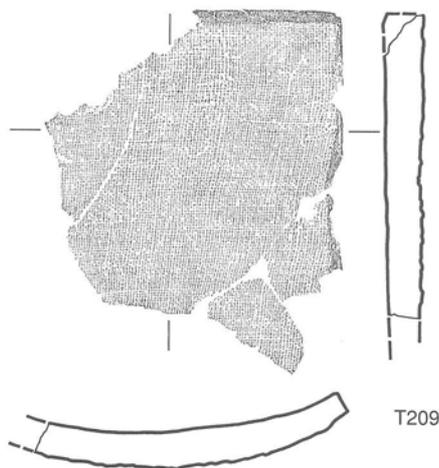
IV区出土平瓦6 (⑤⑥種)



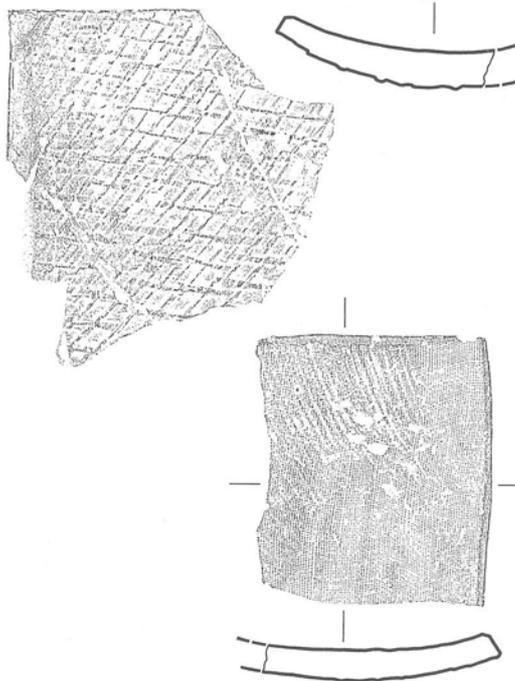
T207



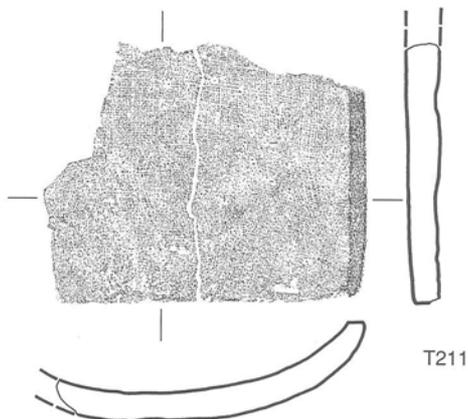
T208



T209

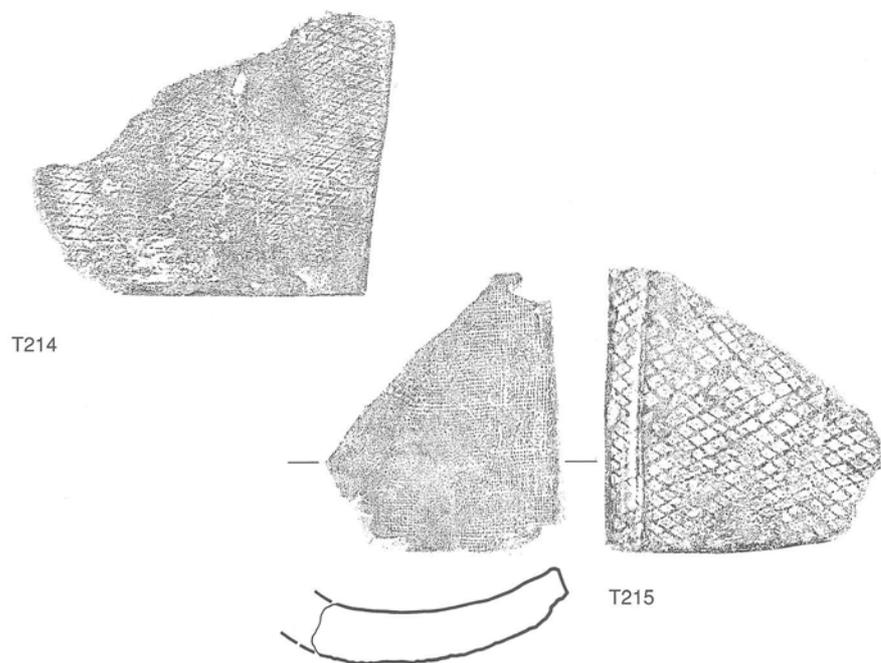
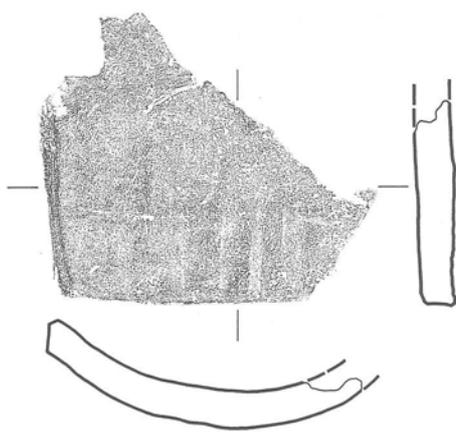
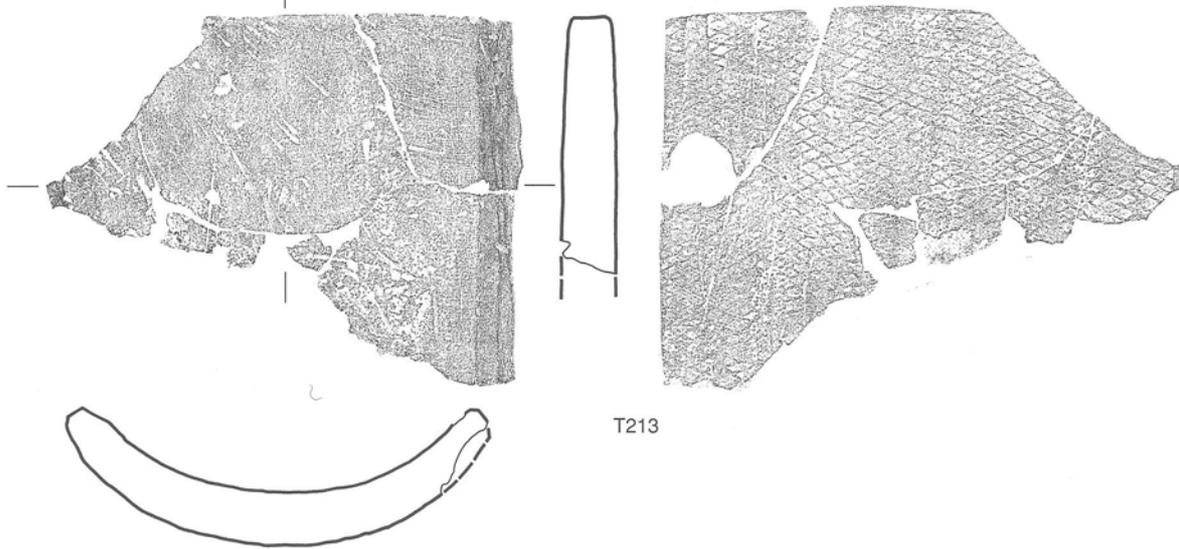
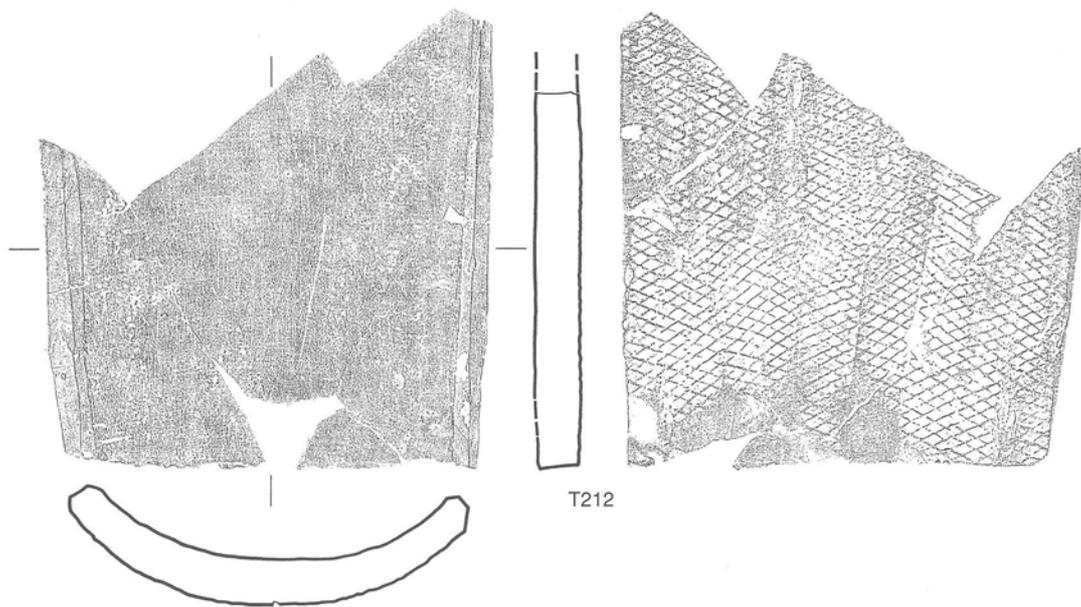


T210

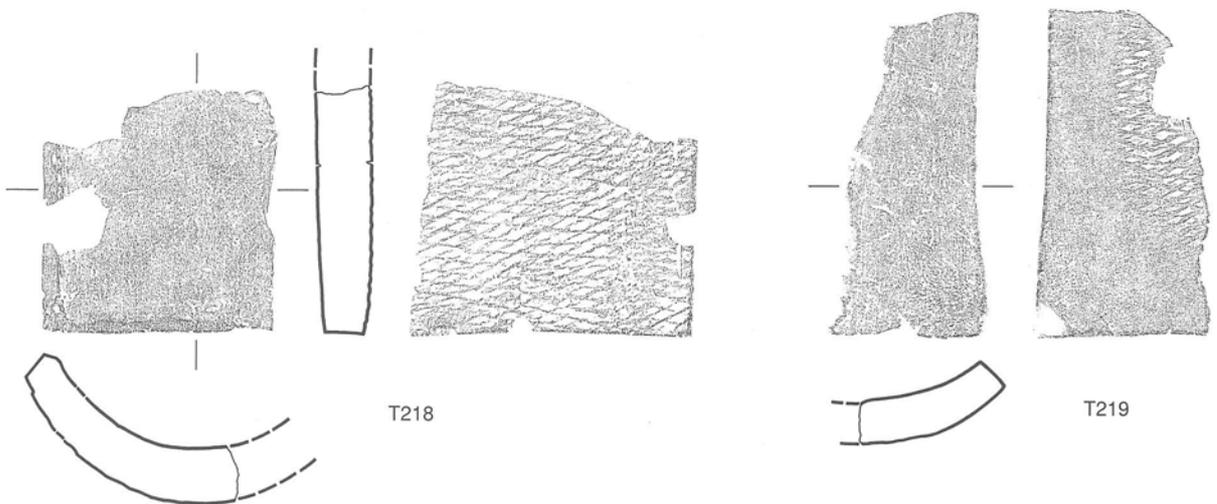
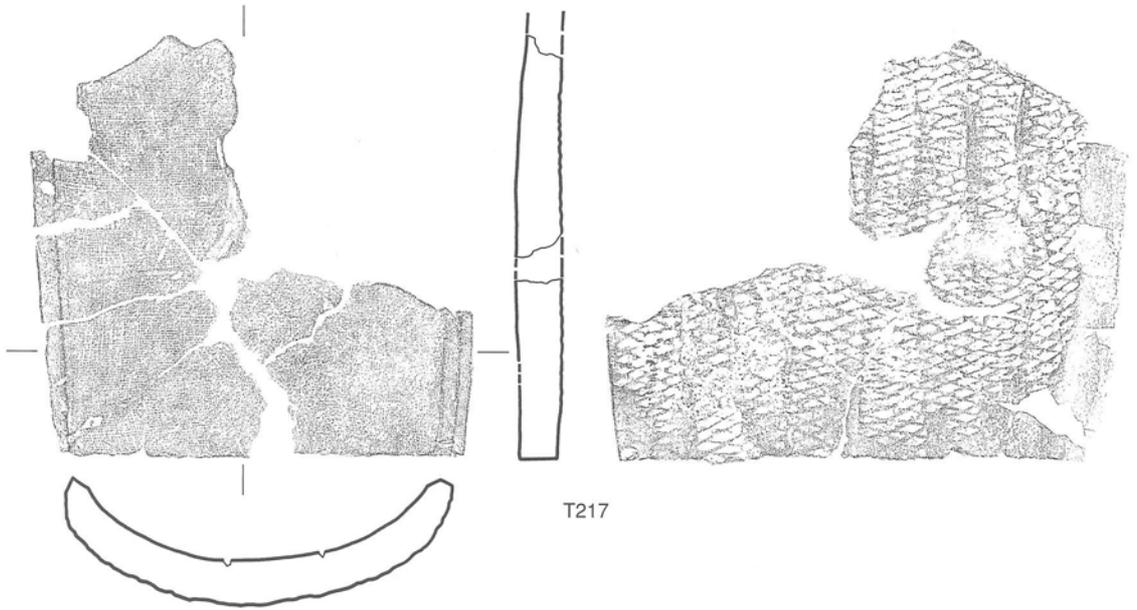
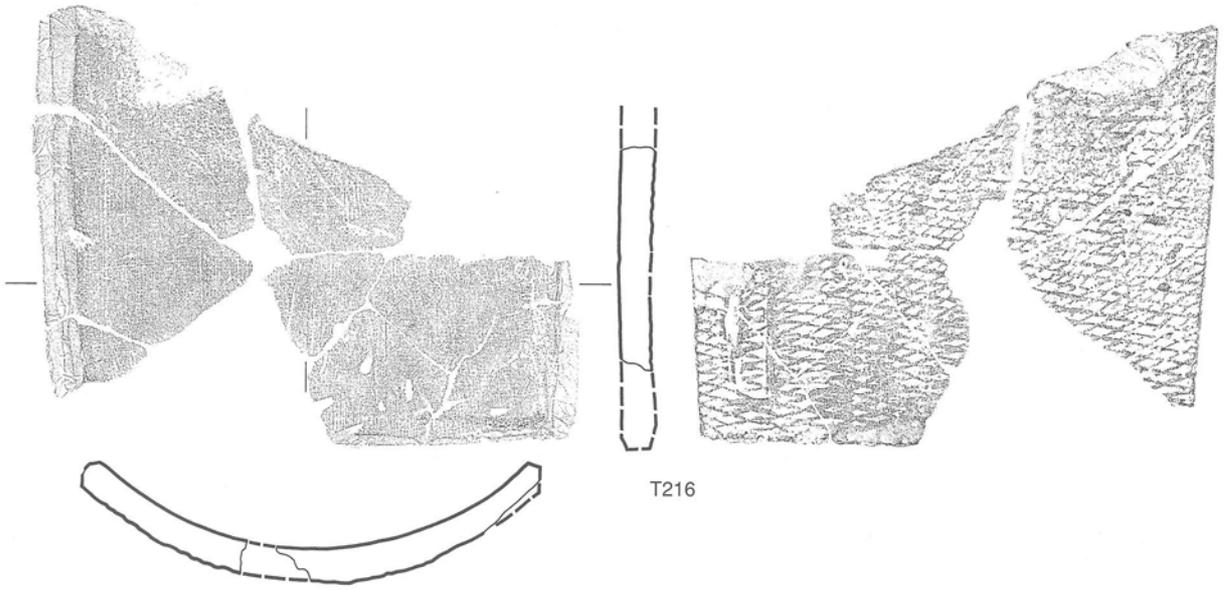


T211

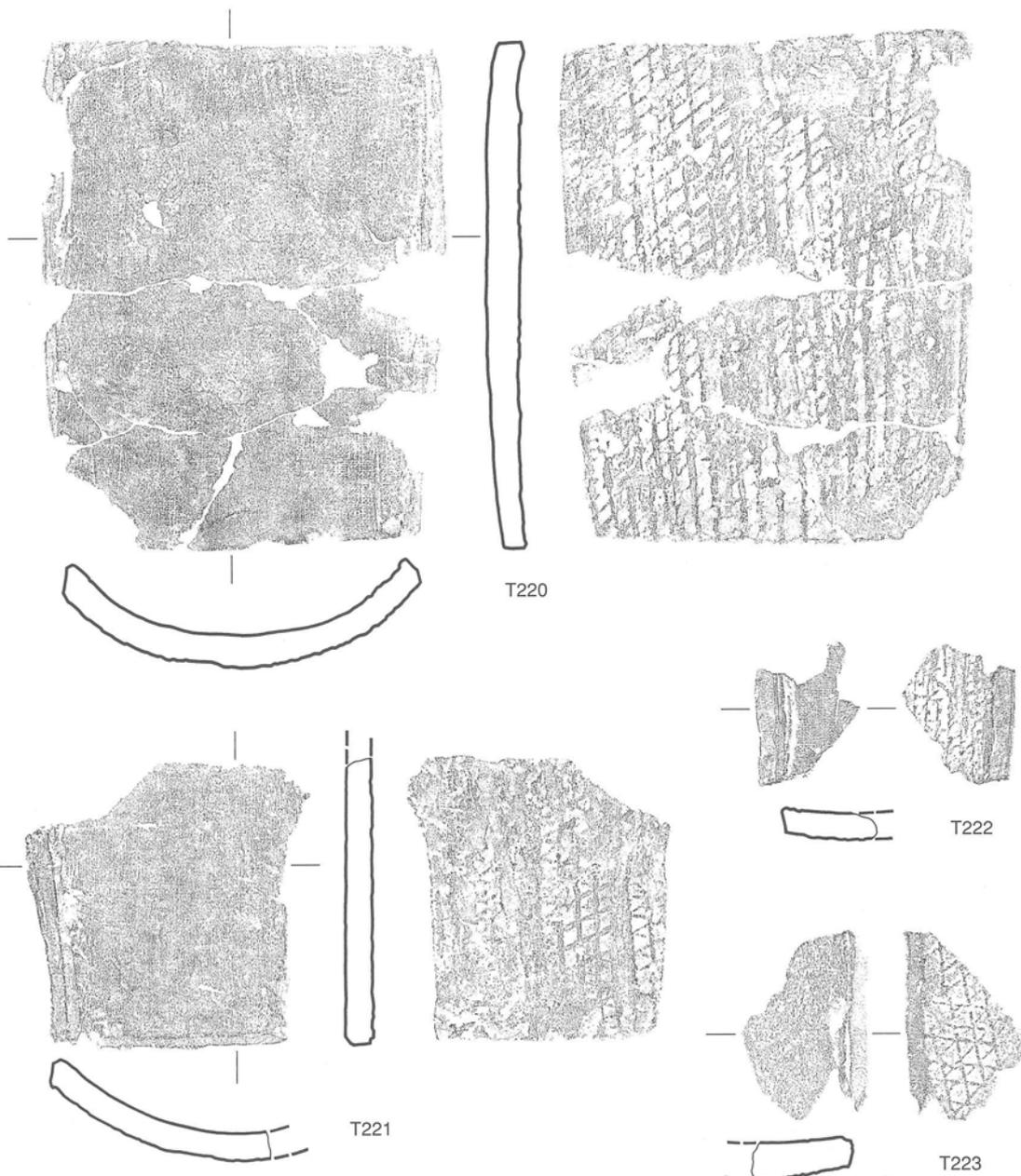
IV区出土平瓦7 (⑦⑧種)



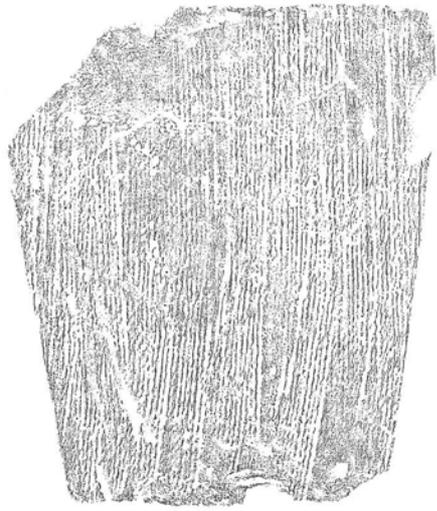
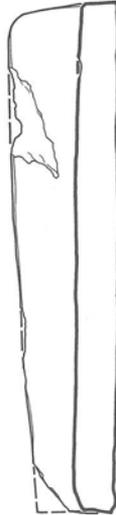
IV区出土平瓦8 (9種)



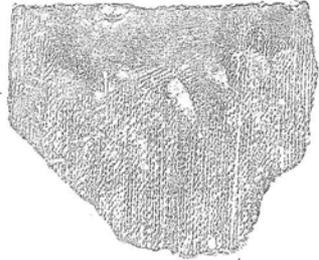
IV区出土平瓦9 (⑩種)



IV区出土平瓦10 (①②③種)

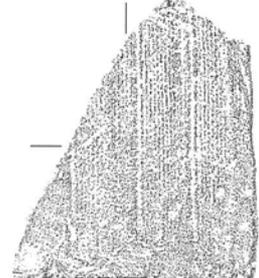


T224



T225

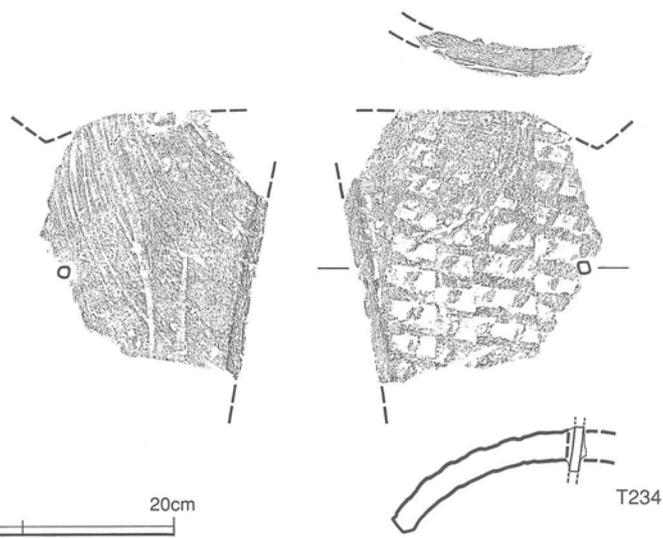
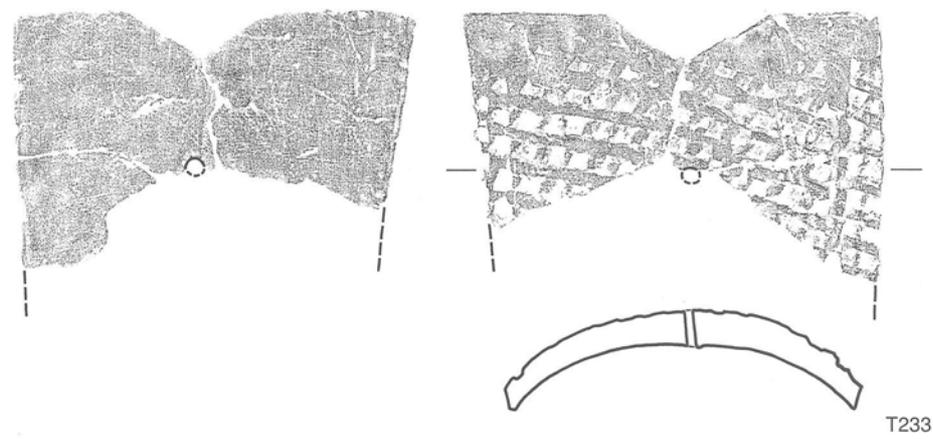
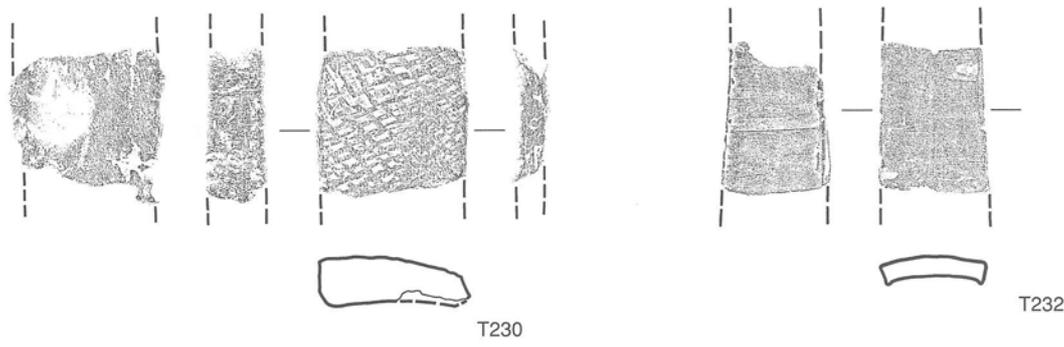
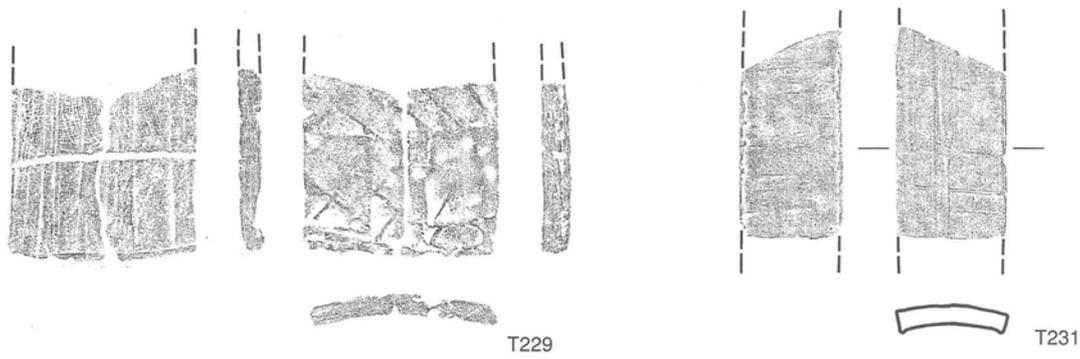
T226



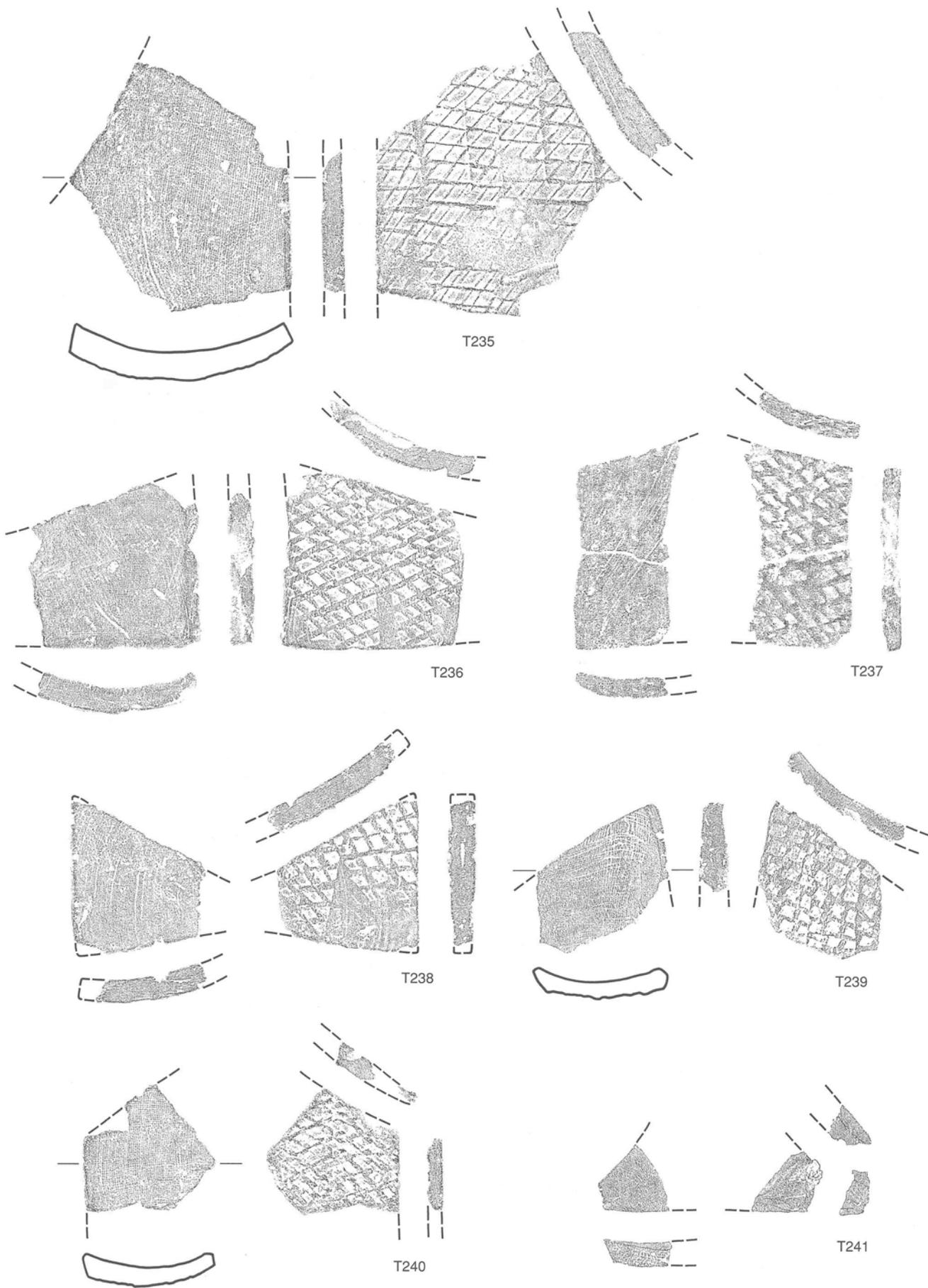
T227

T228

IV区出土平瓦11 (⑭⑮種)



IV区出土道具瓦1 (熨斗瓦・隅木盖瓦)



IV区出土道具瓦2 (隅平瓦)

